明治四十二年一月廿六日印刷納本
毎月一回廿六日印刷納本）

二月一日發行

女學世界

明治三十二年十二月廿五日
第三種郵便物認可

第十巻
第三號



博文館


寶珠は
福を授くる本
クレーム、レートは
美を與ふるの
寶珠!!!
クレームレート
東京・大阪
平尾贊平

二月十日ヨリ開會







女學世界第

世間の實情に叶へる女子教育(二)……後藤遞相夫人
婦人を益する交際の仕方(六)……鳩山博士夫人
巡遊九十日間の珍談(一二)……堀越善十郎氏夫人

◎さまぐの社會教育

大名華族の家庭(二七)……湘南
名流婦人の趣味生活(三八)
△寺田夫人△宮川女史△長井博士夫人△木村女史△高田博士夫人△島貫夫人△矢島老刀自△日野西子爵夫人△棚橋刀自△渡邊夫人△横井博士夫人△嘉納夫人△淸藤女史

生存競爭と妻の覺悟(四七)……佐治實然
空中飛行機の話(五三)……藤葉女史
京都の社會觀察(六四)……紫明女

◎校友大會へ行つて見た記(桑田きよ子)

活潑に働らく露西亞の女技師(七四)……小柳夏村
米國觀光團と握手した記(八〇)……河岡潮風
大阪市の社會觀察(八五)……櫻の宮
女行商となつた私の實驗(九四)……柳井友子

拾巻第参號目次

日々行ふて居る衛生法（一一三）……鷲山彌生

◎さま〳〵の家庭衛生

◎奥様の手控帳（雪の下）

大勢の子供を育てながら時間に餘裕をつくる方法（一一六）……宇山緑子

廿六年間お産を取扱ふた私の實驗（一一九）……西尾京子

◎人は幾歳で結婚してよきか（越嶺）

伯爵家の新夫人（一二九）……若紫

諸國料理十二ヶ月（一三九）……桑原東浪

ゴム鞠の製造（家庭工藝談）（一五〇）……石井研堂

雪の日の思ひ出（一五三）……森英子

◎鶯、梅、雪、（金子薫園）

◎遞相官邸の一時間（朧月）

濱に避寒する日記（一六八）……あをば

◎人間天賦の性質

◎和歌◎短文◎笑話◎誌友倶樂部

人に誹議されし時の心持（一七四）……日向きむ子

妻を迎へて後の私の兄（一七八）……千鳥女

口繪――△花園 原色版）△寒牡丹（武内桂舟）△梅見がへり（太田三郎）△節分（花蹊女史）

△丹頂（平福百穗）△名流夫人△名家の令嬢（寫眞版）

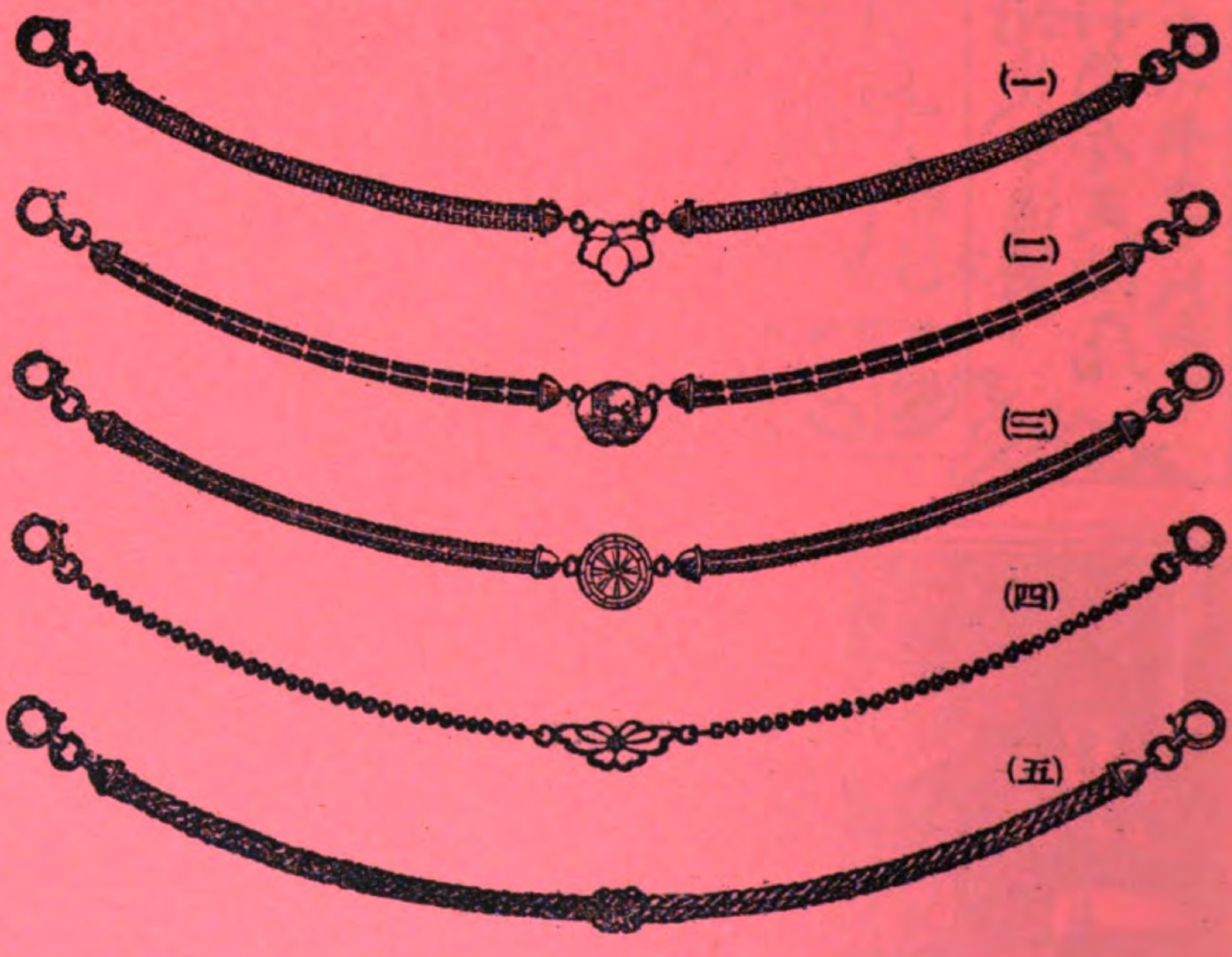
素より顔が標榜の俳優や歌妓の紹介は白紙に胡粉ヶ塗抹て確かに白いと云ふと異ならぬと思ふ御料たつた白粉は美人を美人たらしむる力は有たないその代り若しこ婦人方にして多少なりともご自分の容貌に缺點ありと思召さるゝ方は試みて戴きたいと希ふ



東京京橋南傳馬町

電話本局三十番三千番 ◉ 振替口座九二九三番

金製羽織紐 大西白牡丹



(一) 十八金白金交り角つなぎ
羽織紐 金拾五圓

(二) 十八金くだつなぎ梅眞珠入
羽織紐 金拾参圓

(三) 十八金製きへい二本立
羽織紐 金拾参圓

(四) 十八金玉つなぎすかし蝶
羽織紐 金拾壹圓

(五) 十八金〆縄むすび 金九圓半
同白金交り 金拾五圓

右は何れも最新の形ちにて製作も功妙を極め貴婦人用として御釣合ひよき品に御座候

女(いの一)

女(いの一)

女(いの三)


ネッスル
コンデンス・ミルク
育児に
必要なる
最良滋養品
ミルク・フード

花園



●婦人の涙

(其原因は男子の罪なり)

近來癩に苦み常に不姙を嘆つ病婦の到る處に見るが其最も多き病狀は下腹痛み鼻汁の如き白帶下あり腰筋張り顏色蒼白にて從前の病歷を聞に始め必ず「せうかち」に罹たりと云ふ其病名が子宮病血の道などに云程でも皆痳毒の爲なれば現に永引て治らぬが第一の證據である最に痳病の病原發見後婦人病の大部分は痳性疾患が其原因と成る事が學者の研究に依て證明されて其治療上に一大革新を與へたれば最初「せうかち」の時に十分の手當最も肝要なり凡そ痳病梅毒を根治するには必ず唯一丸に限る唯一丸は現世唯一の驅毒藥を以て最も親切に調劑したれば實に面白き程効力ありて拭ふが如く根治すべし故に多毒質の人は是非服用の必要がある

根治完能唯一丸藥價三日分四十錢●七日分八十錢●十四日分一圓五十錢●三十日分三圓(內地遞送無料)

●本病患者の爲に其病理養生及治療法親切に詳述せる冊子無代施本送料三錢要す

發行所 東京市本郷區湯島天神表門中坂上
藥劑師 中西莊吉
(振替貯金東京口座千五百番)

Crème Simon

美！美!! 美容たらんさせば

其は實に目下世界到る處の貴婦人令嬢間に尤も盛んに賞用せられつゝある佛國シモン會社製 **シモン、クレーム** を常に愛用せらるゝにあり

衛生美顏 **シモンクレーム**

皮膚を白くし柔かにし又羽二重の如く滑かならしむ且つ手足のあれ唇のワレ、霜ヤケ、ヒヤ等に對しても亦無双の良劑なり

粉白粉(黄色、白、肉、とき色)及クレーム石鹼も共に御使用ありたし



日本代理店 橫濱市山下町七十番 エー、ハイム商會

三越始め各地化粧品店及和洋小間物店にあり

女(ろの一)

鈴木皷村先生著（破天荒の箏曲譜
琴を習ふ方の福音）

箏曲樂譜

本書は樂界の大家皷村先生の新たなる考案にして其樣式の簡明なる解義の容易なると只以て斯道の研鑽者を裨益するの至大なるを信ず○陸續發行仕候間幸に御注文を希ふ

改良美濃
用紙半折
木版印刷
和裝美本
毎調

一册正價
金十錢
毎月出版

懷中稽古本

長唄大全

一編上 翁千歳、三番叟、鶴龜、賤機帶、土蜘 下 老松、勸進帳、西王母、鞍馬山、角兵衛花の友、山姥、秋色種

二編上 羅生門、綱館の段、玉藻前 下 蜘蛛拍子舞、越後獅子、望月、櫻狩、助六、外記猿、石橋、賊狩

三編上 橋辯慶、常磐の庭、五郎、淡島 下 若菜摘小鍛冶、時雨西行、二木、君の庭、花見踊、英執着獅子、高砂丹前、狂亂、安宅の松、

四編上 安宅勸進帳（問答入り）下 道成寺、矢の根五郎、娘、人形久、鷺娘、竹生島、浦島 船辨慶、三曲松竹梅、汐汲、忍車、羽猿

五編上 雛鶴三番叟、犬神淺妻船、大原女、蓬萊 猿舞七 下 舌出し三番叟、正札附根元草摺

六編上 傀儡師、連獅子、供奴、與作、傾城、高尾 福神 下 六歌仙、操り三番叟、不動、紀州道成寺、餓獅子、舞扇 げざん 下 初しぐれ、岸の柳、濱松風、

七編上 枕慈童、新松風、月の卷 今樣小鍛冶、伊勢音頭、今樣百夜車 （上下）女利やす、寶船、黑髮、五大力 以下廿九番集

八編 下 初子の日、巽八景、梅の櫟、安達ヶ原 相生獅子、菊慈童、菖蒲浴衣、七種、手習子、松の翁、枕獅子

九編上、芳野天人、織どの一人枕久 下 軒端の松、熊野、●十編近刊

改良美濃
紙半折
木版印刷
和綴美本
毎編上
下二册

正價 金三十一錢
五册宛

長唄大全
合本

右は是迄發行せし綴別十册を美麗なる和綴全二册に合本として稽古本用に製本せしものなり

一編より五編迄
改良半紙全二册
上製金一圓七十錢
並製金一圓五十錢

懷中

長唄百番

縱五寸橫三寸六分
洋綴美本
上製金五十錢
並製金四十錢

右は長唄中通りものと稱する番組總數一百番を活版にて調製せし懷中用なれば演藝會又は旅行携帶に頗る便利なる珍本なり（製本出來發行仕候間何卒御注文被下度奉願候）

新曲

長唄集

改良半紙和綴一册
正價金壹圓也
郵便税金四錢

右は長唄研精會にて春秋の大會に開演せる有名なる文士大家の新作に係る、知盛、鳥羽戀塚、四季の色音、月、滑川、春遊、御皇艫、胡蝶、葵の上、辨の内侍、卒都婆小町、千手、鉢かつぎ姫、三曲景清、一休禪師、有喜大盡、養老、（お伽五大噺）猿かに合戰、花咲爺、かちかち山、舌切雀、桃太郎等、廿一番の新曲を研精會に乞ひて製本せしものなれば同好の各位陸續御注文の程を希ふ

校訂

富本全集

全八册第一編發行
改良美濃製廿五錢
改良半紙製三十錢

第一編目次、長生、淺間、玉川、くらま、乙姫、老松
本書は節附は先代のせしもを倘家元が詳細の注意を加へ校訂は歌舞音曲會に乞ひて上梓せし斯道無二の稽古本なり……●第二編近日發行

發行所 東京市日本橋區住吉町二十番地 法木書店

女（ろの三）


純白
浮き
スワン石鹸
純良なる家庭用浮石鹸
▲定價 二個欖(壹本) 廿二錢
英國ポルトサンライト市
製造所 レバー兄弟商會
日本輸入元 小林
特約大販賣
東京馬喰町四丁目
山岸三之助


千代田香油
千代田香油は廿世紀式の新香料を配合して調製したるものなれば夙に淑女令嬢に愛用せられ高評嘖嘖たり
價
特製金七十錢
大瓶金三十五錢
中瓶金二十五錢
小瓶金十七錢
東京馬喰町
山岸三之助
電話浪花三七九三

寒牡丹




宮内省御用達
内外國金銀
名譽賞牌受領
米國アラスカ、ユーコン
太平洋博覧會に於て
名譽大賞牌受領
最上醬油之元祖
開業貳百六拾六年
上
千葉縣銚子町
醸造元
濱口合名會社
電話銚子二十一番
女(はの一)

ムーレー及ランマン製

フロリダウオーター

Murray & Lanman's
FLORIDA WATER

世界的流行の高尚香水

沐浴・洗手・髯を剃りたる後・疲勞せし時及び運動せし後皮膚に擦用すれば精神を快活ならしむ其他一般の化粧用



極上無比にして最も廣く愛用せらるゝ化粧用香水なることは毫も疑なし貴賤高卑を問はす又如何なる場合に使用せらるゝも神氣を爽快ならしめ恰も蘇生せしむるの快樂を得べし

登録　商標



御購求の際は此の登録商標を御注意あれ
偽造品を以て瞞着せらるゝこと勿れ

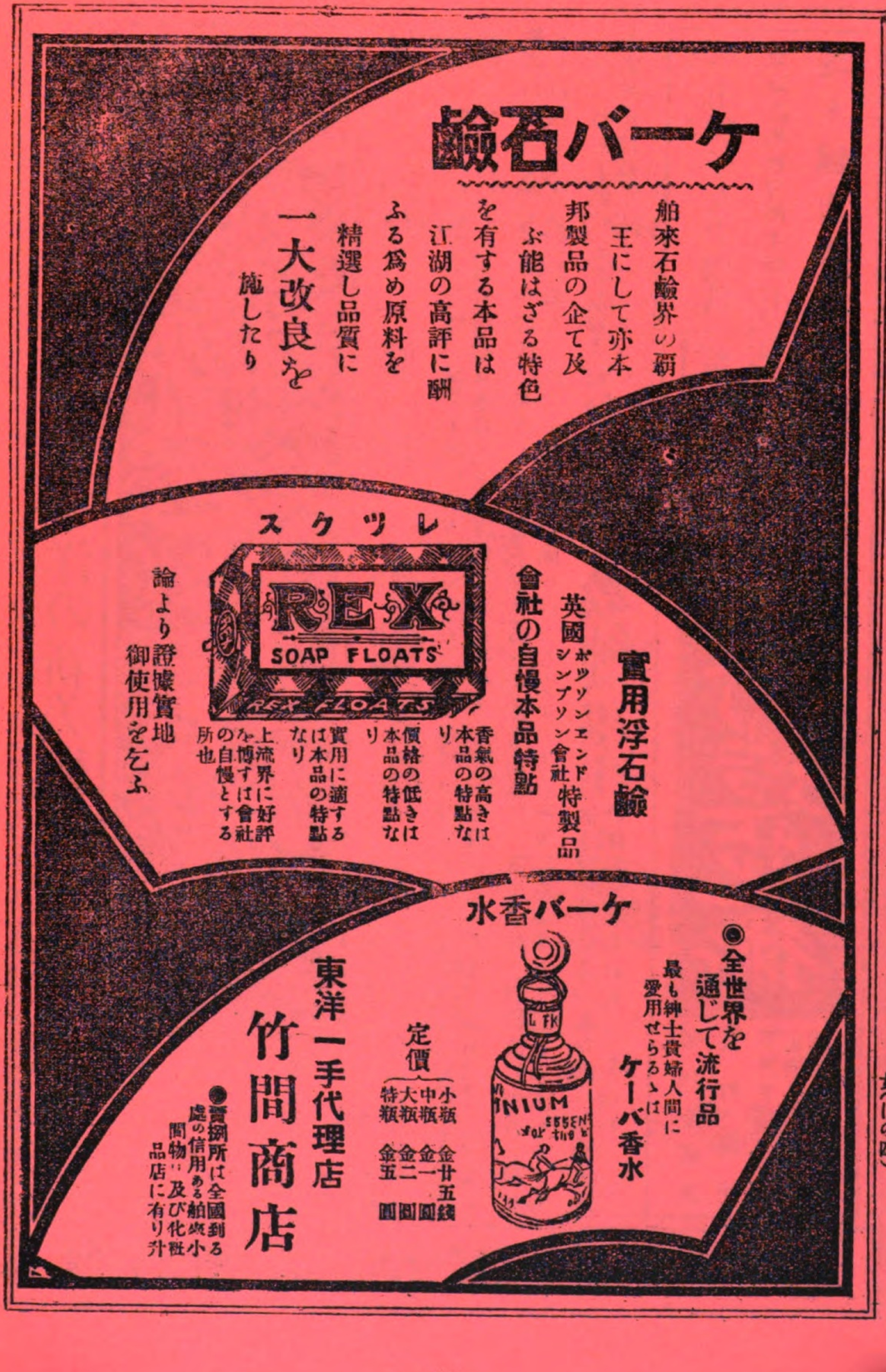
北米合衆國紐育市

製造元　ランマン及キヤンプ

LANMAN & KEMP, New York
Proprietors and Sole Manufacturers

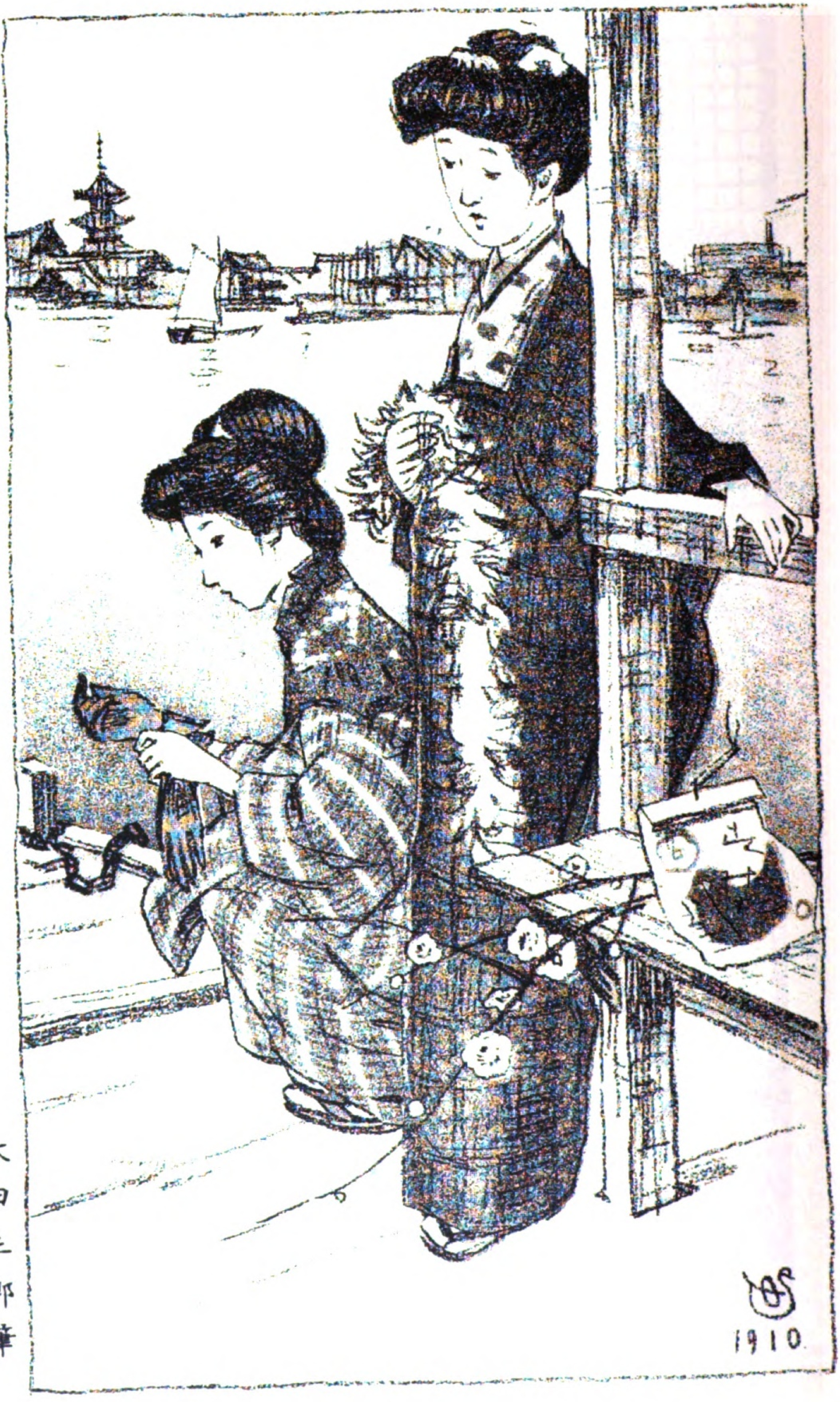
日本帝國代理店　日本支那貿易會社

女(はの二)


ケーバー石鹸
舶來石鹸界の覇王にして亦本邦製品の企て及ぶ能はざる特色を有する本品は江湖の高評に酬ふる爲め原料を精選し品質に一大改良を施したり
レツクス
REX
SOAP FLOATS
REX FLOATS
實用浮石鹸
英國ポツソンエンドシンプソン會社特製品
會社の自慢本品特點
香氣の高きは本品の特點なり
價格の低きは本品の特點なり
實用に適するは本品の特點なり
上流界に好評を博すは會社の自慢とする所也
論より證據實地御使用を乞ふ
ケーバー香水
◉全世界を通じて流行品
最も紳士貴婦人間に愛用せらるゝはケーバ香水
定價
小瓶 金廿五錢
中瓶 金一圓
大瓶 金二圓
特瓶 金五圓
東洋一手代理店
竹間商店
◉賣捌所は全國到る處の信用ある舶來小間物及び化粧品店に有り升

女(はの四)

梅見がへり



太田三郎筆


家庭用和服も縫へる
シンガーミシン
月賦販賣
裁縫書進呈
説明書は御申越次第無代進呈
東洋本店 横濱市山下町六十一番館
シンガーミシン會社
東京支店 東京銀座通尾張町
大阪支店 大阪心斎橋筋二

女(にの三)



日本の婦人は
東洋の美人を代表し、南欧の婦人は西洋の美人を代表す

クラブ洗粉は
内外化粧品の粋を融和せるを以て世界の代表的美身料なり
故にクラブ洗粉は内外の紳士淑女間に盛に愛用されつゝあり

女(にの四)

福はうち



跡見花蹊筆

丹頂



平福百穗筆



家庭と造花

造花は高尚優美で造り易ひ上に多くの費用を要せずして家庭團欒の樂みを得られる唯一の慰です

詳細は御申込み次第御案内書進呈す

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

美術造花材料商

天野卯兵衛商店

電話特長浪花一六四三番
電信略號(アマウ)
振替口座東京四九七〇番

(ほの一)

竹久夢二著（春の巻）再版



定價金五拾錢　郵税金八錢

『夢二式の女』を知らざる青年ありや。『夢二式の眼を知らざる處女ありや。よしさらば少女に、君、君よ！夢二畫集を繙け。描かれたるは、芳烈な近代的色彩を見む。輝けるその眼に咽べる花の如きチャームを感ぜむ。

著者はその畫集のはじめに誌して曰へり……十六の春私は都會へ出た。その頃私は畫工になるつもりでありませぬでした。朱欄長廊の高閣に世の榮華を極めたいとばかりおもふて居た。けれど都會に於ける漂浪生活の習慣は、私をして何時しか群集に交ることをすら恥ぢるようにして終つた。白堊高き銀座の街を、伏目勝に歩みながら波うつ胸を抱いて革命、自由、漂泊、自殺等の奔放な歌を低唱して居た。河野君があの赤い球を投げて居た頃でした。私は學校をエスケープしては、運動場の若草のうへに寢轉んで、早稲田に連らなる目白一帶の高原を眺めて、色深い空に漂ふ白雲に、どんなに遠き思をよせたことか。私は詩人になりたいとおもつたけれど、私の詩稿はパンの代りにはなりませんでした、ある時、私は文字の代りに繪の形式で詩を書いて見た……

發行所　東京市麹町區麹町二丁目九　洛陽堂

大賣捌（東京）東京堂、上田屋、北隆館、東海堂、良明堂、六合館、至誠堂、文榮閣、文林堂（大阪市）盛文館書店、……其他各書店

懸賞小說募集

規定

小說中大學白粉の品質、及び使用上の効果等を巧に聯繫させて叙す事

一 十八字詰八十行以下（總振假名附の事）

（右要所を了得せられたき人は末尾の廣告を熟讀せらるべし）

一 〆切期限、……二月二十八日限り

一 發表（當選者氏名は本誌四月號にて 當選小說は四月中東京及大阪各新聞にて）

一 住所氏名を明記する事（但し紙上の匿名は差支なし）

一 賞品、……一等拾圓、二等五圓、三等三圓、

一 選者、……矢野芳香園廣告部

右規定に據らざる原稿は選に入らず寄送原稿は如何なる理由あるも還附せず

大阪市東區高麗橋五丁目

大學白粉本舖 矢野芳香園

「**大學白粉**」は專門大家が特に製煉せられたる最も完全なる無鉛白粉にして少しも鉛毒の憂なく、美容と衞生とを兼ねたる安全なる化粧料として夙に高貴の御愛用を忝ふし無上の光榮を得たる名譽の白粉にて、他の無鉛白粉の如く肌を荒らす事なく良く伸びて附よくお召物の襟に着す、芳香は頗る高尚にして今や此「**大學白粉**」は**貴婦人令孃間**に**愛用**せられ名優名妓の化粧料として專ら流行しつゝあり

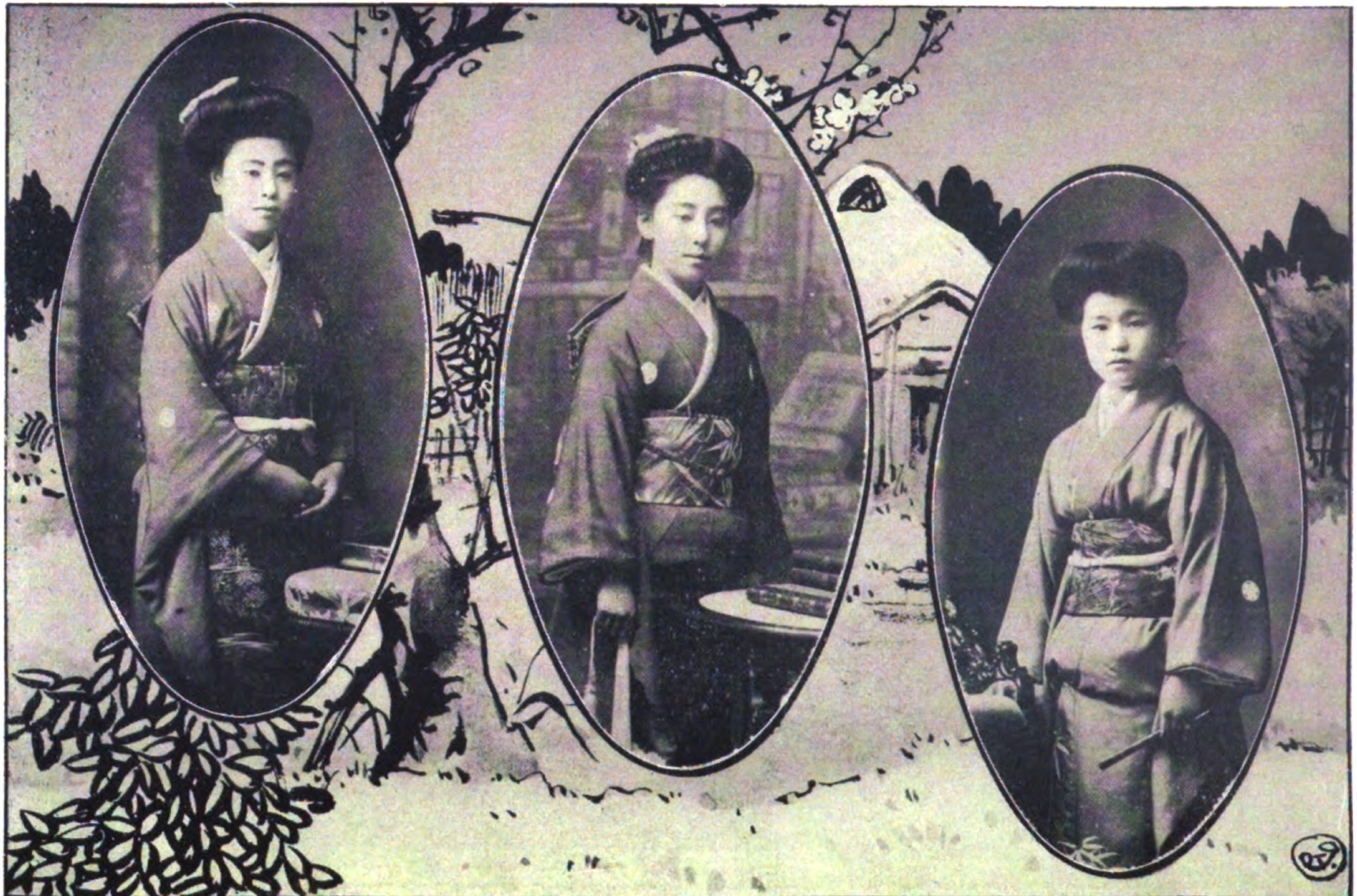
女（ほの四）

徳川公爵家の新夫人正子



德川宗家家達公の令息家正氏と昨冬華燭の典を擧げられたる新夫人は舊薩摩藩主故島津忠義公の令嬢にして當主忠重公の姉君なり

名家の令嬢



右圖 樞密顧問官伊東巳代治子令孃みち子
中圖 舊福井藩主松平康莊侯令妹昭子
左圖 東鄉大勳位令孃八千代子

毛髮の艶を美しくする

椿製ランラン香油

ランラン香油は髮をさらりとして常に御使用被下候はゞ決して臭氣を發しませぬ



東京市内……到る所油店小間物店有……

價（大瓶 金廿五錢）（小瓶 金十八錢）

發賣元

大阪市新町

福田源次郎商店

電話……西千六百〇一番

振替……大阪一四八五番

女（への二）

婦人世界

二月一日發行 五卷二號 一冊十五錢 郵税一錢五厘 半年分郵税共一圓五錢 一年分二圓五錢

十人の子供を教育したる良人の苦心……故從道侯夫人 西郷清子

◎十三で嫁入して十六で初兒を儲けた吾が祖母……竹內貞子

◎裁判官の眼に映じた婦人の犯罪……判事 立石謙輔

◎小兒に牛乳を飮ませる注意……醫學博士 加藤照麿

◎私は米國婦人の交際振に如此感心せり……男爵夫人 澁澤かね子

小兒が危き生命を救はれし多くの實例　村井弦齋

◎強盜に襲はれ之を追拂ひし實驗……林里子

◎五十三年間主家に仕へし女中……七十六歳 坂部きと子

◎父母の年齡によりて胎兒の男女を知る法……佐枝得道

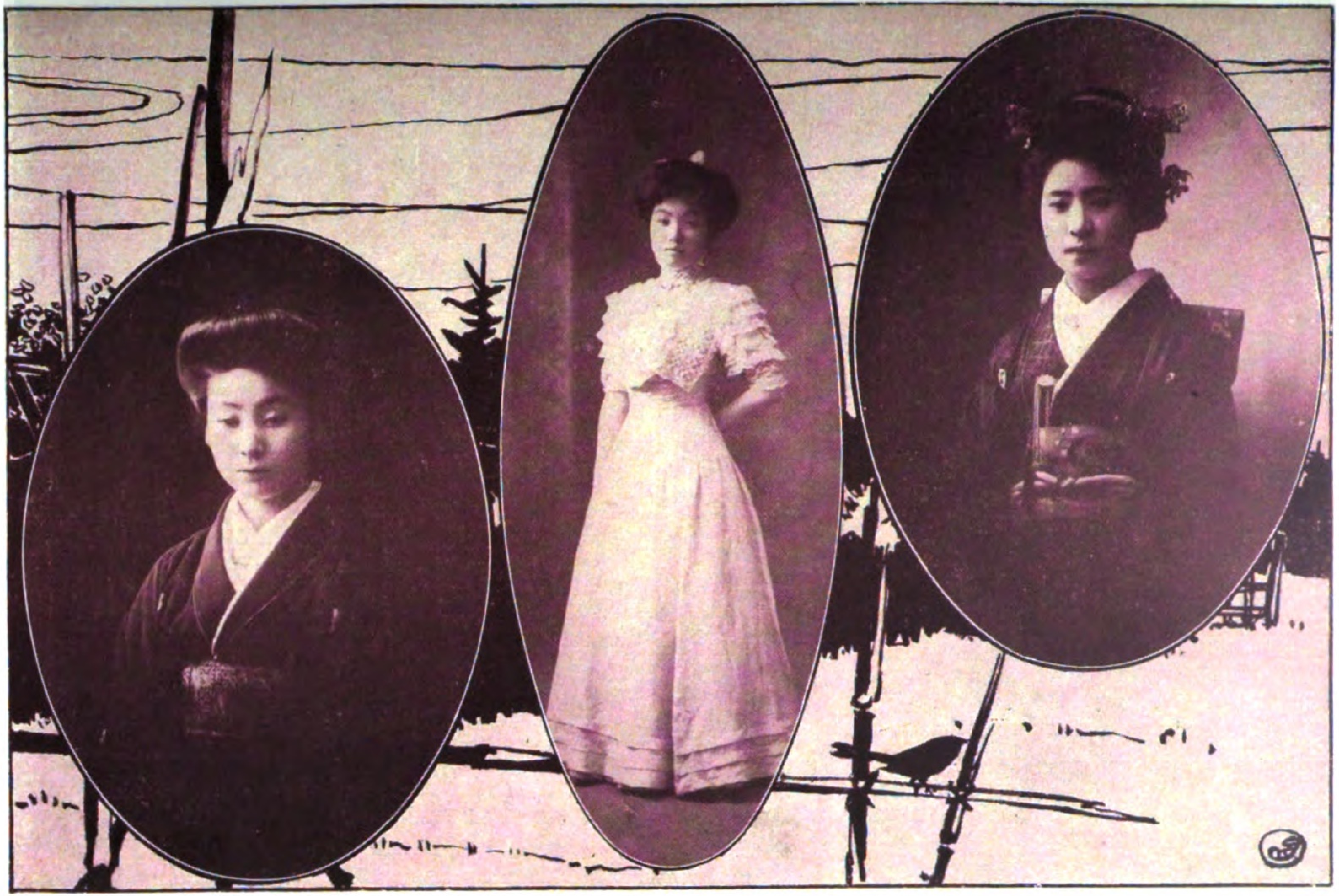
◎食道樂の本家本元弦齋夫人のお手輕料理談……一記者

占守島の風雪中に十二年を送りし實驗……大尉夫人 郡司兼代子

女（への三）

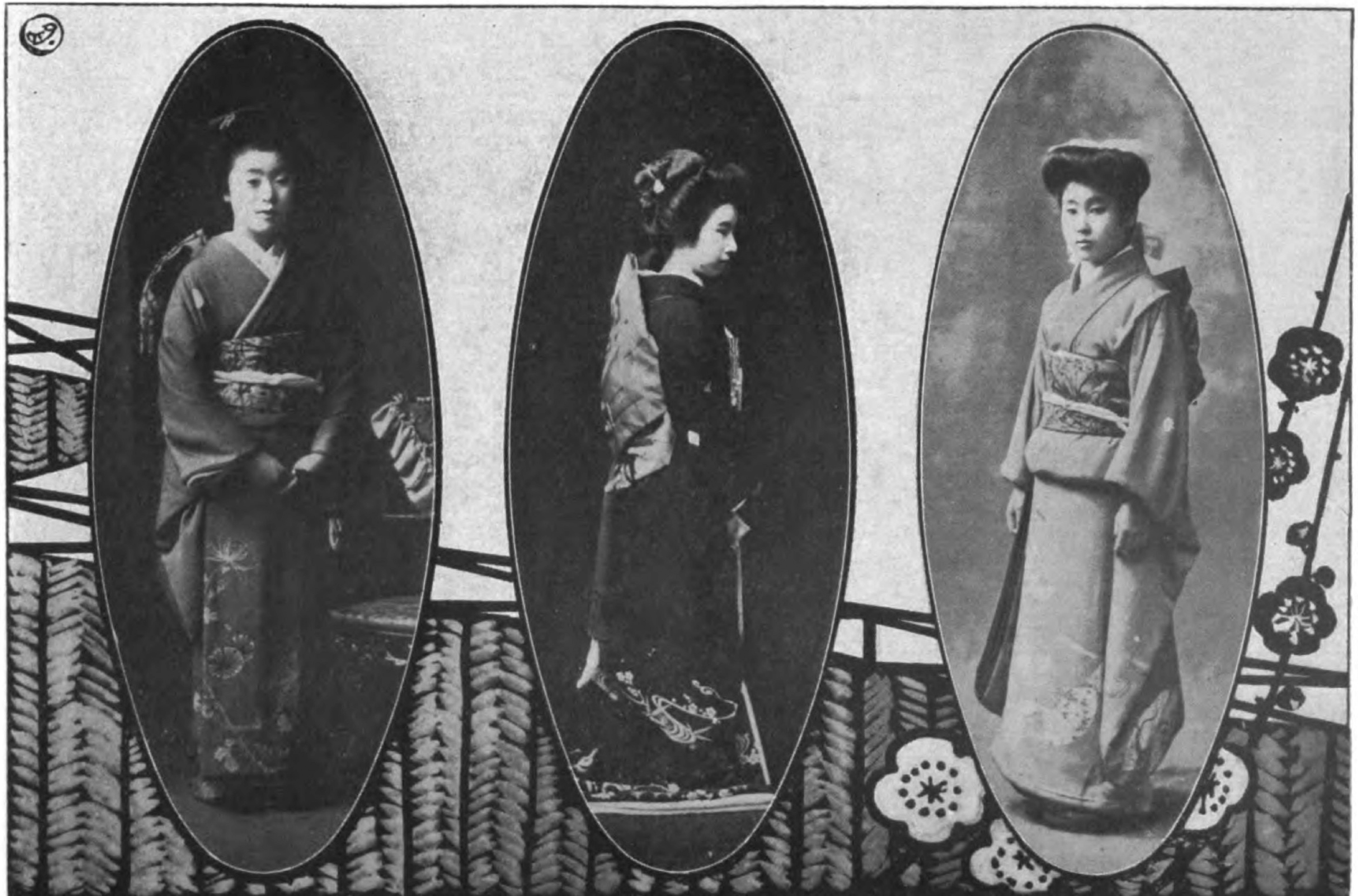
東京京橋南紺屋町十二 實業之日本社 （郵便振替貯金口座參弐六番） 賣捌全國書店

名流婦人



右圖　穗積重遠氏新夫人なか子（兒玉伯令妹）
中圖　伊澤乙女子（貴族院議員伊澤修二氏令孃）
左圖　佐分利貞男氏新夫人文子（小村外相令孃）

令嬢かゞみ



左圖　米井喜代子（明治屋商店主米井源次氏令嬢）
中圖　南洋物産商玉置半右衛門氏令嬢
右圖　日比谷津留子（紳商日比谷平左衛門氏令嬢）

東洋唯一の家庭雜誌

婦人畫報

二月一日發行 二月の巻 一冊 廿五錢 郵税二錢 六冊税共壹圓五拾錢 十二冊税共二圓八拾八錢

畫報

▼春の椽 石川寅治氏筆二頁大美人畫 ▼▼貴婦人と令孃 ▼▼日英博出品女學校遠足

▼天皇陛下陸軍始め行幸 ▼▼米國觀光團

▼閑院宮妃殿下 毛利公爵邸に於る ▼渡米婦人の歸朝

▼東伏見宮妃殿下御染筆御繪 ▼▼盆景…

▼毛利邸に於ける梨本宮妃殿下 ▼▼半月畫報…

▼山階宮妃殿下 ▼▼各婦人會の新年會……

▼西洋風の結婚式 大澤博士令孃 ▼▼新婚旅行の九條男夫妻 ▼▼其他依例寫眞豐富

畫報は愈光彩燦爛讀物は益穩健摯實！

讀物

◉日本婦人の使命 菊池博士 ◉◉渡米實業團諸夫人

◉吾が家庭 一木博士 ◉◉觀光團婦人が初めて見し日本

◉模範婦人實例 井上博士 ◉◉職業に依りて生活する婦人

◉大石良雄の妻 大町桂月 ◉◉貧苦の爲めに兒を捨てし慘な物語

◉米國婦人小兒 巖谷小波 ◉◉安田家の御座敷拜見

◉英國人の妻定め 秋元春朝 ◉◉田舍と都會の小兒 岸邊福雄

◉犬公方德川綱吉公夫人…… 遠山稻子

◉昔の女學生今の女學生 鳩山春子

◉和歌入門 佐々木信綱

其他滿載

東京飯田町四の四 東京社 電話番町二三三九 振替口座一八一八

女(との二)

觀梅と化粧

皮膚の最も荒やすき季の化粧料には『菊の露白粉』を御使ひ遊ばせ

五大特色ヲ有スル



水白粉 金三十錢

煉白粉 小金二十錢 大金三十五錢

粉白粉 打粉金十錢 普通金二十五錢 ポケット入金三十五錢

クリーム白粉金四十錢

觀梅と化粧

梅花の馨にも劣らぬ高尚な香と附着が好て伸の好といふ點に於て此品に優るものはありません

煉香油パール本舗水香乙ミズイ

東京市日本橋區横山町三

平尾銑也商店

電話浪花一一〇

振替東京一一〇

▶賣捌店は全國到處の化粧品店にあり◀

女（との四）

渡米實業家堀越善十郎氏夫人ゑな子





英國大使館參事官山座圓次郎氏夫人賤香子

衆議院議員日向輝武氏夫人欽子



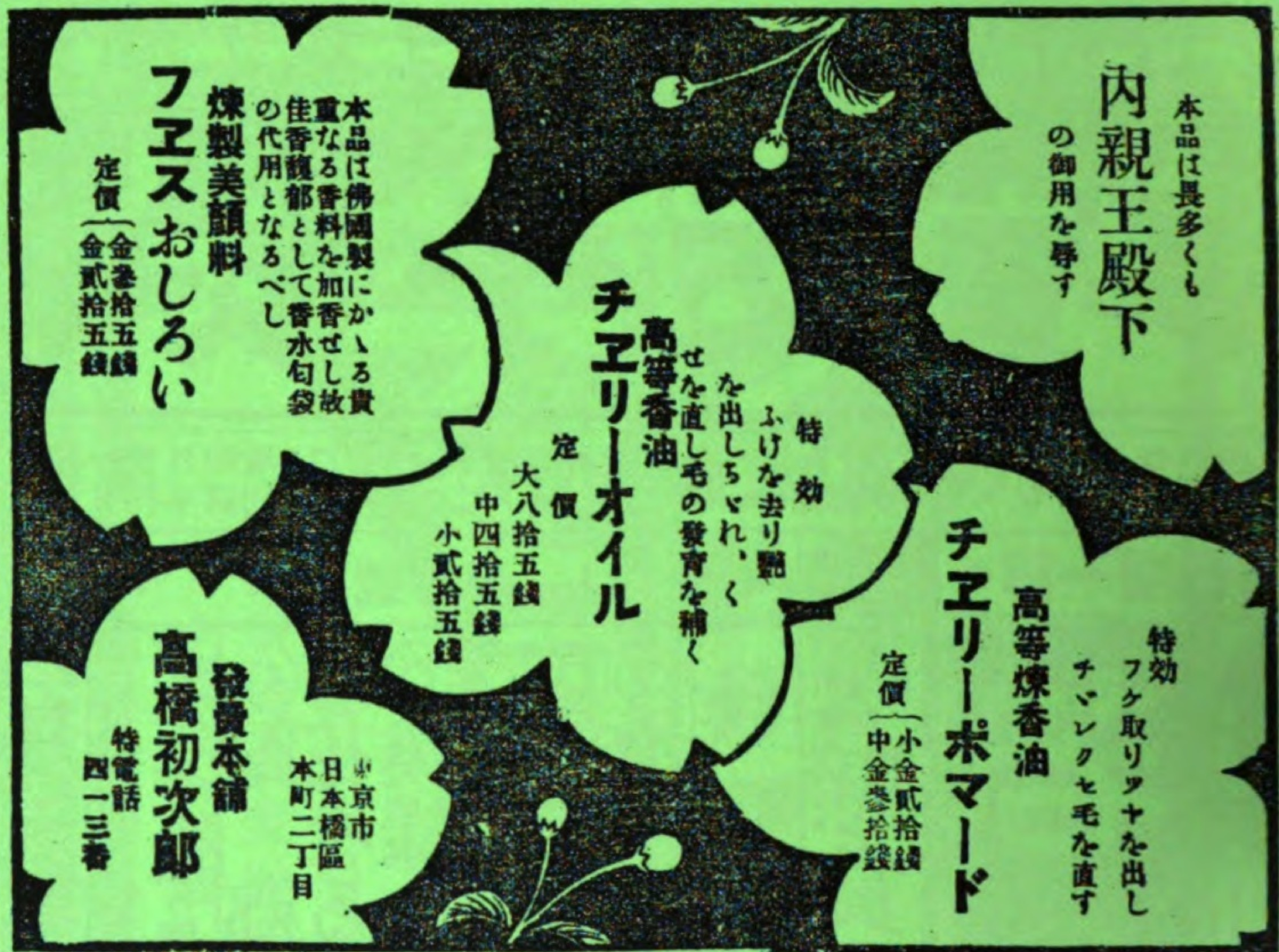
紐育市の大觀



紐育ヘラルド、トリビユーン、サン以上三新聞社並に紐育市公會堂の建物



ブルクリン橋附近の大景


本品は畏多くも
内親王殿下
の御用を辱す
特効
ふけを去り艶を出しちゞれ、く
せを直し毛の發育を補く
高等香油
チエリーオイル
定價
大八拾五錢
中四拾五錢
小貳拾五錢
特効
フケ取リツヤを出し
チヾレクセ毛を直す
高等煉香油
チエリーポマード
定價（小金貳拾錢 中金参拾錢
本品は佛國製にかゝる貴重なる香料を加香せし故佳香馥郁として香水匂袋の代用となるべし
煉製美顔料
フエスおしろい
定價（金参拾五錢 金貳拾五錢
東京市日本橋區本町二丁目
發賣本舗
高橋初次郎
特電話四一三番


於內外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad.
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor
G. TANAKA
Choshi, Chiba-ken, JAPAN
ヒゲタ印醤油
宮内省御用達
千葉縣
田中玄蕃醸造
銚子港

広告（その一）

文學に親まざる女子は品格低し

女子文壇

毎月一日發行 外年四回増刊　定價（口繪十枚鮮麗）一冊十五錢 郵税壹錢五厘 半年（増刊とも八冊）壹圓三拾四錢

◉二月 第六年第二號 一日發行 定價拾五錢 郵税壹錢五厘

本號要目

◎抒情詩二篇……森川葵村
◎私の作と私の周圍……長谷川しぐれ
◎床……加藤介春
◎散文詩……河井醉茗
◎歸郷……水野仙子
◎花なる人の戀しとて……横瀬夜雨
◎模樣としての自然……島田信矣
◎作家の家庭……窪田空穂
◎新代女性の立脚地……一色醒川
◎浪子の墓……外山霞
◎既往五年間に於ける女子文壇の閲歴（上）……飯野一三
◎現に流行の色合
◎英文（二）……星野久成

其他青春の女子が熱血を注げる **懸賞應募**の詩文百餘頁雜誌界唯一の盛觀

内容充實 實物に就て見よ！論より證據

●第一増刊●

若き婦人

▲二月十五日發行 定價金貳拾錢 郵税壹錢五厘

依例豐富

發行所 東京京橋區大鋸町 **女子文壇社**（振替口座壹七九▲貳番 電話本局六〇七番）賣捌所全國到る處にあり

女（ちの二）

女(ちの三)

寮生のお仕事



日本女子大學校裁縫教室に於ける生徒の作業

銀世界





會員募集

共立女子職業學校
櫻友會內
女子手藝普及會編

今日只今
速に入會せよ

女子手藝講義錄

毎月一回發行
◀第四號發賣▶

如斯內容
豐富なり

御夫人—令孃—學生
方に申し上げ候

此の講義錄は各專門の方が多年の實驗により丁寧親切に說明してあり升から如何なる初學の方にも容易く了解が出來ます且つ又一々圖畫を以て敎示してありますから親しく敎師に就いて學ぶと同じであります

裁縫科(和服洋服)編物科、組糸科、刺繡科(各種)袋物科(各種)割烹科(和洋各種)造花科(草花各種)果實科細工物科(撮細工、綿細工、瓶細工挿繪細工、接物細工)手藝用圖畫科(各種)手藝敎授法、其他課外講義數種

壹ケ年修了

進呈
入會規定
內容見本

入會申込所
東京日本橋角
振替口座東京二三八番
電話本局四一四番
大倉書店

女(りの二)

みやけ油



東京人形町通三宅堂本舗

村井弦齋先生御證明

最良髪油

●僞物あり商標とみやけ堂本舗製に御注意
●販賣所は全國信用ある化粧品、小間物、藥店等にあり

珍書

▲新春娛樂……殊に最も絶妙有益の珍書數々あり望の人は大阪高津郵便局私書函第貳號宛往復葉書にて申込あれ詳細目錄進呈す妙齡佳人は勿論奥様も主人も將た青年學生も苟も人生微妙の趣味と實益望の人はぜひ娛一覽!▲但申込は必ず前記私書函第貳號宛の事

乳の出ぬ人

及び少なき人は返信切手封入御問合せあれば必ず一人の子を養ふに充分な乳の出る療法書進呈致します

東京市京橋區山下町二十二 森田とよ子

美術造花

通信教授

二ケ月卒業▲遠國の自宅で男女誰にても和洋造花、花輪、花簪等美麗に出來る卒業後は就職に便あり▲案内書付製品見本は郵券十錢送れば直に呈す

東京四谷區麴町十二ノ九
美術造花傳習所

禿(はげ)、脱毛(ぬけげ)、薄毛(うすげ)、生際(はへぎは)悪(わる)き人(ひと)試(こころ)みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液(モウセイエキ)



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舖 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

●新案特許 一〇三六二號 **衞生的なる改良かもじ發賣**●

●丸髷十五錢より七十五錢迄●島田髷三十錢より壹圓五拾錢迄●銀杏髷廿錢より六十錢迄●送料各八錢



本品の特長

一 根元にコロップを裝置せるにより舊式のものゝ如く硬からず膚ざわり軟かなり 二 皮膚を摩擦すること少なきゆゑ頭のはげる憂なし 三 頭痛癖ある婦人に用ひて爽快を覺えしむ 四 二百度の熱蒸氣にて消毒しあれば毛髮の傳染病を媒介するの憂なし

●諸かもじ製造販賣 東京市神田區豐島町十七番地 (振替口座東京一八一八八番) 田中金三郎

特約 京橋大西白牡丹、本郷兼康、淺草駒形百助、淺草駒形紅勘、神田須田町三升屋、日本橋通二柳屋 外到處の小間物化粧品店に有

女(りの二)

●博文館圖書陳列所……館内にあり

醫科大學藥學專攻 藥學得業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本●東京市下谷區上根岸町 衞生書院

竹柏會は佐々木信綱氏指導のもとに清新なる和歌に志ある人々のため添削質疑に應じ又毎月一日雜誌『心の花』を發行す入會規則書は郵券二錢『心の花』見本は郵券十二錢を送られなば直に發送すべし

東京神田小川町一
電話本局一一一四 竹柏會

男ちゞれ女くせ毛赤毛は何程の難毛も直に矯正黑化良き艶の出る新發見奇渉を郵券封入申込者に教授致ますから御遠慮なく御申込あれ

東京麻布區材木町 岩阪澄子

旅行せんとする諸君は本書を持て

▲名勝寫眞八十餘▲案内圖
和歌、俳諧、落語等數十入
▲ポケット形美製全一册
▲正價金七十錢郵稅八錢

神田旅籠町三丁目 有文堂發行

賣捌 日本橋數寄屋町 六合館
日本橋本石町 至誠堂

漫遊案内 十日の旅

落合浪雄著

時は金と云ふ人にも金で時を料る御方にも丁度手頃な一週間を時間と金と足に無駄のない様キチ〳〵と勘定して〳〵て六日と何時間旅費が何圓何十錢と御土産迄書き入れて一は親切な御案内者一は面白い旅の道連れ唯讀んだ丈けでも面白い枕頭山水はこれ〳〵じや〳〵

女(りの三)

女(りの四)



女學世界二月號

雲ゐより ちりくる雪は久方の 月のかつらの 花にやあるらん　清輔

梅の花はほゝゑむ春になりにけりやなぎのまゆも今開くらむ　弘訓

ふりはれし 雪の朝けはのどかにて 春日おぼゆる 空の色かな　定信

なり圍ふ まがきの竹のよをこめて ねぐらながらに 鶯の鳴く　千蔭

けさ見れば隣の里はわかれども烟ぞ 雪の 上にたなびく　眞淵

山里は 松のしら雪したとけて おつるしづくに 春をしるかな　景樹

ふる雪に 冬ごもりせしうぐひすの 聲はるべにも 成にける哉　枝直

世間の實情に叶へる女子の教育

男爵夫人　後藤かず子

△日本風と洋風の調和

日本人の家庭生活には、外國に見ることの出來ない愛情、質實の風があります。これは日本の國民性を造る基礎であらうと思ひます。それゆゑ私共では交際でも、日用品の選擇でも成るべく西洋風を採つて世の進歩に伴ふて行く事に心掛けては居りますが、日常の家庭生活特に長幼の關係夫婦間の秩序などは凡て日本在來の風を用ゐて居ります。尤も一般に申しますと、今日は未だ過渡の時代ですから、人々の思想、習慣等も區々で、又色々都合もありませうから、果して何んな風にしたら宜しいかといふ事を一概に申されませんと共に、實際家庭の有樣も千態萬狀を呈して居ります。即ち新舊思想の調和がまだ出來ないで居るのですからこれこそ理想の家庭生活である、こんな按排にしたら良いであらうなどゝは申しにくいのでございますけれども、人の家には、それ〴〵祖先以來の風習もありますし、又主人の考へもございますから、婦人としては快く之に順ひ、尙その長所美點を發揮して一家の幸福を圖るべきことゝ存じます。家風や夫の意見に頓着せずして直に自己の學び得た理想を實現しやうとするのは甚だしい間違ひで、多くは家庭の不和を招くに過ぎません。若し婦人が何でも自分の理想を實現しなければならぬ、他を顧ることが出來ないといふ事ならば、とても結婚は出來ない譯で御座います。

家庭の事は主婦次第である、主婦が家庭の中心であるといふやうに申される方もありますが、それは間違ひで御座いませう。一家の主權は申す迄もなく主人にあるのですから、主婦は、よく主人の精神を服膺し、之を助けて圓滿な家庭を造るやうにしなければならないので御座います。

△頭腦と手足の働らき

婦人の務めは、中々複雜なもので、數限りもない程ございますが、別けて育兒といふことには殆ど全力を注がなければなりませぬ。之れは隨分骨の折れる心配なもので、私共も始終腐心致して居ります。此の子供を育てるといふ事も矢張、其の子の性質や一家の狀況などを斟酌して施すべきもので、一概には申されませんが、女の子供に就て申しますと、男子と女子とは自ら天職が違ひますから、夫々その特色を發揮することを忘れてはなるまいと存じます。

婦人の職分を申せば、家庭の事には明くなければならぬし、家庭に關する直接間接の事即ち交際などを仕遂げる丈の頭腦が要り、自ら之を實行する丈の身體を造つて置く事が大切でございます。手足の勞働、例へば裁縫をするとか、料理をするとか、その他一家の雜事に任ずることは如何に高貴の家に在つても必要ですから、何人でも之を忘れてはなるまいと存じます。如何に召使を多く使つて居ても、主婦が躬ら勞働し得る手腕を有して其の模範を示す位でなければ、其の人人を十分働かす事が出來ないのでございます。それゆゑ女と生れました上は、幼い時から母親の行儀を見習ひ、已に十歲位にもなりましたら、少しづゝ裁縫その他の手仕事を習つて間斷なく之を續けるといふことが大切でございます。人は兎角習慣に支配され易いもので、頭腦ばかりを使つて居りますと、手の先のことはどうもうるさくて出來なくなりますから、日々何なりと手足の勞働をする習慣をつけることが肝腎でございます。幼い時から此の樣にして居られた人でも、例へば洋行でもして、歐米の大學にでも御入學になると、三年なり四年なりの間全然頭腦ばかり使ひます爲に、歸朝しますともう働らくのが厭になられる樣でございます。これは人間の自然かも知れませんが、それでは困りますから、十分その點に注意して、如何なる境遇に處しましても此の神聖なる勞働を忘れない樣に致したいと思ひます。

△世間情態と境遇とに應じた教育

女子の教育に就ても色々申されるやうですが、男子の教育の大切なると共に、女子の教育も大切であります。女子の教育は男子の教育と並行せねばならぬ事は申す迄もない事と存じます。其の益々普及し發展するのは誠に喜ばしい事ですが、之を個人の上から考へますと、人々によつて各々事情が違ひませうから、其の境遇に應じて教育をする樣に心掛けねばなりません。又教育制度の上から申しても、餘り突飛な女子の大學教育は如何かと存じます。大學教育も強ち不必要とは申しません。何處までも男子の教育に相伴ふて行かねばならぬのではありますが、只無暗に女子の大學を建てゝ亞米利加のやうに女子の學士を造る樣な事にするのは、餘程考へねばならぬ事で、今日の國情では女學士は忽ち捌け場に困るで御座いませうと思ひます。

高等教育を受けた婦人に對する一つの問題は、主として我が國の經濟事情に關する點でございます。女子が高等な教育を受けますと、自ら知識が廣くなり、思想が高尚になりますから、我が國のやうな比較的質素なそして用事の多い家庭の雜事に任ずることが難かしくなるのでございます。初めは不自由も當然のことゝ思つて居りましても、高尚な教育を受けて種々な事を知つて見ると、再び前のやうな心持にはなられません同じ料理をしても、教育の多い人は少い人よりも高い材料を多く使ひ、又何事でも西洋式にしないと氣が濟まぬといふ風になります。これでは一家の經濟が立ちませぬから、自然嫁に貰ふ人がなくなるといふ事になりませう。つまり世間の狀況以上に婦人の頭腦が進歩しますと、こゝに煩悶苦痛が起り、又迫害を蒙るのでございます。

△餘り偏らぬ趣味と嗜好

婦人と宗教といふ事も考へねばならぬ事と存じます私は只今のところ佛教を信じて總てをこれで律して行

からとは致しませぬ。又基督教を信じて之を金科玉條として居りもしませぬ。此等の宗教から益を受けては居りますが、之を信奉し之を中心として萬事を爲さうとは致しませぬ。前にも申しますやうに、一家の交際は主として主人を中心としてゐるのでございます。それを自分ばかり一種の宗教に據りますと、何かにつけて偏つて參ゐります。それゆゑ男子は兎に角、婦人としては、何にも偏らずに淡泊に淺さりと世渡りをすべきものと存じます。尤もこれは宗教ばかりには限りませぬ何でも一つ事に凝りますと、主人の事なり、家庭の事なりがそれ丈疎になるやうでございますから、總て此の種の事に身を處するには、第一に主人の意向を斟酌する事が肝腎でございます。（談話要領）



婦人を益する交際の仕方

鳩山春子

△一種の清涼劑

人は社交的の動物でございますから交際せずして人生の幸福を享けることはむづかしいもので、必ず互に往來して感情の融和を計り、彼是智識を交換して進んで行かねばならないのでございます。けれども男子でございますと、職分上外出が自由ですから、大抵交際の道が開けて居るやうですが、婦人は多くは家事が忙はしくつて交際の餘暇に乏しいので、動もすれば身神の不健全を招いて一家の平和を破らるゝ方がございます。婦人が始終家にばかり居るのは、家庭の事に專らになつて大層宜しいやうですが、毎日千篇一律の生活を繰返して居るのですから、安逸にしてゐる人は精神が朦朧としますし、多忙な人は神經が興奮して自分の過失を見る事もできなくなります。さうして壓制を蒙ればヒステリーとなり、寛大にせらるれば氣儘となる上に、偏狹で感情の過敏な誠に困る人となり易いのでございます。

之れに引きかへて各々家事の餘暇を以て交際を致すならば、精神が自ら打開いて日頃の鬱氣を散じ、談笑の間に新しい智識を得る事ができると共に、自己の缺點を覺り他人の長所を見習ふて自然一家の平和に資する事が出來るのでございます。それも茫然として交際して居りましてはこのやうな利益もありますまいが、向上進歩といふ考を念頭に置いて致すやうにするならば人の應接を見て、自分の應接の拙ないのを知り、他家の室內の裝飾によつて我が家のしだらなきことを覺り或は今まで自分程偉い者はないと思つて居た慢心が自から消滅するとか、其他一日の淸遊に永日の不快を洗ひ去る等、一としてその人の利益、一家の利益にならぬ事はないのでございます。

△交際に就ての詔勅

それにつけても常に服膺すべきは戊申の詔勅でございます。是は深き大御心によつて煥發されたもので、素より私共の容易く窺ひ知ることの出來ない所でございませうけれども、而かも私共の考へて居ります此の交際といふことに緣多き御詔勅ではあるまいかと恐察し奉るのでございます。即ち、

方今人文日ニ就リ、月ニ將ミ、東西相倚リ、彼此相濟シ、以テ其ノ福利ヲ共ニス。

といふ聖旨は、小く申しますと、吾等は交際によつて人生の幸福を享けるといふ意味に當るのではございませんか。

益々國交ヲ修メ、友誼ヲ厚ウシ、列國ト共ニ、永ク其ノ慶ニ賴ランコトヲ期ス。

これは主として國際間の交際を計り、親睦を重ねて人生の幸福を圖りたいといふ聖旨でございませうが、亦之を個人に取りますと、益々交誼を厚うし、和親を旨として、人類の幸福を望めよとの意味に承ります。

次に、

顧ルニ、日進ノ大勢ニ伴ヒ、文明ノ惠澤ヲ共ニセムトスル、固ヨリ內、國運ノ發展ニ須ツ、戰後日尙淺ク、庶政益々更張ヲ要ス、宜シク上下心ヲ一ニシ

の條項は、つまり年齢や階級に拘らず、心を一にし協力せよとの聖旨に拜察し。

忠實業ニ服シ、勤儉產ヲ治メ、惟レ信、惟レ義、醇厚俗ヲ成シ、華ヲ去リ實ニ就キ、荒怠相誡メ、自彊息マザルベシ。

は、私共が交際をするにしても、實業を怠り、職分を忘れて迄耽つてはならぬ。忠實に家庭の業を勤め、質約に家產を治むる傍にせよとの意味に拜察し、交際の道は、信義の二字に法り、互に相陷擠するとか、又は輕薄の俗に習つたり、又服裝や携帶品に心を專にし、虛榮を欲し、遊惰に流れるやうな、惡習を止めて清き美しき交際をせよとの聖旨のやうに拜承するのでございます。固より戊申の詔書は、各方面に亘つて、これ以外に、深大なる思召のあることは、申すに及びませんが、私共が交際するに當つても、常に服膺して

置かねばならぬことゝ存じます。

△文明的の交際法

例へば我が國在來の風習として、酒を飲み、肴を喰べねば、交誼を厚うすることは出來ないやうに思はれて居まして、一寸した訪問客にも、お茶やお菓子を出すのは、附物のやうになつて居ることは、古代と經濟事情を異にし、多忙複雜の今日には、頗る不適當のことでございます。この點は、特に食物を出さんが爲に招待した場合の外は、絕對的に飲食物を出さないといふ西洋の風習に模倣したいと思ひます。野蠻時代を去ること遠からぬ時代ならば兎に角、今日に於ては、全然飲食物に依らずして、交際の興味を得ることは、容易いことゝ存じます。尤も習慣は第二の天性でございますから、初めの間は、多少面白味の程度が尠いかも知れませんが、一度し二度するに隨つて、淸き交際の趣味が涌出するであらうと存じます。さうして多數の會合の場合には、各自がその心付いた考を順次に述べたり、或は樂器を奏したり、講談を聽いたりするのもよろしく、又小數の時は、歷史上の人物評なども面白いでせう。つまり打寬いで互に睦み語り合ふのが好いかと思ひます。それは、お天氣のお話でも、新聞雜誌上の談話でも、當日の會合の事でも、子供の敎育談でも、何でも捌け合ひ、打解けて談せば、この位面白味のあることはあるまいと存じます。

△簡易なる機關

けれ共困ります事は、お互婦人間の交際としては、日本では西洋のやうに、きちんと訪問の日時を一定して置くことは、周圍の事情が許しませんので、矢張臨機應變にするより致し方はありませんが、さういたしますと、折角遠方の所を訪問しても、留守であつたり手放のならぬ忙しい所を訪問したり、互に不都合を感じて、時間と勞力との不經濟を來すのみならず、前申すやうに、主婦は、來賓の飲食物の斡旋に心配し、甚しきに至つては、之が爲に忙殺されるといふ場合があ

ります。さうして時々は土産物を持つて行かねばならぬし、戴けば返禮をせねばならぬといふ樣な次第で、之が爲に、富裕ならぬ人は、自然交際が迂くなるといふ弊を生じて、誠に不便でございます。

この不便を除いて交際を最も簡易にし、實益を多くする方法としては、僅かの費用を以て日時を定めて一定の場處に集り、互に談笑を交換するといふ一方ほかあるまいと存じます。この種の交際法は、西洋などでは、盛に行はれて居りますけれども、日本には從來殆ど無かつたので、先達て私共の創設した戊申婦人倶樂部は、專ら、之を補ふ趣旨で設つたのでございます。

△老婦人との交際

のみならず尙此種の會が無ければならぬ理由がございます。それは男子は白髮を見ない內は政治を議する資格がないといふやうに自ら老人を尙ぶ風がございますが、婦人は容貌風采に重きを置かるゝゆゑ、若い美しい時代には人からちやほやされるけれども、少しく年を取るとどうも其樣は參りません。先づ人の母となれば子供の爲に一生懸命になつて居りますが、偖子供が大きくなつてお嫁でも迎へるやうになると、一家の主權は頓て若夫婦の手に移つて、老婦人はもう不用の者のやうに待遇されます。そして孫の世話をする位がせめてもの仕事となりますが、此樣にして閑散な身の上となれば、心が自ら僻み、又愚痴つぽくなるといふのは自然の勢で、當人の爲めには氣の毒な次第であり、國家の爲めには誠に不祥な事と存じます。で何うか日本の婦人も西洋の婦人のやうに、老いて徐々進步向上するといふ風であつて欲しいと思ふのですが、さう致すには、やはり此の樣な會があつて、若い婦人が老婦人と交際して其の練熟せる思想感情に模倣せんとし、又老婦人の方では、若い婦人の元氣好き快活な點に化せられんとし、互に接近して相愛し相助くるより外はあるまいと存じます。けれども日本では、若い婦人と年老つた婦人との交際のない爲に、互に同情の念に乏しくて、嫁入つた先でも嫁は姑を鬼の如うに

思ひ、姑は又嫁の爲めに子息の愛情を奪はれた如うに感じ、互に猜疑するやうな風なので、誠に嘆しいことでございます。若しこゝに適當な機關があつて老若互に交際し、お互にその心情を知り合ひ、斯くして家内の圓滿を計る事ができましたなら、誠に幸福な事と存じます。

兎に角人は家にばかり引込んでくよ〳〵して居てはいけません。人生僅に五十年であります。たとひそれが延いて九十年となつても、この間は實に僅かなものですから、つまらぬ取越苦勞で日を暮すのは損でございます。誠心誠意、盡くすべきを盡し、勤むべき事を勤めて、その他は運を天に任し、交際もして打寛いで暮すことが肝要です。さうすれが、期せずして人生の樂みを享くることが出來やうと存じます。

△老若調和の策

一家の平和を保つ方法として尙少しく申上げたいのは母たる人は各自其の子息の品行を監督することであります。妻は夫を助くるものといふ事は申すまでもありませんが、夫にして一見識ある以上は、妻のいふことを百が百迄、用ゐるものではありません。殊に妻と直接利害の關係多き夫の品行を監督するといふことは如何にも妻の利己主義か嫉妬から來る樣に思はれて、中々むづかしいことでございますが、母として、生來手なづけた子息の品行を監督することは、左程難事ではありません。注意の致し方によつて十分出來るものでございますから、常に子息を善行に導く樣にしなければなりません。さう致せば嫁は何より之を喜び、若夫婦の仲も一層好くなり、又嫁と姑との親睦をも增し自然と家庭が圓滿になります。

要するに生活に樂みが少ないといふ事は非常に不利益でございます。私共婦人仲間では、上下老若の差別なく、打寛いで、最も簡易に淸く美しく交際したいと存じます。我が國の現代の如き、新舊思想の衝突多き時代には、殊更この種の社交は必要と存じます。

（文責在記者）

巡遊九十日間の珍談

堀越夫人の米國土産話

婦人記者

輸出の絹織物を何時も多勢の店員が荷拵へして居る堀越商會の洋館に沿て曲ると白木の門があつて、堀越氏のお宅と判りました。丸髷の篤實な婆やの案内で十疊の奥座敷へ通り郡内織の座蒲團に坐らせられ、文晁の山水の軸、楊柳と寒菊を活けられた花瓶、珍品奇什を列べられた違ひ棚に見惚れましたが、一番見惚れたのは實物大の少女の立像油繪を嵌め込まれた大衝立でございました。此油繪のモデルは當家の愛孃であらうと思はれたのです。間もなく夫人は出て來られ一應御辭退あつて、御渡米中愉快に感せられた事の大要を話して下さいました。（夫人は五二會の創立者前田正名氏の令嬢、東洋英和女學校の出身）

▲片言も愛嬌

私などは却々皆様と御一緒に參られる資格は無いのでございますが、餘り婦人が少いからと仰しやつて下さいましたので、恐る〳〵出掛けたのでございましたが、お蔭様で勿體ないやうな優遇を受け、ちよつと容易に見られぬ處までも拜見しましたのは誠に難有い事でございました。イヱ別に疲れは覺えませんでしたが、唯だ困つたのは會話の練習が出來て居ない爲めに、此方の心情を充分に先様へ申上げる事が叶はなかつたとでございます。二十年も打棄つて置いた私の生かぢりの言葉では何としても恥かしくて言つて見ることが出來ませんので、シヤトルへ上陸つた際は、怖氣ついて默つて居りましたが、水野領事夫人が「貴女其様に遠慮なさらずに一言でも仰しやいな。米國の方だつて日本へ來た時、夜分にお早うなんて仰しやるぢやありませんか、片言でも間違でも口を利きさへすれば何よりの愛嬌になるのですよ」と懇々とお勸め下さいますので、

成程然うだと存じて、恐る〳〵ながら少しづゝ遣つて見たのですが、慣れぬ間は本當に脊中からびつしよりになりました。併し慣れると申すものは不思議なもので、歸る頃までには餘程樂になりました。澁澤さんの奥樣も語學は極お若い頃遊ばした限り、久しく打棄つてお置き遊ばしたさうで、矢張り初めの内はお困りの樣でしたが、お歸りの頃は却々お立派に遊ばしたのでございます。

▲汽車から下ると散り〳〵ばら〳〵

何處へ參りましても、汽車から下りますと、出迎への米國婦人方が犇々と押し寄せ、多勢で一人づゝ引張て是れは私共の方のお客ですよと云ふ風に連れて行き、日米の國旗を交叉した自働車へ乘られますので、お連れの御婦人方と散り〳〵ばら〳〵になつて了ふのでございました。

▲相手變れど主變らず

團體の歡迎會の間に主なる實業家の夫人方が私共を私宅へ招きレセプションを催うされました。これに招かれますと其家の主婦が扉の入口に立つて居まして、多勢の知人を私共に紹介されるのでございますが、私共は奥の方に立ち列んで居りますと、來客は主婦の紹介を受けては一々私共に握手をされるのでございます。大抵百人乃至五百人ぐらゐの婦人がゾロ〳〵入り代り立ち代り握手する間立ち續けて居るのですから、しまひには腰が痛くなつて參ります。それに先方樣のお話を一言づゝでも受けなければなりませんので、喉がカラ〳〵になるのでございます。何に致せ相手變れど主變らずでございますから……。ハイお話はホンの簡單な紋切形で、『よく遠方を入らしつて下さいました御婦人がお出で本當に嬉しうございます』、『もつと多勢さんでお出かと樂しんで居りましたのに僅御六人で入つしやいましたのですか餘りお淋しうございますネ』、『何か御不自由な事がございますれば御遠慮なく仰しやつて下さいませ』など云ふやうな事でございま

した。

▲默つて食べたら嘸旨しかつたでせう

何處へ參つても御馳走づくけで、口ばかり贅澤に爲り、是れでは困ると申して唯今でも笑ふ位でございます。ホテルのお料理も結構ですが、晩餐會のは實に又特別旨しうございました。併し食事の際は、前後左右から種々の事を話し掛けられますので、耳も舌も不調法な私などは、聽き違へてはならぬ、失禮な返事を致してはならぬと、それにばかり氣が引けまして、何を頂いて居るのか宛然夢中で咽喉へ通す事もございました。『勝手の樣ですが若し默つて頂いたなら何のくらゐ旨しいのでせうネ』と何時も神田さんの奧樣と、お話して笑つたのでございます。私共の食物に就ては御婦人方が種々心配なすつて『貴女方斯樣な物を召し上り難くはありませんかお厭でしたら御遠慮なく仰しやつて下さい』などと親切に言つて下さるのですが、日本へ來た事のある婦人方が側から『日本の方は大抵何でも此方の料理を召し上りますよ』などと說明されました。

▲大きな前髮の心

米國の婦人方の束髮の格好には實に見惚れました。何卒少し眞似がして見たいと思ひましたが、暇がありませんで出來ませんでした。髢屋へ參つて見ますと、大きな前髮の心が茶色、鼠色、黃金色など樣々な色の髮毛で出來て居り、髱も種々の格好のが出來て居ります。婦人方が各々自分の毛色と合つた前髮心や髱を求めて用ゐられるのですが、前髮は思ひ切つて廣く出し、根元の毛は小さくグル〳〵と卷いて其上へ好みの髱を被せて周圍をピンで止めるのですから、極便利でございます。お年寄でも別に質素に結ぶと云ふ區別もないやうですが、前髮は六十以上になると餘程小形でございます。

▲帯に就ての質問



桑港市マーケット街

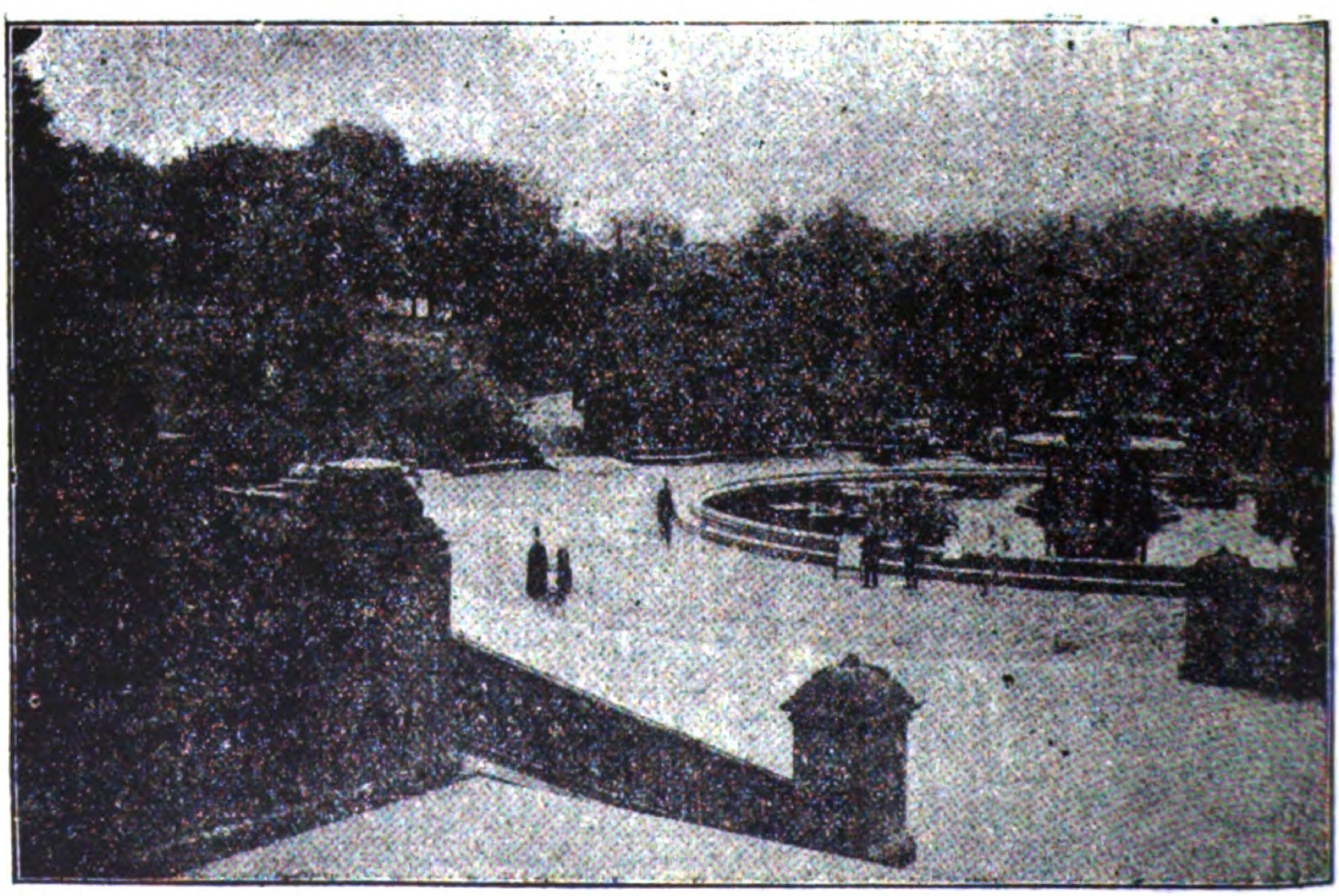
　俄かの旅立で衣服の用意も出來ないのでございましたが、彼地へ着て參つた物は年不相當な華美な物で、宛然妖怪のやうな服裝を致したのでございます。水色、桃色などの美しい彼地の服裝の中へ質素な色氣では燻つて汚く見えますから、金絲刺繡などの好きな彼地婦人の趣味に成るべく近いたものを着て歩きました。何處へ參つてもよく尋ねられましたのは帶の結び方でして『如何いふ風にして長い物を斯樣にお結びなさる、後の方の帶の中には何か入つて居りますか』などと爛つて見る婦人もありましたが、お太皷に結んだ中に何か携帶品を入れて脊負歩くものと思つたのでせう。而して丸く結んだ物に紐でも附いて居て前へ結び附けてあると思ふ方が多うございました。ですから私は時折り化粧部屋で悉皆着物を脫いで、着換へ直し、帶の締め方を見せて納得の行かれるやうに致しますと、皆さんが喜んで熱心に見ておいでゞございました。日本服では帶が一番立派で一番高價だと云ふ事は皆さん善く知つて居られまして、中にも日本へ來たことのある方は

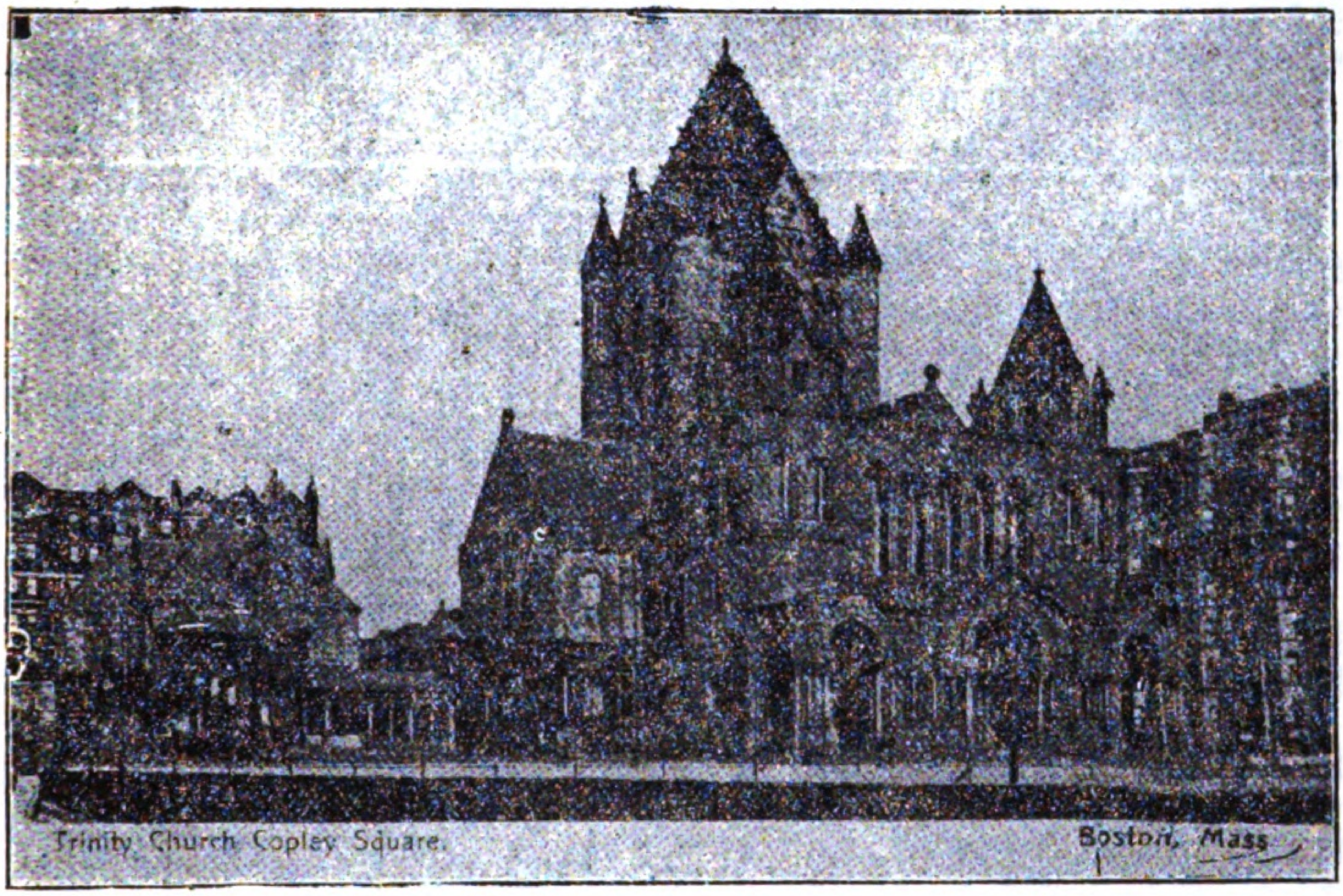
『帯の良いのは數百圓もかゝる』などゝ説明して居られました。

▲日本では衣服の流行がなくて羨しい

私共へのお愛想に成るべく通俗的なお話をなさるのでございませうが、御婦人方が主なる話題は矢張り着物の事でございました。『貴女のお國では着物に華美を競ふと云ふこともございますまいし、隨つて流行を追ふと云ふ面倒もございますまいし、誠にお羨ましい事です。私共は一年に二度も流行に苦しめられるのですから、宛然衣服の奴隷になつて居るやうなものでございます。それでも貴女方の御國にも矢張り少しは流行がございますか』などゝ問はれますから『矢張り色合や地質の流行もございますし、江戸褄と申して裾だけに模様を染め出したり、或は胸の處へ附けたり、模様も元祿とか光琳とか種々様々な流行があり、又紋の大小も時によつて流行り廢りがあるのです。御當地の服裝ほど目立ちは致しませんでも、矢張り始中終流行が

紐育市公園の大噴水





ボストン市の盛觀（トリニチーチャーチの建築）

あるのでございます」と御返事致したのでございました。

▲紋の説明に感心する

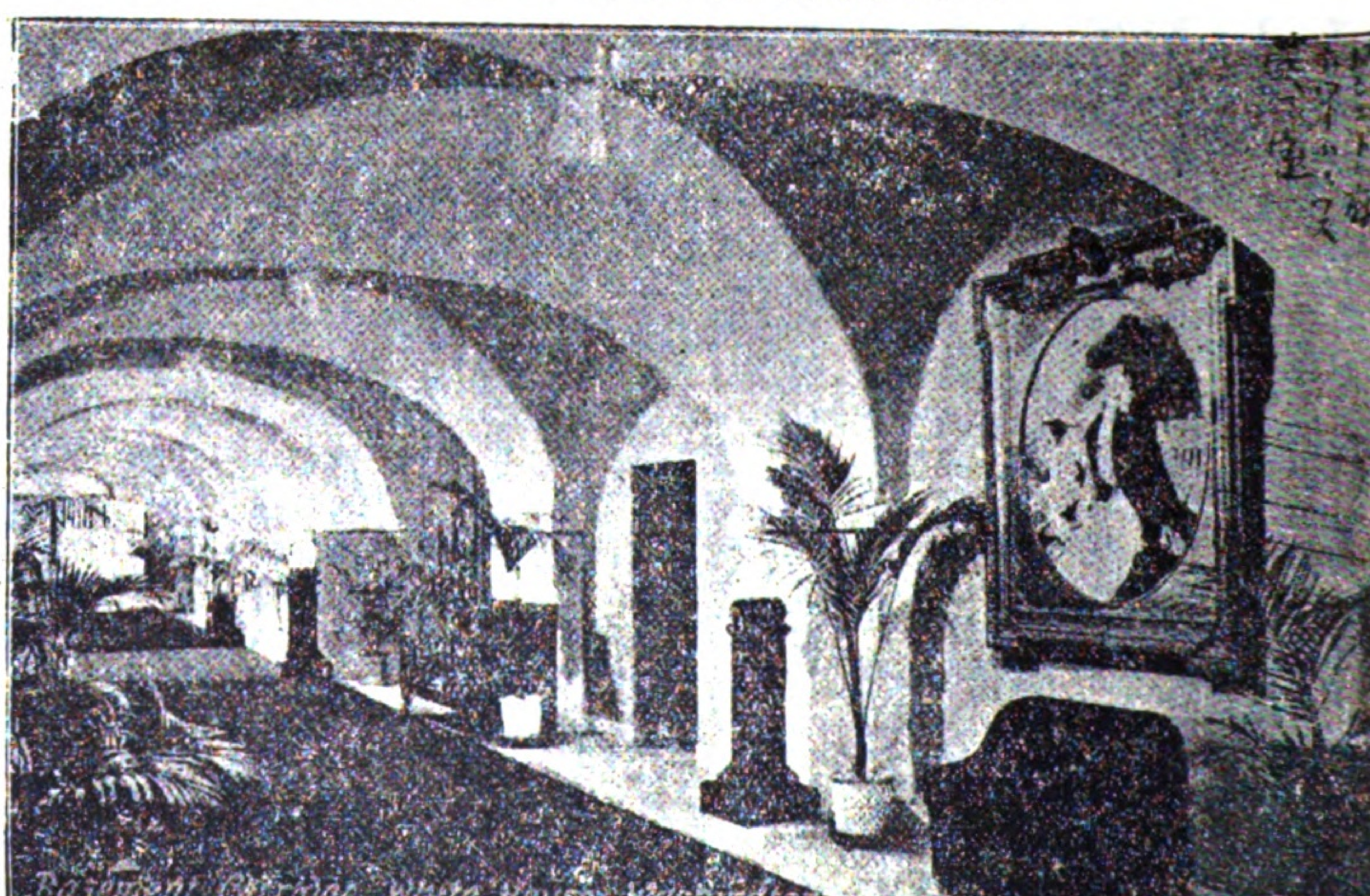
日本の婦人は處女時代には、親の家代々に傳つて居る紋を附けるが、嫁入をすると良人の家の紋を付けると申す事をお話し致しましたところ、日本の婦人はそれほどまでに良人に一身を献げられるのですかと、非常に感心なさいました。それから帶の結び方に就きましても、處女の間は立矢の字と申すのに結び、妻となればお太鼓に結ぶけれども、少し年を取つた處女はお太鼓に結ぶ事もあると云ふやうな談話を致しましたが、つまらぬ私共の談話でも熱心に耳を傾けて居られるところは、誠に如才ない婦人方だと存じました。而して唯だ如才ないばかりでなく、眞情が善くゆき屆いて居りますので、お寒くなつてから、私達の羽織なしの姿が如何にも寒む相に思はれたらしく、ホテルから外出する際など『お寒くはありませんか、手袋は襟

巻は……』と多勢で大騒ぎして氣を付けられました。尤も自働車は風を切つて却々寒うございますから、大抵被り物を致して居りました。

▲賑かな芝居の樂隊

私共婦人連の御馳走として、方々で芝居をよく見せられました。劇場は御承知の通り見物席の椅子が後へ行くほど漸々高くなつて舞臺を見下すやうになつて居ますから、遠くの土間からでも善く見えますが、矢張り上席は日本のウヅラと云つた樣な場所で、大抵四ツ位に仕切られた箱の中に椅子が列べてございます。團體の中でも男の方は土間に招せられた方もございましたが、私共は皆ウヅラ式の場所で見物したのです。劇場内の各處に日米の國旗が交叉されてあるのを見ますと、誠に愉快でございました。時間は大抵午後七八時頃から十一時頃まで位ですが、幕合が極短く殆ど無い時さへございますから、却々見答へがございます。筋書と申しても、日本のよりズット簡單ですけれども、

米國大統領官邸の地下室



仕業が上手ですから、迚も解るまいと想像した壓の私などにも善く解つて面白うございました。ハイ鳴物は普通の樂隊にピアノ、ヴアイオリン、横笛、竪笛、太鼓が大中小、それに清樂も少し混つて、其賑かな事と申したら、幕明の際など耳がガン／＼するやうな事がございます。尤も少しシンミリとした劇になりますと、矢張り極靜かな樂を奏します。樂師は舞臺前面に沿ふた五尺幅位の長い箱舟の中へ入つて奏樂するのでございました。

▲泣かされた芝居

芝居は方々で見ましたが、大抵一幕づゝ異つた賑かなもので、先ア輕業式のものか、茶番式のものでございました。澤山な馬を自由に操縦したり綱渡りをしたり隨分手に汗を握るやうな輕業を見ましたので、何時もチヤリネを思ひ出しました。猿の扮裝をした俳優が長く懸け渡した細綱に吊下つてスー／＼と疾走しましたのは宛然本物の猿に異らぬ身輕の藝當で御座いましたが、斯う云ふ時には樂隊の方でもキー／＼と猿の樂を奏したのです。

それで私共は話の種に一度悲劇を見たいと存じ、其希望を打ち明けました處、一夜紐育の大劇場で面白い悲劇を見せられました。其筋は「或妙齡の令嬢が想思の若い士官と婚約が成り立つて居りましたが、叔母の伯爵夫人が意地惡く邪魔をした爲めに結婚の運びに至らず、煩悶して居る內、士官は戰地へ出征して討死しました。令嬢は絶望して尼寺に投じ、修業して居るうち、尼の看護婦隊に加はり傷病兵を看護する事と爲りました。スルト士官の戰死は間違であつて、めぐり逢つたから夢かとばかり喜びましたが、神の前に献げた身で今は結婚することは出來ないことに心付き苦悶し始めました。士官は人をして令嬢を尼寺から奪ひ來らしめ、自分の胸に短銃を當て自殺の覺悟で口說きましたので、令嬢は愛の爲めに神の前に罪人とならんと覺悟して承諾しましたが、更に士官に向つて自分の胸中の切なき事を述べ、貴郞も軍人の身として尼を奪ひ去

られたのは良心に責められて嘸お苦しいでせうと歎きますと、士官は煩悶の極遂に短銃で自殺した」と云ふ仕組でございましたが、義と情との板挾みになつた令孃の斷膓のコナシが實に眞に逼つて私共は手巾を絞りました。私共にはセリフが善く解りませんけれども、格別口數も利かずに愁歎を充分表はす處は、團十郎の腹藝と同じでございませう。彼地の劇場は御承知の通り、場内で食事は勿論喫烟も許しません、又見物同士話を致すにもコツソリと他に聞えぬやうに致し、歩くのにも靴音を忍ばせると云ふ風ですから、實に靜粛なものでございます。幻燈も度々劇場で見ましたが、これは歌舞伎座あたりで致すのと大した違ひは無いやうに存じました。

▲米國婦人間に評判高き小説

バターフライと申す小説は、米國で有名なものと見えまして、善くお話が出ました。これは米國の水兵が日本の婦人と相愛して日本で結婚して置きながら、程經て米國へ歸り再び日本へ來た時には正妻を連れて居つたので、日本の婦人は悲んで自殺したと云ふ筋でございますが、これを芝居で致しますと、米國の婦人は皆泣くさうでございます。それで今度方々でバターフライをお讀みでしたか〳〵と尋ねられたのですが、未だ讀んだ事がないので誠にキマリの惡い思ひを致しました。少し落ち着きましたらば、一度讀んで置かなければならぬと存じて居ります。

▲大統領に謁見

ミネアポリスで大統領に謁見の際、澁澤さんの奥樣は前年渡米なすつた折、お近附におなりで居らつしやいましたので、今度は可なりお物語がおありのやうでございました。大統領はニコ〳〵した極おチヨクな方で、御近侍の方なども私共の豫想よりズツト少く、誠に平民的な事だと感心致しました。

▲此次は多勢でお出で下さい

お恥しいお話ですが、私など地名を聞いたことさへ

無い處へ參りますと、『日本にも馬車がありますか』などゝ質問されました。スルト中には日本通の人もあつて『日本には馬車どころか電車もある自働車もある米國と同じやうだ』と説明されるのです。併し斯樣いふ風に未だ善く日本を知らぬ處でも、盛に私共を歡迎して呉れました。何處へ參つても婦人方が『よく日本服で來て下すつた私共はこれを大層喜んで居ります。併し最少し多勢で御出でかと樂んで居たのに、僅つた六人では餘り御淋しいではありませんか、此次にはもつと多勢樣で入らしつて下さい』と申すことを繰返されました。

赤い友禪の被布を召した蕪切の愛らしい孃樣が胸に米國旗の小さいのを挿んで行儀よく夫人の側に坐り、楓のやうな兩手を火桶に翳して居られる。大油繪のモデルは此孃樣のお姉樣で而も今は世になき方と云ふ事が、此孃樣の御話で判りました。



社會教育

男が女より受くる感化

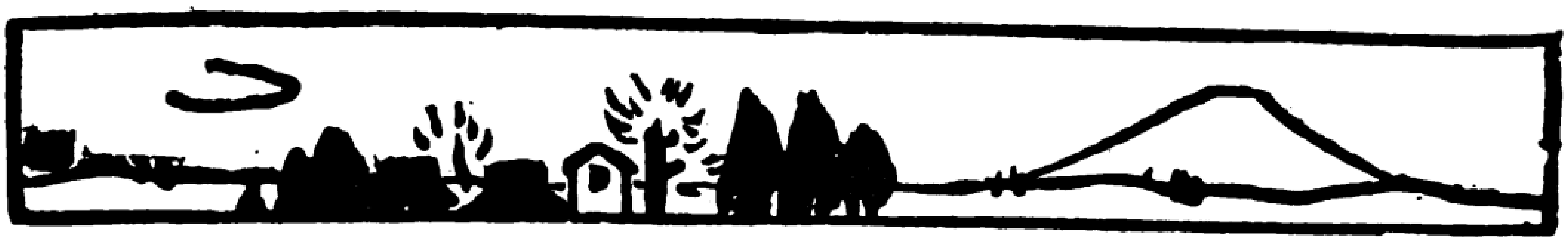
伊藤公が兇徒の手に斃れて、我國の新聞紙は競うて公の逸事蹟話を傳へたにも拘らず、横濱邊にある外字新聞は、一も公の女に關する半面を記載しなかつた。

蓋し攀柳折花の遊びは、文明國紳士の恥辱、少くとも諱め置くべきもので、彼等が之を掲げなかつたのは、一に偉人に對する禮としてゞもあつたらうが、一は又歐米人の社會的道徳の進歩を示すものとも見らるゝ。

我日本は、維新時代の豪放磊落の風習未だに熄まず、寧ろ蕩遊を誇りとし、謹直を以て無能語るに足らずとして、疎んずるの風があるので、新聞紙も好んで男女間の痴態を寫せば、讀者も亦之を喜ぶ。

従つて時めく紳士に節操を買はれて名譽として居る女もある、又斯る女を崇拜する輩もある、男子の放蕩もさる事ながら、女が斯んな有樣では、到底男子の堕落を止むることは出來ない。

米國の新聞は捏造を逞うするので名高いが、それでも淫猥な記事は書かない、事實の大略位は報するけれども、日本のやうに



挑發的には書かない、萬一書きでもすると、女を侮辱するものとして、細君が怒る、家庭で其新聞を取らなくなる。

嗚呼天下も困るが、と云つて、男の言ふ儘に唯々諾々、[illegible]義泣[illegible]性に供して顧みないやうでも困まる、柔順は女の美徳であるけれども、度を過ごせば卑屈に陥る、のみならず、却つて男子を堕落せしむる基となる。

男子の堕落は半ば婦人の罪である、男子の堕落を防ぐには、婦人が先づ一定の見識を具へなければならぬ、すると自然男子の品性も高まつて來る。

例へば或會社に、多勢の男の中に二三の女事務員があるとする、若し夫等の婦人が柔婉一方で毫も内に恃む所がなく、猥達の言ふ儘になつたら、其會社の風儀は紊れるであらう、一村に此種の婦人が多ければ、一村の風紀衰へ、一國に多ければ、一國が堕落する。

女の髪は能く大象をも繋ぐといふ程に、普通の男子は女の爲めに堕落もし、向上もする、百萬遍の説法よりも美人一滴の涙に動かされるのが人情である、男子の堕落を救ふに、倫理道徳も必要だけれども、精神の健全なる婦人を以てする事は、更に捷徑である。(浮田法學博士)

子供の發育と休養時間

一概に兒童と言つても其の範圍は頗る廣いが、特に學齡兒童に

對して注意すべきは、父兄が學校以外の日課を課する事である。言ふまでもなく、現今の學制は普通の兒童に適するやうにしてあるのであるが、然し多數の中には餘りに輕る過ぎる者もあれば、又重過ぎる者もある、例へば二碗の食で腹一杯になる兒童もあれば、四碗の食も猶腹を滿たすに足らぬ兒童もあると同じである。

斯くの如く同じ兒童の中でも力は銘々相等しく無いのである、けれども學校では所謂個人教育を行ふ事が出來ないから、止むを得ず其中間を取つて平均三碗の食を與へて居るのである、故に或る一部の兒童は既に其量の餘りに多過ぎるのに困つて居る、然るに親はそんな事には一向氣が付ないで無暗に焦慮て果ては家庭教師まで雇て兒童に勉強を強る、又女兒であれば學校の日課以外に家に歸ると音樂だとか茶の湯だとか活花だとか云ふ遊藝を教へるので、遂には神經衰弱を起して、其結果發育不良に陥り、折角延びかゝつた芽を萎縮さして了ふやうになるのである、是は全く兒童の罪ではなくて父兄が惡いのである。

幼稚な兒童に過度な負擔を強いる事の不可な理由は前申した通りであるが、是は畢竟父兄が他の兒童に後れさせまいと焦慮る結果に外ならないのである。けれども幼少時代の俊秀が必ずしも成長後豪くなるに極つては居ない、要するに少年時代は何うでも、十分成長をして獨立して社會に活動するやうになつてから豪くなれば可いのであるから、幼少時代には唯その英氣を養つて置けばよいのである。



一體今の兒童には身體を錬る時間が乏しい、早い話しが朝起きて食事をすると直ぐ學校に行かねばならぬ。又午後は二時乃至三時に歸て少し休むと又日課の復習をせねばならぬ、左右する中には日が暮て了ふと云ふ風で、殆ど運動する時間が無い、よく年寄りが今の子供は弱くて不可んと云ふが、昔の人は果して頑丈であつたか否かは別として、身體を錬る時間が有つた事は事實である、その一例を擧ると、柔道をやるとか、擊劍をやるとか、或は又弓術、馬術などの稽古をやつて居たから、自然身體が錬られた、然るに今の兒童にはさう云ふ機會がないから、何しても身體の運動に不足を感ずるのである。

修養と休養とは常に相離る可からざるものであるが一體日常の起居は何うしたら可いかと云ふに、必ずしも朝は何時に起きて夜は何時に寢ると云ふやうに規律的でなくても可い、唯その睡眠の時間丈けは凡定めて置いた方が可い、例へば前の晩は床に入るのが少し遲れたと思へば、翌朝は之れに準じて少し長く寢かすと云ふやうにするのである、是は唯休養の一例に過ぎないが、總ての事も之に準じて行けば可いのである。(弘田醫學博士)

兒童と貯蓄思想

私の實驗に依りますと子供が來た、幼稚園に通つて居る時代か

ら、貯蓄思想を涵養する事が最も大切であらうと思ひます、無論幼稚園時代には金錢の勘定も出來ない位のものですから、金錢の貴い事の解らう筈はありませぬが夫れが段々成長して來るに伴れて自然にわかつて來るのです、然し唯無暗に金錢を尊がらせると遂には所謂守錢奴となる弊がありますから餘程注意しなければなりません。

私は前申した通り子供が幼稚園に通つてる時代から貯蓄をさしてやりました、其の方法は幼稚園へ歩いて行つた時には其車代を貯蓄させるので厶います、又子供の日用品などは一切私が買つてやりますから、子供は自分で一厘半錢の金を持つ必要は有りません、尤も小學校時代からは毎日車代の外に辨當代と云ふものを少し多い目にやつて其の殘りも貯蓄させました、而して是が小學校から中學校、高等學校と進むに伴れて其の額は随分夥しいものになりました、けれども子供は殆んど此貯蓄を費つた事は厶いませんでした。

以上の外に私は子供に地圖や繪畫を書かして夫れを一枚幾何かで買つてやりました紙や繪具などは總て私から提供してやりました、而して夫れも貯蓄させました、是は唯貯蓄思想を養ふ許りでなく子供が餘り此方面に興味を持つて居なかつたから、美術思想を養ふ一助としてやらしたので厶います。

斯う云ふ風で貯金は殆んど奬勵的にやらせましたが、子供は餘り之を出して使はうとはしませんでした。

斯んな風に平常は餘り使ひませんでしたが、其代り使ふ時には随分思切つた使ひ方を致します、何時かも兄弟二人で薔薇を買つて來ると云ふから、二三十錢位で買つて來る事と思つて居ましたら、一度に五圓も買て來ました、而して夫れを何うするかと見て居ましたら二人で屋敷中に植ゑて了ひました、殊に私の部屋の前には立派なの許りを選んで澤山植ゑて吳れました其外オルガン、ピヤノ、玉突きなど云ふ金目なもの許り買つて來ますが私は曾て一度も夫れを拒んだ事は厶いません、要するに幼少時代から貯蓄思想を養つて置く事が肝要だらうと思ひます。(鳩山春子夫人)



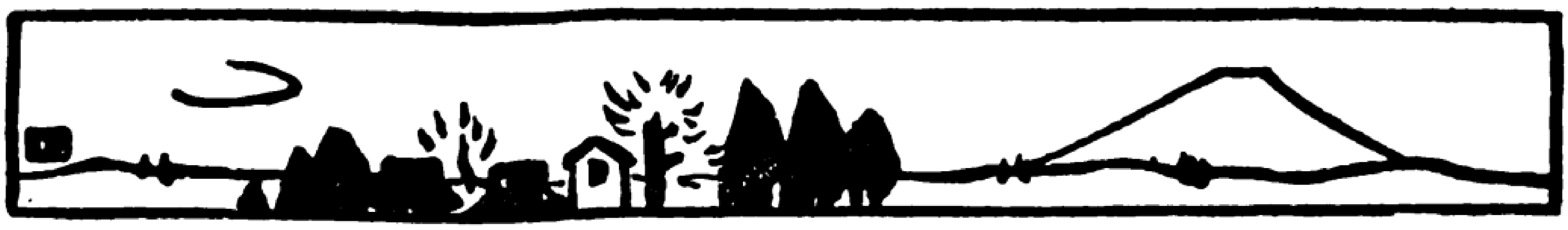
ホドソン河畔船上の樂園

私が紐育に參つて大に羨しく感じたことがあります。ホドソンの河畔に日本で申すと築地の様な處に立派な市立病院が今や出來上らうとして居ります、其病院の裏手の河岸に汚い船が一艘繋いでありましたが、此處に私共は引張り込まれました、何の見るべきものがあるのかと思うて居ると、何ぞ圖らん、此船こそ一種の美しい樂園でありました、一體此船は渡船の古手です、勿論日本の渡船とは違つて彼方のは餘程大きい、其上部が學校と幼稚園とになつて居て、時は午後三時過ぎ、可愛らしい男の子や女の子が大勢並んで牛乳とカステーラか何かを食べて居たのです、で、

此は何ですかと尋ねますと、病身の子供を預つて置く所、一つの小兒保養所とでも云ふべき所であるとの事でした、近頃紐育には結核性の病氣が非常に流行して居て、これは個人の不幸のみならず、社會の迷惑になると云ふので、斯う云ふ種類の病身の子供を此所に預る、しかし只預るのでは子供の體育はそれで補つて行かれるにしても大切の學齢時期を仇に過して其勉强を遲れさせると云ふので、午前午後と〻二時間宛勉强をさせ　普通の兒童に比して僅かに一二年遲れるのみで、不完全なる體育を成るべく充分に發達させる事にしてあります、甲板は幼穉園の運動場、又陸上には廣い花壇もあつて空氣も宜しう御座ますから、子供は皆血色うるはしく、これが病身かと思ふほどであります、斯くてこそ子供の仕合、社會の仕合、近所迷惑の恐れもなくて非常に好いと私は深く羨しく感じました、殘念なのは、此船上の幼稚園は一種の慈善事業であるか、それとも相當の謝儀を取つてして居るのか、その邊を聞き漏して參つた事です、（鹽谷小波氏）

婦人一代の心理の變化

凡そ男でも女でも、十四五歳迄は多血質で、物に感じ易く、些細の事にも激するが、二十歳を超すと膽汁質となり、自我の念が强くなつて、地震雷火事爺と、恐ろしいものに數へられた其爺までも馬鹿にするやうになる、



次に女は四十四歳より五十歳、男は六十歳前後にもなれば、神經質となつで非常に物を氣にする、氣むづかしくなる、それから粘液質に變じて、凡ての感じが鈍くなり、口からは涎を垂らして次第次第に老耄する、

何故年が寄ると神經質になるかといふに、之は生理的の變化、即ち女ならば月經が全く閉止して、身體に大變化を來たすから氣質も女らしくなくなり、口の邊りには男の樣に髯が生える、世渡りの疲れと老を感ずる寂しみとで、心が何とはなしに沈むで來る、それで何か事件の起つた場合、老人に心配を掛けてはといふ思ひやりから、默つて知らせずに置くと、己れを馬鹿にして居ると怒り、若かい者同志で何か囁やいてゞも居ると、己れの惡口を言ふのではないかと、聞き耳立てる、

愚痴も老人の附物である、其徒らに死兒の齡を數ふるのは、自分にはもう子を儲けることが出來ないからである、老人に慾張りが多いのも、若い者なら働けば得られるといふ信念もあるが、老人には之が無いから、何でも現在ある物を掻き集むるのである、

お婆さんが雜巾の古いのを溜め込んだり、一尺の糸屑も拾つて蓄へなさるのは、善い御心掛ですが、之を働き盛りの忙がしい若い者に强ゆるのは、少々御無理と申すもの、

老人がくどくなるのは、新らしい趣味を解し得ずして、自分の若い時に感じた事のみを面白いと思ふからである、故に同じ事を

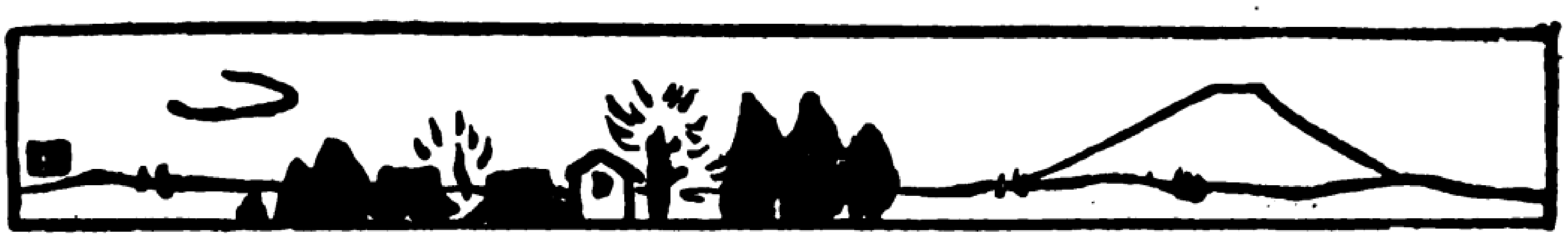
何遍も繰返すやうになつたら、年は取らなくとも、其人は老いたと稱して宜しい、

自分の過去の經驗からのみ推して事物を判斷する爲め、兎角老人は頑固に陷る、老人に限らず、或一事にばかり心を潜むる人にも此弊はある、例へば文學者は政治家を俗と罵り、科學者は哲學者を空想とけなすが如きである、

要するに頑迷と云ひ、誇張と云ひ、其原因の大部分は生理的變化、殊に色情の衰滅と關係するのであるから、若い嫁などは寧ろ同情を以てこれに仕へればならぬ、(高嶋平三郎氏)

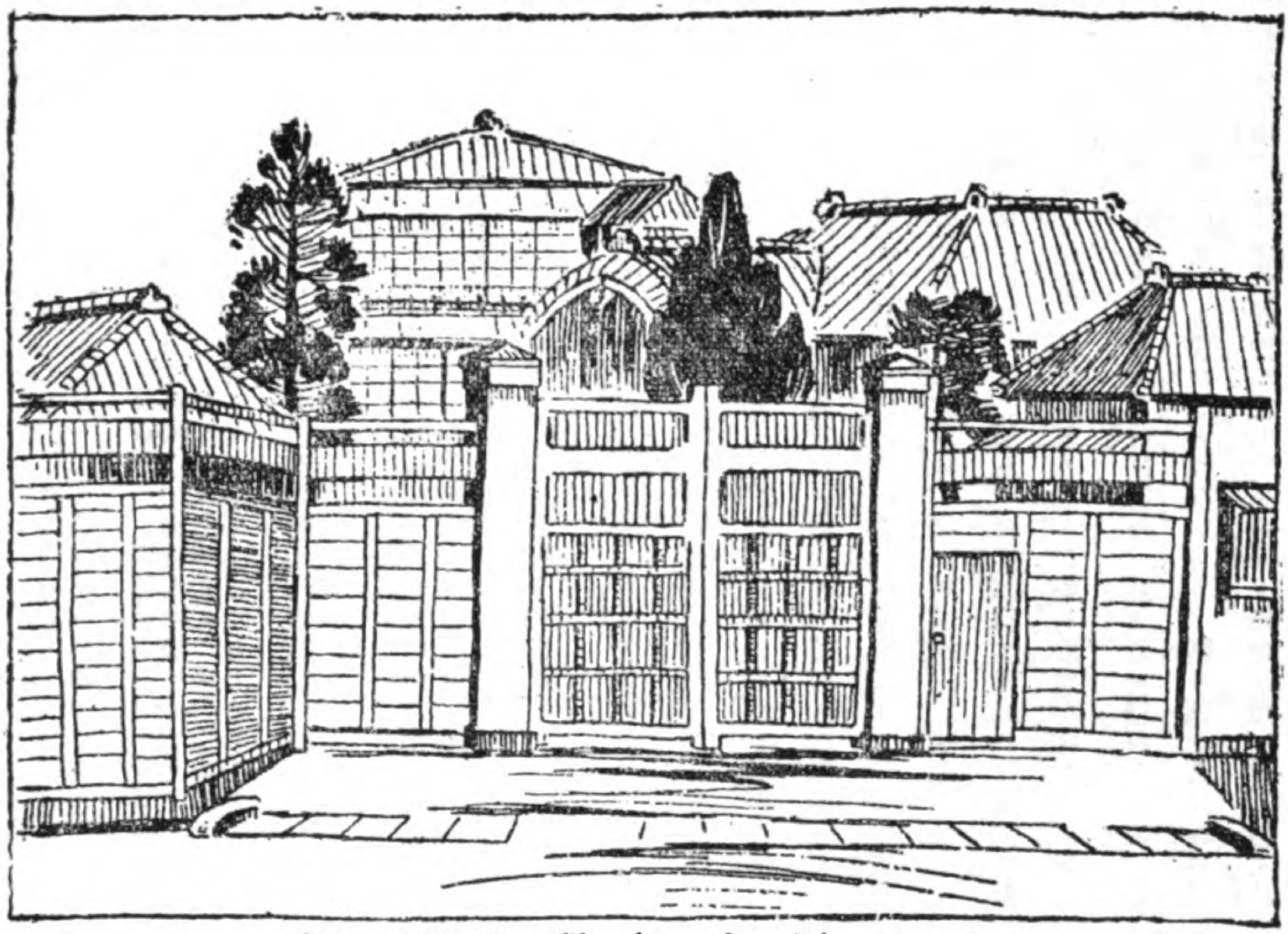
男子の術中に陷る婦人

凡そ婦人ほど虛榮心強いものはありません、さうしてその強い虛榮心に基いて未來を豫想する癖があります、それも未來の惡い方面は少しも豫想せずに、必ず善い方面のことのみを豫想する、これが即ち又誘惑に陷り易い一つの原因をなして居るので、虛言家の男子や、親切の態度を裝ふ男子は、斯る婦人に對しては愈々危險な人物と言はればなりません、例之ば學生であれば婦人に對して先づ第一に自分は始終優等であるが如き感想を抱かしめすると直ぐに此人物を末頼もしく思ひ込み、此人の世話をして置いたら、自分等の行末にも惡いことはなからう、斯う云ふ人に緣付けたなら娘は必ず立身出世をするで有らうと母親が思へば、娘も亦此人の妻となつたら、後には立派な貴夫人になれるだらうなど〻思ふ、そこが婦人の虛榮心の他に乘ぜらる〻源です、最初は巧言令色で瞞着して置き、それから虛榮心に向つて切込み、親切の假裝を以て思ふま〻に操縱すると、婦人は知らず識らずの間に其術中に陷り、愈々虛榮心を燃されて、遂にその者の爲めに恐ろしい罪惡まで犯すやうになる、これは令孃でも裏店の娘でも理窟は同じです、畢竟するに婦人は催眠術中の人間になつて仕舞ふのですから僞多き男子の言葉の中には甚だしき害毒の含まれて居る事、親切らしき態度の裏には恐るべき或物の隱れて居る事を熟慮し、親らは虛榮の空想に陷り易き習癖あることをも自覺して、輕々しく男子の甘言を信ぜぬやうに警戒しなければなりません、殊に正直にして教育ある婦人ほど此弱點の爲めに深みに誘はれ易いと云ふことは爭ひ難い事實ですから、返す〲も自己の性癖と世態との上に反省熟慮を加へて身を過まらぬやうにするが處世上大切であります。(花井法學博士)

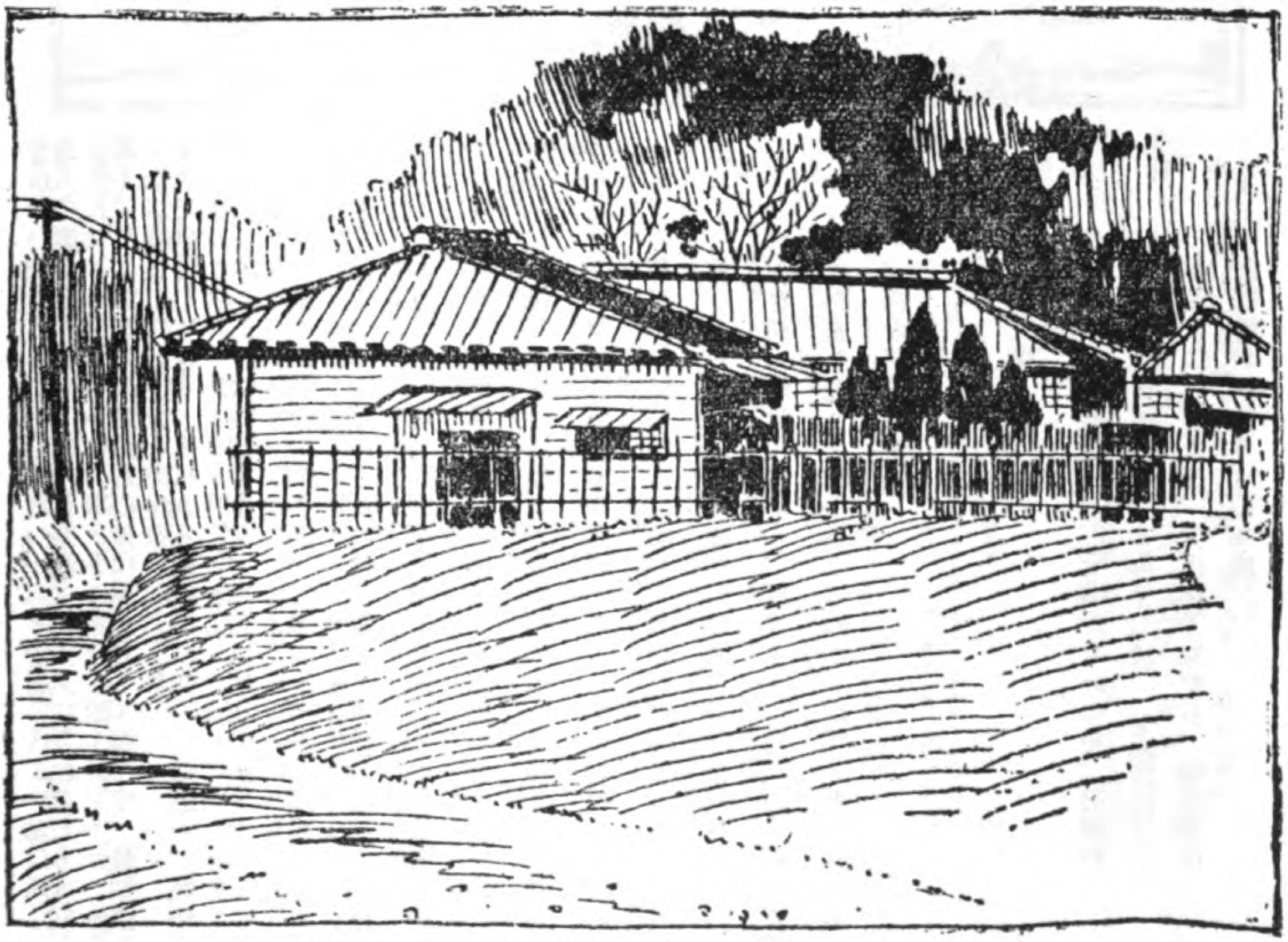


正誤

本誌一月號寫眞口繪の令孃かゞみの中、「男爵原田一道氏令孫信子」とありしは、「令孃信枝子」の誤りに付訂正す、尙ほ序でながら、信枝孃は既に嫁がれたるもの〻由



小松原文相邸　(麴町富士見町)



後藤遞相邸　(麻布狸穴町)

新舊の風を一時に見る
大名華族の家庭

湘南

△公侯爵の家庭に見る新色彩

舊大名華族とは先づ德川公爵家を筆頭として舊三十萬石以上と稱された毛利、前田、細川、淺野、黑田、鍋島、山内、池田、蜂須賀等の諸家を指すので、各家おの〳〵特色があつて、家庭の模樣が一樣でないのは無論である。此の一廓は從來別天地を以て目せられ、普通の上流と家風や格式が違つてゐるやうに思はれてゐたものである。なるほど別天地には相違ない。封建時代の名殘を留めて、一般上流の家庭とずんと異つてゐたのは事實である。けれど、その後家令家扶には新人物が採用されたり、家制などにも種々の變化を現はしてゐるのが今日の狀況で、曾て別天地を以て目された大々名華族の家風も近頃はよほど新彩を帶びて來た特に當主又は繼嗣に、續々俊秀の現はれてゐるのは、その著しい例で、鍋島侯爵の令息桂次郎氏は、韓國統監府外事總長の要職にあるし、山内豐景侯は、陸軍大尉の職を以て、今は佛蘭西大使館附の武官である。又島津公爵は一昨年成績優等を以て海軍兵學校を卒業せられ、德川公爵家の繼嗣家正氏は、昨年第一の成績を以て外交官試驗に及第あつたのはまだ世人の記憶に新しい筈である。或は目下陸軍大學在學の前田侯爵にしても、今年拔群の成績を以て卒業されるだらうとは同大學敎官の一致する所である。其他德川、黑田、蜂須賀、鍋島、細川家(英佛二國に學び土木學に深し)の當主は孰れも新知識を吸收した華族社會の名品で、大大名華族の一廓が、新彩を帶びて來たのは明かな事實である。とは言へ、新彩を帶びてゐる中にも、一般の上流と異つてゐるのは流石に大々名華族の家庭である特に島津家、毛利家、細川家、池田家の如きは、格式はなか〳〵嚴重で、別天地の面影が最も多く、前田家

なども百萬石の遺風は本郷元富士町の洋館に燦びいてゐる。

△多くは家族が小人數

大々名華族といへば、屋敷内に詰めてゐる人數は随分多いものであるが、家族の人數は孰れも案外寡いやうである。毛利公爵家の如きがその一例で、當主元昭公は本國三田尻の本邸に住んで居らるゝから高輪の屋敷に住んで居られるのは、毛利公母堂として世間に知られてゐる安子の方お一人のみである。尤もまだ外に「梅御邸」(母堂の母君、當年七十六歳)が、東京に居られるが、此方も別邸に住んで居られる。そして三田尻の本邸は如何かといへば、元昭公御夫婦に幼年の令息お二人きりである。令息の年長にまだ一人の姫様は在らつしやるが、只今は學習院在學中で、麻布三軒家の中島某女史の許から通つて居られるから、三田尻本邸の御人數といつたら、四人ぼつちの寡い御家族である。島津公爵家なども一昨年兵學校を卒業されたばかりの弱年な當主忠重公の外に新渡戸博士邸に姫様が一人在らつしやる位のもので、やはり御家族は寡い方である。最も同公爵家へは近々徳大寺家からお輿入はあるさうだが、それにしても家族は多い方とは言へない。細川侯爵家は、侯爵御夫婦に姫様お一人、山内侯爵家は、御子様はお一人もない。前田侯爵家もやはり其様で、侯爵御夫婦と御後室と、若様利建君の在らつしやる丈け。それも御當主は第四聯隊附の陸軍中尉で平日は大久保別邸の敬義塾に居られるし、若君は鎌倉の御別莊にお出でになるから、本郷の本邸には御後室と若夫人丈けである。大々名華族の中で、家族の多いのは、僅に鍋島、黒田、蜂須賀家位のものである。

△五十人以上の男女の附人

右の如く大抵は家族は寡いが、而かもお屋敷の人數は大したものである。表向には家令、家扶、家從が居る。奥には奥向を締つてゐる老女が居る。殿様附、奥様附、若様附の女中が居る。呉服の間、お臺子、御膳

所等專屬の女中も居る。表と奥向の間に立つてゐるお使番も居る。臺所には料理番が居る。御飯焚が居る。之でも隨分の人數だが、別に獨立して財産部があつて六七人の人數が割據してゐる。又た別に編輯部といふものもある。例令家族は少くとも邸内に一戸を張つてゐる者丈けでも隨分の人數で、それに別邸の者を加へると、非常な人數となる。先づ一家族の周圍には五十人以上の男女が取り卷いて居るのが普通である。從つて大々名華族の家庭は普通の上流と比ぶれば、非常に複雜してゐるのである。

△財産部と家政部の役割

毛利公爵家などは當主元昭公が本國三田尻に控へて居られる丈けに、使用人の種類も人數も隨分多い方で東京のお屋敷丈けでも、先づ表向の役人の家令田島信夫氏を筆頭として、家扶二名、家從六名、又家從の下に辨事、用辨などいふ者が十數名居る。奥には役女中の外に近侍長、傳役、近侍、などいふ者が是亦十數名居る。前田侯爵家は、表向と奥向とが接近してゐるから、奥向に傳役近侍等の使用人はないが、それでも家事に與つてゐる役人は相應に居る。即ち家政顧問(名義は家令事務取扱)には三井銀行の早川千吉郎氏が控へてござる。早川氏の下に家扶二名、一名は會計主任で、一名は家政萬端を司つてゐる庶務主任である。會計主任は小木貞正老人で、ツイ先頃迄京都府第二部長を勤めてゐた高木亥三郎氏は庶務主任である。高木庶務の下に、家從二十名、家從の下に家丁五六名、それに給仕數名ある。別に器具寶物を扱つてゐる雜具掛五六十名あり又編輯掛もある。財産部は毛利公爵家で、毛利五郎男が財産主管(田島信夫氏は副主管)となつて獨立してゐるやうに、羽野知顯氏を親玉に控へて、全く家政と獨立してゐる。

△奥女中の權勢

複雜なる大々名華族の家庭に更に特色を放つてゐるのは、奥女中である。毛利公爵家などの樣子を見ると

奥御用人に役女中、近侍長、傳役、近侍等が居る事は先に述べた通りであるが、其中役女中などは皆一人一人にお室を戴いて、却々仰山な生活をして居る。そして近侍長は君側に侍つて、幅を利かせ、老女は御後室を控へて、奥向の權威を一身に收めてゐる事は今も昔と變らない。其他御後室付、若様付、呉服の間、お臺子、御膳所、應接間付等と一々分れて居つて非常に仕事が込み入つてゐる。前田侯爵家の、奥向はずんと簡略になつて、大刀自（老女の稱）と許詰（役女中の稱）とで濟まされてあるが、其外に殿様付二名、若奥様付一名、御後室様付二名、利建様（幼年の御令息）付二名、それに呉服の間及御膳所等にそれぐ＼役女中が居るから可なりに込み入つた方である。同家では數年前迄鍋島侯爵家から御後室様に付いて來た梅島といふ老婦人が大刀自であつたが、今は絹江といふ老婦人が、奥向一切を取締つてゐるので、奥向御用の衣裳又は調具類は大抵此の大刀自の意見が行はれる。何しろ大々名屋敷の老女の勢力は大したもので、某公爵家の老女の如き、家令も常に一目を置いてゐるといふ。從つて老女の中には氣性の確固した死生の間に出入した女丈夫も交つてゐる。北白川宮家の老女などは、今は八十幾歳で、故宮が仁和寺當時より勤めて居るので、その名は上流に鳴つてゐるが、内親王を迎へられた竹田宮殿下や北白川若宮殿下など皆な此の老女の下に人となられたのである。

△役人の住宅、家族、給料

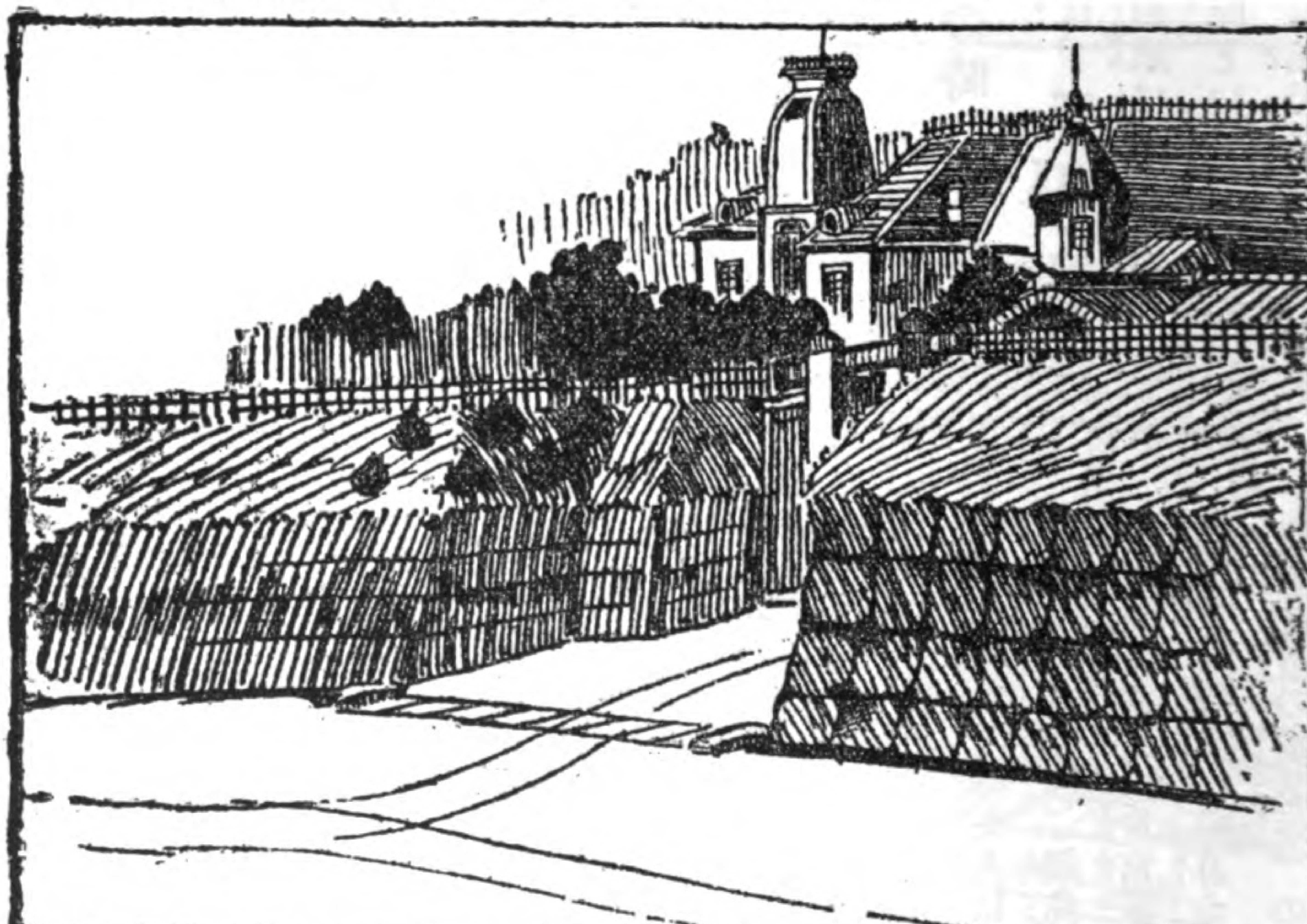
家令以下の役人が、お屋敷の内に長屋を貰つてゐるのはいづれのお屋敷も變らない。前田侯爵家を例に取れば、本鄕元富士町の赤門に沿つてゐる平家が役人の住宅で、一軒の家は玄關を合せて各々五間あるさうな最も財産部主任羽野知顯氏は、庶務主任高木亥三郎氏と共に、屋敷の一部に邸宅を構へ、編輯部詰の諸役人は根岸の別邸に住んでゐる。家扶以下の者の家族は、主人がお屋敷に詰めてゐるといふ丈けで日常は屋敷とは何等の交渉なく、新年に賀禮を申上ぐる位のもの

である。役所詰は、午前九時出の、午後四時退けで、毎日詰所に出で丶事務を執つてゐる。——給料は判然しないが、家扶二名は百五十圓内外、家従は最高七十圓、最低二十圓位のものであらうとか。服務年限は七十歳迄で、月給の中より積立金の制度も設けられてゐる。

△役女中の控室

御用人がお屋敷内に長屋を貰つてゐるやうに、同家では老女以下の役女中も、入り側附の八疊二

竹田宮御邸裏門　（高輪南町）



タ間位、それに女中部屋の附いたお室などを戴いて、宛として、一ッの家庭が出來てゐる。或は賄部屋、湯殿等の附いてゐるのも見える但し近年役女中の取扱が簡單になつたのは事實で前田侯爵家も舊幕時代に比ぶれば、ずんと簡略になつたやうである。大刀自は今でも八疊二タ間と女中部屋が附いてゐるが、許詰女中などは女中部屋を籠めて二タ間に過ぎぬ。そして從前は當番と非番とあつたが、今は當番も非番もなく、毎日お屋敷詰めである。奥女中は大抵舊藩士の家柄より

採用されるので、行儀見習の爲に上つてゐるのもあるが、年若き軍人未亡人等が世を果敢なみ、お乳に上つてゐるもある。若樣のお對手には特に家柄の子弟を選ぶこととなつてゐる。給料は、老女は五十圓以上ださうだが、普通の役女中は、十圓内外、十四五圓位ださうだ。役女中付の女中（腰元）は一ヶ月二三圓である。けれど、屢々お賜りなどがあるので、普通の上流に比ぶれば、手當は薄い方ではない。女中達の邸外に出るのは、お付として、一ヶ月に一回、二ヶ月に一回で、世間との交際は先づ絶たれてゐる樣なものだから報知新聞外二三種の新聞紙に依つて世間の音信を傳へられるのが、何より嬉しいさうである。

△御主人の外出の時

御後室樣又は若奥樣の外出は、一ヶ月に一回位で、頻繁ではない。同侯爵家の御親戚は近衛公爵家、二條公爵家、鍋島侯爵家等で、訪問といつても、如上の御親戚か、又は大久保の別邸へお出でになる位である。

若奥樣の外出の時には、大刀自に、許詰一人、それに家從が附くこととなつてゐる。其時は、奥女中一同及び家扶以下の表役人は玄關にづらりと列を作り、お送りする。尤も家族の婦人が外出ある時に、女中一人、それに三太夫と、斯う表奥の二名が跟いてゐるのは何の大名華族でも殆んど例の樣である。

△公侯爵夫人のお里調べ

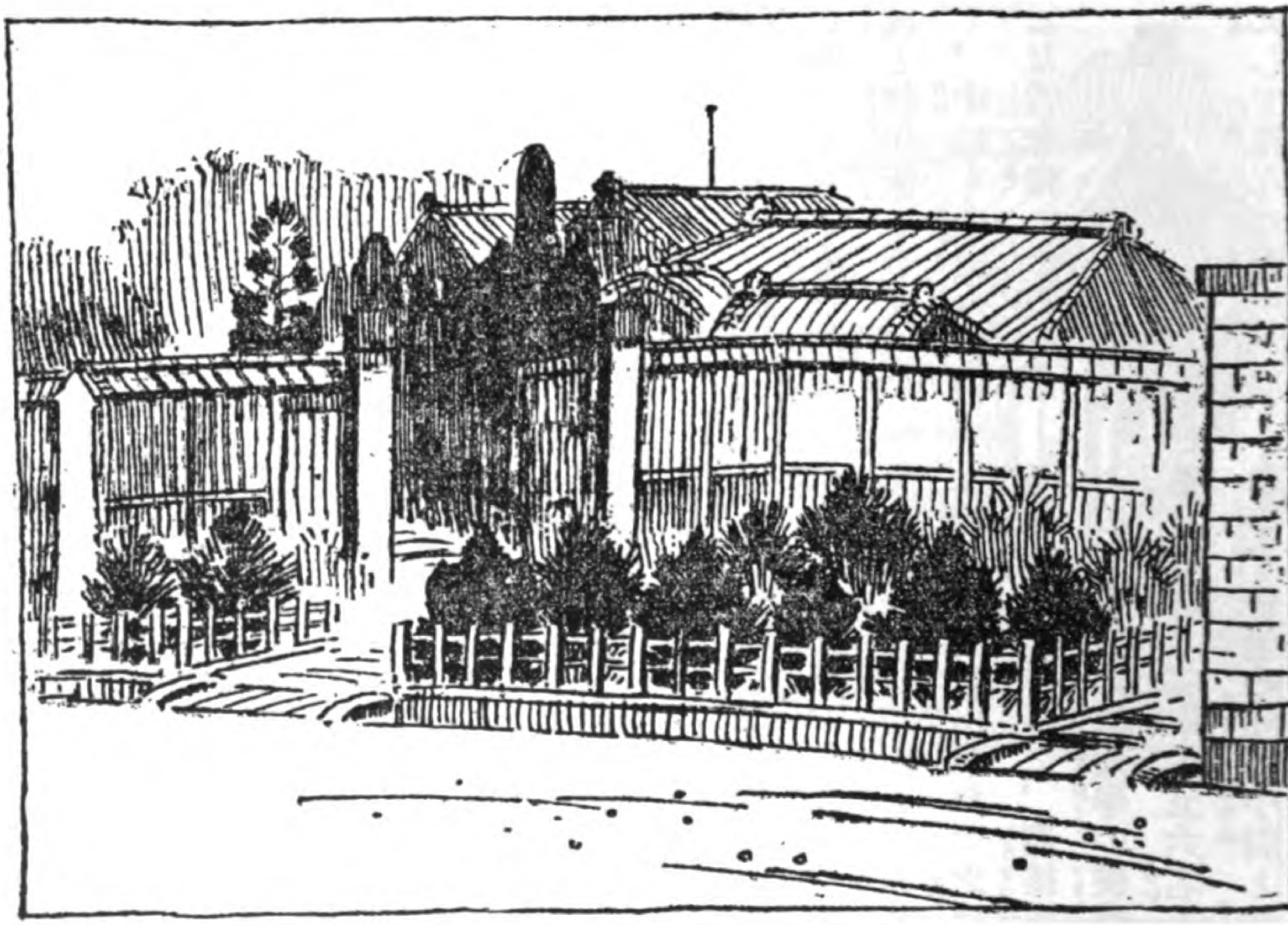
大々名華族の奥樣方のお里を擧げて見ると、不日御婚儀ある島津公爵家は德大寺侯爵の息女、毛利公爵家は三條公爵家の息女、細川侯爵家は大垣の戸田伯爵家黒田侯爵家は島津公爵家、池田侯爵家は御養子で、德川老公爵の令息、蜂須賀家令夫人は德川公爵の息女で令嗣正昭氏の令夫人は、昨年歿くなられたが、公爵德川家達氏の令妹、鍋島侯爵家は公卿華族の廣橋伯爵家山内侯爵家は伏見宮家の御令姫にして、前田侯爵家の御後室は鍋島侯の息女で、利爲侯は同族前田子爵（上州七日市の舊藩主）の第三男である。なほ姻戚の糸を

探れば、公侯爵の間は、大抵親戚になつてゐる。但し親近なる御親戚として、頻繁に往復のあるのは、勿論御夫人のお里又は御息女の御婚姻先である。

△前田侯爵御夫婦のお居間

そろ〳〵と御主人の消息に入る。――大々名華族御夫婦のお居間はいづれのお屋敷でも大抵離れてゐるが、前田侯爵家は十六疊を二タ間宛にして四間を十字形に襖で仕切られてあるのが、相接し

東伏見宮御邸　（赤坂葵町）



てゐる。即ち侯爵のも若奥様のも眞四角で、本間も次の間も八疊である。お居間に二間の床があつて、違ひ棚と飾り物が上つてゐるのは、いづれのお屋敷も相違はない。そして前田侯のお居間などは黒塗に青貝の鏤入つた蝶足の机の傍に書棚があり、若奥様のお居間もお机の傍に料紙棚や三棚（上は戸棚、中は違棚、下は戸棚）があつて、上には對手道具が上つてゐる。いづれのお屋敷も其樣であらうが、奥樣のお居間には又美しい人形が飾られてある此の大小各種の玩具を藏め

る對手文庫は、總ふさつきの紐で結へた總金の高蒔繪で、却々見事なものだ。

△細川侯爵家の盆石

大々名屋敷の娯樂といへば、抹茶、生花、極稀には琴彈、正月松の內には源氏物語や伊勢物語等の歌合せと大抵相場が極まつてゐる。最近一二年來はぼつぼつ香を聞くとが行はれ初めたが、まだ廣くは行はれない。で、奧樣方の日常といへば讀書、作歌、或は生花位で、如何かすると、絹の小巾を集めて、お細工物に手を着けられる方もある。爰に特筆すべきは、細川侯爵家の奧に、盆石の行はれてゐる事である。流石に細川流の本家本元（盆石には遠山流と細川流とあり）とて此處には却々斯道の名手が多く、中にも令夫人の御器用には侯爵家に出入する者は皆な舌を捲いてゐる。

△女人禁制の敬義塾

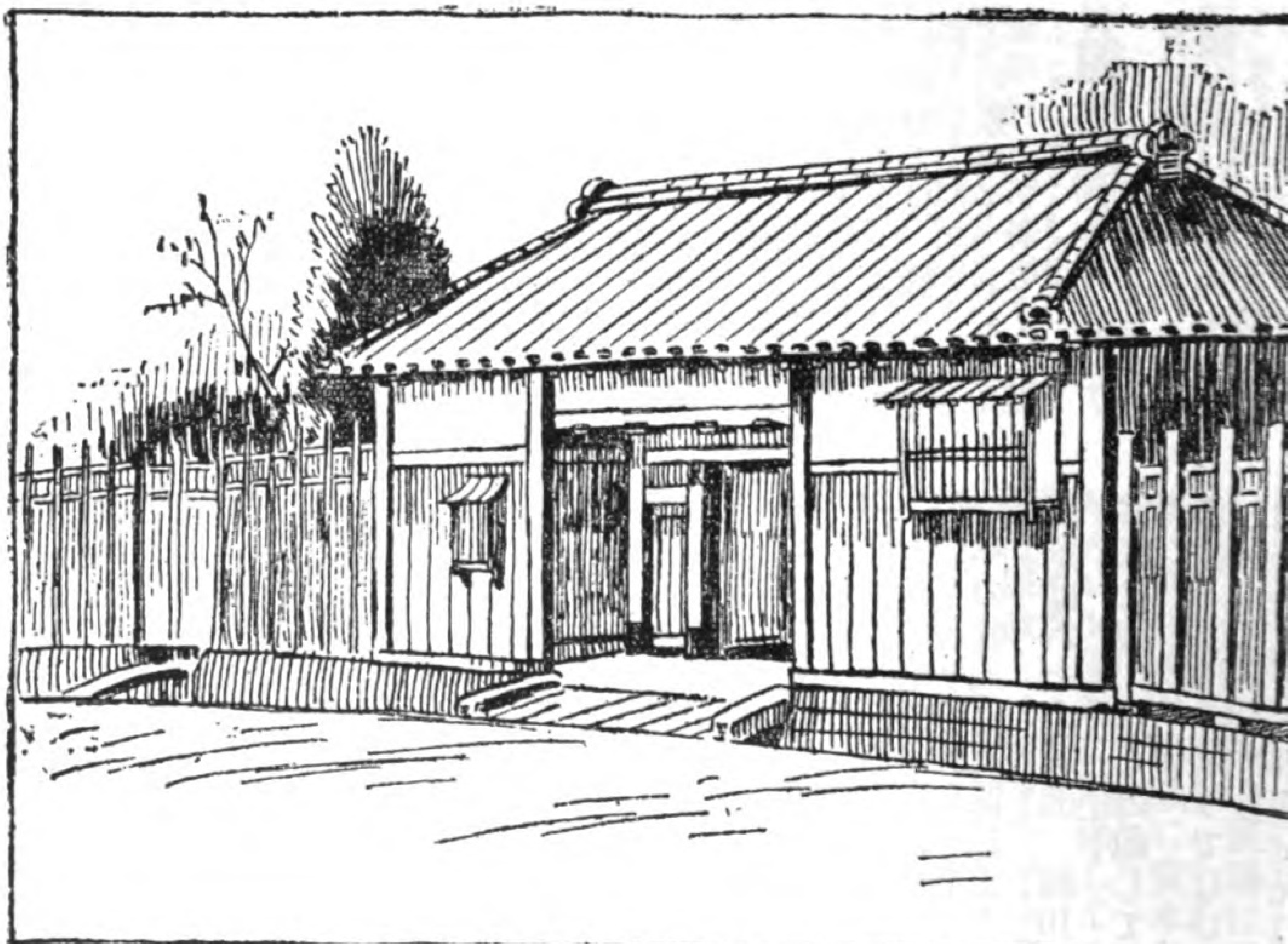
此等の華族の御當主の日常を記して見んに徳川、黑田、鍋島、蜂須賀等の公侯爵は、公人として、世間に立つて居られるから、暫らく置くが、毛利公爵は三田尻の御本邸に在つて作歌に親まれ、細川侯爵は英佛で仕込まれた學問を傾けて讀書に耽られ池田侯爵は本國鳥取に風月を樂しみ、繼嗣は東京のお屋敷に病痾を養つて居らるゝ。此の間に在つて英氣潑剌として前途に最も望みを屬されて居られるのは外交官補の德川公爵令嗣海軍少尉の島津公爵陸軍中尉の前田利爲侯である玆に前田侯爵の日常を記して見ると、侯爵が本邸に歸らるゝのは、一週土曜と日曜の二日で、爾餘の五日間は大久保の別邸に住んで居られるが、此處には家従二名と（一名は、劍客で）書生五六名、それに金澤の碩儒織田小覺氏が従いてゐる。舊臘此の別邸の一角に一ト棟の建築が出來た。之は同族間に有名な女人禁制の敬義塾で、書齋と、應接室と、食堂の三間より成つてゐる。陸軍大學通學の侯爵は織田老儒の下に此の敬義塾に起居し、學生五六名と書生生活を續けて居られるので、普通の陸軍中尉と些も變らない。否むしろ一層

質素で書生風である。

△大名と富豪の服裝くらべ

大々名華族の奥に用ゐられてゐる衣類は富豪華族（岩崎又は三井の如き）から見れば、比較的質素で、平常着は糸織か縮緬それも富豪の家庭が流行を追ふのと反對に、流行を避けて、ケバ〳〵しない物が行はれる。（最も當主御夫婦の氣風に依り、家風に相違あれど。）姫樣方は裾長にして、裏は變り裏の無垢・羽織は夜分の外用ゐられないのが普

梨本宮御邸　（麴町一番町）



通であるらしい。女中の衣類は並裾の紬か銘仙もので糸織は老女格に限られてゐる。細川家などの樣子を聞くに朝お召しは午前の九時又は十時で、夜分のお召物はまた違ひ、そして二三日毎にお召物が更るといふ。

△晝晩の料理とお茶菓子

お料理なども勿論お屋敷によつて相違はあるが、前田侯爵家などは、晝餐は西洋料理、晩餐は日本料理である。其の魚は森下町の能登屋と、本郷四丁目の魚鐵から入つてゐる。魚類は甘

鯛、小鯛、鱒、鱚、ひらめ等で、料理人の獻立によつて日々納めるのである。御臨時の來客があれば麻利支天横町の伊豫屋又は常盤などから入る事もある。お菓子は近頃は西洋菓子も入り初めたが、やはり蒸菓子が多いさうである。本郷四丁目の藤村、安藤坂の紅屋、銀座の壺屋、和泉橋の新杵等は、大々名屋敷に出入する重なる菓子屋であるが、前田家の出入は重に藤村である。菓子の御用は夏より冬が多く、其種類は冬季なれば冬籠、芝の雪・冬至梅、風吹雪等の蒸菓子、春季は白櫻、花ひさご、春の野、彼岸櫻など御用が多いさうである。敷菓子はお屋敷によりそれ〴〵相違はあるが、細川侯爵家のは紅白の腰高の打物だとは、某女史の談話であつた。(富士見町の尙侯爵家では、豚の油で揚げた麵包が出る。流石に琉球王の敷菓子である。

△島津毛利二家の編輯部

終りに、編輯部と財產部の模樣を書いて置かう。いづれのお屋敷でもだが、特に薩・長、土、肥の四家では、宮內省の命に依つて維新史料を蒐集してゐる。大仕掛なのは、島津公爵家と毛利公爵家で、島津家は白金三光町の別邸に編輯部を置き、老儒阿多流氏が主任となつて史料の蒐集に努め、毛利公爵家では中原邦平氏（和製十數冊の井上侯傳の著者、日頃伊藤公傳を發表）が主任となり、白金猿町別邸に編輯部が出來てゐるが、毛利家のには末松子爵が編輯總裁として關係がある。前田侯爵家では、根岸の別邸に編輯部が設けられ、戸水信義（戸水博士の嚴父）世良太一、陸萬猶等の諸老が關係してゐる。

△大々名華族の財產

大々名華族の富は幾何であるか。島津公爵家は、一箇年の收入百萬圓以上といはれ、毛利公爵家及前田侯爵家は六七十萬圓、細川侯爵家は三四十萬圓、鍋島侯爵家は細川家と匹敵してゐるとは世間の取沙汰である事實は保證の限りでないが、島津家以下毛利家、前田家等の家計や事業を見れば、おそらく事實に遠くはあ

るまい。大々名華族の事業といへば、銀行の投資が最も多く、又鑛山に指を染めてゐるお屋敷もある。即ち毛利侯爵家は正金、第十五、第百十八銀行の大株主で前田侯爵家は日本銀行及明治商業銀行に持株多く、細川侯爵家は第十五、第九及び肥後銀行に關係深く、鍋島侯爵家は第十五、第百六銀行に關係あるなどその一例である。金山に全力を注いで居られるのは島津公爵家で、同家所有の山ヶ野及芹ヶ野金山は、日本隨一だといふ。又毛利公爵家は金田炭坑に手を分たれ、前田侯爵家は北海道の農場に眼をつけて居られるやうである。其他水力電氣に資本を投じてゐるお屋敷もあればセメント事業に關係してゐるお屋敷もある。そして事業と家政とは別々で、いづれのお屋敷でも前に紹介したやうに財産部は家政部と獨立してゐる。奥向を見れば、大々名華族の家庭は、封建時代の面影を遺してゐるが、財産制度を見れば、文明風の政治的組織で、舊守と新式、二者をちやんぽんにしてゐるのは、今の大大名華族の家庭である。





名流婦人の趣味と生活

（前號の續）

1、平常最も信仰し給へる古今の人物
2、日常最も感心し給へる金言又は名句
3、艱難に處するの覺悟
4、富貴に處するの心得
5、幼年の折最も樂しくおはせし事柄
6、毎日のお仕事
7、日常の御嗜好（讀書、詠歌、遊藝、旅行其他の趣味）
8、お好みの食品
9、お買物の御用（呉服、小間物、日用食品等）
10、御氣象の一端

（掲載の順序は到着順による）

▲

寺田勇吉氏夫人　寺田つね子

（一）徳川家康公、貝原益軒先生
（二）力ある松も雪には折れ安し素直な柳危げはなし
ふじの山登りし時の正直を常の心にあらまほしさよ
（三）後日を樂み他人の力に依らず一心に働く覺悟
（四）若し自分の子供の教育費を充分に支給し猶餘裕あれば東京市丈にても數千人あるといふ貧困にして義務教育を猶豫せられ居るものを一部分にても就學せしめ度常に考へ居候之れ夫が教育中最も重きを兒童教育に置くを平常耳にし至極最もと思ひ居ればなり
（五）兩親と外出
（六）料理、針仕事、内外の掃除、草花の世話、草採り
（七）全家族との旅行
（八）天金の天麩羅、精養軒の西洋料理、野菜、栗
（九）呉服は通例神田の松屋、西洋料理用食品は牛込の青木堂
（十）勝氣の方

▲ 女子高等師範學校教授　宮川壽美子

(一)キリスト並に古今實行ありし御方々。

例へば僅かなる事に忠實なりし太閤秀吉の如きが其の一人に候。秀吉が未だ信長公の草履取なりし頃、寒き冬の日信長公を玄關にて待ち居りし間主人の草履を懐中に入れ大事に暖め置きし如き、普通なれば寒暖になすもさしつかへなきものなるが、職務を大切に思ふ餘りかくなせし其忠實なる心掛は實に彼をして大事業をなさしめし事と存候。秀吉は鞠の如くこすく、立廻りて成功せし如くいひなす人もある樣なれど、まことは如何なる境遇にても右の樣に忠實なりし事と信じ居候。

(二)汝僅なる事に忠なり、我汝に大なる事を司どらせん。小事は小事なり、されど小事に忠實なるは大事なり。かくすればかくなるものと知りながらやむにやまれぬ大和魂（吉田松陰先生泉岳寺にて）

(三)艱難に處してよく之に打ち勝ち、艱難なる境遇を利用しますます〳〵へりくだりて、己を修養すべき事と存候。艱難は實に己をかへりみ且つ研く事を得せしむるもの、又人の艱難をも察せしむるものに候。まことに自らつぶやき、不幸をなげき、人をうらみ、天をうらむは境遇に支配さるゝといふものなれば、よく〳〵注意すべき事と存候。

(四)富貴にはいろ〳〵あり。一は心の富貴にして善なるものが己の性質の一部分となり一言一行それに背かざる事を得る心の有樣に候。又金錢上の富貴といふ事も有之候。それは資本金の利子にて金貸する樣なものかと存候。私はいまだ夢にだにかゝる境遇と相成し事これなく候へ共、其心得としては本を忘れずたかぶらずます〳〵へりくだりて働き人を思ひやり、人を助くる事を忘るまじと存候。

(五)母などが正月はいそがしくていやと申候を、ふしぎに思ひ居りし程幼時は御正月がたのしう存じました。

(六)毎朝四時半位に必ず眼をさまして起き、うすぐらき内に門の内外を掃除し、後室内を掃除し、行水をつかひ、學校の仕度をとゝのへて出勤いたし夕はつかれはてゝ歸れど、夜は夢をも見ず翌朝迄さむる事これなく日々誠にいそがしくたのしう暮し居候。

(七)母の手傳、讀書、演説説教等を聞く事等が一番すきに御座候。

(八)別にすききらひこれなく候。

(九)目下はありあはせ物にて間にあはせ何もほしくも存不申居候。

(十)心配性。熱心なれど力足らず。

▲ 藥學博士長井長義氏夫人　テレゼ子

(一)Königin Luise von Preussen.
普魯西女王、ルイセ

(二)Thue recht und scheue Niemand.

正義を讃め、何者も恐るゝな。

(三)Im Unglück mutig.

Frisch vorwärts in Gefahr.

不幸に當つて男氣あること。危險に當つて雄々しく前進。

(四)Im Glück gütig.

慈善。

(五)Mit der Puppe spielen.

Baumklettern.

人形遊び、木昇。

(六)Erziehung und häusliche Arbeit.

敎育と家事。

(七)Gute Musik.

Blumenzucht.

善い音樂、花卉栽培。

▲

修香女塾長　木村貞子

(一)古人にては、楠正成と、紫式部、今人にては、黄檗の頑儒高津柏樹老師、大德寺管長見性宗般老師婦人にては　男爵辻新次氏夫人

(二)天作孼猶可違、自作孼不可活、

世の中はなにかつねなるあすか川

きのふの淵はけふの瀬となる

(二)人生意外の事多し一々氣にしては際限無し人事を盡して天命を俟つのみと此頃しみ〴〵感居申候

(三)富貴に處するには、別に意見とてはなし

(四)お茶の水に寄宿中、燒立の薩摩芋に舌鼓打ちながら寄集ふて戯れたる等今に思出され候

(五)毎朝五時起床、八時より塾生に漢學及裁縫等を敎授し、午後三時より外出、漢學等を敎へ、八時歸宅、十時就眠

(七)謠曲、彈琴に有之、特に無邪氣なる小兒を相手に打興ずるを第一の樂と致居候

(八)其味淡きものを好む、糖味を含めるものよろこばず

(九)何でも價廉にして實用に適するものに心掛けをり候

(十)自身にては解り兼候へ共義に勇み情に富めるもの
をしたひをり候

▲　法學博士高田早苗氏夫人　高田不二子

(二)正靜以修心、儉素以守家、從容以對物、忠恕以接人
幼時父より與られし訓言にて今倘之を守りつゝあり
(三)一生懸命に働く覺悟
(四)富貴に成る可しとも思はねば別に之に處する途も
考へ居らず
(五)勉强の後に父より菓子をもらう事が一番樂かりし
(六)裁縫、庭掃除等
(七)遊藝にては謠曲、旅行も樂の一つ
(八)これと云ふ好もなく嫌もなし

▲　日本力行會主夫人　島貫志賀子

(一)救世軍總督ブース大將夫人(故人)春日局(故人)
(二)信ずる者に於て爲し能はざる無し(聖書)
己の欲せざる所を人に施す勿れ(論語)
(三)妾共は常に困難と闘て參りました爲今では左程
苦痛も感じませぬが假令逆境に陷りましたとて是も
神樣の恩惠だと感謝して居ります
(四)此のお尋ねは左の通りで御座います
妾達は金は欲しくありませぬ金は時に罪惡を釀す場
合もあります、若し萬一、身分不相應の入金があら
ば是を逆境者を救ふ爲に用ゐませう
(五)幼稚い時は男親の手で萬事男子らしく育てられた
爲運動では繩飛や駈けつこを遣りました中々悪戯娘
で御座いましたよ
(六)朝五時半頃起床家族共三十人の献立てを指揮をな
し、朝の集會に出席し音樂を輔け西洋料理英語、ミ
シンの教授をなす夜も亦通學生に英語を授く、兒童
女中のしつけ
(七)旅行と讀書を好みます、未だ女學校に居た頃は三
島の宅から横濱の學校へ一人で箱根越をして參りま

した今では毎年家族と海水浴に參ります三十九年一月から五月迄米國を漫遊致しました讀書は偉人傳等を好みます。
(八)魚類、鳥肉、水菓子類
(九)普通最寄の店より求めます
(十)お答へ致し兼ねますが強て申せば普通の平凡な女で御座います

▲ 女子學院長　矢島楫子

(一)かぞへ盡されぬから此欄は御免を蒙り升、餘り信かうする御人が多いので、
(二)現在を良用すべし、自分の所有なる故に常によろこぶべし、絕ず祈るべし感謝すべし國の爲神の爲家族の爲もしくは婦風會の精神の爲め、
(三)これは忍耐を生むの母ですから欣然受けねばなりませんそしてむしろ血路をひらくの道を求めます、
(四)さう云ふ場合には愉快に慈善事業にかたを入れ升
(五)何かものを問のほか遊として茸がりツミ草でした
(六)家事と教育婦風等を仕事として居升
(七)勤務のひまに何でもこゝろみ度ものですが、まづ讀書位より外何もできません
(八)全體の運動がよければ別にきらひはありませんがどちらかと申せば菜食的の好みです
(九)安價で必要品殊に新工夫の產品もつともよろし
(十)主人相しらずです十目にまかせ升餘り匆々ですがいそがしゐから御免下さい

▲ 宮內省侍從職侍從子爵日野西資博氏夫人　日野西廣子

(一)私は尤も佛敎を深く信仰いたし居候へば、佛を深く念じ居申候が、人にては吾師と我を生める父母に候、
(二)尊きは道より尊きはなく、美なるは德より美なるはなし、
大いに延びんと欲するものは久しく屈する、

(三)我身に安樂を求めざれば、艱難に處するも自から心安からんと存じ候、

うきものゝ猶此うへにつもれかし
かぎりある身の力ためさん

(四)いまだ富貴を見ざれば其心得は御座無く候、

(五)幼時の娯樂は人と同一に御座候へ共、よく讀書にふけりては母にたしなめられ申候、

(六)何と申してよろしきか手當り次第に御座候、

(七)只今は中々我が嗜好を求め候境界に至らず、只だ日々子供の世話、家事の世話にいそがしく暮し居り候、是をしも嗜好と申さんか、

(八)食品にきらひの物なし、食し馴れぬ異國の品はいかゞにや、

(九)近邊にて專たる物は大店小店を不撰候、まことに不粹ものに御座候、

(十)我が氣象は變な氣象にて自分ながら不明に御座候友人にても承知致し居らんか、

▲　東京高等女學校長　棚橋絢子

(一)孔子、孔明、二程子、朱子、鎌足公、菅公、和氣淸麿公、楠公、淸正公、二程の母、曾大家、小楠公の母、井上通女史、

(二)

明　洪　自　誠

天勞我以形吾逸吾心以補之
天阨我以遇吾高吾道以補之

(三)境遇に安んじ勉强可致覺悟、

(四)萬事ひかへめにする心得、

(五)人まねとほめらるゝ事、

(六)外出、學校の勤、讀書、裁縫、

(七)旅行、讀書、

(八)滋養分ある品ならば魚肉、野菜撰ぶ所なし、

(九)都て有合にて濟し來れば買物には用なし、

(十)容易に事を始めぬ代り始めたらばしとげ度く思ふ

▲ 山口縣知事渡邊融氏夫人　渡邊るい子

(一)現在に一人有之候へども、あらはには申上げにくく候、
(二)いろ〱有之候得共、辛ばうは幸ひのもとか申事をかねて服膺いたし居候、
(三)別段覺悟とても無之、いづれ身を以て其事に處するより外は有之間敷候、
(四)其地位にあらざるゆゑ、其心得も無之候得ども、もし其地位にあらば、謙遜を守り、奢侈を戒め度く事と存候、
(五)もはや老年に成り候爲め昔しの事は忘れ果て申候
(六)家族の着物の縫針其他の世話に日を暮し居候、
(七)別に嗜好とても無之、園藝、蔬菜を扱ひ樂しみと致居候、
(八)あつさりしたる粗食を用ゐ居り申候、
(九)別に事變りたる買物も無之、普通の品のみ相求候
(十)いかに考へ候ても自分にはよく分り不申候、

▲ 農學博士横井時敬氏夫人　横井清子

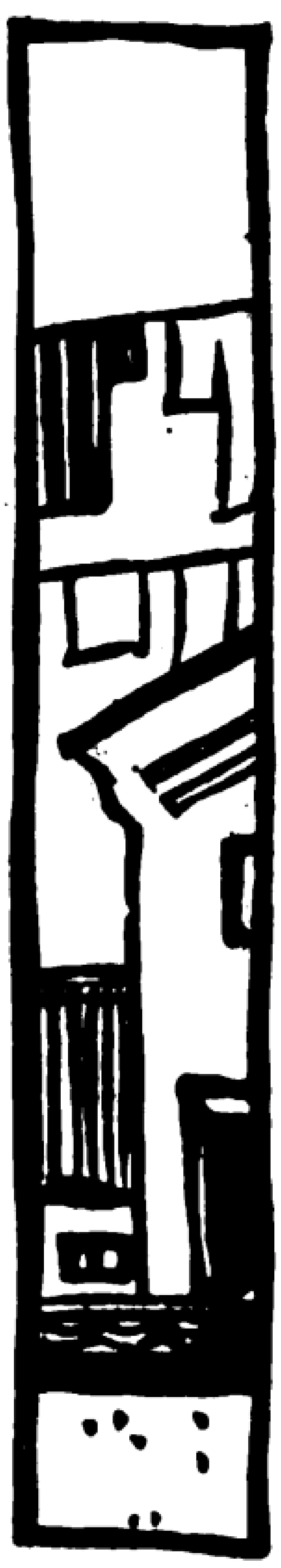
(一)別段これと云ふ人はありません、たゞ正直の人を信仰致します、
(二)事足らばたるにまかせて事たらずたらで事足る身こそ安けれ(仙厓和尚の歌)
(三)艱難は何事によらずなしとげんと覺悟致してをります、
(四)金持の經驗は未だ之なく候、それで貴くても貴く思ひ申しません、
(五)正月
(六)家、外の掃除、洗濯、襤褸のつゞくり、子供の世話、夫の出入世帯の世話、
(七)これと云ふ嫌ひも無く、これと云ふ好みも御座いません、
(八)日本食、
(九)御意味解しかねます、
(十)きれいずき、

▲ 東京高等師範學校長 嘉納治五郎氏夫人　嘉納須磨子

(一)取り分けて信仰する人なし、
(二)實踐躬行せよ、
(三)艱難の種類によりてそれ〴〵覺悟の仕方も異なれば今此に述べ難し、
(四)自ら富貴になるまで金錢を得使用せぬ事もあるまじければ、自身には平素富貴になりし時の覺悟なし
(五)同年輩の子供に接すること、
(六)子供の躾と家事と、
(七)旅行、柔道の亂取、染物等、
(八)特に好むものとてはなし、唯果物の中にてはバナナ、
(九)問の意味不明、
(十)自らはいひ難し、

▲ 東洋婦人會幹事　齊藤秋子

(一)ワシントン、
(二)君子は其獨を愼む、正を踏んで恐るゝなかれ、
(三)困難は天が我身を鍛錬すべく與へ玉へる特別の恩寵と確信し、敬虔の心を振ひおこし、之に處するに滿幅の努力を用ゆること、
(四)救貧、養老、孤兒院、施療院等を最も有効に經綸すること、
(五)春の野に蝶を追ひしことなど、
(六)用は多き方なれど、雜用なれば記する程の事なし
(七)旅行を好めども、今の境遇は之を許さず、讀書、詠歌、遊藝等は人並又は人並以下なり、
(八)干魚の上等なるは特に美味を覺ゆ、
(九)取立て申すほどの事なし、
(十)神經質、




十一日の朝

生存競爭と妻の覺悟

佐治實然

△處世の後方任務

私が奥樣方に向つて望む第一の注文は、別に六ケ敷いことでも何でもない、「妻は夫の後に居よ」といふことです。詳しく申せば、妻君が良人と立並ぶは宜しくない、常に良人の背後に在つて、良人を助けるといふ位地に居つて欲しいと思ふのです。妻の任務は家庭に在つて、夫の足らざるを補ひ、子女を養育し、家政を見る等の後方任務を全うするにあると思ひます。即ち夫と相携へて活社會に出づるにあらずして、夫の後に引込んで居て、内政を整へるのが妻といふものゝ眞の任務であり、また婦人の天職であると思ひます。尤も妻は夫の後に居よといふたところで、夫に手を引いて貰つて歩けといふのではありません。また夫の背中に負されといふのではありません。夫の後より夫を押すといふ意味で夫の後に居よと申すのであります。疲勞せる夫を慰藉して、之に活動的元氣を與へるのは、夫を押すのであります。また夫をして内顧の憂なからしめ、外に向つて猛進の機會を與へるのも、詰まり夫を押すことになります。夫の仕事に助言を與へ、分別を貸す如きも、矢張り夫を前に押し進めることになりませう。そこで私は此の押す力、即ち巧みに夫を押し進める力のある婦人こそ、眞の賢妻であると思ひます。要するに男子と功名を爭ふ所の活動的婦人とならんよりは、男子に功名手柄をなさしむる所の内助的の婦人たらんことを望むのであります。

△生活難の一變調

近來は女子にして判任官だの、事務員だのと、男子同樣、活世間の仕事を執る者があるやうになりましたが、之を以て婦人の位置が進みたりと解するは誤りです。是は詰り生活の困難になつた爲め、女子も餘儀なく外へ出て働かねばならぬことに成つたので、女子の

職分からいふときは勿論變則的であります。元來生活の資を得る當面の責任は男子に在つて、女子には無いのです。男子は外に働いて、家族を養ふといふ責任を持つてゐるが、女子には其が無いのです。其代り男子の獲たる所を巧みに處理し鹽梅するといふ重い任務を有つて居るのであります。太古原人時代には夫が山へ行つて鹿を取つて來ると、妻は家に居て之を料理したものです。夫の持ち歸つた獲物を妻が程よく煮燒して家族の者に喰べさせる。是が誠に好いので、自然夫は外に働き、妻は内に働くといふ風に、夫婦の職責に劃然たる區別が出來て參つたのです。兩者の關係はすべて斯う行かねばならぬと思ひます。

△常磐御前

尤も是には但し書が要ります。其は人事には不測の變といふことがありますから、變に處するの覺悟を要することです。例へば不運にして一家の大黒柱と賴む夫が四十五六で死ぬ、十二三を頭に二三人の子供を殘されるといふ場合を豫想したならば、夫に代つて之を扶養して行く丈の能力を平時に於いて備へて置かねばなりますまい。また男子の無情なる、時に或は破鏡の不幸を見ぬとも限りません。さういふ場合に遭遇しても子供は貴郎のものと夫になすり付けないで、常磐御前もときに自分の手に抱へて出て、之を滿足に育てゝ行く丈の能力と氣力がなければなりません。そこで變に處しては女ながらも出でゝ生存競爭の矢面に立つの覺悟丈は要るのでございます。婦人は須らく斯かる覺悟あつて始めて結婚すべきだと思ひます。是は今日の社會組織上何うも已むを得ぬことであります。

△關東の女と關西の女

關東は女の働く處です。殊に東北へ行く程女が眞黒に成つて働いて居ます。田圃へ出て鍬も振廻せば、馬の口綱も取り、荷車も曳くといふ調子で、女の荒仕事をする樣子は、男子と些度も異はない。服裝も男の通りで、殆ど男女の識別がつかない位です。然るに關西

産科婦人科専門 醫學士 北畠孝夫先生閲

最近

婦人病心得

子宮病自宅療法

無代進呈（但送料貳錢を要す）

目次（婦人病の總論◎血の道（ヒステリー）の原因病理及び自宅療法◎神經衰弱、貧血、萎黄病とは如何及其療法◎しらちながちの病理及其根治法◎月經時の手當月經諸病の療法◎姙娠の原理、受胎すべき塲合姙婦の攝生、つわりの養生法）

女の一番つらい病は。子宮の諸病であるが。此病にかかりし婦人は。大抵之れを秘して、適當の手當をなさず。亦妙齢の頃などに。月經の閉止とか。不順等あれば、獨り心を痛めて、素人的の通經劑などを試み、遂には恐ろしき難病となつて。生涯の苦みを遺すことのあるのは。洵に痛歎の極である◎著者は多年の實驗と。最近の學説を基礎とし。（婦人病者の心得）と題し上記の各項に分て丁寧親切に詳説せり◎病める婦人は勿論一般の婦女は。本書を一讀して、自宅の療法を會得せよ

●當分の内無代進呈す送料貳錢封入至急申込まれよ

發行所 東京築地新榮町四ノ一 笹岡省三（電話新橋三六〇一番）

與謝野晶子
江南文三 合著
岡野榮畫

◎鼻の文三の「花」と云ふ本の廣告

本は買はないでもいいから



廣告文と本のデヂケートだけを

是非見て貰ひたい。文三記

新刊

着色繪畫數葉挿入美製本
優美價金六拾錢郵税六錢

鼻の文三が赤ン坊の時分から一生懸命で白い息を吐き乍ら北極の氷をぶち割ッたり日のかんかん照る赤道の上で足のうらを燒きながら橄欖の根を掘ッて見たり地中海であぶを食らッたり地獄や極樂へ行ッてアポロやお釋迦やエホバのつらを穴のあくほど見てやッたりしてやッとこさで集めた花に關する南北歐東西洋のあらゆる洒麗惡口傳説神話俚諺花の表はす意味なんでもござれと知ッてるだけ投りだした亂雜の宮殿はこの本である。四方の壁畫と廣間の額とは岡野榮氏が書いた。その宮の中を晶子女史の歌の少女が水色の單衣に珊瑚の冠をして素足で通る。つまらない從來の花の本と同一と思ふ者は本屋でひやかして見るがいゝ。ひやかしはたゞよ。本屋の番頭がまづいつらをしたら著者がさう言ッて廣告してたと威張るがいゝ。（文三記）

發賣所
東京神田錦町一の九 振替東京三四〇九番
二松堂書店
東京日本橋區數寄屋町 振替東京二三一七
六合館書店

女（その一）

[illegible]

は歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞贊好評を博したる秘密藥を當館主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥なを配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する禿丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生毛劑や粗悪の賣藥にて効なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髪はへぎはゝまゆげ、ひげ其他の薄きを濃くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツホー、キリキズ跡の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二劑增の事

●●●取次所ハ前月ノ廣告ニアリ●●●

らい病

此のらい病藥は獸稀の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學奉職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩病は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども其病勢の甚しからざる中に本劑を四ヶ月間服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても繼續服用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に赴き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無効なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陷れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

●醫師は癩病者を診察せば屆出る規則なれど藥劑師には其規則無ければ決して他へ知れることなし安心服用あれ

ザノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

三河國碧海郡刈谷町益世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

從七位勳六等

本舖　中島龜之丞鑑製

看護婦生徒三十名

試驗の上採用す來二月十五日迄に出願すべし

（年齢十七年以上廿五年未滿）

規則書望の向は郵券貳錢送付あれ試驗は二月廿一日より開始す

東京芝區愛宕町二丁目八番地

東京慈惠會醫院

血の道

信用は神の如く古き歴史と由緒ある根治家傳妙藥實に濟世的理想藥

織物袋入　四日分四十錢一週分六十錢三週分壹圓五十錢送料不要郵券代用諾

吾が地方には昔より俚謠あり

「産の道には神崎藥飲んで死にたやをもわくで」

神崎藥とは即ち吾が狠ぐすりの事『神法湯』の事なり以て其信用の厚きを知らるべし

神法湯を飲まずして血の道子宮病に患める婦人は愚なり神法湯は血の道根治確實なり

●難産の癖ある人飲めば安産疑ひなし

●産後の長患、惡血の滯りを一掃し

●月經不順滯り、月經の激痛、不妊三週分にて根治す

傳家元祖丹後國峰山町神崎紺屋

福井家（特電話十六番）

女（ぬの二）

婦人雜誌 家庭

毎月一回一日發行一册拾錢郵税一錢 半年六拾錢

……《第二巻第一號目次》……

○よき氣分を作れ…… 女子大學校長 成瀨仁藏
○新年から作りたき習慣 三輪田女學校長 三輪田眞佐子
○年々に求めて止ぬもの 明治學院長夫人 井深花子
○余が不老術…… 伯爵 大隈重信
○新年、花賣少女…… 新作唱歌
○宮中歌御會式…… 文學博士 小杉榲邨
○禮式…… 小笠原宗家 小笠原德房
○新遊戲閉塞かるた…… 松浦政泰
○世界婦人通信……
○嬰兒の營養法…… 醫學博士 加藤照麿
○母の會…… 豐明幼稚園主任 甲賀藤子
○新年に用ゆる玩具…… 高島平三郎
○不瞼砂糖…… 理醫學博士 長井長義
○黄金の林檎（子供らん）……
○似而非勝利…… 三宅花圃
○冬の日…… 茅野雅子
○松竹梅…… 日本女子大學講師 兒島文子
○初荷…… 秋雨
○手輕き饗應…… 幸子
●毎月附錄献立曆 便利重寶なる料理曆なり

女子大學講義

講義錄の特色

雜誌の如く零砕的でなく書物の如く説明を缺かず講義錄の特色を發揮して質問の自由を有す講師は孰れも當代第一流の學者にして教育に熱心なる博士等講義親切材料堅實文章平易說明嶄新一讀了解し得べし母たる者と妻たり又妻たらんとする者は勿論各學校教師の參考書として最も好適のもの也の圖畫は大に理解を助くるもの費用を惜まず多く挿入する所以此點にても普通の書籍を凌ぐ通篇悉家庭經營の實際を酌み一家の主婦に有益なる課目耳講義二册雜誌家庭一册配布一ヶ月會費五十錢此際入會金免除の特典あり

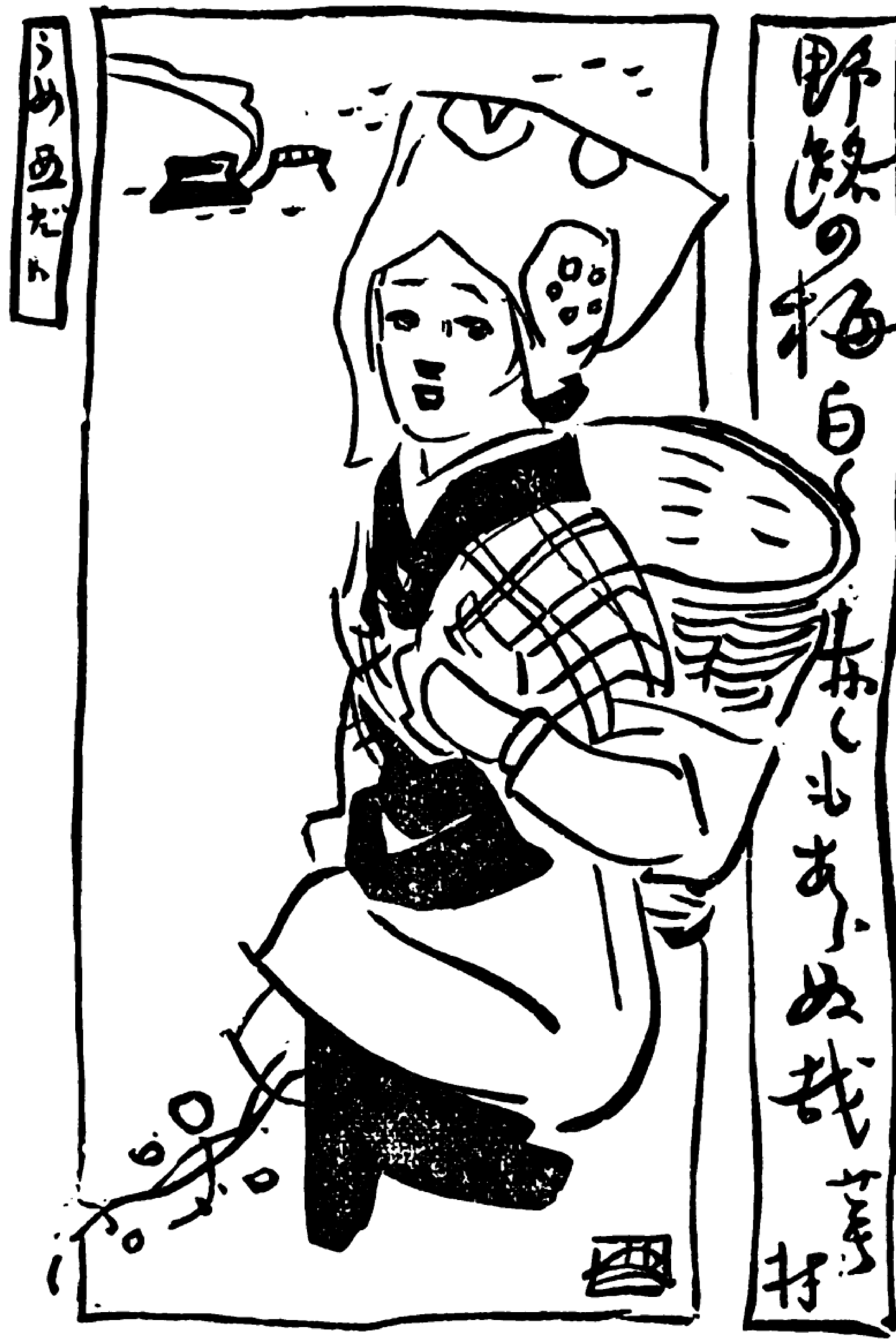
會則 無代進呈……

東京小石川久堅町百八 精美堂 振替口座一八三八二

女（ぬの四）

女(ゐの六)

地方へ行つて見ると、之とは反對で、女の野働きを見受けません。殊に五畿內から中國邊へかけての女は一體に家に引込んで居ます。關東や東北の女の樣に泥土だらけになつて働く者は無い。是は誠に奇妙な對照であります。私は之を見て關西は早く開けた所丈あつて文明の度が進んで居り、東北は遲く開けた土地故に野蠻の風が未だ遺つてゐるのだと思ふ云ふ見解を下して居ります。即ち關西及び中國は家庭に分業が行はれて居



るのに、關東及東北は其が未だ行はれて居ぬのだと思ひます。そこで皮相の見を以てすると東方婦人の男子に劣らぬ懸命の働き振は、大層えらいもの丶やうに思はれるが、深く考へると外へ出て荒仕事をするのが必ずしも豪いとは謂はれません。同時に家に居て外の勞働をせぬ關西婦人が怠惰者だとは謂はれません。關西の婦人は外の勞働をせぬ代り必ずや家の中に在つて其れ丈の仕事をして居るのであります。ですから家內は整

頓して居ります。關東及び東北婦人の如く田畑の勞働に從ふ者は家内の仕事は零で、殊に針仕事などゝ來たら殆んど駄目であります。隨つて家庭の優美などゝいふことは見られないのであります。

△上州安中の風俗

上州の安中といふ所は生糸場所、養蠶場所でありますから、女子の勞働を必要とし、產業的意味に於いて女子を尊重する所であります。故に此地に於いては嫁を貰ふにも、人間としてゞはなく、生產的の機械を購めるやうな考で娶るのです。だから嫁入支度一式を男の方で負擔するといふ奇妙な風習があります。然し安中邊の女は斯樣に男子から貴重視される程、養蠶や糸取りの事にかけては克く働くが、踏込んで此の稼ぎ者の女を女房とする家庭の樣子は何うかと見るに、少しも餘裕といふものが無い。安中は延長一里に亘る長い町ではあるが、客座敷の設があつて庭のあるといふ樣な家は全町に唯だ一二軒しかありません。其餘はすべて養蠶本位の建方で、家族は養蠶部屋に同居して居るといふ有樣、何の家も御蠶樣が主人公といふ觀があります。故に其趣味や頗る下卑て居つて、酒を飲んで騷ぐとか、酌婦にからかつて遊ぶとかの類より外は無く茶を點てゝ風流韻事を娛するなどゝいふ高尙な趣味は無いのであります。殊に驚くべきは可なり相當に暮してゐる家でも客夜具の準備が無いことで、如何に女が家庭の仕事に注意せぬかゞ分ります。女が產業的に働くと、家庭は這麼風になりますから、女子の稼ぐといふことは餘り感心したことではないと思ひます。

△立派でも不潔な家

家政といふ後方任務の局に當る奧樣方が第一に心掛くべきは、內所を人に見せても恥しからぬやうに整頓して置くことです。表玄關から客が上つて來ると、慌てゝ障子を締めて內所を隱す人がありますが、是は何の爲めでせうか。裡面は散らかつてゐて不體裁であるから、他人に見せたくないとの心づかひからでせう

か。それとも封建時代には内所を客に見せるのを失禮としたのであるから、其風が習慣的に遺つて居て、それでさうするのであらうか。後者の失禮といふ觀念から來るなら兎も角、唯だ見られては體裁惡いとの觀念から、慌てゝ締めるのであつて見れば、さういふ習慣のある細君の仕打を大いに咎めねばなりません。平生裏面を見られても差支ないやうに整然と整頓して置けば、不意に客が來たからとて、急にガタビシと障子をたてるにも及ますまい。其を客の姿を見て慌て隱すといふは、つまり平常の心掛が至らないからであります。是では家庭の内に陰陽があるといふもので、誠に恥入つた次第であります。私は奥様方に望ます。いつ何時客に飛込まれて何處の隅を見られようと少しも恥しくない。さア御勝手に何處なと御覽下さいといふ樣に、隅から端まで整頓して置いて戴きたい寧そ自ら世間の模範を以て任ずる位の意氣組で家内の整理に心を用ゐて戴きたい。此の心掛さへあれば、一事を以て萬事を推すべきで、家政の仕事はすべてうまく行くものです。それから整頓に次いでは家庭を清潔に保つといふ心掛が必要です。家内



が、清潔であれば家人の健康上に宜しい許りでなく、士女の道徳性を發達せしめて、清く高い生活を營ましめることが出來るのであります。併し清潔と立派とを混同してはいけません。立派な家必ずしも清潔ではなく粗末な家必ずしも不潔とは謂へません。世間には立派な邸宅を構へながら不潔にしてゐる家が澤山ありますさうかと思ふと九尺二間の裏長屋にも、清潔に住みなしてゐる家族があるのです。故に立派と清潔、粗末と不潔とを同一に視ては困ります。

△夫婦同尊主義

妻は夫の後に居べきものではあるが、家庭にあつては夫婦同尊主義でなければなりません。夫は妻の人權を認め、妻は夫の權威に服するやうに、互ひに相重んずるといふ風でありたいものです。例へば夫婦意見を交換する場合にしても、夫は妻の忠告する言葉を唯だ妻の言として聞かず、より以上の或者が妻をして言はしめると思つて、之に耳を傾け、また妻も夫の言ふ言葉を夫の口から發するものと思はず夫以上の權威ある者の聲として謹聽するといふ樣な風でありたいものです。かうして始めて夫婦の間は圓滿にゆくのであります。基督も余の言は神の聲なりといふて居りますが、餘程自信の强かつたものと見えます。



空中飛行機の話

藤葉女史

讀者よ、翼なき身と悲しみしは已に過去の夢となりたり。此の如き語は恐らくは近き將來に於ては廢止となるべし。

交通機關に汽車あり汽船ありと一應文明になつた積りにてすまし込めるお人よしの我等が太平の眠りを醒さんとて、又人類が原始的の欲望たる飛行の要求を充さんとて、歐米人が血眼になりて日夜其の機械に就きて熱心に研究せる結果、彼の英國が唯一の天嶮と頼みたる英國海峽も難なく飛び渡る事を得るに至り、今や世界の形勢は一變せんとす。

歐米人が多くの財と人命とを犧牲に供して造り上げたる飛行器は今は枚擧に遑あらざるが、一日新刊空中の經營と云ふ書を讀みて、益々歐米人の熱心と、勇氣とに感ずるの餘り、せめては其大略を書き綴りて廣く讀者に報せんとす。

△空中飛行器の種類

空中飛行器を大別すれば、空氣より輕き瓦斯を袋に入れて之れによりて上昇するものと、空氣より重き物體を以て造り推進器の力によりて上昇するものとに別つ事を得。前者は所謂風船にして、之又三種に別る。即ち繋留氣球、自由氣球、誘導氣球にして、繋留氣球は最初に出來たるものにして地上より綱を付けて昇るもの、自由氣球は昇りたる氣球が風力に從つて所々に飛び行くもの、誘導氣球は最進歩したるものにして己が志す方向に飛び行く事を得るものなり。其の水素瓦斯を入るゝ袋にも亦無骨式、有骨式、半硬骨式などの別あり。佛國に行はるゝものは悉く無骨式或は半硬骨式にして、獨逸に行はるゝものは凡て有骨式なり。

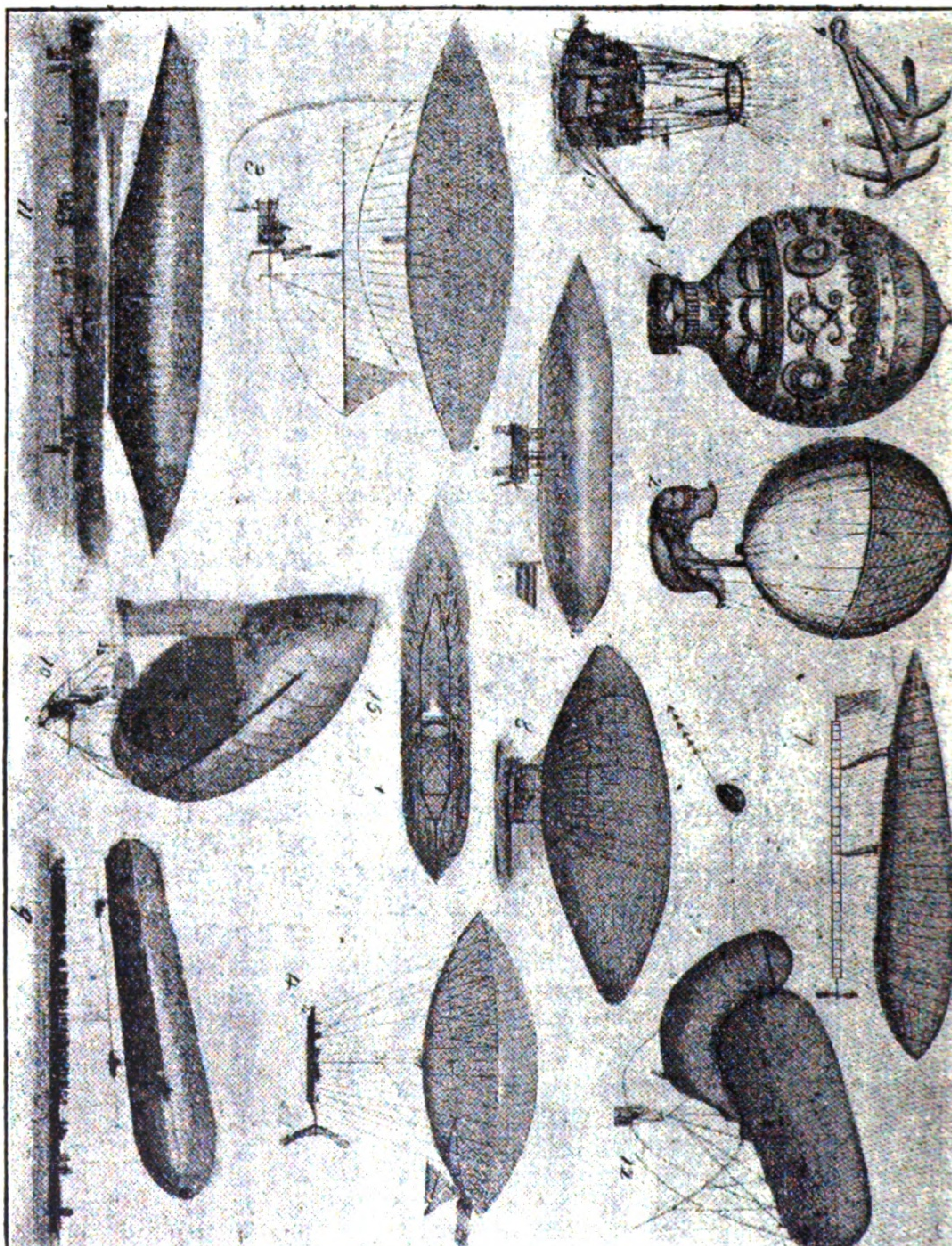
兩者何れを可とも定め難けれ共、其利害を擧ぐれば

有骨式のものは最も輕き金屬アルミニウムを以て骨となせども猶其所量は決して少なしとせず。重量は飛行器に大の禁物なり。のみならず其地上に碇泊せる時には往々にして危險あり。彼の佛國のルボーディーと云ふ人が造りたる有骨式の氣球を以て、一九〇七年十一月、首都の附近なるシャレームードンと云ふ處より、ヹウエルドンの要塞に向つて、二百五十五米の距離を六時間餘りにて全く飛行し、其好結果を悦べる折しも、俄に颶風起りて、地上につなぎありたる氣球は二百人の勇卒が死力を盡して繋ぎ止めんとしたれども終に及ばず、英國方面に向つて飛び去りたるが如きが其一例なり。されば之れを防がんとするには停留場に特別の建築物無かる可らず。佛國と獨逸との境なるメッツにある停留場は長さ百五十メートル、幅五十メートル高さ四十メートルの廣大なるものなるが此寄泊所を充分に完全ならしめんとせば、尚ほ之れに水素瓦斯の製造工場をも建て添へざる可らず。其他不時に備ふる修繕具や附屬の家屋も必要なり。斯る設備のものを造らんとせば、一ヶ所に少くも六萬圓を要すといふ。

佛國にありては、巴里を中心として各所に設計せんとせるもの、已に二十五ヶ所の多きに達せりとぞ。

又無骨式のものに有りては、常に氣球の平衡を保たざる可らざるの不便あり。即ち氣球の形體一定せざれば之れに連絡せる船は常に一定の位置を保つ事能はずして動もすれば轉覆して完全なる航空をなし能はざるなり。故に近來其害を防がんとして球の內部に內球を造りて此內に空氣を充て、內球と外球との間に水素瓦斯を充滿せしめ、內外の壓力を常に平均せしむるの裝置をなせるものあり。何れの種類にも長短ありて直に何れを可とする事能はざれども、思ふに熱心なる人々の研究によりて遠からず我等は兩手を擧げて歡迎すべき優秀なるものゝ表はるべきを信じて疑はず。

推進器を用ゐて昇るものにも亦種々の別あり。此種のものは初め鳥の飛行するを基として考案したるものにして、二つの翼を備へたれども、而かも自然の妙には如かざるなり。試に鳥の飛ぶを見よ。其姿の如何に



輕妙にして自由なるよ。萬能の神は雀一匹の翼にも微妙の力を與へたれば、如何に智識の進歩を誇るとも、萬能の神より見れば赤子の如き人智を以てしては、此小なる雀の翼一枚さへ造る事能はざるべし。之れを模せんとして飛行器の發明者は如何に苦心したりけんよ即ち鳥の翼と同じ打翼式のもの出來たれども、眞の鳥の翼は斯の如く上下にのみ運動するものにあらず。或時は前後に、或時は上下に、又ある時は後より前に向つて強く空氣を打つなど其運動を思ふまゝの方向になす。之等は鳥にして初めて出來得る事にして、現今の人智にては如何に工夫するとも此の如く自由あるものはなし能はざれば、未だ世に行はるゝに至らず。

現時最稱揚せられ且つ成功せるものは皆靜翼式のものにして、翼は唯推進器の力によりて空に舞ひ上りたるものを支ふるの役をなすに止まる。これに翼の二枚なるあり、又翼と尾とを兼ねたる數枚重なれるものあり。其骨となるものは木又は竹にして布を以て覆はれたり。

△飛行器の歴史

初めて飛行器を發明せるは一八四三年ヘンソンと云ふ人にして、物體は空氣より重きも一種の翼と推進器とを以て空中に浮き上る裝置を工夫したり。然れども其當時は甚だ幼稚なるものにして、廣く世に行はるゝに至らざりき。然るに此發明ありて以來之れを基礎として二十世紀の初めに至りてラタム、フアルマン、フエルベール、エスノーペルトリー、ブレリオ等續々として各特色ある機械を發明し、米國にはライト兄弟が發明せるライト式出で、各世界に月桂冠を爭へり。外國人の生氣充ち滿ちたる樣實に羨ましき限りならずや。

ライトは一九〇〇年に初めて飛行器の實驗を行ひて以來、次第に改善を加へて、一九〇五年には終に三十九吉米迄に飛行する事を得るに至りしが、猶當時依頼を受けたる佛國政府が欲したる要求に應ずる能はず且其頃は各國共に飛行船熱盛にして、米國政府にても之に重きを置かず、其前途は甚だ心細きものなりしが

年を經るに從ひて其侮る可らざる事先づ佛人の悟る處となりて、飛行機の聲漸く高くなるに至りしかば、米國政府も亦其等閑にすべからざるを知りて、之れに保護を與ふるに至れり。

其後ライトは佛國にても飛行器熱漸く盛になりて次第に効果を得ると聞き、如何にもして之れに勝るものを得んとして日夜苦心せしが、其甲斐ありて一九〇八年九月九日に至りて五十七分三十一秒の長時間を飛行し得たるを以て、流石に誇れる佛人も爲めに色を失へり。されはタフト氏の如きも亦進みて其試驗を見、ライトの名聲之れより全歐洲に響き渡り、各國は競ひて彼を師として研究するに至れり。

氣球の發明せられたるは、西曆一七八三年、我か光格天皇の天明三年六月にして、佛人モンゴルフイエー兄弟の創造になり、之れに次いで自由氣球の發明ありしが、之等は風力順當ならざれば飛行せしむる事を得ず、從つて廣く世人の注意を惹く能はざりき。されど此氣球出でゝより此方面に向つて研究するもの續々として顯はれ、或は失敗し、或は現今の科學の進步程度にては到底不可能の事として悲觀するものさへありし中に、彼の一八七〇年の普佛戰爭起るや、攻圍せられたる巴里の城中にて六十八箇の自由氣球を使用して攻圍中の狀況を地方の軍隊に報告せる事ありて、之れによりて多大の利益を得ると共に、又其氣球の極めて幼稚なるを感ずるに至れり。爾來之れに腐心するもの益々多きに至りしも、斯る重大なる發明は然く突差の間に成就するものにあらず。多くの資金と實驗と貴き人命とを費したれど、猶充分なる効果を得る能はず、根盡きてしばらく中止の姿となり、專ら輕便なる發動機を見出さんとして力を用ゐたり。

一八九八年に至りてブラジルのサントヂユーモンと云へる者初めて石油發動機を用ふるに至りて、從來飛行器に厳禁なりし重量を多く減ずる事を得、之れよりして其進步は俄に著くなれり。

一九〇二年には佛人ルボイテイーと云へるものルボイテイー式氣球を造り、爾來二年間に六十三回の飛行

をなしたるも、一回として不結果を來したる事なく、從來試乘には多くの人命を損ひたるも、此氣球に於ては更に其事なく、或時は寫眞をうつし、捜索勤務に從ひ、爆彈投射等に關する重大なる試驗を行ひて非常に効果を得たれば、終に一九〇五年ルボーヂイーは之れを陸軍に寄贈しぬ。

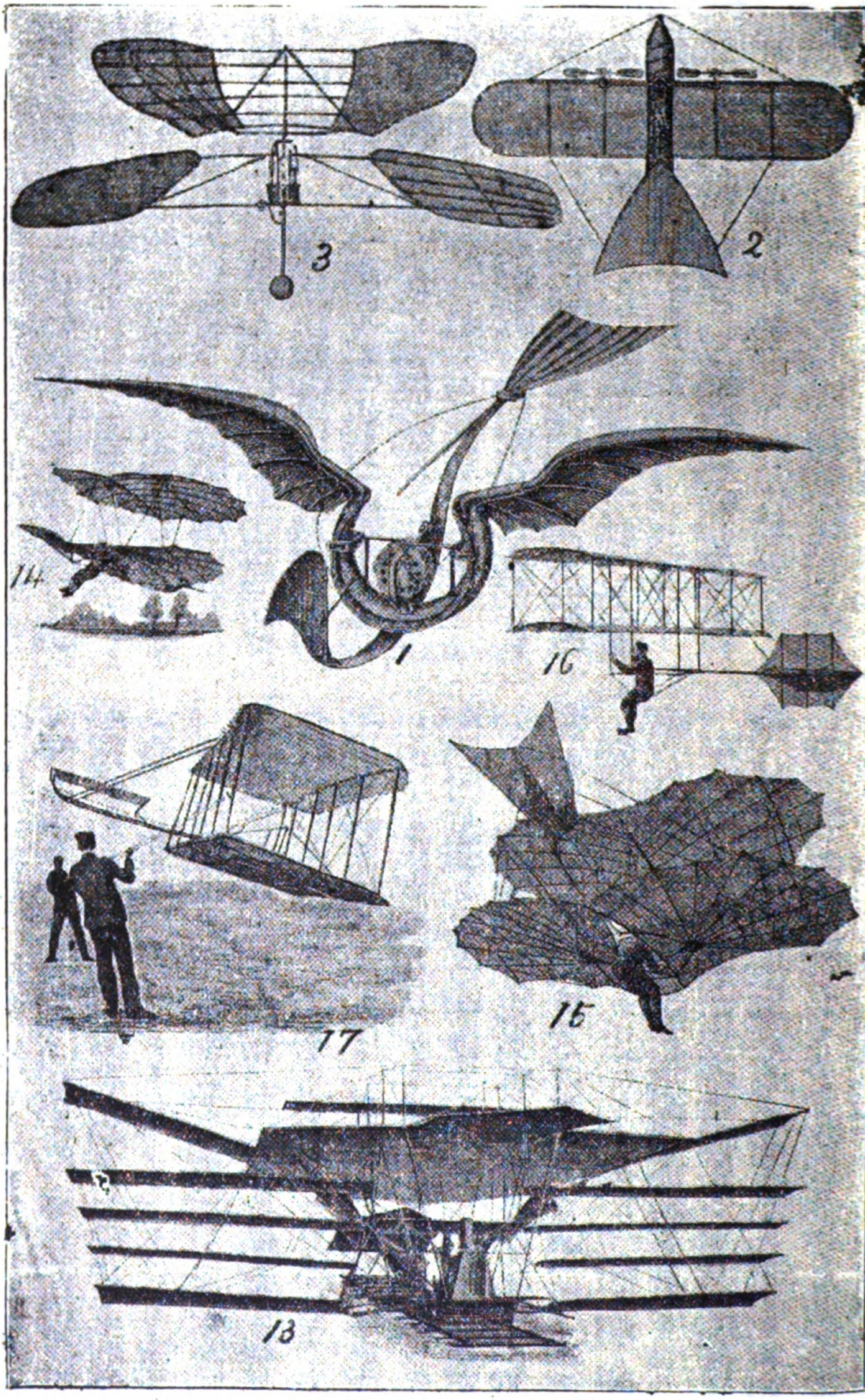
△各國の狀況

獨逸も亦由來飛行船の盛に行はれし處にして、一八九二年以來伯爵ツエッペリン將軍の造り出したるもの先づ行はれ、皇帝は之れを空中征服の王とまで絶叫し其資金の盡きんとするを見ては、ウルテンベルヒ國王と共に之れが補助につとめて、終に成功するの運に至らしめたり。

其第四番目に造りたるものは、飛行船中の首位を占むるの効果を表はせり。氣球の內部の骨幹は鋼鐵とアルミニユームとを以て製りて、勉めて其重量を減ずる仕掛を爲し、前後二ケ所に吊船を設けて電話を以て其連絡をとり十四人を乘せて優に二十四時間を續行し得。讀者よ、思ひ見よ、斯く筆に書くは最易き事なれど之れが發明に日夜苦心せる伯の熱心や如何なりし。

然るに最後の二十四時間を試航せんとせる時しも、俄に船中に火災起りて、氣球も共に燒失し、ライン河岸に空しくアルミニユームの累々たる骨を殘しぬ。流石の伯も、資は盡き、年老いて、而も最愛の氣球の一朝にして烏有に歸せるを見て、涙潸然、少時は其爲す處を知らざりき。然るに義俠にして進取の氣象に富める國民は、二晝夜を出でずして二百萬マークの資金を集めて伯に贈りたれば、老將軍の勇氣は又更に加り、白髯をしごいて立ちて更に新氣球の製造に從事し、猶且舊に增して之に改善を加へたれば、昨年十二月の新聞には、四十八人を乘せ得るに至れりと報せり。前途益益有望なるかな。

佛國に在りてはブレリオ、アントアネット等の人々は、ライトに勝るものを得んとして種々の工夫を凝らし、中にもブレリオは初め試驗をなしたる時は結果思


3
2
14
1
16
17
15
13

はしからずして世評も惡しかりしが、之れに屈せずして研究せる結果、一九〇九年七月に至りて、其十一番目に造りたるものを試乘せしに、五十八分間飛行する事を得、同月下旬に至りては遂に英國海峽を乘り越えて大に世人の賞贊を博したり。當時海峽を渡らんとして苦心せる者にラタムあり。初めには海峽の半にして落ち、猶屈せずして第二回目を行ひしも、又好果を得ずして英海岸を去る一哩餘の處に至りて墜落の不幸に逢ひ、且つ微傷をさへ負ひて悲憤焦慮せる際にブレリオの成功を見たるものにて彼の得意思ふべきなり。

英海峽は僅に三十分餘を以て渡る事を得るなれども從來飛行機を造れる者は自己の飛行力を疑ひて容易に之れを行ふもの無かりしが、此點に於てブレリオは非常に大膽なりしと云はざる可らず。

我海軍の力と富とを以てせば世界の大軍も何ぞ恐るるに足らんと竊に誇り居し英國も、彼れが海峽を苦もなく渡り來りしを見て、流石に物に驚かぬ國民も高枕の夢穩ならず。今や政府は俄に航空學校を設立して盛に技師を養成し、氣球に關して充分なる補助をなし國内には各所に氣球の停留所を設け、海岸には之れが避難所を造るなど、此天空より侵入する恐ろしの怪物に向つて非常に焦慮しつゝあり。

如何に勇敢なる將士と雖も敵の陣地深く忍び入りて其狀況を探るは至難の業なり。旅順包圍攻擊の時など、若し之等完全なる氣球ありて砲臺の内部を深く瞰み見る事を得たりしならば、彼の數萬の忠勇なる將士も死なで濟む可かりしならん。實に近き將來に在りては、恰も濃霧の一時に晴れたるが如く、高き堡の彼方のものも、山一つ越せる彼方のものも、敵の陣地も其數も皆手に取る如く見ゆるに至るべし。況して、之れに自在に爆裂彈を落せかけたらば如何に。海と陸と天空とより攻めよせ攻せ返す其戰や如何ならん。

然はあれ、吾人は此貴き發明品を以て、徒に平和の敵、人殺機械とするを望まず。其慘澹たる戰争を豫想して、以て容易に戰はるべきものに有らざる事を思はしめ、之れによりて益々平和文明ならしめざる可らざ

るにあらずや。

飛行器に關する記事は、猶極めて詳細なれども、茲には省きて記せず。

たゞ終りに特に大書すべき事あり。由來歐米の人々は進取の氣象充滿し、一日も一所に止まるを欲せず、進んで新規なる、便利なるものを取らんと欲する心勃勃たり。又一方に此心を滿足せしめ猶發達せしめんとして惜氣もなく數萬金を擲ちて助くる人あるは羨むべき事ならずや。元來飛行器の如きは、一定の胸案を作るは容易なりとするも、之れを實際に行はんには非常に多くの資本を要するものなるが、發明者は多くは裕福ならず、又多くは富有の人を說きて出金せしむるの辯舌を有せず。茲に於てか徒に机上の論として棄てらるゝが常なるに、歐米人の然らざるは感心ならずや。彼のツエッペリン將軍が失望落膽せる際國民の義捐によりて立ろに大金を得たるが如きは其の例なり。

尙ほ感ずべきは其の不撓の精神なり、勇氣なり。一代の資產を使ひ果すとも、失敗に失敗を重ぬるとも、將た貴き人命を損ふとも、自若として更に勇氣を出して其源因を尋ねでは止まざるが彼等の常なり。斯くて勉むればこそ次第に事の成功を見るなれ。彼のサントヂューモンが七年間に大小種々の氣球十四個を造りて屢々危險を冒しては大膽に之れを試驗せるが如き其の一例なり。

又米國のライト兄弟にしても、兄が佛國に渡れる間に、弟は氣球の轉覆によりて重傷を負ひたる時、兄は悲歎の淚に暮れつゝも益々之れが改良に餘念なかりしが如き、一度び飛行器に熱中すれば腦中他に何物も有らざるの概あり。

又墺國のダヴイットシユワルッと云へる人は、一八九三年以來、伯林附近に於て軍用氣球の研究に從事せしが、其未だ成らざるに先ちて死去せしかば、其夫人はいたく之れを殘念に思ひ、か弱き女の身を以て健氣にも其意志を繼ぎて亡夫の遺業を全からしめんと思ひ立ち、獨逸人の補助を得、終にシユワルッ號を竣工せしめて之れを試驗したるに、球は高く昇りたれども、

發動機に故障を生じて運轉を止めしより、降下せんとして未熟なる運轉士は狼狽して俄に地に達せんとしたる爲、烈しく衝突して悲惨なる最後を遂げたり。多年の苦心も空しく不成功に終りしが其功は空しからざりき。彼のツェッペリンは即ち之れに基きて出來上りたるものなり。女の身を以て斯くの如く斯道に熱心なるは、歐米にして初めて見らるゝ事にあらざるか。

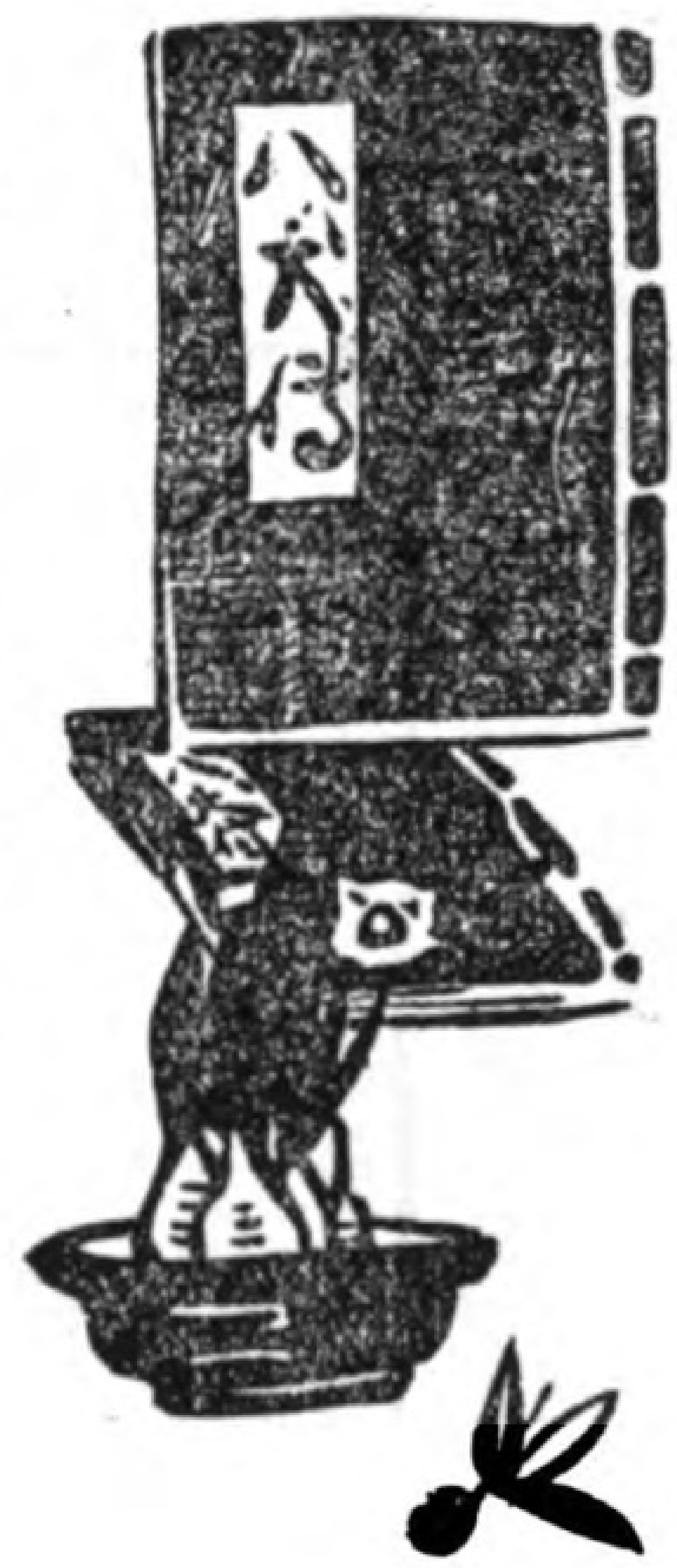
太平の眠に醉へる我國民よ、醒めよ、世界は今如何にして飛ばんかと云ふ事に斯くも熱中せり。我國には不幸にして之に匹敵すべきものあるを聞かず。偶々苦心發明する人ありとも、之れに百萬二百萬の資產を贈るの覺悟ある者果してありや否。何事にも先つものは財なり。年々に流行を追ふて一枚のショールにさへ數十百金を費す婦人達よ、現時我國の富の程度より見ては餘りに奢侈に過ぎざるか。若し其の幾分を儉約醵集して斯る有益の資本に投じ、他日我國に有力なる飛行器の表はれん其折に、聊かたりとも婦人が之を助けたりと言はるゝならば、豈に嬉しき事ともならずや。

因に記す、佛國のアントアネット式のもの一箇の代價は、我一萬圓にして、佛國より米國に至る運賃と、稅金、梱包料は五千圓位なりと云ふ。然れば我國にて之れを買ひ入れんとせば、二萬圓位を要すべしとなり。

土耳古奇聞

世界を漫遊た人の土產話によく出るのは土耳古の浴場である、土耳古の浴場は娛樂的社交的に出來てゐて其建物は甚だ宏大美麗殊に其の公立浴場の如きは、宛然宮殿の如き高閣である、其設備の一斑をいふと浴室の外部は大きな石で疊み內部は一面に研いた大理石が敷きつめてあり、天井も彫刻した大理石で張つてある、一浴場は凡そ十室位に分割せられて、各室の中央に噴水器あり、其の周圍には大理石のベンチが並べられ、壁には美しい額が掛け列れてある、又敷物も誠に贅を盡したものばかりで、浴客は着物を浴衣に着替へ湯殿に行く樣になつて居る、此の湯殿の天井は八角形になつて居て、其所から光線が射し込むから非常に明るくて氣持が好い、此所は常に華氏の百度位の溫度にしてあるから、浴客が入つて來て其所の大理石の臺の上に寢ころんで居ると、蒸氣のために心地よく蒸されて來る、其の時番頭が來て按摩をしたり洗粉を入れた袋で身體をこすつたりして呉れる、斯くして最後に石鹼でよく洗ひ、大理石の洗面器で顏を洗つて元の室に歸つて、コーヒーや煙草をのみながら世間話をするのださうな。


暗香



京のさま〴〵

京都の社會觀察

摩耶子

●汽車の時間表には新橋より三二八哩、昔の道中記には三條大橋より江戸日本橋まで里數百二十六里六町一間としてあります。

●三條大橋と云ふと元の日本橋の樣に名ばかり高くてみすぼらしい橋です。

●人口は女の方が男より多ふ御座います。

●京の着倒れ大阪の喰ひ倒れと名高い通り、お花見などに行く晴着は中以下のお神さん達でも、お召に縮緬位は羽織つて出掛けます。私の知つて居る奥樣などは初めて京都へお移りになつた時、お國で第一種の正服が下女の晴着位にしか當らなかつたと云ふ事です、處で立派なのは上べばかり、見えぬ處は正反對と思し召せ。

●半襟の四五圓もするのを流行に應じて掛けて居ますが、色を抜いて染め變へるのだそうです。

●着物は中々大切にし、時々出して見ては樂しんで居ます。

●女學生は一般に質素で、東京の樣に六吋もあるリボンをひらつかせる者はありません。頭髮は束髮が主でマガレットなど極く稀です。履物は草履次いでは下駄、靴は中々見られません。袴の色はえび茶か紫ですが總じて黒味がついて居ます。

●第一高等女學校はお孃さん第二は娘さんが多い樣です。從つて第一の方がハイカッテ居ます。

●女學校の運動會の入口に、男子は十二歳以下に限ると書いてありますが、大學の運動會などには紅や白のリボンが澤山ひらめいて居ります。

●京美人と云へば小野小町の昔から名高いものですが、勝れた美人は居りますが、美人の多い事は決してありません。反つて東京の方が多い樣に思はれます。

●本誌の風俗記事に京美人は花賣に多いと出て居りましたが、花賣は洛北白川から出ますが美人はおろか十人並もどうかと思つて居るので御座います、だが綺麗な手拭を姉さんかぶりにして太い華美な襷を掛け、頭に花を頂いて京の街を、朝霧の消えやらぬ頃「花いりまへんか、花買なはらんか」など呼んで通る處は風情のあるものです。

●純京都式の家へ參上つてもお菓子など出す事はありません。

●食事時に人が行つても御飯を出すなど〻云ふ事はありませんから、不意の來客で御飯の豫算の狂ふなど〻云ふ事はありません。

●食物は質素な所で、朝大津に居ると京都で粥を啜る音が叡山を越えて聞えると惡口に申す程です。

●商家の小僧さんは坐つて御飯を頂く事は無く、勝手の上り框に腰を掛けて戴くのださうです。

●活動寫眞は可なり盛んですが、入場料は東京の倍で十錢とはお安くありません。

●想像の全く外れたのは鴨川で、未だ見ぬ中は綺麗な水がさら〳〵と白砂の上を流れ、屋形船でも浮いて居て鼓の音位洩れるのかと思ひましたら、船はおろか水はちよろ〳〵と流れて居るだけで、多い時は濁流滾々殺風景な川です。

●昨年圓山公園で男が喧嘩をして居るのを見ましたが、掴み合つて居る中に一人の懐から錢がパラ〳〵と落ちると『ちよつと待つておくれやす』と云ふと、對手が手を引く一人は金錢を拾ふ、喧嘩はこれで止めかと思つたら中々、拾つてから又初めた、噓の樣で眞實の氣の永さ。

●女學生は學校では東京辯を用ゐますが家へ歸ると京都言葉を使はる〻。

●お詣に行つて小錢のが無いと銅貨をおげて疊の上にある賽錢の中からお釣を取つて來る、又途中で乞食に

遇つて丁度小錢のを持合せがないと、白銅位出して乞食からお釣を取る。佛樣や乞食からお釣を取るなどの事は他國では見られません。

●世の中には物好もあつたもので、新京極には冬でも氷水屋があります。

●人が優暢だからと云ふ理由でもありますまいが、荷馬車が少く牛車の多いこと。

●電車が日本では一番早くから開けたので、其代りと云ふ理由でもありすままいが、速力は日本で一番遲う御座います。

●俥に相乘の多いのは見物に便利なからでせう。

●お正月の淋しいこと、松を立て注連を飾る家はすくなく、羽根の音凧の唸も微です。

●お菓子は全く拙です、それでお安くないのですから甘黨は閉口致します。

●お蕎麥もおしるこも東京とは比較ものにはなりません。お蕎麥屋に行くとよく子供の二人も連れて來て、うどんを二ッ位取つて緩りして行くのを見受けます。

●飲食店にひる、まむしとありますので、蛭や蝮を食べるのかと恐ろしく思ひましたが、ひるは家鴨でまむしは蒲燒の事だそうです。

●牛肉は神戸に近いだけあつて美味う御座います。お値段は最上百目五拾錢次が四拾錢です。

●松茸は盛に出まして諸所へも送られます、同じ京の松茸でも東山と北山に依つて薫りが異うそうです。出盛りには百目上等十四、五錢です。

●お寺とお宮も多う御座いますが玉突屋もこれに負けずに多う御座います、只今全市で六十五軒程御座います。

●名產は西陣織、友禪染、八橋、千枚漬、豆不知、紅、白粉、扇、京人形。

●嵐山は櫻で有名ですが、花より寧ろ初夏の新綠が何とも謂へぬ眺めです。

●祇園の夜櫻も昔から音に聞えたもので、未だ見ぬ中は吉野櫻でも植ゑ込んで、雪洞の光が夢の樣に春の夜を照らし、花の精かとも疑はれる舞姫が舞扇翳して居

る處を想像致しますが。實際は矢鱈に大きい木が一本あるのみで、砂埃の立つて居る狹い處に毛布や茣を布き、重詰を開きお酒を飮んで騷いで居るので御座います。

●時雨るゝ事多く、時雨の趣きも捨てられぬ風情があります。

●大原女が花賣りに出るのだと思つて居りましたが、白川から出るのだそうです。

●愛宕と書き山は愛宕山と謂ひ郡は愛宕郡と呼びます。

●花賣女が花と一緒に番茶を賣りに參りますが、目方で賣らず桝で賣ります、一升四錢位。

●湯屋の湯槽は大小二個つありまして、一方は熱く一方は溫くしてあります。湯槽は流の中央にあります。湯槽は深さ二寸五分直徑六寸位で、一返手拭を浸せば湯が無くなつて仕舞ます。

●加茂の祭昔ながらの面影を存し、祭と云へば加茂に限つて古を偲ぶよすがともなります。

●布團着て寢たる姿や東山、京都の景、京都の人、皆眠つて居ります。全く京都の空氣には活氣がありません。スケッチブックの夢が墓とでも云ふべき所でせう。

●茶の湯、生花のお稽古は盛んです。

●音樂は關西音樂協會、京都音樂會等ありますが盛とまではまゐりません。

●小學校は日本風の堂々たるもので、學區內有志の寄附に依つて出來たものです。或小學校には千二百圓もする洋琴が備へてあります。高等女學校や女子師範のピアノでさへ遙に及びません。

●小賣商人に惡風がありまして、町內の者には普通の値より一割位引き「ごめんやす」とでも云つて入れば普通の値、東京辯でも使ふ他國人と見ると一割は高いそうで御座います。

●道路はよろしい處で、雨降りでも泥濘る事は少う御座います。

●風と雪は少い樣です。

●生鱒はよく用ゐます處で鮨にも使ひますが條蟲が怖いので今でも私は戴きません。

●京に居りまして中古の文學書を繙きますと紫式部や兼好法師が目の前に浮び出て參ります。

●山を見ても川を見ても、一木一石皆古を語る樣な氣が致します。

●京都に住んで年に一度位東京見物に出たらば理想だらうと思ひます。

●昔の京の有樣はどうであるかと、二鐘亭半山の見た京物語から二つ三つ拔いて次にお目に掛けます。

△京は砂糖漬のやうなる所なり一體雅有て味に比せば甘し然れ共かみしめてむまみなし、からびたるやうにて潤澤なる事なし、きれいなれど、どこやらさびし、多きもの寺、女、雪踏直し、すくなきもの待酒屋けんどん屋ぐはんにん生醉、鳶、烏、馳出し等なり。

△正月門松立る家はなはだすくなし、よほどの家つくりにても壁に折釘打てありこれに注連を張るなり。

△昆布をみづからしと呼びてことの外に用ゆ芝居にて饅頭や水辛を賣る、夜の往來だまりて通るものなし大かた義太夫節淨瑠璃なり老人は謠なり。

△風すくなく雨まつすぐに降る。

△天氣暑寒の事、氣分の事あんばいといふ。

△女の小袖多くは裏にもやうあり縫など入たるもあり。

△六分女四分男たるべし夜も若き女ひとりありく男女つれ立ちて歩行くを少しも惡口いふものなし。

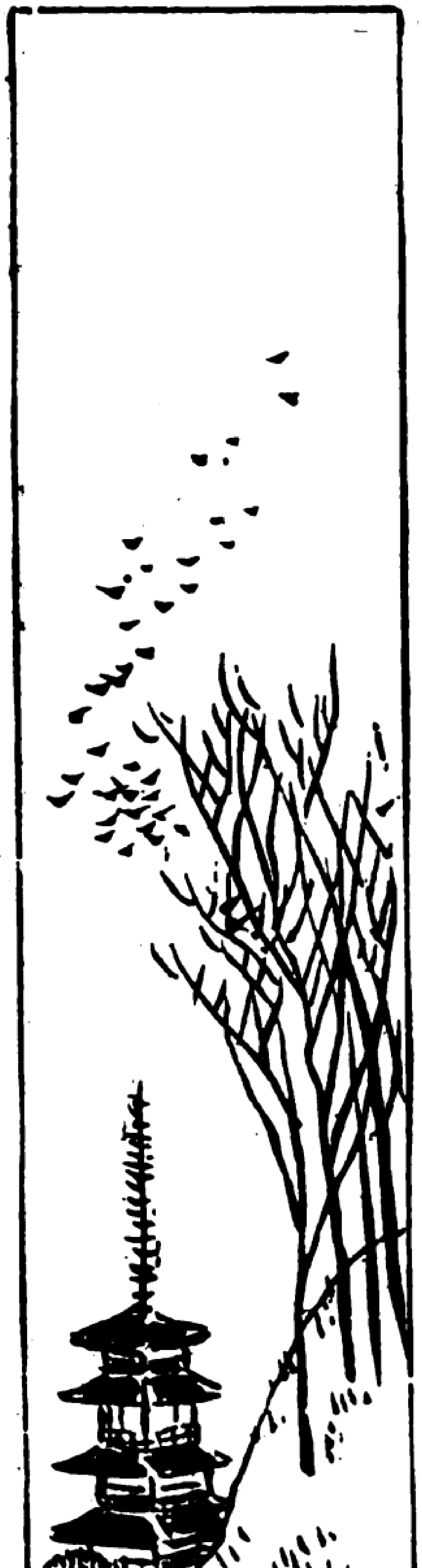
△生姜の事をはじかみといふ、鴫燒の事を茄子田樂と云ふ。

△婚禮すくなし目だゝぬ樣にするか葬禮は中興なりはなはだ氣味わるし。

△思ふに京は石地小砂利のみ多く土氣すくなし故に人きれいなり女などにいにしへより美人多きは國に油氣なくきれいなるゆゑなるべし魚などむまからず生る草なども細にして唐繪の如く綺麗なり、どくだみ蕺かうじなどいへるもの、けがにも生えず。

△男女子供ともに冬は袖なし羽織多く着る。

△九月出かわりあり雛賣る。
△花火は線香より大きなるはなし、裏店なし、米搗なし、草箒なし。
△山伏見えず、竈拂見えず、小間物賣油うりなし、木綿うりなし。
町々掛行燈或は張紙に
　御法度
たばこの火出し不申候
くはへきせる無用
とあり。
△雪踏直しは編笠を着てぬりたる箱をかつぎなほしなほしとよびありく、形も小ぎれいなり、乞丐人とは見えず。
△女院御所の表御門石壇上に雪踏直して居るを見掛けたり。
△五月節句に髪置の白髪やうのものを賣る男の子へは菖蒲刀を祝ひやり女の子へは其白がやうのものをいはひ遣はす、この名を玉つばきといふ八千代といへるころなるべし。
△京は竈の形したる所なり東北西山々圍みあり南のみひらき地なり、はれたる日は山々近き故うつとをし雨中は山々見えぬゆゑ、かへつてはれ〴〵し。
△朝より晝すぎまでは人氣靜なり狼の眼の光る頃より甚元氣よし。



校友大會へ行つて見た記

桑田きよ子

私は、會計と來賓係りとを兼れて居るので、今日は目が廻る程に忙しい。設備は昨日までに凡て出來た積りであつたが、さて出校して見ると、あれもこれもと缺けてる處がまた澤山あるので、五時に出てもう八時に間もないのに、一寸の休む暇もない。グラウンドや娯樂室に、開會の時間を待つて居る人だちに、暢氣さうで眞實に羨ましい。こんな寒さにこんな忙しい思ひして、その上皆んなに、委員の方は先生のご信任があるの、平素のお使ひ物が委員と化けたのだなどゝ、陰口いはれてほんとうに間尺にあはない。

八時から、來賓の方はそろ〲お出でに成つた。皆卒業生ではあるが、それでも娯樂室へ案内する事から、お茶のことお菓子の事など、私等同じ係りの委員十人そこらでは全く手が足りない。それを知らず顔に來賓方のあの悠々たるお話振り、實に恐れ入つた。中には私等の姓名、年齡、住所などをお聞きなさる、ご親切な方もあるが、私等の戸籍調べをして何になさるのかしら、お媒酌役にはまだ早いお年なのに。

來賓の方は、皆で八十名餘、隨分な大勢だ。がお子さんをお連れの方は四人しかない。私等が一年生の時には十四五人も有つたやうに覺えて居るが、翌年は十人となり、翌々年は五人となり、漸々少なくなつて行く。卒業された方が多くなればなる程お子供さん　お連れの方も多くならなければならぬ譯だが……でもお子供さんがお有りなされては、外出も都合よく出來ないのかしら。それにしても可笑しい。

何にしろ此の澤山の來賓に現在生も混じつて居るのだから、その騒々しい事夥しい。中には如何はしいお手付きで、ピアノやオルガンを得意になつて弄つてゐる方もある。見れば、昨年音樂學校に入學なされた野河さんだ。勿論、弄る爲めに備へ付けた樂器だから、弄くるも弄くらぬも來賓方のご隨意だが、其の御勇氣には感心する。こんな時こんな場合に衆へ目にして居るのは、藝術に忠なる人の爲可き事でないのだらうと今日只今野河さんの御蔭で初めて悟つた。

また、武内さんといふ方は、何んの御本やら厚い洋書をお持ちになつて居た。私等は忙しいので、よくは見もしなかつたが、何んでも皆様とお話の相間には、少しの暇にもそれを開いてお讀みになつて居らしたやうだ。Bee the boy……オホホこんなものぢやない。どうして大變むつかしさうなご本だつた。聞けば第一回の卒業生だといふにまだ何處へも縁付かないですつと獨身主義を厲行して居られるとの事。彼の方なら無論澤山の御縁談もあるのだらうに、よくまあさうして御過しになると、私は全く感心して終つた。そして斯んな騒々しい場所でも、少しの暇をも惜んであゝなんですもの、よく寸碎の時を惜しめの利用せのといふ事は、種々の本で見受けたけれども、實行は今まで出來ないで居たに、今

目の當り武内さんを見ては、私も明日から何處へ行くにも書物を離さないで、之を實行して見やうと思つた。

それから私が、林さんといふお方がお連れなすつたお子さんに、お菓子を別けて上げて居たら、林さんと元同じ級の方だらう。

「林さんはお感心ね、よくお子供さんのお世話をなさるのね、御面倒ではなくつて？、お襁褓の洗ひ方なんかも、ご自分でおやりなさるといふぢやありませんか。」

「全くよ、それにお子供さんのお世話ばかりならまだしも、御兩親のご機嫌をお取りなさるばかりでも大仕事だわね、結婚なんて眞實に私……」

などお話して居らしつた。女は何處かへ縁付くと先づ子供が生れる。子供が生れてはまさか捻り潰す譯にも行かないから、是非とも養育てなければならない。養育てるには、何にから何にまで決して樂な仕事でないのに、其の上舅姑に對して機嫌を取らなければならない。それより獨身で暮した方が……。とは却々いゝ思案だ。私は今まで男猫や男犬の子供を育てゝ居るのを見た事がないし、鶏や雀を見ても其の通りで、皆雌が子供を育てゝ居るから、父様や母様が「子供を育てるのは女の天職だ」と仰つしやるのを此の上もない御名論だと思つて居たが、今は結婚は女を堕落させるものだナとつくづく感じた。

先輩の方は私等に好いお手本を示して下さるから、私等はどれ程貴い感化を受けるかしれない。それだから、この暑さにも係らず、先生方が先きになつてこんな會を開催するのだらう。

間もなく閉會の時刻となつたので、來賓の方を初め會員一同食堂へと這入つた。さしも賑々しかつた娯樂室も一時閑寂となつた。ホッと息をつく暇もなく、お晝までに此の室をすつかり掃除して、來賓方へのご飯の仕度せなければならないと、思ひ出しては凝として居られない。またも目の廻るといふ騒動。これで目の廻る事二度。三度目には如何なるだらう。私達の身體……

こんな譯で、會場の有様が些つともわからない、不平たらたら駈け廻つてるうちに、それでも十一時頃には掃除も御飯の仕度も出來たので、漸つとお晝までには暇があると、少し汗をさまして居たら、節子さんが大變眞面目なお顔して「これご覧」と小さい紙片を渡すので、何んであらうと覧れば、

一、せんべい	三十枚以上食べしもの	八人
一、同	二十枚以上	十五人
一、同	十枚以上	三十人
一、同	一枚以上	三十人
一、お茶	十五杯以上飲みし者	四人
一、同	十杯以上	二十人
一、同	五杯以上	二十五人
一、同	一杯以上	三十四人
一、ブランコよりおつこちたもの		二人

其の他泣いた者、獨身主義を振り廻したもの、それに賛成の意を表する者など、隨分可笑しな事ばかりなので、「オホホー　この忙しいのに如何してこんなによく調べて。」といつたら、こゝがそれ忙中閑ありですかられ。」

　それから大笑ひで二人裏の方へ行つたら、佐藤さん北原さん奈良岡さんなど、私等同じクラスの方が十人ばかりでシク〳〵泣いて居らしたので驚いた。「如何したの」つて聞いて見たら、佐藤さんが獨唱するに就いて、その前に一二度先生に練習して下さるやうお願ひ申したら、如何なる御都合か二年の森さんや三年の前田さんにばかり何度も〳〵練習して下さつて、その他の方には練習して下さらない。その結果、佐藤さんの獨唱はまるで失敗に歸して終つた。それで他の方達は佐藤さんに同情して泣いて居らつしやるのだとの事。私の級には斯んな同情の念の厚い方ばかりあるので、何れ程嬉しいか知れない。私が何時であつたか北原さんと公園を通つた事があつたが、十二三歳位の盲の女乞食と出遇つた。そうしたら北原さんは 不潔い乞食だ側へよれつて大變口穢なく罵しつて居たのを覺えて居る。その時私は、穢ないなら御自分で側へよれば好いに、不自由な、哀れな盲の子を、彼んなに口穢なく罵しらなくともと、北原さ



んを不人情な方とばかり思つて居たに――。また奈良岡さんも、二人で横町を通つた時に、男の子が轉んで膝頭を擦り剝いて、アイ〳〵泣いてるのを、私が、傷などゆはひて世話したら、誰れも見て居る人もないに、貴女も大變馬鹿れつて笑つた人だ。それに今はお二人とも佐藤さんに同情して泣いて居らつしやる。私はお二人に同情心なんかないと想つて居たのは、心から濟まないやうな氣がした。それから私も兎に角同情を表して見たが、泣く事だけは如何しても出來なかつた、して見れば、私の方が、寧しろ北原さんや奈良岡さんより、同情心が少ないのかも知れない。

　間もなくお晝になつた。またも御飯後のお茶だ。お菓子だ。これで目の廻る事何方も丁度三度目になる。それでも不思議な事には身體には異狀がない。扨て見渡すと可笑しい事には、只今御飯食べたばかりの方が、皆んなお茶もがぶ〳〵飲めば、おせんべいもばり〳〵食べて居る。

　隨分胃の壯健な方ばかりだ。節子さんが想像してお書きになつた事がその半分としても、前後兩回で丁度節子さんのお書きになつた位になるだらう。よく食べてよく騒ぐ、之れが二十世紀的の衛生法かナと大に感心した。

午後には、私達四年生一同の「波上の音樂」の合唱があるので、アツと

聽き手を驚かさんづと、一同力んで居つた所、愈唱ふ段になつてその不出來つたらまるで猫喧嘩みたやうなものが出來て終つた。さあ大變。皆んなが會場から出て、彼方の隅でシク／＼、此方の隅でもシク／＼、五六人の人を除く他は先づ泣かない人がない。其のうちに、誰れ行くともなく五人行き、十人行きといふ風で、皆栗原先生の所へお詫に行つた。茫然してお詫し遲れたのは、例の節子さんに千代子さんそれに私と都合三人。私がお詫して好いものやら悪いものやらと考へてると、節子さんと千代子さんとは、それに就いてのご議論だ。

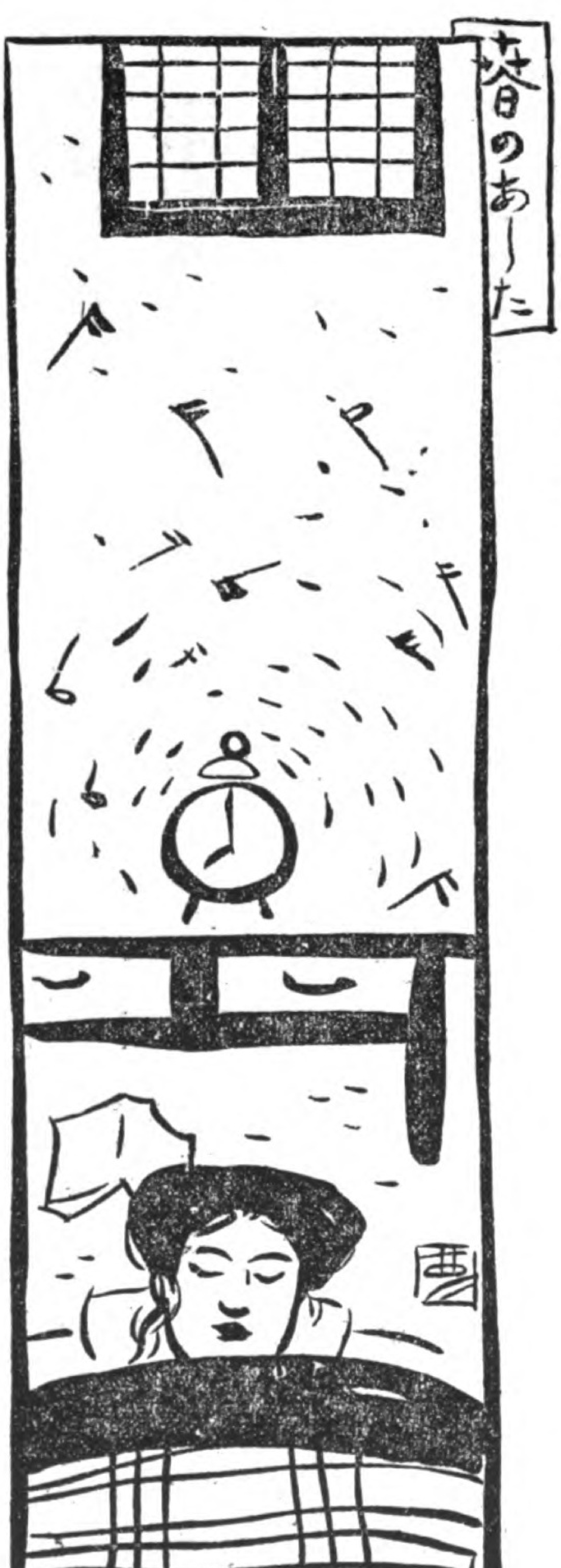
「……でも私如何してもお詫する必要ないと思ふわ、私達何にも先生に失禮した譯でもなんでもないもの、餘興にやつた唱歌が悪るく出來たつて一體お詫などする方達の氣が知れない。」

「私だつてお詫する必要があると思つて居やしないわ、でも私達三人だけ行かなければ、後でまた誰れ／＼さんは如何してお出でになりません同じ級の方は、皆一致の行動を取らなければなりませんなんて、例のお目で睨まれるのを、貴方何んとも思はなくつて。」

「オホホ！　貴女大變お弱いのね、だもんだから〇〇のやうな奴に尾行かれるんだわ。」

「まあひどいわ。」

後は笑ひになつて終つたが、兎に角私達三人もお詫する事にした。唱歌の不出來は、平素先生の教が悪いからだと人にいはれては、先生に對して濟まないといふ理由を無理に附けて……。



活潑に働らく露西亞の女技師

小柳夏村

△妙齡の處女の鐵道工事

露西亞の內地に參りますと、近年女醫者の多くなつたのには、誰れでも喫驚するさうでございますが、近頃女技師と云ふ隨分突飛な職業が又々露國に流行して參りました。道路の修繕や、鐵道の改築に、大の荒くれ男が、花をも欺むく妙齡の處女に頤使されて働いて居る光景は、中々見物ださうでございます。

女技師を養成するやうになりましたのは僅か四年前のとでペテルスブルグにあります高等工業學校の校長でピーレクンプスキーと呼ばれる隨分發音の六ケ敷い博士の發案ださうで、始めは色々の反對意見もありましたが、兎に角面白からうと云ふとで、三年前に愈々此の高等工業學校內に女技師部が設けらるゝことになつたのでございます。

これが直に官報で發表になりますと、吾も〳〵と志望者が多くて、今日では七百人內外の生徒が居ます。

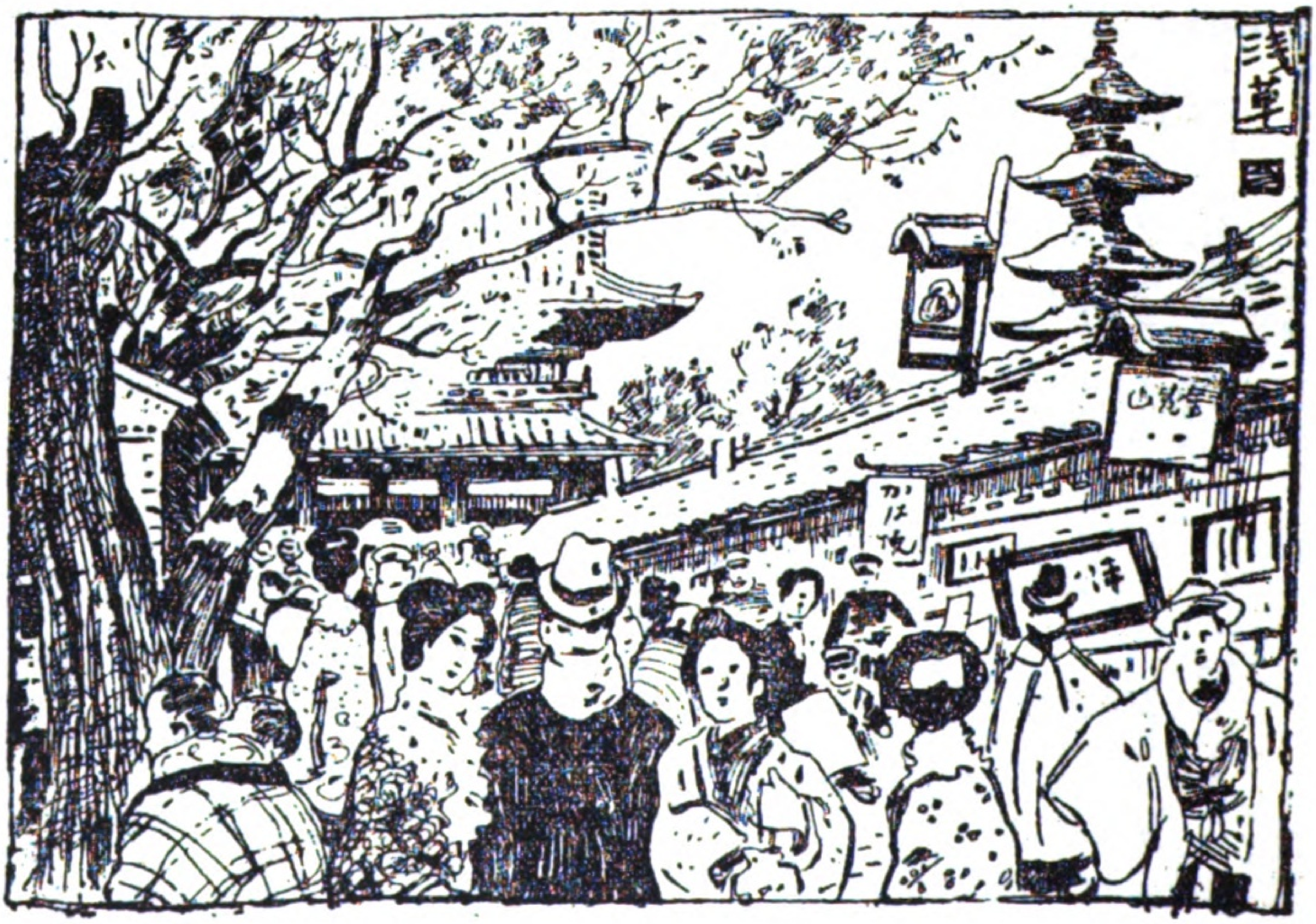
御承知でもございませうが、露西亞婦人の一般傾向は極端から極端に渉つて居る二つの型があります。一つは賢母良妻主義とも申しませうか、夫大事に唯もう自分の家を城廓と心得て、社會から全く懸け離れた生活に甘んじで居る婦人と、今一つはハイカラ主義とも申しませうか、兎に角自分で自分の運命を開拓して、自由の空氣を吸はふと云ふ、近代的思潮を極端に代表して居る婦人であります。右の工業學校に入學する婦人は、將來大の髯男を頤の先で平氣に使へる武者ばかりで、無論近代的思潮に觸れたハイカラな婦人連であるとは申上ぐる迄もありません。

△ニコライスクの造船所

昨年第一回の卒業生が四十人餘り出ました。此等の

女技師は皆夫れ〳〵政府の工場や、鐵道技師に採用されましたが、目下一番多く女技師の勤務して居る處はニコライスク造船所、ペルム鐵道、セバストポール電氣鐵道などであります。又近頃露國政府は陸海軍用倉庫をペテルスブルクに新設する計畫でありまして、巨大な倉庫建築中でありますが、工事の監督は皆女技師に任せて居ます。

　成績の上から見まして、女技師の方が優つて居るか、矢張男子の技師が善いか、これは未だヤツと第一回卒業生が出たばかりのと



淺草の仲見世

ですから、無論正確な判斷は下されないでございませうが、是れまでの經驗によりますと、女技師の方が一體に仕事に忠實で、出勤時間も男子よりは正確で、政府の工場でも、會社でも大層受が善いさうで御座います。

『どうしても女の方が眞面目で頭腦がハツキリして居る』

　女技師を使つて居る工場や會社で、係官に聞ますと誰れでも斯う云つて居るさうでございます。どうしても、男子はツマラヌ場所で夜更しをする傾があります

から、自然と出勤時間が遲くなつたり、勤務が厭になつたり、頭腦がボンヤリになることがありますが、そこになりますと、婦人はどうしても勝るやうです。一體が男子と違つて婦人は何と云つても小心翼々のものですから、仕事に一心になり、翌朝のことを思へば夜更しなどは出來ないやうで、自然と出勤時間が正確になり、頭がシッカリなり、仕事に眞面目だと可愛がられるのです。如何に近代思想に觸れたハイカラな女でも、到底男のやうではありません。これは女の一德でございませう。併し顔の人並勝れて立派な女技師はどうも成績が惡いさうです。現に陸海軍倉庫の建築に使つて居る女技師の内で、容貌の善い技師は十人並の婦人よりも成績がどうも思はしからぬと言はれて居ります。それは顔立の善い婦人は色々要もないことを男子から話し掛けられて仕事を妨げられる故だといふ事です。何處も人情は同じものと見えますが、固より之は女の方の罪ではありません。それで政府も之には困つて種々研究した揚句、女監督員を設けまして漸く此の弊害が無くなつたと云ふことであります。

△女技師は諸工場の引ッ張り凧

斯んなふうに大層工場や會社の受けが善いからでせう、女技師は俸給も男子と異はないさうだけれども、それでも女技師の方をと申込んで來るさうでございますが、未だ、在學中の生徒も各地方からの望み手が大層多いさうであります。御承知の通り工業學校は生徒は技術に關する學問をするのですから、休暇〳〵には實習の爲めに各工場に派遣されます。それで成績が大層善くて、將來益々女技師の職業は有望だと云ふことに一般に認められて居ます。先程申上ました彼の妙齡の婦人が荒くれ男を監督して鐵道の修繕などを遣つて居るのは此等女學生が實習するのであります。

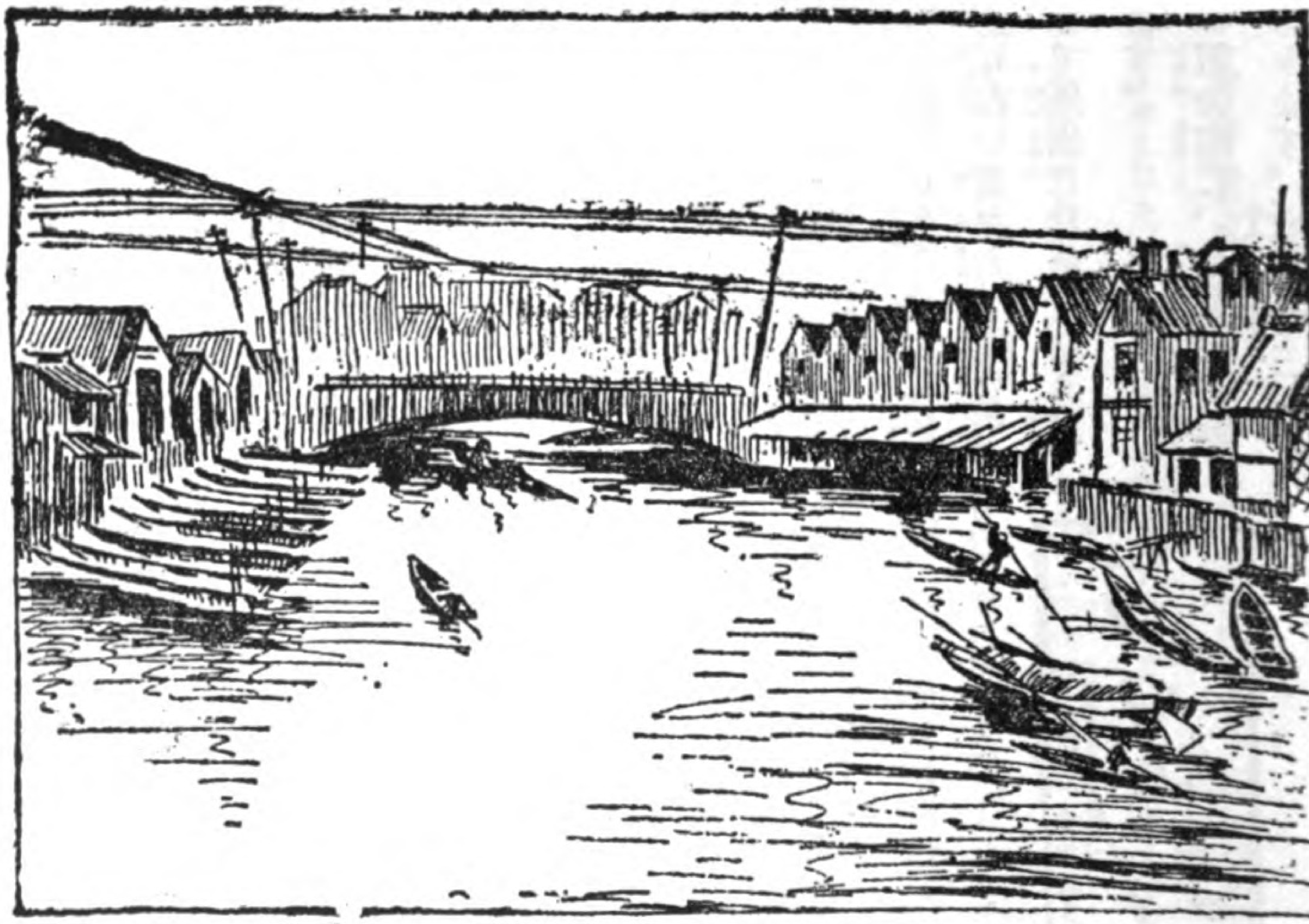
政府の工場に使はるゝ女技師は矢張男子と同じやうに一定の制服を着けることに定めてあります。制服は男子のと同じやうに上衣は眞鍮釦で留め、袴はオリーヴ色ださうですが、「着物にまで干渉される必要はない」

と氣焔を吐いて服從しない婦人もあるとか。尤も服裝などに就いては男子などでも反抗するのは珍らしくない事で、一般に此の正規が遵奉されるのは露國では一寸六ケ敷いのでございます。

△露西亞の女辯護士

序ですから、女技師以外の婦人の職業に付いて少しお話し致しませう。日本にも近年殖えて參りました女事務員と云ふ職業は露國にもあります。銀行などは澤山女事務員が居ます。又女判任官も珍らしくはありません。矢張日本と同じやうに郵便局では無能な書記は追々排斥されまして婦人が採用される傾があります。つまり前に申すやうに婦人は小心翼々の方で、忠實に事務を執るからでせう。

女判任官や、女事務員が露國に居たからとて、日本でさへ追々採用されて居る今日でありますから、別段珍らしがるにも及びませんが、女辯護士には一寸驚かされます。如何に露國が一風異つた國柄だとは云へ、未だ女辯護士が公然許可されたと云ふ次第ではありませんが、婦人界では何れ近い内に女辯護士の職業が許



日本橋の魚河岸

可されるに違ひないと確信されて居ます。で、現今大學で法律を研究して居る婦人は數百人ありまして、既に辯護士として立派に資格のある婦人が六十人ばかり居るさうで御座います。果して近い内に許可になるで御座いませうか、若しさうだとすれば、愈々婦人界萬歳です。

△婦人界趨勢の新舊雜踏

兎に角、露西亞は何事でも突飛な一風異つた國柄で御座いまして、常識では中々判斷し難いとが度々ありますが、婦人社會の趨勢なども矢張其の數に洩れないのでせう。斯んなに開放的な近代的な風潮があるかと思へば、他方では最舊式な因循な風習が矢張殘つて居ます。地方に參りますと彼の土耳古の貴夫人と同じやうに被頭巾を被らないでは決して外出しないといふ風の優しい内氣な婦人が澤山居ます。

然も此等の舊式の婦人が居る田舍町に、女醫者と云ふ最近代的な婦人が居るのであります。女醫者と云つても日本の女醫者とは異ひます。全く露西亞一流の女醫者で御座いまして、政治にも關係致します、夫も自分で養つて行きます。勿論家族も自分で支へて參りますが、一家の經濟などは自分で監督する譯に參りません。子供なども唯自分は監督の任に當るばかりで、他人を雇ふて敎育させ、朝夕の献立などは全く自分は關せず焉と云つた風で、食事は大方飲食店から運んで居ます。細君の手料理で一杯飲むと云つたやうなとは女醫師の夫には藥にしたくても無いので御座います。

要するに、露國は革命運動などには必ず男子の背後に有力なる婦女子の助言が潛んで居ると云はれる位な國柄ですから、露國の婦女子の一體にインシエチーヴな、又チヤームに富んだ性情が思ひやられます。



言葉づかひの不注意

今の社會には何事に依らず一般に下等な風が瀰漫して居るので、之を改善するには先づ上流社會から矯め直して掛らなければならない。近頃の女學生の言語などゝ申したら、實に何うも野卑極まつたもので「好くつてよ」とか、「貰うたわ」と云ふやうな語を立派な姫君が用ゐて、恬として恥と思はぬやうになつて居るが、あゝ云ふ語は皆下等社會の婦人から出たものである。何うして下等社會の婦人の間にあゝ云ふ語が生れ出たかと云ふに、總て日本の言葉は言ひ切ると何んとなく角の立つ氣味がある。其例を數へ擧げて見ると、日常の言語の中にも、婦人に相應しくないものが少くない。それ故昔は上流社會には代語が澤山あつた。例へば鯛をおいらと呼び、鱈をおいきと言つた。今はそんな語は廢れて仕舞つたが、前に申した通り、明晰した語で物を言ひ切ると何か嫌みが強いやうな心地がするので、語尾に餘計な語を添へるやうに自然なつたので有らうが、それにしても「だわ」とか「よ」とか云ふのは沙汰の限りである。其他語の下に「ねえ」と云ふことを添へる。あれも、矢張り下等な語で、決して貴人の前で發すべき語ではない。併し常に斯う云ふことに心得がないと知らず識らず禮を失するやうになるから、家庭に於て好く注意すべきことで有らうと思ひます。此言語の善惡は、全く家庭の日常如何にあるので、急に改めやうとしてもなか〳〵出來るものではない。近頃上流の家庭なども躾を嚴しくされる處が、段々多いやうに聞いて居るが、斯う云ふ家庭に生い立つた婦人は吃度言語も正しい。之に反して常に職人などの出入する家庭の子女はとかく言語も亂れて居る。これを學校の力で嚴しく言ふと、家庭では喜ぶと思ひの外反對に、そんなに言語まで嚴しく云はれては困ると云ふやうなことを言ふ。併し自分の娘が堂々たる席に立つとき、いかに立派に着飾つて居つたところが、口を利けば「貰うたわ」とか「いやよ」とか云ふ野卑な語を用ゐて居るのを親が見たらさぞ堪へられぬ感じを催すで有らうと思ふ。（小笠原清務氏）

米國觀光團の握手會に行つて見た記

大隈伯のお屋敷で

河岡潮風

某新聞の所謂「高名なる學者、有名なる實業家、資産家、農業家及び貞淑なる貴婦人と其家族とを包含したる」七百餘名の米國觀光團は一月六日入京した。そこで報知、毎日、兩新聞が發起して、その翌七日、大隈伯邸に握手會と云ふのを開いたのである。わたくしも招かれて末席に列り、「貞淑なる貴婦人」の一言一行を觀察した。

十四度の近眼鏡を通して

案内狀には午後一時よりとあつたが、サテ事實は一時を過ぎてもなか〳〵集らぬ。規則正しき西洋人も郷に入つては郷に從へと、日本流に改宗したのかも知れない、ハタられて高利の金を返す様に少しづゝやつてくる。いづれもゴム輪の俥をつらねて、米國觀光團と赤地に白く染め拔いた小旗を翻へして來る處は、碧眼金髪でこそあれ、宛然たる「お上りさん」ぢや。こなたの笠松の下には活動寫眞機を備へて、頻りに寫してゐる。五人の内に二人位の割に婦人もゐるが、イヤいづれを見ても同じ冬枯、眼のさめる様な美人は居らぬものだ。皺競べならいつでも來いと云つた風の梅干婆さん。ソクラテス夫人の様な活潑な三十女。女角力の様なマダム。鼻眼鏡のミス。鳥の毛をピンと立てた娘など、續々と來るが、「端麗」の二字を許すべき顔が幾人あつたか。先頃日本から渡米した一行のうちにも美人が無かつたさうなが、世の中にはかうも別製品が揃ふ底なのぢやらうか。

得意になつて小さい日傘をさした、大きな面の婆さん、殿として、最終の連中が着いた。玄關先は湧きかへる様な混雜、僕は折りふし出あつた和田垣博士と共に内側へ入つて見る。

玄關の取りつきにニコ〳〵然として大隈伯が控へ、

伯夫人がその次に、それから東都著名の實業家連十人ばかりならび、賓客は一人一人握手して中へ入るのである。「イヤ實に丁寧だ！」と博士は獨り語を云ふ。今度は奧へ行くと、記念エハガキを與れ、どうか庭へと案内する。大神樂が始まつて、ピートロ、ピートロ、ドン〳〵と、鍵笛に飛び、向ふ鉢卷の男が大車輪でやつてゐる。見物には無論男もあるが女が多い。ゴム人形に息を通はした樣な女の子が、小さな犬張子を小脇に抱へて、母親の腕にもたれて、懸命に見とれてゐる。



あまり愛らしいので、持つて來た少女世界をやつて、色々話をして見ると、名はカザリン、年は十四、プルークリンの、ハイツセミナリーの生徒だと云つた。これで大きくなつて鼻眼鏡さへかけねば、キット可憐な娘になるだらう。

演説があると云ふので、一同式場に入つて、食卓につく。こゝで端正な婦人を兩三人見かけた。美人畫家アスチーなどが好んで畫く南歐美人的の型である。謹んで前言を取り消す。

かつ聞き、かつ食つて、ものゝ二十分も經つと思ふと、

「日光組、第一團早く〳〵」

とガナりまはる。四時何分とかで日光へ立つ連中は、泡くつてばら〳〵席を離れる。手眞似で御亭主に外套を持たせ乍ら、何かパクつく「貞淑の貴婦人」もあつた。男も女も此の期に及んでマダ食ひたらず、手近のものを食ひ乍ら俥に乗りうつる有樣は日本人では出來ぬ藝當、一寸品のよいオカミサンさへ、バナ、の皮を剝き乍ら、

「グットバイ！」

◎劍舞についての奇聞

演説すめば、演壇のうしろで少年劍舞、女子大學生の薙刀仕合などが始まつた。しかし大抵は大神樂に吸集されて、劍舞の邊は日本人の數が多い位。

四十近い。中婆さんがツカ〳〵とやつて來て。

「この子供たちはサムライ階級ですか」と僕に問ふ。

「穴勝さうでもない」と云へば、又、

「これは一體何と云ふものですか、今やつてゐるのは何ですか」と根掘り葉掘り聞かうとする。僕曰く、これは劍舞と云つて、志氣振興の遊戲である。

しかし今演じてゐるのは「捨子」と云つて、悲劇の樣なものだ、

そのうちに旅順陷落の詩になり、白刄丁々と斬り結べば、火花が八方に飛ぶ。

「オ、危ない〳〵」としかめ甲斐なき顏をしかめる。

「どうです。こんな勇ましいものお好きですか」

と、二人の會話を聞いてほゝ笑んでゐる一方の二十四五の婦人に話しかければ。

「オ、、妾、こんなのが大好物」と頻りにサンドキッチを食つてゐる。こんなのとは、果してサンドイッチか、劍舞だかわかりやしない。聞けば二人ともミスだ。町名番地を書いて呉れたが紛失さして仕舞つた。二婦人はこれから伯大隈に面會してくると、カスートを曳いて芝生の方へ出て行つた。プッシングの強い處は日本の女はかなはぬ〳〵。

僕もフラリと庭の方へ出る



○座敷における婦人連

ふと心の底から可笑しさにたへぬ様な笑ひ聲が聞える。大廣間で一男四女が、坐つて、茶菓の饗應にあづかつてゐる最中なんだ。

新らしい疊の上に立派な座蒲團がならんでゐる連中は靴ばきで上り込んで、その儘坐つてゐるのは一寸變に感せられる。坐ると云つても中腰で、腰を上げたり

おろしたり、「來るか〳〵と濱へ出て見れば」とでも云ひたさう。鼻曲りの男の靴の裏には五厘銅貨大の破れが見える。何てシミツタレた先生だらう。

婦人連は打ち見て二十四五から三十止り、夫れでもミスかも知れぬ。口の大きい下品な一人はベールをかけてゐた。

接待役は女子大學生三四人、言葉少なく手を執って敎へれば、悦に入り奥に入つてたしなみなく笑ふ。膳の上に干菓子が載せられ、大井鉢に食指大の輕燒が滿たされてある。食堂からまぎれ込むだ給仕人が二人茶を運へば、茶碗を濡からぬ指にツマみ上げて、一寸甜めて下におく、

「おゝほゝほ！」

「ふあッはッは！」

と腹をかゝへて笑ひこける。鼻の眼鏡もズリ落ちさう。

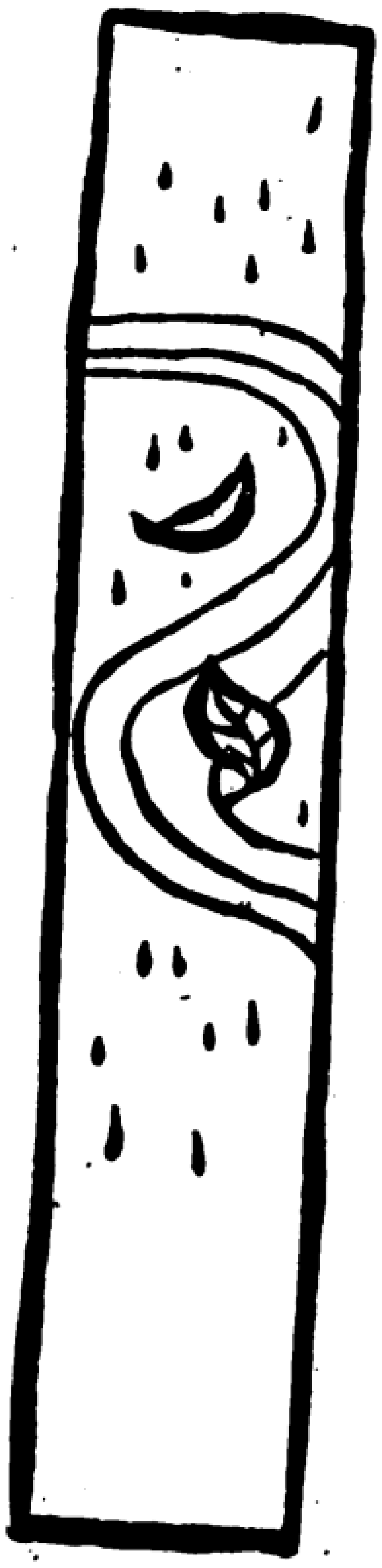
次いで箸の持ち方を習ひ始めたが、なか〳〵どうして指に從はぬ。お前あちらへ、わしやこちらと、離れ離れにならうとするを、口をゆがめて持ちなやむをかしさ。流石にベイル女史はオチャッピーだけあつて、一番上手だ。先づベイルを鼻の上にまくり上げて、輕燒を挾まうとする。今にも落ちさうなので女子大學生が手を添えやうとすると、

「關らないでおいて下さい」

と頻りに藻掻いてとゞ挾み上げる。この處宙づりの體と御座い！　皆な首を傾げてのぞき込む。

善く云へば賑ぎやかに、惡く云へば八ケましく、食ひ終つて、連中は出て行つた。これから日光へ出かけるのださうな。ヒヨロ長い二三の男は、通譯の櫻井女塾の塾生に握手して、

「ムスメさん、グードバイ！！」



風俗記事

大阪市の社會觀察

櫻の宮

ロンドンやパリー扨はニユーヨークなどにくらべては劣るかも知れませぬが、我國では商工業の中心として全國の經濟元とまでゆるされて居る大市であります

△全國商業の中心地

大阪といへばすぐ商業地と申ますが、それでも、さう商人ばかり住んで居るといふ譯ではありませぬ。やはり官吏も居れば軍人もあり、病院醫師は勿論、他地方と同じ丈の種類の人が混み入つて居るのです。唯東京と違ふのは屋敷町といふもの丶ないことです。故に比較的商人が多く且其商業のやり方も大阪の土地の人同志よりも、殆ど全國に氣脈を通じて得意先とか製造元とかと諸國の人を相手に取引をなす方が多いから、自然商業の中心といふ名がつけられたのでございませう。

そして立派な商業店は殆ど大阪市の中でも、其中央部に集まつて、市の端々にはあまり住んでは居りませぬ。即ち船場、島の內、うつぼ、天滿、道頓堀、といふやうな場所です。又之れ等立派な商人といはれて居る人は、如何なる程度の人であるかといふことを一寸しらべて見るのも一興でございませう。

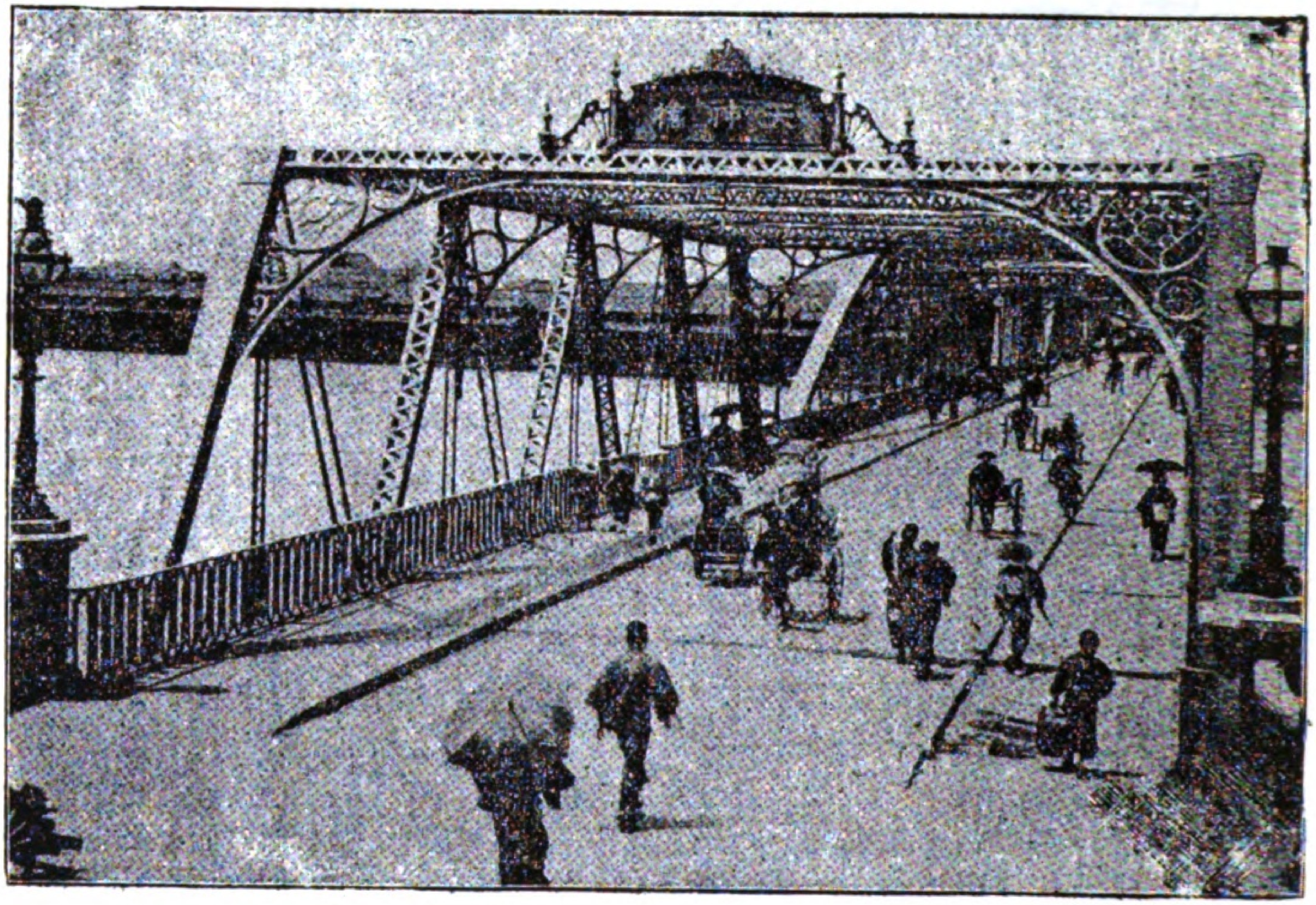
近頃は商業學校出身の青年達もぼつ／＼商業道德を基として、大阪市の面目を改めようとして居りますが、今までの商人は大抵小僧上りで、十四の春兩親に死に別れ、葬式の費用も足らぬ勝に家財を引集めて賣拂ひ、其殘りを旅費にしてはる／＼大阪迄出て來たが第一丈夫で、正直で、よく働くといふ所から、情ある主人に引立られ、數年主家に忠勤をはげんだ末、形ば

かりの別家をして貰ひ、小さな商業を始めた所、今迄主家できたえ上げた手腕や、勤勉が、忽ち自分の利益となつて信用はます／＼まさりゆき、旭の上るやうにめき／＼と成功したといふのがまづ半數、其他は親や祖先から讓り渡された家の商業を受ついで、信用も堅さず、第何代とやつて居るのがまづ幸福の部。

尤も第一流といはるゝ舊家は別ですが、又亡き父の情で、ほんの形ばかり別家してやつた番頭と、肩をならべることさへも出來ない程に落ぶれて居るのもよほど澤山ございます。之等は畢竟敎育といふものをおろそかにした罪だらうと思はれます。

△從前の子供の敎育

内の坊なんぞ學校に入れてそう可愛相に勉强させずとも、幾萬とつんだ財産は、生涯贅澤をしたつても使ひきれるものでない、智慧のいる時には賢い番頭を雇へばよし、勞働の必要な時は人夫をつかへばよし、凡そ世に金といふものほど重寶なものはない、之さへあればどんな不自由もするものかといふ風に育てられた結果、金を費すことゝ人を使ふことばかりを覺えて、自分で働くといふことは夢にもしらず、そら藝者だ、そら芝居だ、と遊び暮らす内には、慈愛深き兩親もいつしか此世を去り給ひ、幾萬とつんだ財産も坐して食へば山も空しの例にもれず、殊に世の變遷は經濟界の風浪を起して、きのふの財産家強ちけふの金滿家ならず、銀行がつぶれる、株が暴落するといふ有樣で、こうなつては人も相手にしてくれず、さればとて今から働かうにも幼時よりの久しい習慣が規則正しい勞働にたえらるべき筈もなく、勉强しようにも小學校の素養からかゝらねばならぬといふ風で、此種の大家の息子ほど實に氣の毒なものはありませぬ、私が此樣なことを申せば今の時節に何でその樣なことがと仰られるかもしれませんが、之は實際十年前の談ですから、十年前に三割あつたものは今も一割はある理窟、尤も當地は非常に藝者のもてる所で、幾百金で身受して宿の妻にするといふやうなことは決して珍らしくない、殊に



大阪天神橋の朝景色

成金黨などは人もゆるし自分も當然のやうに思ふて居るのですから、其家庭で子女の教育などゝは思ひもよらないでせう。

△疊一枚に二三人の割

又町内の親密にせぬ事も當地より甚しいのはありますまい。同商業なれば誠に懇切に致しますが、商法がちがへば二三軒隣のやうでもあまり知らないのです。今尋ねて居る家が四五軒の所だのに敎へてくれぬと田舍の人はおこるけれど、實際諸國からのより集りで、我町内にどんな人がすんで居るのか知らないのですもの、致しかたがありません。そうしてどこの家でも疊一枚に二三人といふ割合に、ゴロ〳〵してるのですから目貫の場所のさう〳〵しいことは何とも例へられませぬ。

△火事早き土地

申さすとも土一升金一升の土地なので、どちらむい

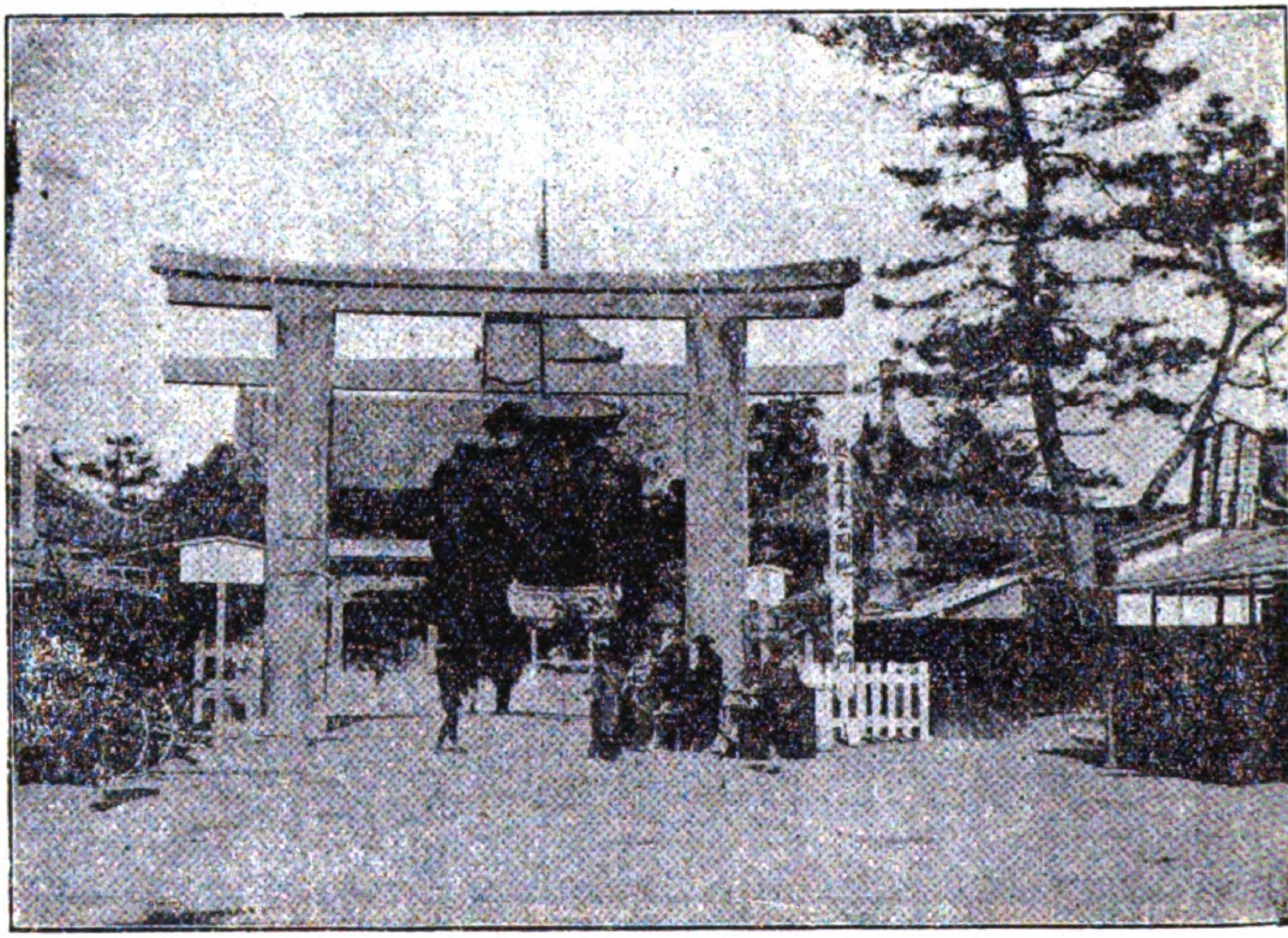
ても軒のいらかや小さな火の見臺ばかり。臺の眞中にヂャン〳〵、そら又火事だ、あちらももえてるこちらも煙があがつてるといふ有樣。田舍から出た時には一一胸がどき〳〵しましたが、習慣は恐ろしいもので、夜分ヂャン〳〵半鐘がなつても今はもう胸の動悸も高まらず、あゝ又かいくつなるだらうと、一寸耳かたむけてすりばんの時には火の見へ出ますが、二つ打位ならば幼な子が子守歌でもきく程に無神經に眠るやうになりました。又大阪で火事を恐れて居つては、到底生きては居られませぬ。併し先達ての大火などは全く別で御座います。

△土地固有の訛

朝に夕に時々刻々に舟から汽車からはき出される幾千幾萬の人、日々東にゆき西にゆきて其交通のひんぱんなること全國其比を見ませぬ丈に大阪詞といふものも東京辯と同じき程に諸國の人に知られて、今更こゝに記すまでもありませぬが、少しく申て見ますならば

一あのね……あのな
一有ます……おます
一ゆきました……ゆかはりました
一きました……きやはりました
一もうたくさんです……もうけつこうだす
一あゝそうですか……あゝそうだつか
一ハイと返事することを……へーと申ます
一さよなら……さいなら
一茶……ぶゝ
一坊ちやん……ぼんぼん
一お孃さん……とうさん
一小孃さん……こいさん
一御隱居さん……おゑさん
一御新造さん……御寮人さん
一主人……大將

そうして無沙汰の人と一寸道でゆきあふとか汽車か電車へ一緒にのり合せるとかしますと、御機嫌よろしいですかといふ意味のあいさつをした後に、必らず何

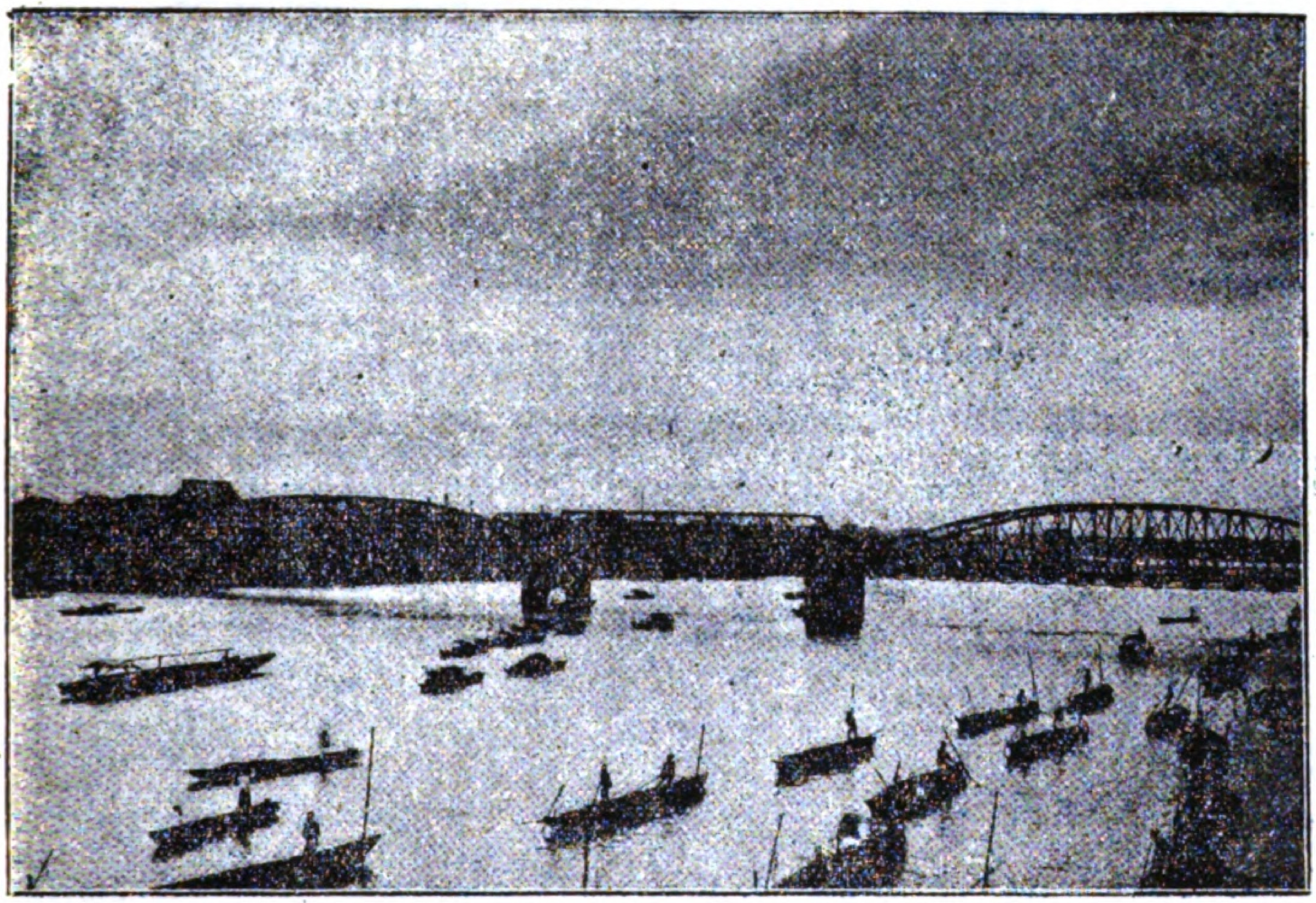


大阪東公園地

ぞぼろいことおまへんかと申のが普通です。すると一方の人は笑ひ乍ら、一寸首をかたむけてさつばりあきまへんな、と申ます。他國の者には何の符牒だか別りませぬが、御本人同志は中々得意で申て居ます。併しよく考へて御覧なさい、少しく人格のある人が、公然大道の眞中でいはれるべき詞でせうか。着實にして行末長く信用を保たうといふよりも、一攫千金少し位不正をしても澤山まうかることが理想とより見えぬぢやありませんか。又假令彼等のいふぼろいことがあるにせよ、何で大道の眞中でさう容易に人に洩らすものですか。それにもかゝはらずあふ人に尋ねるといふのは畢竟一般の挨拶になつてるのかもしれませぬ。

△賑はしき興行物、見すぼらしき公園

大阪百二十萬市民が唯一の遊び所とたのしむ中の島公園は實に氣の毒なほどせまい公園です。尤も豐國神社や圖書館はありますけれど、山もなければ池もなく之が帝國第二の都會の公園とは一寸信じられませんが

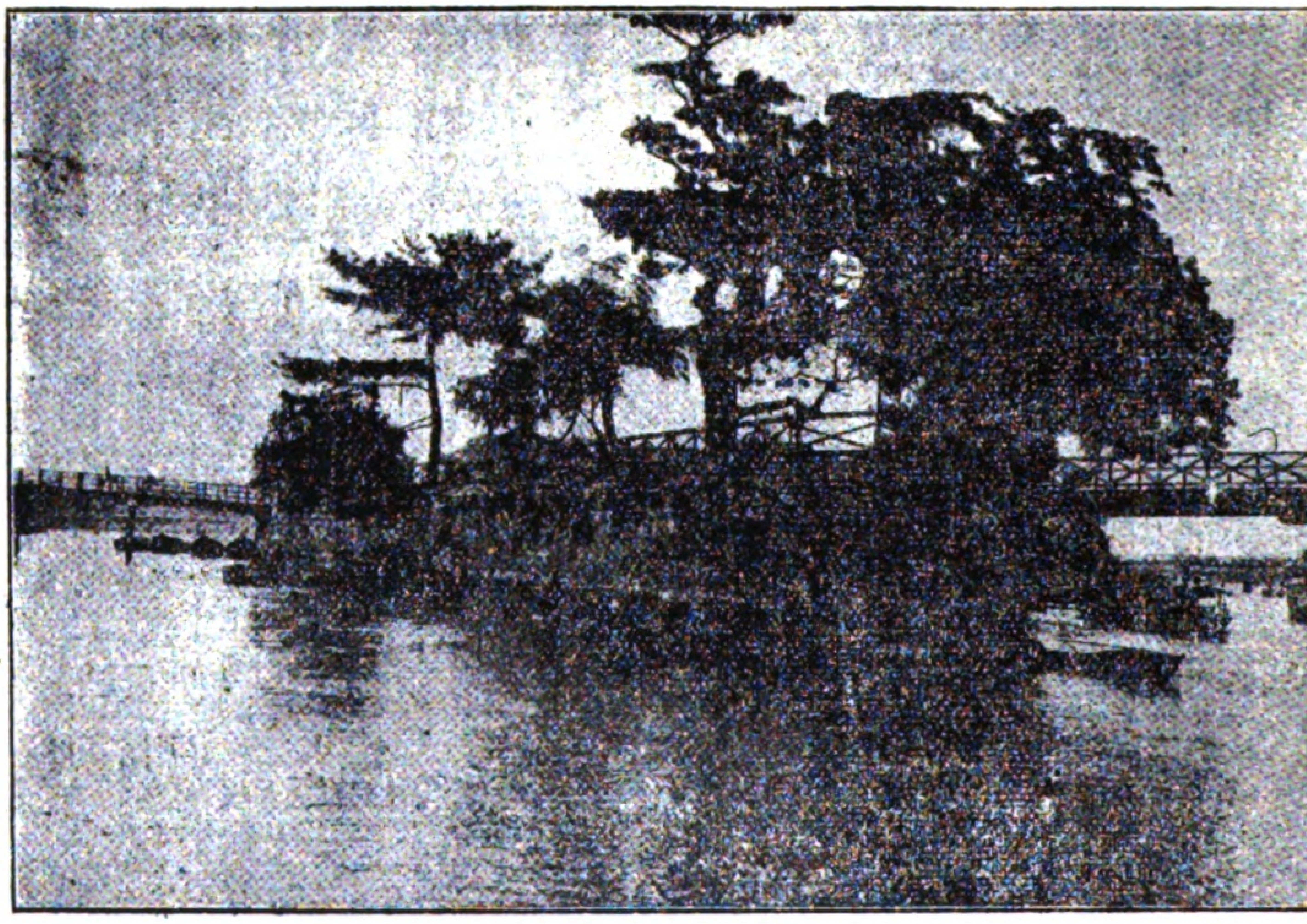


大阪天神橋の側面

其代りには道頓堀や千日前はいつ見ても幾千の人群をなし、四時たえまなく芝居や、興行物がかゝつて居つて、小僧さんや職人は殺風景な公園よりも皆申合せたやうにこゝに集まりますので、其にぎはしいこともまた全國第一でせう。殊に田舎者の眼をひくやうに、見た所きれいに價も安値な品が店に並べられて居ますから國への土産は是非此邊を見物し、こゝで求めるのでございます。其他生魂神社、高津の宮、四天王寺、茶臼山、眞田山、桃山味原池、産湯稲荷、などは歴史上名高うございますが中にも天滿天神樣は七月の二十五日に有名な舟祭があつて俗に之を天神祭と稱し當市第一のにぎはひです。

△雄大なる大阪城

大阪城は當時第四師團司令部がこゝに置かれ昔豊太閤がきづかれたと申す丈に中々見事な城でございます尤も天主閣は燒けたまゝではありますけれど、其址にのぼりましても大阪市は一望の中に見られます。頂上



大阪中ノ島公園

に達する途の左側にかの名高い金水の井と申のがあります。東の方を望めば生駒、六甲の連山巍峩として、三百年以前の歴史を語りがほにそびえ、百二十萬市民が明暮生命のつなとなるべき飲料水はこゝに貯水されてあります。今も昔も出舟入舟たえまなき淀川は、眼下に横りて、花の頃には泉布觀や、櫻の宮は殊に美しく、我國貨幣の製造元なる造幣局もこゝにあります。其他川と橋の多いこと、殊に四つ橋と稱して東西南北眞四角に一つ所に橋のあるなどは、此大阪ばかりでございませう。東京程にも急速の進歩は見ませぬが、それでも場末にまゐりますと先月通つた野原がもうちやんと七八軒も家がたつて、人がすんでるといふ有樣。聞いたことも見たこともない町が、整然といつの間にか出來てるといふのですもの。強ち薄情でなくとも、之では道を數へられないぢやありませんか。

△物價の大概

物價はお定りの都會丈に中々高價で、家賃なども年

年に上つてゆくといふ有樣、最初すまひました時六圓五十錢のものが次第に古くなるにも不拘、十年後の今日は十二圓になりましたが、それでも引越すよりは易いので御座います。なほ家を借りる時には敷金と稱して、家賃の二倍或は三倍のものを最初に家主に渡し置き、そうして出る時、即其家に最早すまはなくなつた時、假令一ケ月後でも十年以後でも其二割丈引かれて渡される習慣なのでございます。

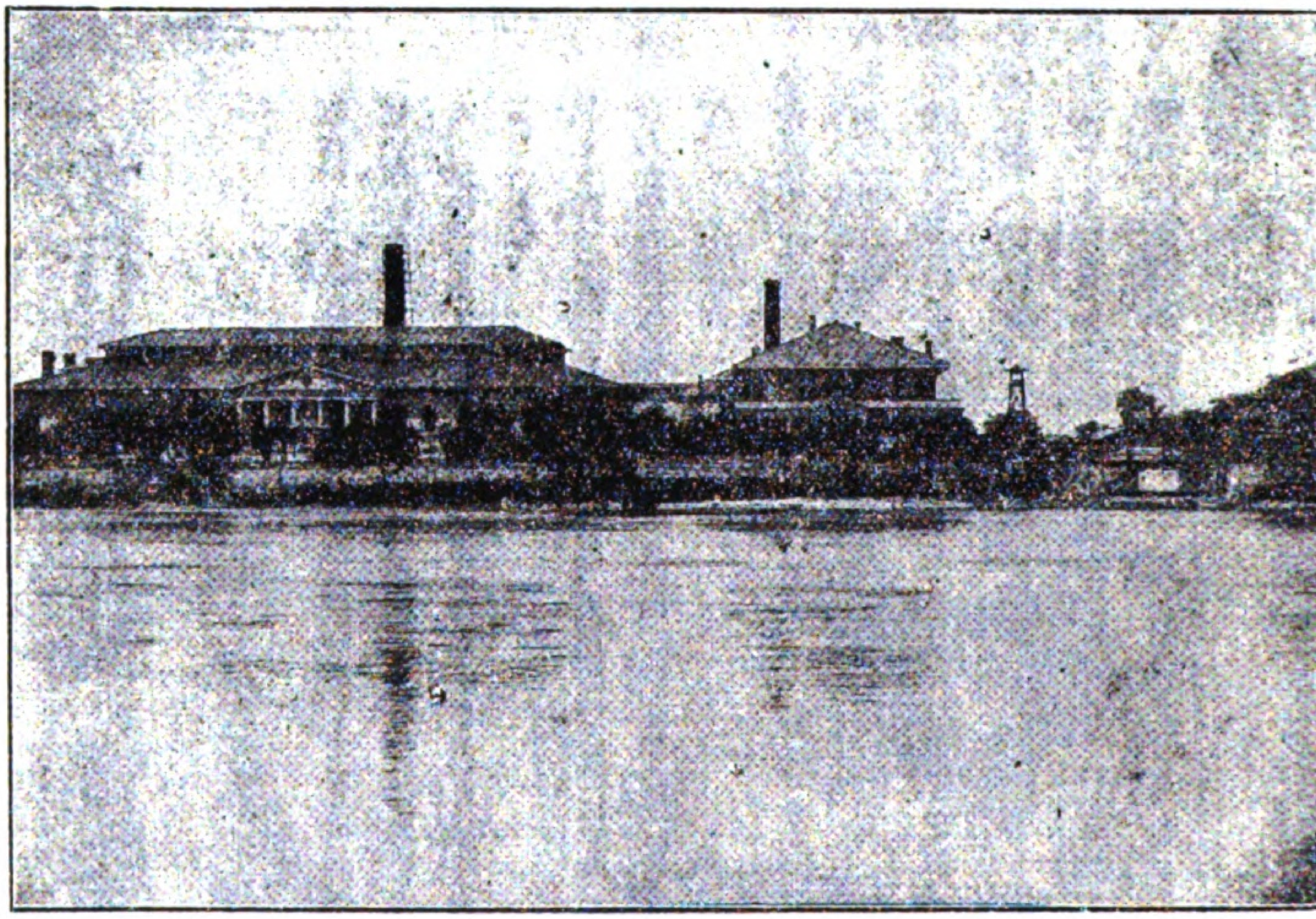
△煤烟の都

當地は四時たえまなき煤烟の爲め空氣不潔で、光線なども室内にはあまりあたらぬ風の建家ですから、呼吸器病の多いこと全國其比を見ないと申ほどで、之が即ち地方病と申てもよい位でございませう。それ故近頃は電車がしかれましたから、衛生に注意する人は南海線の住吉や、濱寺、又阪神線の西宮、尼崎あたりの海岸に住宅をかまへ、日々市内に出勤するといふ人が多くなりました。

△細民の多き都

大阪と申ます處は富豪も澤山ございますが、また細民の非常に多い所で、之はどの都會でも同じでせうけれど、殊に當地の細民はさすが商業地丈に、勞働よりもやはり僅かな資本でゝも商業をよろこぶといふ風ですから、あの緣日などは中々盛でございます。一ノ日は何丁と何町、二ノ日はどことといふ具合に場所は異つても殆ど毎日かゝしませぬ。雨天の日でさへなければ休みはないのでございます。

其賣る品はやはり他地方と同じやうに、ハミガキ、ヨージ、安價な小間物、またゑはがきといふものですが、一つこゝに奇習と申てもよいのは、風變りの瀬戸物屋です。元來商人といふものは腰の低い、お上手の一つもいひ、おじぎの五六遍もして、そうして客に愛嬌をふりまくといふのが普通ですのに、此瀬戸物屋ばかりはそうぢやありませぬ。其亂雜なる詞の使ひやう丸で貴重のものを非人にほどこしてやると申やうの態



大阪川口造幣局

度と詞で、そうして相當に賣上げ、又客もあやしまないのです。まあ早く申せば瀬戸物のくづ、即ち丸のゆがんだものとか、燒きずのあるものとかを、極めて易く買つて來て、それをまた一組二組と作り直し、そうして最初は尤も突飛な直段より初め、だん〳〵とせり下げるのです。其内に誰か買ふといへばそれであきないが出來たので、例へば尤も早口でかう申のです。

そうら買はんが〳〵〳〵くらわんか〳〵〳〵やすいぞ〳〵〳〵どんぶり鉢三つで五十錢、四十錢、三十錢、二十錢、十八錢、十五錢、十三錢、十二錢、之でもまだよう買はぬのか、しみつたれめ、そうら買はんか〳〵〳〵茶わん五人前三十錢、二十八錢、二十五錢、二十錢、十八錢

と申す風にそれが一二分間にしやべつて其品物をかんかんいはせる、其内客が自分の思ふ直で買ふといへば有がたうの一言もいふ所でなく、そら麥飯をくらへといふてなげ出します。併し來客用はとに角ふだんは安價でていさいがいゝ。即ち新らしいし、幾つわつてもしれてるものですから、假令くそみそにいはれてもそこがそれ利己心の強い大阪人ですから、其時丈いはれる位は何とも思はず買ふのですが、氣の早い江戸つ子てゝもあれば忽ちけんかゝ初まるかもしれませぬ。

女行商となつた私の實驗

柳井友子

私は姉と二人で出來るだけ、自分で勉强を致したさに、此樣しい面白い經驗を致して、見まして初めて精神さへあれば何事でも出來る、神樣は自から助ける者を必ず助けて下さると自信致したのでございます。

美しう降つて飾つた庭の雪景色を、御居間の火鉢に手をかざしながら女學世界を御覽遊ばす令孃方の御一讀を願ひ度いのであります。

あなた方には御氣も付かれませんでせうが、良人は某省の判任官、乃至高等文官受驗の目的で、私立中學の講師などをして御出になる方の奥樣方でも、理財の道に考へのある方は、內職に煙草店の一つも出して雜記帳や文房具を並べて、店番かた〴〵仕立物でもして、幾分の家計の助けとして居らるゝ方もありませう。

神田や本鄕邊りには御顏の美しいのを資本に、あたら娘に店番させてうるさく〳〵やつて來る淸國學生などを對手に、あらぬ噂さを立てられて、密行巡査の注意人物と視られる樣な方もあります。

それでさへ何程かの資本も入る、客を呼ぶに足るだけの親切丁寧、世辭愛嬌、それを無口でしかも無あい嬌ものゝ私が、無資本で化粧品の行商をしやうと思ひ立ちましたのでございます。

行商するにも其筋の許可がなければ出來ませんのをしらぬでもなかつたのでしたが、何しろそんな事をして居る暇も無い身の上、朝は早く起きて御飯炊きをして、弟を學校に出して置て、自分も仕度そこ〳〵某校の裁縫速成科へまゐりまして、午後二時頃に歸つてからほんの三時間か四時間の商ひなのでございます。

私の友人が緣付て居られる家の、極々懇意な化粧店へ、勿論保證金も入れずに無代で商品を借り出して、一圓に三割五分の利益を貰ふ約束にして下さつたので來る日曜日から始めて見る手筈に致しました。

實は私は女子の最高學校を卒業して、種々なる家庭

の事情から、今では危ふい處をきり拔けて、弟と二人自炊生活を致して居るのでございます。

箱は巾一尺に長さ一尺三寸位のものへ、石鹼、洗粉、齒みがき、おしろい、種々な化粧水糸類等を入れまして、荷ごしらへが出來上りましたのを、枕元へ置て明日の事などを想像しながら、弟の心配致すのをさけるため、餘りそんな向の話しをよして平氣な風で床に入りましたが、なかなかにいろんな事を思ひ出し考へては眠りもやらず、いたずらに更け行く冬の夜の寒さが身にしむ頃、うと／＼とねむりましたが、五時頃に起き出まして即席の朝御飯、輕便みそに食パンといふ珍な取り合せですませて、それぢや行つて來ませうと出かけました。



△初日の經驗

學校へ行くのにいつも大きな荷物を持ちつけて居るので、別に重くも何ともない、足は小石川雜司ヶ谷の方に向

いて居る。

それと見た車夫は姐さん參りませうとうるさく痕いて來る。支那人の呉服屋ぢやあるまいし、今日店せ初めの貧書生が、車に乘る筈もないのにと、獨りでをかしくなる目白坂を登らずに音羽の通りを護國寺へまつすぐに行つてしまつた。

扨何といつて入ろうかとしばしためらつて居る内に犬に吠へ付かれたり、いやな顏して巡行の巡査に立留まられたりして、やつと入り込んだあるお邸。御免下さいと訪づれると客人と思つたか、廂髮の令孃がしとやかに障子を開かれた。

私は苦學生ですがどうぞお化粧品を何か御求め下さいましと頭を下げる間もなく、何ともいはずに令孃は奥へ行かれると、どや〳〵と走つて出て來たのは十歳位いの坊ちやんが二人、竹切れを持つて私の前に立はだかつて、

貴樣何だい、早く歸れ、うちぢや何も買つてやらないよ、出て行かなきやこれで打つぞつと威勢を示す。

これは一寸有名な某私立大學の先生の御宅の出來事。美事初陣に失敗を取つたけれども、これで少々其味が分かつた樣な氣がするので、情け無いとみれんにも出て來る心を奥齒でかみしめて、新建ての大きな家へ入つた。何だか妙に油嗅いと思つて見ると、清國廣東省陳某と支那人の名刺が泥になつて落ちて居る、して見ると支那人の住居か、何しろ御免下さいといふと、のつぽうなのが一人出て來て、來意を聞て奥に入つたと思ふと、ちんぷんかんぷんさつぱり分からぬ事をしやべりながら、三人程雲つく大男が出て來ました。

私の箱を我物顏にひつくりかへして見て居ましたがスワン石鹼を五個と、ライオン齒みがきを大袋五つを買つてくれたのはよいが、直下げの談判には實に閉口しました。

先刻からにや〳〵と笑つて居た一人は、そつと私しの手に紙片を握らせた、何氣なく見ると。

「日本の令孃苦學同情に堪へず、我等同國の學生數名自炊生活をなして、早稻田に學ぶ、貴孃來たつて薪炊

の勞を取らば、月給五圓を呈すべし」と書いてあつた。
親切氣に見せて處女を弄するといふ事は知つて居たが、自分に迄失敬千萬と思つたが、何の氣も無い風でさつさと出て行きました。
高田豐川町の通りへ出て二三軒御用を聞て見ましたが、ろくに返事もして與れませぬ。「忙がしいよ、また出直して御出な」などゝお三どんに尻目にかけられたり、煙草屋のお神さんが店に居るのを見かけて入ると、買ひに來たと思つたか、いらつしやいといつたのに、自分の來意をきいて急に顏色をかへて、今日はまあいらないよ、とすましたのもをかしく感じた。
學習院前から目白停車場の横を通つて田舍道へ出て盲目めつぽうに百姓家を訪づれたが、幸ひに足に皸の出來た村娘やお嫁さん達がクラブ洗粉を求めてくれて時々來なさるがいゝといつてくれたのは、しみ〴〵うれしく思つた、人の同情に泣くの味は却つて此邊にあるのでした。一圓三十錢ばかりの商ひをしたが、歸途は大塚の方に出て、旭看護婦會といふ札のかけられた家へ入つた。
「苦學生ですつて大に同情を表す可きだわ」と面白氣に笑つて出て來た肥滿した人の紹介で、レートを三本と一瓶三十五錢の香水二本を賣つて、犬も歩けば棒に當るの例へ、初めての經驗では比較的に賣れ高の多い樣なうれしい氣がして、總賣上二圓八十錢程の內から一圓ばかりの配當を得て、歸るこれが私の行商生活の第一日。

△二日目の經驗

姉さんは疲れたんでせう、僕が茶を沸かすからといふ弟を無理にねかして、朝の御飯こしらへにかゝる。空合がどうも惡い、今日の行商は駄目かしらと思はれました。此家のお神さんはまだ此事を知らぬので、御苦勞ですね晝からのご勉强が此節始まりましたかなどゝ不審さうに問ふ。別にきかせて惡くも無いが、話さねばならぬ事もないから、よい加减にいつて机と食

卓袱用の飯臺の上へ醬油と煮豆の皿を並べて、今日も天氣だつたら出て行くから、晩の御飯を待たないでお上りといつて置く。

二時頃から例の荷物をさげて傳通院前から、富坂をだら〳〵と下りる、小石川行と本鄕行電車の交叉點に三十位の女が報知の夕刊と聲を限りに呼んで居る。留まつた電車から頭を出した紳士は、此女の新聞を受け取つて金を拂はぬ前に、電車が動き出した、女は驚ろいて駈け出す。待ち合せの群衆ははやし立てる。

女は脛もあらはに小半町も走る。無禮な紳士は此わづかの間に無代でよみ終つたか、ひら〳〵と窓から新聞を投げ出した。

實に慘酷な事をする人もあるもの、女の身空で新聞賣子と迄成り下つた不幸な女に、私は同情の念に堪へませんでした。讃美歌の、

花散り失せては新にうられ、家まづしければ人に捨てらるとはしみ〴〵よくつゞつたものと思はれる。

元町邊で二軒ばかり入つたけれ共、用は無いよ、また此次ぎになど〻斷わられるばかりでした。道を換へて小石川の指ヶ谷町の方に行く。格子の內に女靴が四足ばかり脫ぎ捨てられてあるのを見て、御免下さいましと入り込みました。

山出し然とした下女が出て來たので「私は苦學生ですがお孃樣方に何か御求めを願つて下さいまし」と賴みこんだ。下女が奥に行つて間も無く「苦學生なんて氣の毒ですわね何か買つて上げませうよ」など〻話しながら、袴の儘で出て來た丸顏の一人、御園おしろいがあつて、私しレートにしやう、小町かたんは無いこと、など〻いろ〳〵と注文をうけて、幸ひと五十錢餘りの商ひをして出ましたが。後できけば某裁縫學校の生徒が合宿をして居る家であつた。

原町の方へ行かうとしてる道で、小說家の大塚楠緒さんが、派手な紋お召の羽織に束髮で、供の下女に包みを持たせて御出でになるのを見うけた。

廿二三の奥樣が坊ちやんをおんぶして、木戸に立つて夫のお歸りお出迎ひ方々のお守りと見うけた。

一寸頭を下げて小間物の御用はと處撰らまずの商賣人になつた。

そうだね白い絹糸を持つて居るのと御用命があつたがおあいにく樣でした。

竹垣の門構への家に入らうと思つて、何氣なしに表札を見ると、醫學士井村某としてある。



同級だつた井村さんは御養子と共に本郷邊にお住居とほのかに聞いたのは此家かしらと思ふと、妙に氣がさして入りも得ず足早やに通り過した。

天氣のせいかいやにうす暗くて、ぼつ〴〵燈をつけた家も見える、もう一、二と思ふ内に知名な大

學教授の御邸の前に來たので、内玄關の方から伺がつて此御家で一包五錢の針を二包と、小町かたん二箱、下女らしい人がゐづゝ香油を買つて呉れました。

だん／＼と慾がさすといふものか、景氣づくともう一軒といふ氣になつて、冠木門の家へ入つて、門内で遊んで居られたお下げの嬢樣に『何か小間物の御用は御あり遊ばしませんか、どうぞお母樣に御伺ひ遊ばして下さい』と丁寧に腰を下した。しばらくすると十六歳位の令嬢と共に、出て來られて二錢銅貨一つを投げる樣にして渡された。

大方私しを物貰ひの女乞食と奥で御覽にならぬ奥樣が解釋されたのであらう。

決して立腹はせぬが、行商すればいろんな目に逢ふものと思はれる。私はお金を頂戴に上つたのではございませんと、其二錢を返してまた上りますと出て行く私しを不思議さうに見て居られる。門に出るとワンと一聲犬に吠へ付かれてびつくりする。今日は一圓程であつたけれ共三十五錢の配當を得て七時頃に歸つた。

親切な弟はもう茶をたぎらせて待つて居てくれたのみならず、姉さん僕は何にもいはぬ、たゞ／＼感謝の二字あるばかりです、どうぞ數年先を樂しんで今の苦勞を忘れて下さいと涙さへ含んだ目に、決心を表して私の顏を見上げました。

又何を思ひ出してそんな事をいふのです、お前は精出して自分の勉强をすればよいのですから、決して餘計な事を考へてはいけませんよと心つよくいつたけれども私は何とも申せぬ感じが致しました。

父が事業の失敗、兄の戰死、一家の離散、家財も狼の樣な冷酷な伯父の手によつて傾いてしまふ、あゝたつた一日か二日の經驗ではあるけれども、渡る浮世に鬼は無いの例へ、無資本な、しかも勉强片手の不馴れな仕事ではあるけれ共、國元には病身ながらも數年後の歸國を樂しみにわびしく暮して居らるゝ母上がある身體精神共に强健な弟がある、何も此世に不足は無いのである。世の中にはまだ／＼不幸な人は幾人もあるものを明日は青山の方へいつて見る事として其れ／＼品を取り揃へて床に就いたのは十一時過ぎでした。

さまざまの家庭衛生

種痘の心得

昨年の四月に改正になつた種痘法は本年の一月一日から施行されてゐるが、從來の規則よりも大層難かしくて、迂かりして居ると罰金を食はねばならぬから、大切な箇條を左に記して見ませう。

◎第一期種痘

一番最初の種痘は、子供の生れた翌年の六月までに、市區町村長から種痘の期日を指定する筈になつて居りますが可成ならば生後百日目位に、近所の醫者に其ういつて植ゑて貰ふやうにする方が、子供のためには安全で、遲くとも指定期日までには假令市區町村長から知らせがなくても植ゑて置かねばなりません。

◎第二期種痘

夫から二度目の種痘は、數へ年の十歳になつた六月までに、これも知らせがなくても植ゑて置かねばなりません、



其うして第一期、第二期とも醫者なり吏員なりから見せに來いと言はれた日に連れて行つて檢診を受けて種痘濟の證書を貰つて大切に保存をして置かねばなりません。又市區町村長から指定されるまでに、自分で醫者に植ゑて貰つた時には、善感ても不善感くても種痘をしたといふ證書を貰つて、之を市町村役場に屆出ねばなりません。

◎事故が有つた時

病氣其の他の事故で指定期日までに種痘することが出來ぬ時は、其の理由を市町村長に屆出た上、猶豫證といふものを貰ひ、猶豫期間が過ぎてから三十日以内に受ける手續もあります、又第一期の種痘が不善感かつた時は、翌年の六月までに、更に植ゑなほして貰はねばなりません。

◎監督者の義務

學校、育兒院等の生徒や又教育、監護等のため自分の宅に預つて居る未成年者及び小僧、下婢、子守等の雇人が、數へ年十歳になつた時は、其の監督者や雇主は第二期の種痘を受けさせるか、又は保護者に督促して種痘の義務を終へさせるやうにせねばならぬ、尙是等のものを新に入院させたり雇入たりするときには、種痘が濟んで居るか否か

を最初に調べて、若し濟んで居なかつたら、六箇月以内に必ずさせるやうにしなければなりません、夫れが二十歳以上のものならば雇主に責任はないが、二十歳以下のもので其の手續を怠つて居ると、雇主が罰金を科せられます、多數の工女を雇入れる紡績會社などは餘程注意して居らぬと手ぬかりが出來ます。

◎證書の提示

種痘證は大切に保存して置いて、市町村吏員、衛生官吏警察官吏などに見せろと言はれた時には、何時でも見せなければならぬ、若し紛失をしたときには市町村長から證明を貰つて置くが宜しい。

◎舊法と新法

改正前の種痘規則によつて種痘を受けたものは、七歳までに種痘を受けたといふことが確に證明されゝば、第一期を終つたものと看做されます、それで十歳になつた時に第二期の種痘を受ければ宜しい、夫から八歳後に受けて居るものは第二期を終つたものと看做されますから、改正規則によつて改めて受けるには及びません。



小兒の感冒豫防

◎朝夕の外出は禁物

近頃大分小兒の氣管支病に罹る者が多くなつたが、既に罹つた者は手後れせぬやう醫療を受くるが肝腎であるし、一般家庭の注意としては感冒に罹らぬ豫防手當が何より必要である　生後五六ヶ月位の幼兒ならば、戶外に出さずに置くがよろしい、二三歳から六七歳に至る小兒でも、朝早くと夕暮頃からは外出は禁物である、夏時ならば兎も角も、冬空に六七時乃至八九時頃の冷たい空氣に當るのは却つて毒となる、總じて日本作りの建物は通氣の工合が惡いから、故らに幼兒を戶外に負ひ出すには及ばない、七八歳の健全な小兒でも、午前の十一時から午後の二時に至る暖かい時間を除くの前後は外出無用である。

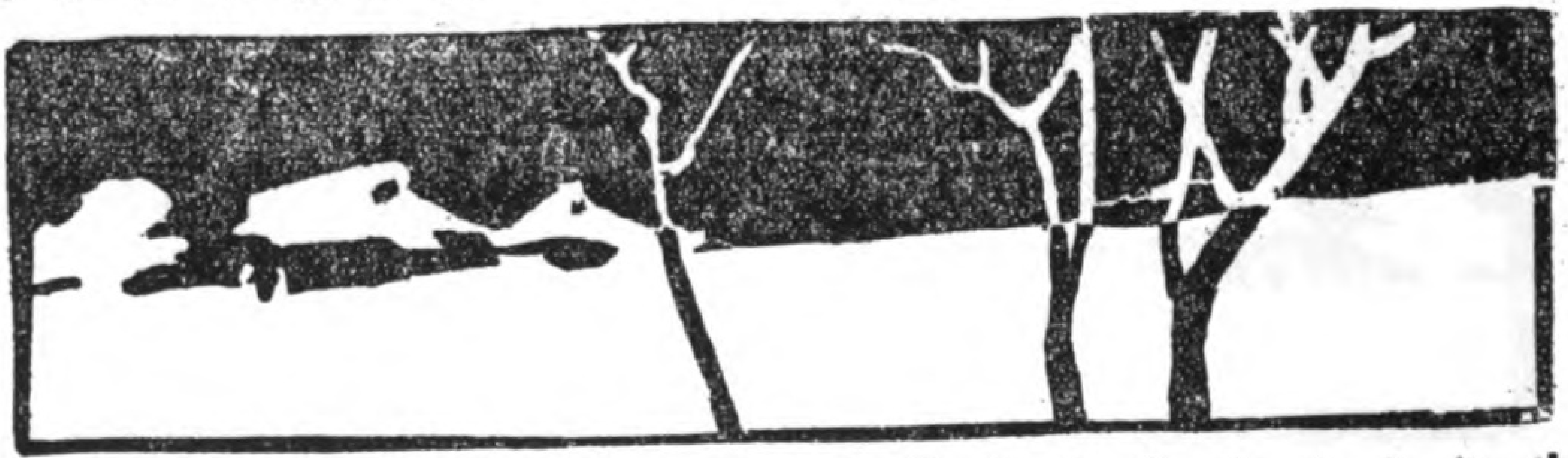
◎衣服寢具等の注意

何でも澤山に重ね着さすのが小兒の爲めになると心得て襦袢に綿入の三四枚も着せて、其の上に股引を穿かせ、襟卷をさせると云ふ風は強ち珍らしくない、甚だしいのは寢かして置く時迄矢張り股引綿入に身を包んで、其れで小

兒の爲めに親切であると誤つて居る父母もある、小兒の日中着は襦袢一枚綿入二枚とし、寒い時には綿入羽織を重ねて遣り、寢衣としては冬はフランネルの襦袢一枚、夏は木綿の單衣一枚と決めてよろしい、一體東京附近の氣候では、小兒に襟卷、襯衣、股引等の必要はない、寢衣を二枚も三枚も纒はせて厚い重い夜具の中に寢かすのは、安眠にも害になり、夜中蒲團を轉げ出す虞れもあつて、却て感冒に罹らせる機會を作ることがある、寢衣も夜具も成る可く暖い身輕い物を用ゐて、小兒の安眠に便するが好い、夜間股引足袋の儘に寢かして置くが如きは以ての外なる誤りである、大人小兒を問はず暖い所から寒い所に急に變する場合は感冒に罹り易いのである。

◎入浴後の注意

小兒を毎日〳〵風呂に入れる習慣の家庭もあるが、身體の淸潔を保つて遣る爲めなら其樣な必要はない、子供の入浴は一週二回とし、腰卷は入浴の都度即ち一週二回洗濯したのと取替へ、襦袢は一週一回同じく洗濯したのと着替へさせるが、之れで立流に淸潔も保たれ、健康も保もたれて居る、未だ襁褓を用ゐて居て時々股間腰部などを汚くする時代でも、湯に入れた軟い布片類で丁寧に拭つて遣



り、濕氣を悉皆と取つて置けば、必ずしも毎日〳〵湯に入れず共よろしい、入浴後は俄かに體熱が蒸發するので、動もすれば感冒に罹り易いから小兒の爲には寢る前に入浴させるのが一番安全であるが、若し其の他に入浴させた場合は綿入れの一枚位餘計に着せて置かねと好けない、小兒を錢湯へ連れて行く家庭に於ては、浴後歸宅迄の間に充分なる注意を拂ひ、自身の温かさに取り紛れて小兒に滿着をさせたり風に當てたりしてはならないし、又何れの場合を問はず湯を使はせた時は濕氣を悉皆と拭き取ることを忘れてはならぬ。(瀨川醫學博士)

婦人の病氣と貧血

◎婦人萬病の基

婦人の最も罹り易き肺結核、萎黃病、消化器病、呼吸器病、神經病、心臟病、腎臟病等は殆ど悉く貧血に基くと云ふも可なり、此貧血は統計によれば婦人十三四歲より廿歲迄の間に最も起し易く、同年頃の男子の貧血症が百人中九人六分なるに對して、女子は十六人六分の割なり、此年頃は婦人に於ては發育最盛の時代なると同時に又此貧

血に基く諸病に最も罹り易き時代にして、即ち又婦人の最も病氣多き時代なり、尙姙娠及び出産の爲にも往々にして貧血を起す、隨つて又姙娠若くは産前産後に貧血に基く前記諸病に罹る婦人亦尠からず。

◎肺結核と婦人

十五六歳より廿歳位迄の若き婦人に肺結核の多數なるには實に驚くべきものあり、統計に據つて男女の肺結核に罹る者を年齡別にして見るに、十五歳迄は男女共極めて尠なく、且つ殆んど同數なるも、廿歳以上四五十歳迄は男子に罹る多數にて、婦人は何時も男子より少く、老いたる婦人は殆んど肺結核に罹るゝ者無きに至る、然るに夫にも拘はらず十五歳より廿歳迄の婦人と男子を比較すれば、全く正反對の結果を示して、男子は十萬人中十九人なるに對して婦人よりは實に十萬人中百十五人の多數なる肺結核患者を出す、獨り此の五年間に於て斯くも法外多數の肺結核患者を出すは、實に此時代の婦人に貧血を起す者多きに據る。

◎其他の諸病と婦人

年齡に據つて差別すれば、一般に若き婦人の罹る病氣は右の肺結核の外は、第一に消化器病、呼吸器病、神經病、



皮膚病、傳染病、と云ふ順序にて、之を同齡の男子に比較すれば、消化器病患者は男子の三倍、神經病は男子の四倍、傳染病は男子に比すれば三倍もあり、是等孰れも原因は貧血なり、女中、料理屋の仲居、商店の女賣子、女工等に就て見るに、是等にも貧血を惹ふる者實に多く、夫れより萎黄病、消化器病、呼吸器病、皮膚病等を惹起すもの多く、統計に據るに實に百人中三十人の多數に及ぶ、其中貧血より直ちに來る萎黄病の如きは、商店勧工場の女賣子等に最も多し、是等の婦人の貧血を起す原因は、勞働時間の過多なる事、立つて居る事、飯を搔込む事、居所の不良、營養の不良等是なり。

◎婦人と長壽者

されど長命者は婦人に多しとて、婦人の健康男子に勝るとは云ひ難し、統計に據るに、若き婦人は若き男子に比するに病氣に對する抵抗力は非常に強し、されど一度病氣に罹れば臥床日數は同年頃の男子より多く、又其病氣の爲死する事も男子より多し、是は若き婦人は長く臥床せざるを得ざる病氣に罹り易く、之に反して男子の罹る病氣には臥床久しきを要せざる者多きに據る、左れど四十歳より五十歳位に及べば、婦人は男子よりも病氣に罹る事も死亡する

事も少くなり、斯くて老年に及ぶが故に、隨つて婦人に長命者多く、爲に一見婦人の方が健康勝れ居る如く見ゆるにて、婦人が元來男子より健康勝れ居る譯には非ざるなり、故に婦人にして長壽者たらんとせば、若き時充分に注意して貧血を起さぬ樣にし、四五十歳の時更に健康に注意すれば、百歳は愚か、二百三百迄も長命疑あるべからず。(富士川ドクトル)

痲痺症の手當

◎しびれの溫浴療治

一寸した血液の不循環から發る俗に所謂しびら位の痲痺なれば、別に看護の必要もないが、痲痺には隨分重症の者が多い、而して腦脊髓病、神經病、毒あたり等の諸原因に分れてあるから、何も角も同じ療法を施す譯には行かないが、槪して痲痺性に通有的に効能のあるのは溫浴である、其の注意としては餘り熱からぬやう攝氏の廿六度乃至三十度位として、一日一回乃至二回十分間から十五分間位の入浴に止めることである、症に依ては冷水浴、冷水灌漑、按摩などもよろしいが、之れは醫士の指圖を受く可きである、此の症の患者は得て按摩を欲しがるが普通であるが



腦溢血や脊髓痨から來た病症に無暗と按摩や其の他の運動法を施こそうものなら其れこそ危險である、飲食物としては酒、煙草、芥子、胡椒、珈琲等の刺戟性のものは小量と雖能くは無く、又た同じ肉類魚類でも精分の強いものは避くるが好い、便の結するのは害になるから、尠く共一日一度は屹度排便のつくやうに心掛け、尙ほ自然排泄の行はれない場合は灌腸を施すがよい。

◎迷信療法の作用

凡て痲痺症は治療に長日月を要する爲め患者に飽きが生じていろ〱と氣を揉み出すことになり、例の迷信が其の間に乘じて來て、何の家傳とか、何の妙法とかに引込まれ、相當の見識ある人士でも赤い粉末を塗つたり、青い水を飲んだりするやうになるが、之れは甚だ遺憾千萬な次第である、ヒステリーから起つた患者で、半年も一年も坐わつたり寢たりした切りで、一歩も歩るくことの出來ない患者では、精密な診察を施した上、「貴女に歩るけない譯はない」と云つて能く其の理由を説明して遣つて、「さあお歩るきなさい」と勵ますと、ひよろ〱歩るき出す場合は常にあることで、患者中には唯感應丈けで治る者がある、即ち醫學上から見て無効な粉末や水で治る位の病氣は、醫

師の一言の說明で治る可き苦であつて、粉末の爲め水の爲めに治るのではない、一時獨逸に行はれた金屬療法の末路に考へても此の邊の消息が詳かに解することができる。

嬰兒の冬季衞生

◎生後六十日間は外出無用

赤兒が生れて三十日若しくは三十一日經つと、御宮詣りをさせる、それが爲めに發熱したり風を引いて肺炎、氣管支加答兒を起す例は度々目擊する。近頃は一般に衞生思想が發達して、小兒の守るべき攝生など大抵は御承知ですが、此お宮詣と云ふことはまだ盛に行はれて居るやうだ、これは一方から言へば美いとでも、小兒の衞生上から申せば大に注意しなければならぬ、小兒が生るれば氏神に參詣させるはよいとしても親類を車で押廻はるなどは絕對に止めてほしい、赤兒が外出して差支ないのは六十日後で、其前に赤兒を連れて他へ參り珍らしい愛らしいと云つて彼方でも此方でも抱き廻はすのは、其體を薄弱にする恐れがある、殊に冬六十日以內の外出は危險である、六十日後になれば晴天の日に午前十時より午後三時頃までなれば卻て皮膚を强固にし、健康を增進致す、單に赤兒のみならず小兒は夜間の外出、多人數集合の場所に小兒を連れて往くことは氣を附けなければならぬ、殊に塵埃の多い乾燥せる空氣を呼吸すると、それが爲め鼻の腫れる病氣を起し或は咽喉加答兒、氣管支加答兒、肺炎、實扶垤里亞等を惹起すから、母親は其愛兒の爲めに自己の欲望を犧牲にする覺悟がなければならぬ。



◎いくら寒いからとて炬燵は嚴禁せねばなりません炭火からは絕えず有害な瓦斯が出て居ますから至極不衞生なものです赤坊を寢かす前に湯タンポを夜具の中に入れ豫め溫めて置いて寢かせば充分だと思ひます、赤坊の寢卷は假令赤坊が夜具から飛出しても風邪を引かぬ丈けに着せて置かればならない醫學上では春夏秋冬を通じて赤坊には大人よりも袷一枚丈け多く着せるのが原則と言つて宜しい。

◎赤坊は風の強い日とか夜分とかには成可く外へ連れて出ないやうにしなければなりません。然し學校通ひを初めた子供などは最早や一通身體も定つて來たのですから隨分薄着もさして見ればならぬ、寒風にも吹かれて見なければ卻つて弱々しい人間が出來上ることになります。

奥様の手控帳

外交官の夫人

雪の下

五十有七のクラスメートの、羨望の的となつて、天晴れ名譽ある外交官の令夫人となりましたのは、たつた二ヶ月前、まう初物の裏珍らしい頃であつた、ゆくては遠き外國の、海のあなたのはるけき國へ、凛々しい夫に伴はれ、多くの人に見送られて横濱港を出帆する時の嬉しさ、滿足と誇とに胸は充たされ、生れてはじめての愉快であつた、然し漸次遠ざかりゆく波止場、うすくなり行くお母様のお顔お姿、さすがに涙のさしぐまれて、「そんな氣の弱いことではどうする」と、お笑ひ遊ばしたのは、忘れもせぬ背の君、それでもすつかりこちらへ來てしまへば、又氣も變り、毎日のつとめに逐はれて此節では、まうかへりたいとも淋しいとも思はない、………それにしても案じるより産むが安いとは、私の語學のことであらう、知らないつてもそれは〳〵情ないほどわからなかつて、是では交際場裡にたつてどうしてと、其心もとなさつたら一通りではなかつた、いつその事日本にゐのこり一年許り空閨を守つて、專心語學を修業しやうかとも思つたけれど、新婚早々それもいやであるし、「どうでもなるよ」と賴める人の言の葉に、自分でもまたどうかならうなど、、雲をつかむ様な考をもつて當地へ來たのであるが、——勿論、直ぐから教師を招聘して、毎日非常に勉強してはゐる——當座こそ、總べての用を啞聾様、手眞似で辨じる有様であつたけれど、それはほんの束の間、見なれ聞きなれ覺えては、此節ではさした不自由も感じない、

毎朝六時半の起牀、食事は三度とも洋食（時々米飯にお刺身が食べてみたいと思ふけれど）八時には背の君の御出勤、各室内の裝飾を終つた頃に美顏術の技師が來る、直ちに施術にとりかゝる眼の色にまで流行があつて、眼球へ注射するといつたけれど、そればかりは何となく氣味がわるく、恐ろしくて中止、手指の爪まで美しく彩色して、全く終つたのは二時間の後であつた、潔き茶の洋裝に着かへて午餐までをピヤノによる、午後一時フレンチの教師來る　前回の練習及び次の五頁習つて終り、あと一時間は獨習（三時より再び容儀を整へて背をたき御歸宅をまつ、）其間なつかしき故國の雜誌女學世界を讀む）四時には決まつた様に御歸宅、お出迎へ申して帽子外套を侍女に渡し、お居間へ伴ひお召がへ、かれて用意の珈琲お菓子に、留守中の出來事、語學の難易などお胸の擧かぬほどにお話申上げ、やがて樂しき晩餐に終日のうさをはらし、打連れて公園に自轉車の稽古、米月を踏んで家

に歸れば、戀しい袂より故里の愛しい便り、返事は明日にまはして十時には必ず床につく。

大名華族の奥方

御前樣はまだお目覺遊ばさない、今朝は大層よく御睡眠遊ばすこと、……昨日の御運動が少し過ぎたのではないかしら、だからお止め申したのだけれど……心配でたまらないのでソット又お枕下へ伺つて見る、何がお夢に入つたのやら穩かな微笑がお顔に上つてゐる、あゝ嬉しい、此御樣子ならおわるいのではあるまいと、ヤツト胸なでおろしてゐた處へやす（老女）が來て御飯といふ、お疲れの處をお驚かせ申すでもないと、音せぬ樣に次の室へ出て、一人で朝餐の牛乳とパンを頂く、やすの面白い話や、宿の下婢のをかしい言葉づかひに、淋しいことはなかつたけれど、なほ物足らぬ心地がした。

琴子樣からお端書が來た「ホネムーンのお樂しみ一羽島の到底想像もつき申さず候」と、かたばみつなぎのハートの中に、相變らずおもしろいことばかりおつしやること、御前樣のおひやかしにあはない内にと、急いで信玄袋に入れる。

御目ざめまでと思つてたつ（小間使）をつれて海岸まで散歩、都風の珍らしくてか、方々で指をさし何かさゞめいてはあとをゾロゾロつき歩く。

よせてはかへす大濤、パツト散る濤の白花、氣もひろ〳〵と塵外のすが〳〵しく、いつまでも歸りを忘れて濱を歩いてゐた、吉木（家從）の迎に驚いて歸る。

今日は箱根へ上ると仰せになる、例によりてお徒歩にてかとお伺ひ申せば、勿論とのこと、困つたとは思ひながらも、そんな我儘も口へは出せず、さりとてお留守居して一人宿に、ポツネンとしてゐるのも面白がられねば、詮方なくお供申す、我ながら驚くばかりの甲斐〳〵しきいでだち、御前樣御覽遊ばして薙刀はなきかとお笑ひ遊ばす、吉木とたつの二人をつれて都合四人、金剛杖を便りに關門に入る、はじめのほどは道も平坦、かつは足も新らしければ、さまで苦しいとも感じなかつたけれど、一里ばかりも上つたと思ふ頃から、足は漸次に疲れてくる、道はいよ〳〵險嶇となつて、息はせはしく動悸高く、一歩二歩と遲れ勝になつた、たつが見かねて吉木にそれといふ、吉木は狼狽へて御前樣へ申上げ、少しお休息遊ばす樣にとお勸め申上げた樣子であるが、なか〳〵御聞入がなく、ドン〳〵お先へお出遊ばす、私もなるべくと思つて一生懸命歩いたけれど、もう一歩も進めなくなつた、息もたえ〴〵蒼白い顔をして、其處へ坐りこんだ、吉木もたつも吃驚して大騷ぎ、それお水、それ仁丹と、ベタ〳〵するので御前樣も何事が起つたのかと後戻り遊ばして、お氣づかひ下さる、ここだと思つたか吉木が、恐る〳〵「御前樣けふはどうか此まゝで

御歸宿をお願申上げます、お奥様をおつれ遊ばして御徒歩などは全く御無理と存じます、殊に此險阻な峠を……相すみませぬが、どうかおかへりのほどを幾重にも御願ひ申上げます、」ヒョコ／＼頭を下げる、御前様はいやなお顔を遊ばして、「困るなあそんな事をいつたつて、僕はいくよ、どうでもいくよ、奥はそんなに苦しければ歸ればよろしい、駕籠でも雇つて……僕まで其お供をするには及ばぬ、」「恐れ入りますがお奥様はたつ一人つけておかへし申す譯にはまゐりませぬから……」「汝も一緒にお供をすればいゝぢやあないか、何に僕は一人でいつてくる、けつく氣樂でよいからら……いゝといへば、面倒だなあついてこなくてもいゝよ、是非僕はいくから」いろ／＼に申上げて、お歸宿を懇請したけれど、お聞入がないので、吉木も今は是非なしと思つたか、二三町先へいつて駕籠を呼び、別に附添の屈強な男を雇ひそへてつれて來た。「大切にせよ」「お大切に遊ばせ」の御前様と吉木の言葉をあとに心細くも坂を下つた、直ちに床をのべさせ横になつた、

御前様はほんとうに御親切に遊ばすけれど……氣に懸るのはあまり御變窟でお出遊ばすので、御自分でお思ひ立のことは是が非でもやり通すといふ御氣象、今日なども矢張り其例、或方面からいへばそれもまことに結構で、男らしくておよろしいけれど、萬一事があの通りでは何となくゆく末々が案じられる、こんど東京へかへつたらばお奥のこと、一切改良しなければならないと、かくもしかうもせんと心に描いて、其來る日を樂しみにまつてゐるに、もしや今日の通りに何事もお聞入がなかつたらば、……あゝどうしやう、考へるほど心もとなくて、思はず涙を袖に覆ふた、

醫學士の奥様

昨晩二度も遠藤さんから呼びに來たので、いよ／＼床についたのは夜明の四時、もう眠つてはならないと思つたけれど、……ウトウトして今朝は大朝寢、御飯をすましたらばもう九時半、お玄關の方にはもう患者が大勢押しかけてゐる様子、小兒の泣き聲、岡本（書生）が例のうまい世辭、太田（代診）の面白さうな笑聲などが手にとる様に頻りに聞える、

新聞を御覧になつてゐる處へ富田（書生）が來て、「先生患者がきました、新患者が二名、それから遠藤さんからお藥をとりに來てゐますが、前法でよろしうございますか」「ハイハイ」急いで列薦布算をもつてくる、それを御覧になつて「ウン前法でいゝだらう、それに座藥を添へてやつてくれ、今直ぐ行くから」富田が下つてから約三十分位、新聞を御覧遊ばして診察所の方へ御出まし、はつ（小間使）を對手に後片付をして、夜具を乾燥物干へ出し、シーツをとつて洗濯屋へやり、寢衣も一切洗濯をいひつける、今日は便所の消毒日、ホルマリンの匂がプン／＼通ふて來る、又澤山黴いたのだらう、一寸檢査して來る、旦那様へ珈琲を差上げて御書

飯のライスカレーのお加減をみに臺所へ出る。

此前のはカレーがきゝ過ぎたとおつしやつたから、今日は少し量を減じた、御飯の出來も丁度よかつた樣で今日のはまづ〳〵無難、お晝飯を頂いたのは一時四十分、それでもまだ玄關の方には二三人ゐた樣子である、二時中廻診にとてお出掛、夜具を入れさせシーツをかけてしまつた、洋服屋がきたので醫師服を洗濯にやる、御夕飯は一人でお先に頂いておかへりまでをお裁縫してまつ、

今晩のお寒いこと、お風邪召さなければいゝが、お胴着をお着せ申せばよかつたと思ふ。

十時がうつたので旦那樣のお夕飯のお仕度にとりかゝる、スチユー、鯛の鹽燒、慈姑の煮たのに白菊豆腐、お香のものは瓜の味噌漬漸うとり揃つたのが十一時十分、丁度其時「おかへりー」と大吉（車夫）の聲、お玄關までお出迎申して外套と帽子を受取り、御手洗の御湯をとらせ、用意の御馳走を運ばしてたつやとき（下婢）はやすませた。

三十分の後藥室からお出まし、お手洗がおすみになつて漸く食卓におつき遊ばした、御病家先のお話を承つたり、洋服やの話を申上げたりして面白く御飯を召し上つてる處へ、岡本がとんで來て「先生大變でございます情死がありましたつて……巡査がやつて來ました先生に御目にかゝりたいつて」「さうか」とおつしやつたと思ふと、もうお箸をお置きになつて、お玄關へまあ何事が起つたのかしら、此夜更けてと思ひながら、お茶お菓子を運んで奥の火鉢に一人あんじゐると、今から又出掛るとおつしやる、太田ではすまないのでございますかと伺へば、いけないとたゞ一言、仕方がないので眞綿をドッサリ、御背中へおきせ申して御送りいたす太吉がいかにもいやな顔をする此節はもう毎晩だもの、ほんとうに無理もない可愛想にかへつたらば何か暖かいものでも食べさせやうと思ふ。あまりお寒いのでアンカを入れて暖まりながら女學世界をみる中の挿繪では與平さんと夢二さんの筆いづれも一寸垢拔がしてい丶と思ふ内藤千代子樣はどんなお方やらほんとに珍らしい才筆である僅か十八九の乙女とは誰しもきいて二度吃驚であらう。何でもお父樣がゐらつしやらない御樣子お可愛想にどうかしつかり御勉强なすつて文學で御成功遊ばせばいゝがと餘計なことまで考へる、和歌は近頃新派ばかり私なんかにはとんと分らない。思想が古いのか知らないが、矢張り舊派の方がよろしいと思ふ。ガラ〳〵ッと車の音がする、おかへりらしい何だか大勢の人の氣勢がするがや〳〵診察所を片付たり、物を運んだりする樣子なので、ツット宮田を呼んで尋れる病人だといふ。やかましかつたのも一しきり「それではお願いたします」と巡査の聲がしてから間もなく靜になつた。旦那樣のお出をまつて事情を伺へば、まあどうしよう情死の二人を連れておかへり遊ばした

って……鐵道往生しかけたのが二人とも死にきれなくて夜更ではあるし、外にやりばがないので內へおつれかへりになつたとのこと、診察所へ休ませてあるさうだが、何だかどうも氣味がわるく、思ふまいとすれば猶更其みじめな狀態が眼につく、床にはついたものゝ、どうしてなか〱ねむられない、

商家のお神さん

旦那樣今日は橫濱へお出かけといふので、いつもより早く御起床、お湯からおかへりになると食膳を出して、けふの御首尾を祈つて梅茶をおすゝめいたす、殊の外上機嫌、此間出來てきた結城紬のお召物をおきせ申して、お店先までお送りいたす、いひつけられた帳簿の記入を終つて、晝食の仕度、今日はあまりお寒いので薩摩汁にする、小僧までみんな喜んで食べた樣子、何より嬉しかつた、午後髪結がくる、久し振りに銀杏髷に上げてみる、かるくていゝ氣持だ、「奧さんはおきれいでゐらつしやいますから何にお結ひ遊ばしてもよくお似合遊ばします」とお世辭をふりまいて歸つていつた、五時過に旦那樣おかへり、直ぐにまたお出掛け、大方柳橋だらう、今晩は同業者の人らしいが、また遲いであらう、縫物を出して針を運ばせながらいろ〱考へる、御主人のお歸りが少し遲いといつてはお迎を出したり、ひどいのは御自身御出馬になつたりする奧樣が世間にはよくあるが、そんな方は實業家否商家、ことにこゝの家などには到底一日も辛抱が出來ないであらう、此家へきてから丁度一年中、其間お夕飯を御一緒に頂いたのは僅か二三十度、每晚〱十二時過になつてから酒臭い息なしておかへり、初め頃の心細さ、よく机によつては泣いたものだが、だん〱馴れてくればそれほどでもない、それに放蕩の待合入りとは少々趣をことにして、これが營業上の策略、商業の運動と委しい譯をきいては、なか〱に賴母しく、妙なもので此節では每晚の御出掛にも必ずお緣起のよい樣にと心私かに神棚を拜んでゐる、けれどもどうせ男だもの、三度に一度五度に一度は御自分で遊びもなさるであらう、それはそれほどの腕があつて、其働でなさるのだもの、其爲に私へ對しての愛がへるといふ譯でもなし、其上對手は藝妓、何も罪にはなるまい、其位働がある人だと思へば却つて嬉しい位である、それにしても緣といふものは不思議なものである、すべての點に於て育ちからいつても、商家の妻としての資格はない私、況して毛蟲の如く嫌つてゐた其商家へ嫁で、黑繻子の半衿に前掛姿、以前は見るもいやであつた藝妓の寫眞などを、平氣で否喜んでみたり、きいたりする樣になつたとは、女でこの位なら人生を達觀したものだと思ふ、十一時うつたので床をのべさしたまた今晚も十二時過であらう……

私の日々行ふて居る衞生法

東京女醫學校長　鷲山彌生

▲日々の仕事の順序

私は職業としては醫者をいたして居りますし、學校も有つて居れば、子供もあり、無論家庭の事も御座いますから、普通の人に比べますと非常に仕事が多く活動が烈しいので、生活には成るべく規律を立てるやうにして居ります、朝は七時頃に起きます。病室をもつて居りますから、急病人でも出來れば起きて直ぐ其方の手當をしなければならないやうな事もありますが規定はまあ午前八時に診察所に出る事にして居ります。それから十二時までの間に外來と病室との診察を濟せます。十二時から一時までの時間を面會時間として置きまして、其間に隙を見て晝の御飯を頂きます。一時からは往診に出懸けますが、これは規律を立てる譯に參りませんから、歸宅のほども從つて一定いたしません。午後からの急病人や外來患者は醫員に委せて居りますが、中には私が歸つてから診てやらなければならないのもあります。歸宅後はまた入浴を濟し、食事をいたし、受付、藥局　看護婦をはじめ、女中や小間使などからいろ〳〵な報告をきゝます。病室の賄は、賄方などを入れますとなか〳〵面倒ですからこれを私の直轄にして居ります。

▲日常を見た父の驚き

一週に一二回は家族一同で茶話會のやうな事をいたし、御話をしたり、注意を與へたり、面白い遊びなどもいたします。學校に出ますのは一週に二回で、其日は急場の往診丈けをして、三時より參りますが、授業のほかいろ〳〵報告を書いたり、整理をつけたりいたさなければなりませんので、歸宅は大抵夜の九時頃になります。そして家の者は皆十一時に寢ませますが、私は其あとで、自分用の手紙を書いたり調べものを

したりいたしますので、床に入るのは毎晩何うしても十二時から一時二時の間で御座います。其の代り枕に頭をつけるともう直ぐ眠つて了ふのです。先頃から國元の父が出て参つて居りまして、私の仕事の忙しいのに驚いて、身體でも惡くするやうな事はないかと申して心配いたして居りますが、晝のうち話をして居る暇がないものですから、夜分私が床に入るのを待ちうけて、次の座敷から話しかけるのです。處が私は二三分もするともうすつかり寢込んで了ふものですから、老人はこれにも驚いて居るので御座います。

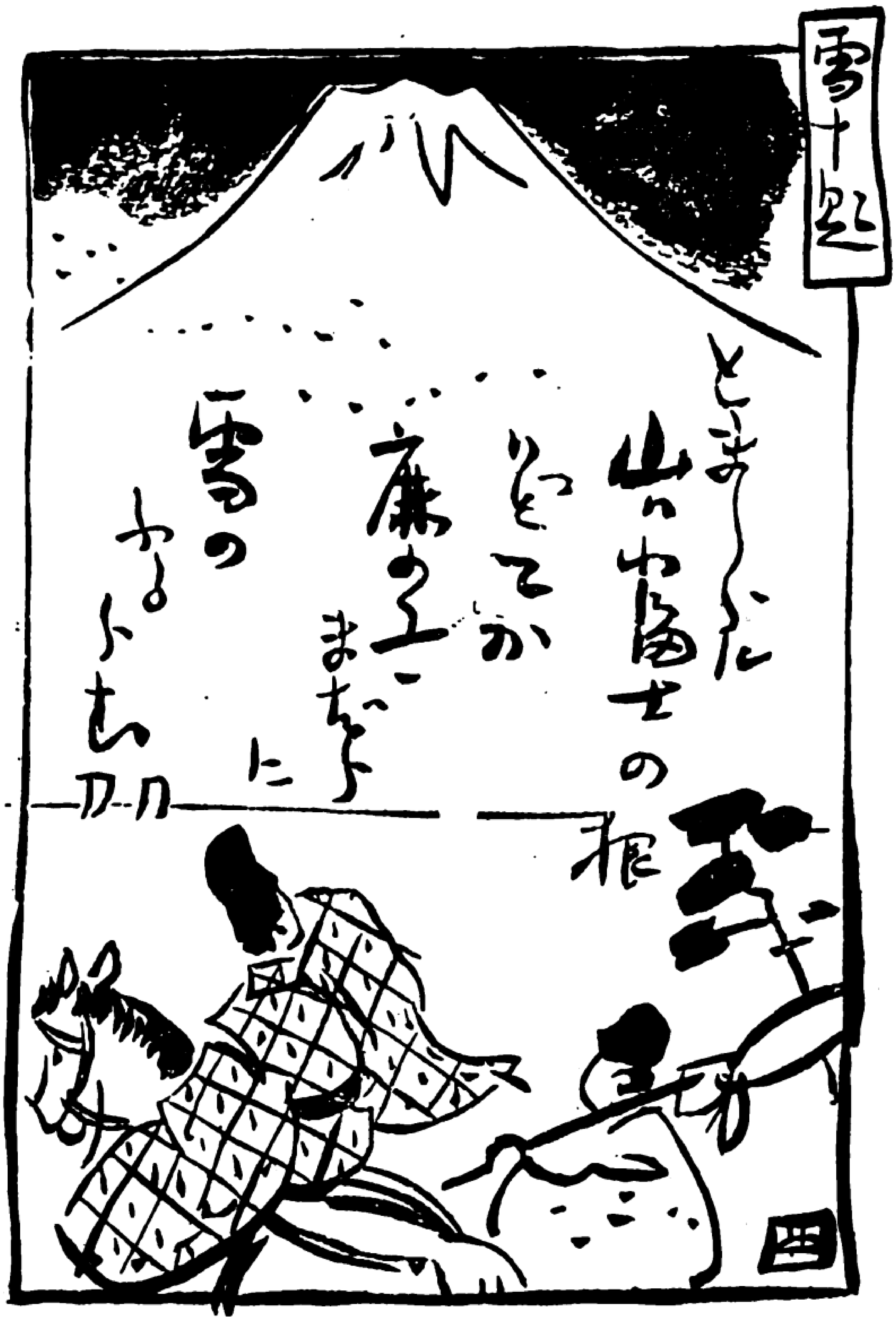
▲神經衰弱の退治法

一體誰れでもよく働けばよく眠れる筈で御座いますでよく弟子達へも、神經衰弱などをするのは、勉强の過ぎる故ではなくて、何か他につまらない煩悶をするからです、勉强をすれば頭がつかれるから必ずよく眠れる筈である、神經衰弱になつて、これは勉强をしたからだなどゝよい顔をして居つても承知しませんと申すものですから、弟子達は神經衰弱らしいと思ふときは、私に内證で他の醫者に診て貰ふ位にして居ます。考へて見ると、私は今日に至るまで眠れないといふ晩は一晩しかありませんでした。それは私が兄と一緒に初めて東京へ出て参りました時で、其晩は汽車中で前途の事どもをいろ／＼考へて、何うしても眠られなかつたので御座います。

▲お菜は本食で飯は副食物

食事は外形はよくなくつても滋養物に富んだものを選んで頂きます。餘り好き嫌ひをしない方ですけれどそれでも習慣で滋養物でないものは自然嫌ふやうになつて居ります。この十五六年來は少しも變りなく朝は牛乳一合、パン四斤半、鷄卵一個、それに生の牛肉半斤を搾つた肉汁を頂きます。尤もこの肉汁を頂きますのは、三年前病氣をいたしまして以來の事で御座います、凡て私のいたゞきますのは三食ともお總菜の方が本食で、御飯は副食物といつた風で御座いまして、お總菜は普通の方の三倍もいたゞきます。ですから日本

食に招ばれると一寸困る事も御座います。普通手をつけずに家へもつて歸ることになつて居るお口取とか燒肴とかいふやうな御膳の向にも私は必と手を出して了ふので御座います。其代り、多忙な故もありませうが、間食は決していたしません。しかし夜の九時頃に一度牛乳を頂くことにして居ります。一體お夜食といふものは普通いけない事のやうにいはれて居りますけれど、不消化物でさへなければ、夜食は寧ろよいので、乳のみ兒などのある方には別して必要なので御座います。



▲職業と子供の養育

とにかく私の生活は、右に御話いたしますやうな工合で、非常に事が多いので御座いますが、しかし前にも申した通り規律は正しい方で十年一日の如く少しも變りなしにつゞいて居ります、但し正月の元旦丈は學校で年始を受けますから、往診を休みにいたします。がそれにしても家の方

に五人や六人は診てやらなければならない病人のない事は御座いません。この一日をのぞいては午後一時から俥に乗らない事は三百六十五日中一日もないので御座います。それ故婦人會へでも出たいと思ふ時には、二日位前から其つもりで氣をつけて往診の方を都合いたすので、私には今日思ひ立つて、今日直ぐ出かけるといふやうな事は、甚だ六つかしいので御座います。

私は斯ういふ多忙な職業をもつて居りましても、それがために子供の育て方に不都合を感じたとか、子供あるために、職業の方の邪魔になつたとかいふやうな事はありません。

▲子供は職業に敬意をもつ

子供は當年は八歳になりますが、赤坊の時でも、朝髪を結ふ間に乳を與り、正午にやり、其間には牛乳を遣るといふ風にいたして居りましたから、少しも差支はなかつたのです。そして子供の世話は乳母とか下女とかにはさせませんで、書生とか看護婦とか多少學問のある理窟のわかつた者に致たさせるやうにして居ります。子供の方でも母の職業といふ事をよくきゝわけて、三歳になる頃からは、往診です病家に往くのですよと申せば、決して後を追ひませんし、普通のお客様の前にはチョコ〳〵出て來るやうな事がありましても患者の前には決して出て參りませんのです。

▲女の外出は進歩の原因

かう申しては我田引水のやうですけれど、私は一定の職業をもつた母親に育てられた子供は、何うもよく育つと思ふのです。婦人が外でよく働きますと、家の方が……といふ心配を一寸するものですが、其實事のわかつた婦人でさへあるならば世の中に出て仕事をするのが、家庭にとつて差支なきのみか、却つて益する處が多からうと思ひます。家政にばかりかゝはつて居る婦人の家庭には缺點が多う御座いますが、外に出ていろ〳〵な事を見聞いたします婦人の家庭は種々の點に於て改良せられ進歩せられて參る筈で御座います。

大勢の子供を育てながら時間に餘裕をつくる方法

宇山綠子

△朝の五分は十五分の價

私は若いうちから手少で子供を大勢育てゝ參りましたので、時間の餘裕をつけることに就いては、常に研究いたして居りますが、何ういたしましても人の家と申すものは、朝がおくれると一日片付かないもので、朝が一番大切で御座います。私共では決して夜更しをいたしませぬ代り、朝は必ず五時に起きます。そして六時半には御飯を濟まして、八時までに家中を片付けて了ふことにして御座います。尤も一家となれば臨時に事が起ることも御座いまして、規則通りに參らぬ事も御座いますけれども、其積りで働きますと大抵出來ない事はないのです。で八時までは、家中誰れでも手をあかさずに、一生懸命に働きます。臺所の方は私が受持つて居りますが、それは臺所と申すものは、一番手のかゝる所で、かつ臺所を手早くしなければ、他の方が片付かないからで御座います。お座敷の御掃除などはをしへてさへ置けば、誰れにでも出來ますから、手廻しの惡いものを其方の係に廻して置きます。かう定めて置きまして、先きに手のあいたものが、他の手傳をすることにいたしますと、存外時間がかゝらずに片付くもので御座います。實際朝の時間は間に五分取られると、終は十五分おくれて參るもので御座いますから、女中などを使ひますにも、一つ用をいひ付けたならば、それが濟まぬ内は他の用をいひ付けないやうにいたします。

△自分の事は自分でさせる方針

子供には自分の事は自分で始末をさせて女中を使はせないやうにいたし、子供にも成るべく手數をかけないやうにして居ります。尤もずつと小さい子供は止むを得ませんけれど、六七歳から先は床の上下から衣更

でも何でもすべて自分でいたさせます。お家によりますと、それ帶をしめてくれ、本をつゝめ、下駄を出せといふ風に學校に行くにもお子樣のために女中を一人かゝり切りにおさせになりますが、くだらぬ事に人を使へば、家内が混雜するばかりでなく、子供の方にも依賴心が生じて、人に我事をさせるのを當然と心得、成長いたして後も我儘を振舞ふことになります。けれども自分でいたしつけて居れば、それになれて、初めから人の手などを借りやうとは思はなくなります。又平常は子供は餘り外へ出さないで日曜などに遊びに出すので御座いますが、もしも遊び過して晩くでも歸ると、自分で御膳を出して御飯をいたゞかせ、後の始末まですつかりいたさせることにして御座います。

△大切な働き時

かういふ風にいたしますと、大勢の子供がありましても、女中一人で時間の餘裕が十分御座います。これで私は一昨年までは、月曜から金曜まで毎日方々の奥樣方にお料理もお敎へいたして居りましたし、昨今ではまた戊申婦人倶樂部のことで及ばずながら奔走いたして居ります。それは私は衣服に垢をつけて置くことが嫌ひですから、洗濯はしきりといたします。お針も止むをえない場合を除いては大抵家でいたして居るので御座います。尤も其代り夏避暑などに出懸けて居る暇は御座いません。一體病人でゝもあらばともかくも丈夫なものが避暑に參るなどは、贅澤極まる事で、暑い時にこそは最も働かなければならないので御座います夏はお互に訪問もなく暇があるので御座いますから、私は其間にすつかり冬物を仕度して了ひます。そして夏のものはまた春三四月頃までにいたして置きますから、衣更の時が參りたからとて、それ〳〵と周章てるやうな事は御座いません。其他また盆栽が好きで、裏庭に三百鉢ばかりも御座いますが、これらの世話も自分でいたして居ります。

△女中が多ければ却つて混雜する

私共あたりでは、主人には何れ生涯活いて貰はなければなりませんから、婦人も家のために出來ます丈けの働きをいたさないでは勿體ないと思ふので御座います。人様によつてはあの位の身分のものが、自分で買物に出かけてはをかしいとか、女中を幾人つかはなければ恥しいとか仰しやる方もあるやうですが、何うして一家の家内が奥様だから〳〵といふ調子で居つては、人の家と申すものは、到底よく治るものでは御座いません。何うも今日の奥様方に女中を多くおつかひ過ぎになるやうに思はれます。人の家に召使の者を多くいたしますと、お互に依頼心が殖えて、却つてゴタゴタするもので御座います。それは氣を付けても御覧遊ばせ、女中の多いお家ほど家の中は片付きません。これも自分で試めして見ましたので、是迄四人つかつて見た事も御座いますし、三人にいたしたこともあります。老婆にもして見たり、小娘にもして見たり、それはいろ〳〵と試驗して見ましたが、大勢つかつても一人つかつても同じ事で御座います。此方の心懸け次第では一人の方が却つて片付き易いので御座います。

△自分でやり切つてゆく覺悟

それに大抵のお家では、一人でも二人でも女中をお置きになれば、直に女中本位になつてお了ひなさるやうで御座います。私は隨分方々のお家に出入りをいたして、いろ〳〵な奥様方にお交際いたして居りますが多くはさうのやうで、斯うなすつた方がよいでせうなど〻御注意申上ても、それは家の女中が出來ないと申ますからと仰しやる方が、まあ十中八九で御座います。そしてよく女中がないから何も出來ない、御飯も炊けない、洗濯も出來ないといふやうな事を外見であるかの如うに仰しやる奥様方が大分多く御座いますがこんな間違つた事は御座いません。自分の家であるからは、人が少なければ、自分でやり切つてゆくの覺悟がなければなりません。

實驗談

廿六年間お產を取り扱つた私の實驗

產婆　西尾きやう子

私は產婆を開業いたしましてから丁度二十六年になりますが、仕合に私に御用を仰せ付けられました方方はお產も輕く御肥立も宜く、而してお子樣も丈夫にお育ちになる方が多うございましたのは全く產婆運の良いのだと何時も感謝いたして居ります。併し是迄永年の間には樣々なお產に出遇ひまして、自分の命が縮まるやうな心配を致した事もあり、又飛立つやうに嬉しかつた事も幾度在つたか知れません。夫れで姙娠の初期からお產後までの事に就て私の實驗談を少々奥樣方にお話し申上たいと存じますが、未熟なお話も御參考の一端となりませば誠に僥倖でございます。

▲醫師の命を守つて命拾ひした惡阻患者

惡阻の輕いのは心配なものではございませんが、食事に障るやうになりましたら放擲つて置かれません。惡阻は如何に重くても日數さへ經てば必らず治ると云ふ舊來の說を信じて醫者にも掛らず、藥も飲まず養生を忽がせに爲て居りますと遂に一命を失ふやうな事になります。嘗て私の近所に初姙娠で極重い惡阻にかゝつた者がございましたが、食物は申すに及ばず、藥も吐いて了ひ衰弱は日に加はつて醫士も風前の燈火だと申して居つた位でした。併し此姙娠も家の人達も良く醫師の命を守つて一生懸命に養生いたし、產婆は醫師の指圖通り灌腸を致したあとへ牛乳と肉ペフトン、又は玉子と水藥とを混せた物を腸へ注入いたし、翌日又灌腸いたしては前の滋養物を注入して居りましたが、灌腸した排泄物が良い大便となり、滋養品は良い工合に體內へ吸收しましたので追々と力付て危き命を取留め、お產も安々と出來まして唯今では五人の子持

になつて丈夫に暮して居ります。

▲迷信で生命を失つた惡阻患者

丁度是と同じ頃に同じ樣な惡阻の重い妊婦がございまして、醫師が矢張滋養灌腸其他の手當を命じましたけれども、家の人達は醫師の命を信じませんで、何樣とかの行者を招き祈禱を爲て貰ひ、服藥も止め氷嚢も取除て了ひました。私は之を見まして腹が立ちましたから其行者の住所姓名を尋ね警察へ訴へやうと存じて表へ出かけましたところが、家内中のものが、私の袖に縋り止めますので其儘に致して置きましたが、翌日妊婦は遂に死去いたしました。産婆は大抵は妊娠五六ヶ月頃から頼まれるのですが惡阻の重い方には極初期から頼まれる事がございまして隨分難症な惡阻も見ましたけれども初から醫師の命をよく守つた方は危い生命を拾ひました。折角醫師が丹精して側について居る人達が妊婦の好嫌にばかり從つて食養生や手當を無茶苦茶にいたした爲に生命を失ふたものも隨分多うございました。

▲神参り爲て流産した婦人

流産は妊娠二ヶ月の末から四ヶ月の始位までのを多く見ました。種々な病氣のため、殊に梅毒のために流産する人が多く誠に惜い事と存じますが、一寸した不注意のために流産するのは猶更惜うございます。或る婦人が初めて妊娠したらしい身體になつたのを喜んで、未だ産婆にも見て貰はぬうちに雜司ヶ谷の何樣かへお禮参りに出掛け、遠い道をテク〳〵歩いて歸りますと久々の客來で直に御馳走を出すと云ふ騷ぎ、二階を上つたり下たり致した爲に夜分になつて下腹が少しづゝ痛み出したものですから、大根の乾葉を煎じて腰湯をつかひ、良い心持に眠りました。翌朝女髮結に髮を結せて居りますと又少しづゝ腹が痛み出し何か下物が致したやうですから側に在つた古綿を當て置き、後に便所へ参りますと塊りが下りて後は下物も少くなりました。けれども矢張古綿を當て居りましたところ、

段々氣分が惡くなり三日目から強い發熱で十日目になくなりました。私は此話を此婦人の死去後に聞たのでございますが、是は古綿の黴菌から蓐熱を引起して倒れたのであらうと存じます。

▲放任な姙婦には困る

つひ近頃の事でございますが、年を取つた初姙婦が三箇月目に電車から落ちました後、お腹が少しも大きくなりませんのださうで私に診せました。私は早速專門のお醫者を世話いたし、良く命令を守るやうに姙婦に勸め、又下物が少しでも在たら直に私に知らせるやうに申て置きました處、其後何とも沙汰がございません。で或日尋ねて見ますと疾に下て了つたと申して蒼い顏を致して居りました。私は驚いて何故知らせなかつたのですと詰りますと『知らせると仰山な騷ぎをされて厭ですから默つて居ました。夫でも苦しくて身體が利ぬやうになれば仕方がないから賴むつもりで居ました』と答へました。私は開いた口が塞がらず、『夫では前に、お世話したお醫者の方へは往かないのでしたか』と尋ねますと、『折角參つても格別の療治も爲て下さらず、毎日一寸洗滌を爲て飲藥を貰ふ許りでつまらないやうに思ひましたから醫者通ひは止て毎日中將湯を飲で居ました』と答へました。私は熟々氣の毒になり呉々も後を醫師に診て頂く事を忠告して歸りました。取越苦勞をされる姙婦の方は未だ安全でございますが放任主義な姙婦は實に危險なものでございます。

▲老母の干渉に困つて居る姙婦

姙婦が折角醫師や產婆の言ふ事を守らうと致すのに側に居る老婦人が頑固に干渉する爲に、思ふやうに攝生も出來ず困つて居られる實例は隨分あるのでございます。私は此頃お氣の毒な實例を見て居ります。是は初姙婦で良人は某學校出の方ですが、或事業に失敗したので海外へ出掛て勞働して見やうと相談しましたところ、若い細君は姙娠の身でありながら健氣にも留守中何か働いて待て居る旨を承知いたしましたが、同棲

して居る細君の母親が不承知を申して居る內、好機が在つたので良人は母親に無斷で出立して了ひました。夫で出張先の米國から私の許へ手紙を寄越し、私の妻は今妊娠五箇月でありますが、實は私が結婚前少々遊んだ爲に或は胎兒に災を傳へて居りはせぬかと案じられる、貴姉は此點に就て良き方法を執られると云ふ事を雜誌で見たから何卒留守宅の妊婦を預つて與れ」と申す旨を細々頼んで寄越されました。で私は早速お宅へ上つて見ますと、妊婦は銀行の事務員に就職して毎日通勤されて居る由で母親一人居られましたが、お婿さんが無斷で渡米されたのを非常に憤り、家族を振り棄てゝ勝手に高飛する不埒な男と娘とは決して一緒にする事は出來ぬ、其男からの依頼とあつては娘をお任せ申されませんとピッタリ斷わられました。併し其後も屢々米國から依頼狀が參りますし、母親はお國風で産婆の手を借ずに自分で取上るつもりで居られ、細君は之を心配して居られると云ふ噂を聞込みましたのでどうか母親の心が解けるやうに百方手を盡して見ましたが頑として動かないのでございます。妊婦は最早臨月間近の身體で銀行通ひをされる上に初産でも産婆を頼む事も出來ず、母親にせかれて良人との音信も思ふやうに出來ぬと申すのは實にお氣の毒な次第でございます。此母親の頑固も一つは娘を愛する爲ではございませうが、誠に度し難い困り者でございます。是等は極端の例ですけれども、世間には之に類する干渉沙汰が隨分ありまして折角の衛生法を打壞して了はれるのには實に閉口で御座います。

▲骨盤の狹い婦人

妊婦の骨盤は外結合腺が十八九センチメートル（一センチメートルは曲尺三分三厘）より狹うございますと、お産が少し難しうございますから斯樣御婦人は分娩前から專門醫に托して適當の方法を執らなければなりません。私は初姙のお方を初めて診察いたします際に、大凡手加減で骨盤の幅を試み、若し十八九センチメートルより狹いやうだと存じますと、二回目の診

察の際に骨盤計を持參して計つて見る事に致して居ります。夫れで骨盤の狹い方には前々から專門醫に願つて置きまして分娩御させ申すのですが、案外安々と產れるのでございます。稀には十箇月未滿の內に人工早產を行はなければならぬやうな事もございますが、是は骨盤が十七センチメートル以下で已を得ぬ場合に行ふ方法でございまして滅多に無い事です。人工のお產は稍もすると產後の肥立を害するものですから成る可く避けなければなりません。尤も斯樣場合には何事も專門醫の考にある事で私共は其命に從ふのでございます。但しお醫者はよく〳〵選ばなければなりません。



▲流産と早産の區別

姙娠七箇月までに分娩いたしますのを流産と申し、八箇月から十箇月の半までを早産。十箇月の末から十箇月と一週間までを定期産。夫から先を晩産と申しますが、如何程後れましても十一箇月半より過るのを見た事はございません。月數が重つて居ても死兒を分娩したのは流産で、月數が少くても生兒を分娩すれば早産と申すのが世間の言ならはしのやうでございますが産科の方では兒體の生死に關らず月數に依つて流産と早産とを定めるので御座います。

▲早生兒の發育

早産の原因は流産と略々同じやうなものでございます。「胎兒が七箇月で母體を離れては先づ育つ事は出來ないが、八箇月だと看護法が行屆けば育ち得る子供もある。九箇月で生れた兒は世話さへ宜ければ育つ方が多い」と云ふ事を專門醫から伺つて居ります。私は昨年姙婦の病氣のために七箇月で流産した二百五十目の兒を預りお世話いたしました。何に致せ二百五十目の兒ですから實に小さいものでしたが私の考案した保育器で丹精いたしました處、三日目から一日に二匁三匁位づゝ目方が殖え、次第に四匁五匁づゝ殖えまして百三十日許りの間に六百目になりました。

▲十一箇月半で生れた子供

私は日清戰爭の前年に姙娠十一箇月半（四十六週）のお産に出遇ふた事がございました。此奥樣はお國で六回も死兒を分娩なされたのだ相ですが、御出京後私が御用申上ましてから幸ひに三人も丈夫な男兒がお生れでした。十回目の御姙娠はたしか奥樣が三十六歳の時と存じましたが、十箇月半までもお産が延びたものですからお家中却々の御心配で、お醫者も頼み難産の覺悟を爲てお出でになりました處、幸ひに骨盤がお廣いので醫者の手も借ずに大きな男兒を分娩されました。何にいたせ十一箇月半も母體に居た赤さんですか

ら體量が一貫三百目もあり、産湯を上げてお寢し申して置きましたら獨りで寢返りを仕たり、普通の待受着の袖では手先が出て困ると云ふ位でございました。而して側を人が通ると見送るやうでしたから試に愛して見ましたらニコ／＼と笑つてヲッコン／＼語りかけましたには實に驚いて了ひました。此お兒は生後四ヶ月半でサッサと這ひ／＼が出來たのでございます。

▲胎兒の男女

御腹の兒は男か女かと云ふお尋に對しては判然としたお答を申上る事は出來ません。第一體向と申して胎兒が母體の左方へ脊を向けて居るのは男兒。第二體向と申して右へ脊を向て居るのが女兒と云ふ事は昔からの言ひならはしでございますけれども、分娩までに幾度も胎兒の體向の變る事もありますから一定出來ません。又胎兒の心臟音が百三十までゝ力強ければ男兒。百三十以上で弱ければ女兒だと申す事でございますが是も胎兒の體に依つて男兒の心臟音のやうな女兒が在り、どうも分らぬものでございます。私は或御家へ初めて診察に出ました折、奥樣が「西尾さん私は第一番に伺ひたい事があります、今度の子供は男でせうか、實は良人が若し女を產めば離別すると申して居りますので誠に心配して居ります」何卒判然とした處を御知らせ下さい」と改まつて仰いましたので、私は『是れはどうも分り兼ねます。併し若し女の御兒さんでございましたら奥樣が旦那樣を御離別遊ばすのが當然かと存じます」と申上ましたら奥樣も笑つて居られましたが、此御主人は電話まで具へて立派な門戸を張つて居られる方ですのに斯樣御無理を仰つて奥樣に心配を御掛なさると云ふのは誠に苦々しい事だと存じました。

▲輕くて不眠症重いと出血

姙娠中は神經過敏になるのが通例でございまして、殊に御產の時は些細な事にも精神を刺激し易いものですから、產婆は勿論、家内の方も餘程注意いたさなければなりません。男の兒が欲い／＼と望んで居た處へ

男が生れた嬉しさに興奮して如何しても眠られず、遂に不眠症にかゝつた產婦もございますし、甚しいのは子宮出血を起したのもございます。又失望した爲に高度の熱を起した產婦も隨分ありました。夫で私は分娩の際に產婦が御尋ねでも直ぐには男女を申上げぬやう致して居ります。

▲醫師の頓才で解熱した產婦

女の兒を二人待たれた或軍人の奧樣が三度目の御產に又女の兒を分娩されましたところ、お產後發熱され三日目には三十九度の高熱に上りましたので、御主人始め私共も非常に心配いたし、榊先生を御迎へ申して御診察を願ひました。すると先生が「此熱の原因は如何しても分らない。併し手當を爲た處で解熱する見込もないが、放擲て置ても三日目には乾度熱が分離するに違ひありません」と要領を得ない事を仰るので、御主人に御氣の毒ですから先生に頻りと原因を質問いたしましても分らん〳〵とばかり仰います。夫から私が「先生此お產婦は女のお兒だと御聞になつた時にボーツとお顏が赤くおなりで、夫から引續いてのお熱ですが、精神感動で斯樣高い熱が出るもので御座いませうか」と伺ひましたら先生は「アヽ分りました、夫の爲に相違ありません。併し夫の爲にしては熱の出處が少し違ふと思ひます、女のお兒であつた爲なら御主人が發熱なさらなければならぬ筈です」と赤い御髯をひねりながら眞面目で仰いましたので御主人は不思失笑なさる、傍に居つた者が皆轉げて笑ひ出しました。お產婦も之を聞て愉快らしく笑はれた途端にお顏の赤味が醒めて少し經ちますと熱が全然無くなつて了はれました。

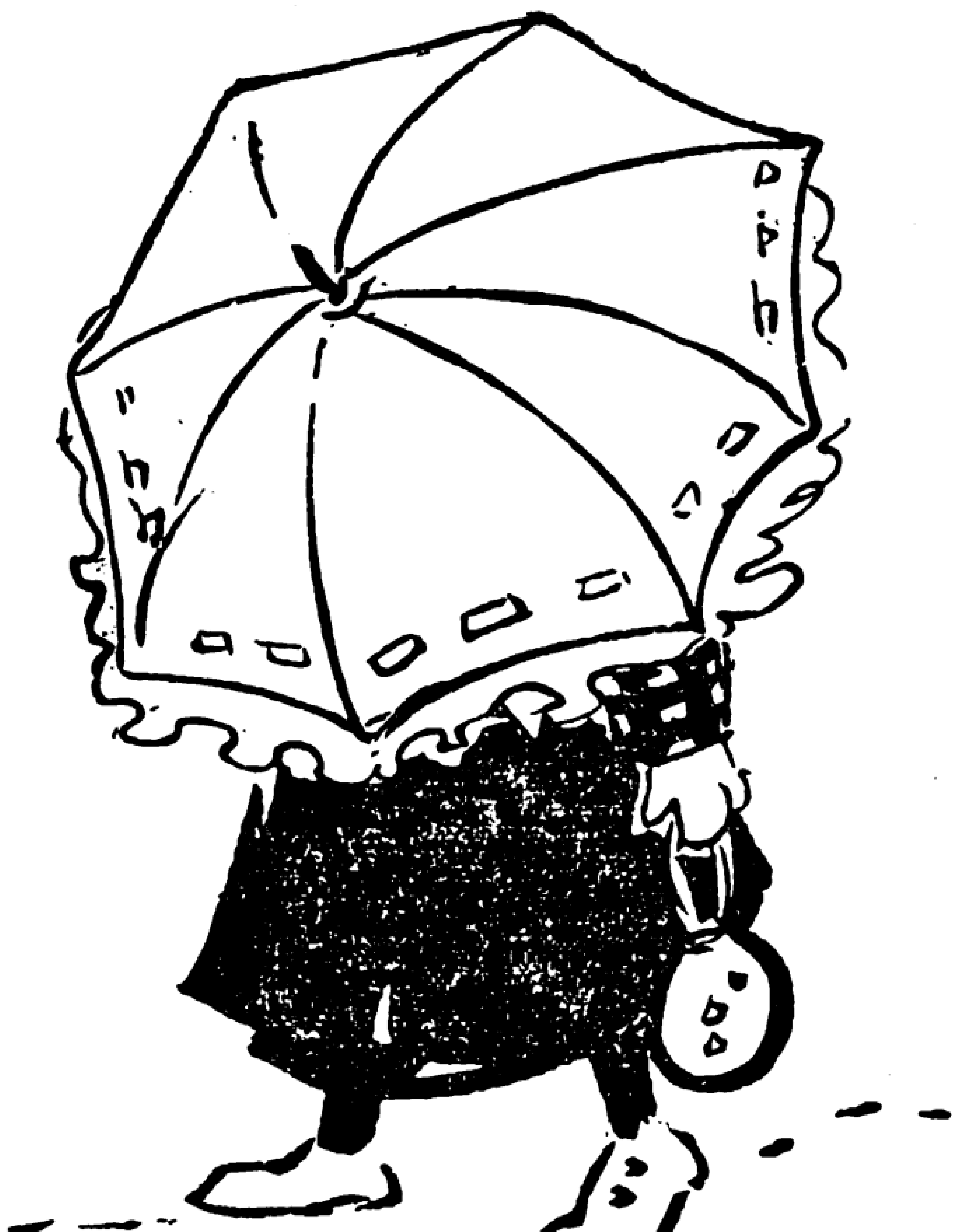
▲御歸りの轍の音で解熱した產婦

御良人が平生御交際向や何かでよくお宅を明けられるのを心配して居られた或奧樣が、お產後二日目の晩俄かに發熱されたので、御主人はお留守ではあるし附添の者は大層驚いてお手當いたしたのですがお產婦の

容體が段々悪いやうですからお醫者を迎へやうかと相談いたして居りますと、丁度二時頃、御門の開く音が致しましてがら〳〵と車の響玄關でお歸り――と云ふ聲が、産婦の耳へ入りますと。お産婦は微笑れましたが、其途端にお顔の赤味が取れてお熱は直に下つて了ひました。

▲信仰で安々と分娩した婦人

つひ先達の事でございましたが、腎臟病に罹つて居た姙婦が月滿て分娩となりました際、二晝夜も烈しい陣痛が續いても未だ生れません。産婦は早く産み度いとあせつて私共が止めるのもきかずに一生懸命にいきみますので兒頭が子宮口を壓迫いたし自然の分娩力を妨げますから益々産れにくゝなる許り、産婦は苦痛の餘り叫び狂ふて手の附けやうがないのでした。私はふと考へ附いて「貴女のお宗旨は何ですか知りませんが一生懸命に其お宗旨の神佛を念じて御覽なさい。私も一緒に信心致しますから」と申しました處、産婦も始めて心附た樣子で兩手を胸に組み合せ全能の神よと祈禱いたし始めますと十分も經たぬ内にヒヨイと産れて了ひました。此婦人は腎臟病のために分娩が困難であつた處へ餘りあせつて烈しくいきみました爲に猶更むづかしかつたのでございますが、精神を安靜にすると同時に安産したのを見ますと、お産の際には心の持方が肝要だと熟々感じたのでございます。(因に西尾氏の住所は飯田町六丁目十二番地)



人は幾歳で結婚してよきか

人は何歳にて結婚すべきかと云ふことに就き、匈牙利の統計學者にして且人類學者なるコロシと云ふ人は餘程詳しく研究してゐる。氏は結婚の目的の一は生殖に在りて、生殖の法則は極めて隱微なりと云ふことを述べて、偖其の研究の結果を報道して曰く、

二十五歳の男は十九歳の女を娶るべく、
三十五歳の男は二十一歳の女を娶るべく、
四十五歳の男は二十三歳の女を娶るべし、

と。倘氏は女側の方面より立言して曰く

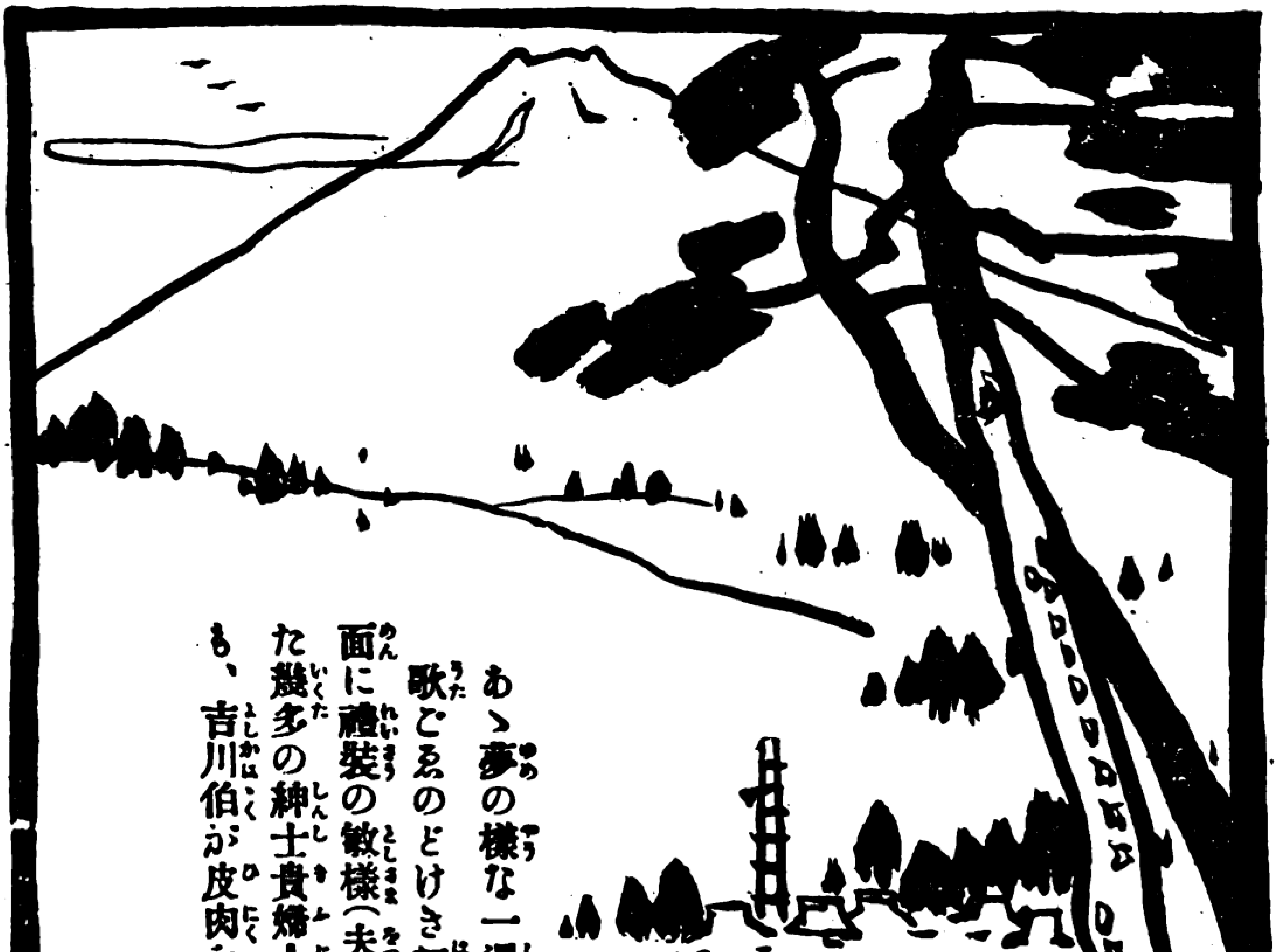
十八歳の女は二十五歳の男と結婚すべく、
二十五歳の女は二十八歳の男と結婚すべく、
(三十歳の女も亦二十八歳の男と結婚すべし、)
三十五歳の女は二十九歳の男と結婚すべし。

と。されど結婚年齢に對して精確なる解決を下すのは實は六ケ敷い事である。蓋し結婚の條件は人により、氣候によつて違ふからである。例へば花の都の巴里あたりの例を擧ぐれば、統計上巴里人士の結婚する年齢は平均二十八歳にして、巴里婦人の結婚年齢は二十三歳五ケ月であると云ふ。されば夫婦の年齢の相違は四年と七ケ月となる譯である。

コロシと云ふ學者は何を根據として此の如き説を立てたか、其の詳なる事は知らぬが、結婚年齢に就ては常識が明に之を敎へてゐるから、必ずしも此の如く深く研究する必要はないやうである。普通の考によつて左の如く心得て居てもさしたる不都合もないやうに思はれる。

「戀愛期に達したる者は、即ち結婚期に達したる者なり」。

然しコロシと云ふ學者の説は、世の結婚せんと欲する男女に取りて確に參考にはなる。少くとも最近の研究と云ふ所に注目の價値がある。(越嶺)



伯爵家の新夫人

若紫

あゝ夢の樣な一週日!!!

歌ごゑのどけき初春の宵を華族會館に披露のうたげ、あの廣間の正面に禮裝の敏樣(夫の名)と並び立ちて、綺羅星とばかりよそほひこらした幾多の紳士貴婦人の祝詞を受けた事も、つゝれの丸帯の重かつたことも、吉川伯が皮肉をおつしやつて口惜しかつたことも唯夢の樣におぼえ

て居るばかり、須磨の別莊に數日間の新婚旅行を終へて昨夜こゝ一番町の新居に歸り着いた身は、今日よりは將に一家の主婦としての新生活に移るのである。

世にときめける伯爵世嗣、眉目秀麗の新法學士敏腕の外務書記官、それらの榮譽を擔へる人からの懇望により私が結婚するといふ評判はいち早く世に擴まつてそれ以來この身は殆ど羨望の焦點となり、自らも亦未の日花の香につゝまれた如く茫として一週日を過してしまつた。けれど敏樣とても今は未だ實出しの將來大臣大使の榮位を得らるゝも、或はまた此のまゝ書記官ぐらゐで朽ち果てるのも腕次第、その幾分かは妻たる此の身の内助にまつかと思へば今までの「藤波男爵令妹時代」の樣な無責任では濟まされぬ、また人も許してはくれまいと、急に何か重荷でも脊負はされたかの如く心細くもうれしくもある。

おゝそれよ、たゞ努力あるのみ家の爲め我が脊の君のため專心誠意つくしませうと心に誓つた。

今日は本邸へ御挨拶に出なければならないので念入に身じまひを終へて

「ぢや御供いたしませう」と御書齋に入ると安樂椅子に倚つて葉卷をくゆらしながら新聞を見てゐらしつた敏樣は私の方を一寸御覽になつて

「あゝもう仕度はいゝの？　それぢやそろ〳〵出掛けやうか」とニッコリ遊ばす、佛蘭西型の綺麗にはさんだ短いお髯、着物も羽織も對の大島絣を召したまゝに新しい中折帽を御持ちになる、私もおぼろ御召の二枚重ねにぬひ模樣の半コートを被つて下二番町の本邸さして俥を走らす。

石柱鐵扉の嚴めしい門を入つて手入の屆いた植込をまはれば巍然としてそびゆる宏壯な洋館、梶棒を中の口に付けさして敏樣がまづ靴脱へお下りになると書生やら女中やらが大勢バラ〳〵と出て來て平伏する、その中の高島田に結つた一人がネクタレットやマッフを受とつて、年增のがコートをぬがしてくれた。

まづ奧の書院に男樣の御機嫌うかゞひに出る、南向の窓際に紫檀の机を据ゑて靜かに御書見遊ばしていら

つしやるところで。

「従五位様が御越し遊ばしまして御座います」と奥女中の注進につゝいて敏様が御挨拶遊ばす、終るのを待つて私も旅行の御禮を申上げると

「どうぢや須磨は氣に入つたか」ともう夙うからの御馴染の様に打解けてゆたかな御笑顔、ところへ姑様も御出まし遊ばしたので一應御禮を申上げてから

「御居間へうかゞひませうと存じて居りましたのに……恐入ります」といふと

「なんの……もう〳〵御歸京が待たれましてね、今日は子供達も日曜なので先刻から嫂様方の御いでを樂しんで居ましたよ」

殊更に嫂様と云つて下すつたのが實に嬉しい、紅茶を運んで來た小間使に舅様が

「子供等に此室へ來る様に……」と御命じ遊ばすのを姑様が「また若い者は若い者同志であちらの方が勝手で御座いませうから」と氣を利かして下すつたので御苑かうむつて此の間まで敏様の御居間だつたといふ洋館に入つて暫く休息する。

疊ならば十二枚も敷けやうかしらあまり廣くはないけれど美しいビロード張の長椅子一脚にテーブルを置いて、一體に光線のよく入る暖かい室だ、キユツとしぼつたオレンヂ色のカーテン、白いレース、壁間には伊太利あたりのらしい風景畫をはじめ水彩畫やら油繪やらの小額が配置よく四五枚かけて有る、片隅の三角棚には石膏細工の女神の半身像と並んで溫室咲のヒアシンスが一鉢、ガラス越しに外面を見やると折からの朝日をうけた霜どけの庭に犬の母子がふざけて居る。

「御机はどの邊に置いて御座いましたの？」一寸仰ぐと

「あゝあの窓のところ、いま艶さんのよりかゝつてる其處だつたね、此家の新築ができてから今年でエート――左様丁度今年で十一年、隨分宿題に腦をかゝへたものさ」、葉卷に火を點けて一口お吸ひになるとまた語をついで

「暖爐の上にあるその銀の莨入ね、それは松平の叔父

が僕につて獨逸からの御みやげさ、あゝ此の室とは永いおなじみだつたな」となつかしさうな眼を遊ばす。

あゝ私だつてなつかしくなくてどうしませう、天にも地にも替へがたなの我が最愛の君が永の年月御勉學の紀念なのですもの……あゝ眉うつくしき美少年が櫻の徽章つけた制帽片手に書物包かゝへてドアを排して出でゆく姿や、襟にJの字法科のしるし、金ボタンきらめかして若人が長椅子に倚りながら、夕低聲に何かの歌を口ずさむ樣がおぼろならず眼先にうかぶ……フト我に返つて見上ぐれば君は紫にけぶる葉卷を右手に私の横面をみつめながら美しい齒なみを見せてお笑ひ遊ばすまあ……心の奥まで見すかされた樣で、我にもあらでおぼえず面があかくなつた、つぎほなさにドギマギしてると折よく外からドアをコツ／＼

「誰？　入り給へ」とこれは敏樣、

まあ／＼これは千客萬來、去年醫科大學に入られた直ぐの弟の幸雄さんを先登に目白臺の健兒滿麿さん久麿さん、つゞいて女學部の名花伊津子さん折枝さん美邪子さんの六人がドヤ／＼と入つていらつしやる、一脚の長椅子位では追つ付かなくて到々敏樣は立つておしまひ遊ばす、何のことはないまるで滿員の電車そつくらだと一寸をかしかつた。

最初此の緣談の持ち上つた時「大きな妹が三人もあるから」と生家の母樣はそればつかり御心配あそばし自分も亦川上さんの御姉妹は尊大な氣風のかたよと友の云はれたのに氣を痛めたが斯うして接近して見てそれは全く杞憂にすぎなかつたといふ事をつく／＼悟つた、隔てなどは露ほども措かず肉親も及ばぬまでに嫂樣嫂樣／＼と慕つて下さる、

「これから學校の歸途に毎日あがつてもよくつて？　嫂樣……」

「それよりホラあの御披露會の時ね、室町子爵が今度の御嫂樣とは舞踏會で度々御對手をいたしましたとおつしやいましたわ」

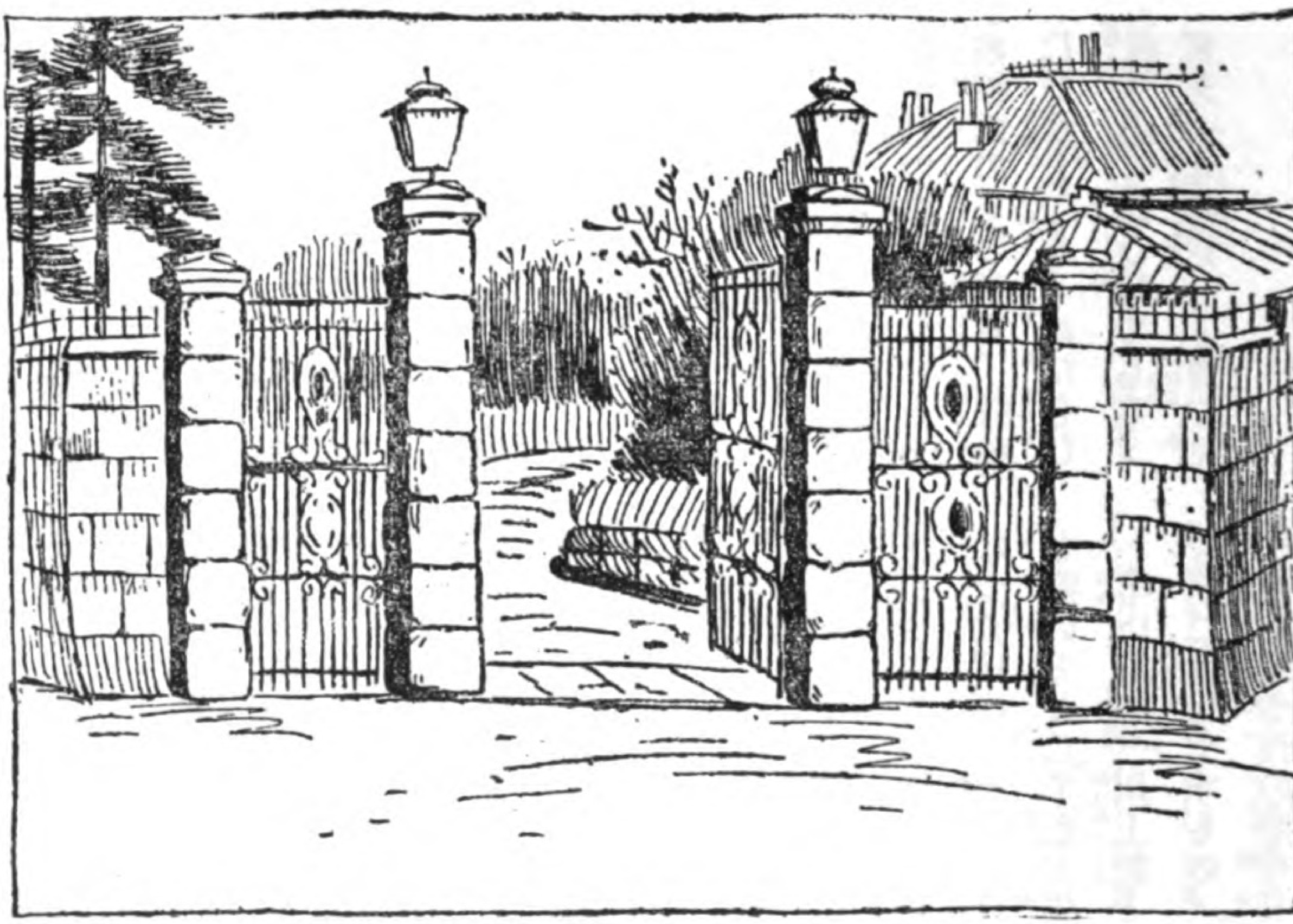
「御嫂樣の獨唱は御茶の水の自慢といはれた位だつてうかゞつてますのよ、何か遊ばして頂戴な」とあちこ

ちからお話の矢をつがへられるので大狼狽「はア〳〵」とでたらめに御返辭してるとぢやア歌つて下すつて？と伊津子さんが開き直る。

オホヽヽまあいやだ、何ぼ何だつてまさか花嫁さんがソプラノ、ソロなんぞまじめで初められやしないぢやありませんかと思ひながらたゞほゝゑむと

「ね、どうぞ遊ばして頂だい」と攻められる、困り切つてると敏様が

「あんまり嫂さんをいぢめて泣き出されると閉口だからどうぞ御手やはらかに願ひますよ」とそれとなく應



元老松方侯爵邸　（三田綱町）

援して下すつたのでやつと大難をのがれた思ひ、まあうれしかつたこと。こんどは幸雄さんが

「嫂さん僕が寫眞撮つて上げませう、どうだい折枝や美那さんも一緒に寫しては……」とおつしやる、

「あゝ寫眞で思ひ出しましたわホラ昨日丸木から出來て來た此の間の……誰かに持つて來させませう」と伊津子さんの言葉の終らぬうちに

「さう〳〵、よくつてよ私とつて參ります」と折枝さんがいち早くも身を起して矢絣のはでな被布がドアの

かげに消えると見る間にパタ〳〵とスリッパに廊下を走る音が遠ざかりゆく、

「折枝は相變らず御轉婆だね、僕の留守にまた二階からころげ落ちたなんて椿事は無かつたかい」

「ホヽ、兄樣はまあ……、折枝さんが聞いたら……」

と伊津子さんも笑ふ。

「あら何おわらひ遊ばすの？　隨分ね皆さんで私のかほばかり御らんになつて……」

噂の主の折枝さん御自分もニコ〳〵なさりながら

「ほかの方は憎らしいから嫂樣だけね、」と云つて渡されたものは——まあ!!!

勅題模樣の振袖に白襟かさねし我が姿と並んでシルクハット片手にほゝゑみ給ふ我が君の立姿、おゝそれよ名殘の高髷おもたかりし新婚披露のその當日、後の紀念にと波立つ胸を袖にかくして君と二人、あたらし橋畔さして馬車を驅つた時をそゞろに思ひ出でらるゝ

敏樣は「できたのかい？　ドラ一寸拜見」と暫く見入つてほゝゑみながら

「嫂さんは大層すましてるぢやないか」

誰にともなくおつしやると伊津子さんが

「あら兄樣こそ大すましのくせに圖々しいわね……あのね嫂樣もう小石川の方へは昨日御送り申させましたのよ、」

まあ心配な——凛々しい眉やさしい口元、敏樣こそ申分なく撮れて御いで遊ばすけれど私の方は胸のとゞろきを鎮めかねた羞らひのいろがあり〳〵よまれて氣はづかしい、母樣はまあ何と御覽あそばしたことかしら……。

午食はあの圓形い食堂でみんな揃つて樂しく頂いた美那子さんと折枝さんとはこれから眼かくしをして遊びませうと子供みたいな可愛いことを云つてお止めになつたけれど小石川にまゐらなければなりませんからと御いとまして直ぐ生家に廻る。

早いもの、川上艶となつて此の家に來るのもこれでもう二度目ですもの、里歸りの時には人顏もわからぬほどであつたのが今日はよほど沈着いて母樣や嫂樣と

お話した。
兄様は宴會で御歸が晩くならうとの事故、ではまた此の次御目にかゝりませうと敏様の仰せのまゝに宵を灯ともす春寒の町を我が新居さして急がせた。

△

いよ〳〵今日から御出勤、私もそのつもりで早く起き出で手落のかどの無い樣にと召使どもに指揮したり御洋服を揃へたりして置く。

おめし替遊ばしながらネクタイにそつとさしといた金剛石入のピンにお氣が付いて

「これは小石川の兄さんが巴里から送られたといつたあれぢやないの？　命から二番目に秘藏がつてるものを僕が借りるのは勿體ないね」とおつしやる

あゝ敏様！！　君ゆゑならば寶石も黄金も、あらゆる財寶なげうつともゆめ惜しいとは存じませんものを……此のこゝろをお酌み遊ばしてどうぞ遠き未來の未來まで御互の想ひの離れませぬ樣にとひそかに祈つた。

この間舞子の濱邊をそゞろあるきの路すがらヘリオトロープはやさしくて大好きとおつしやつたのを思出したので白絹のハンカチーフに其の匂ひを淡くしませてポケットへ入れてさし上げといた、あれに御手がふれた時どんな御面をなさるかしらと思ひながら玄關まで御見送りする。

あゝ何だかガッカリした樣な、嫁いでこのかた丁度一旬、出るも入るも必らず緒にしたものが今日は始めて、おいてきぼり（？）にされたのですもの掌中の珠をとられた樣で何となくもの足りない、新聞を見ても雜誌を繰つてもさつぱり頭に入らずあゝ今頃は御俥があの角を曲るころかしら、屹度私のことを考へてゝ下さるにちがひないわとこんな事ばかりが胸をゆきかふ。

御晝の食もあまりすゝますぐづ〳〵してゐるうちに柱時計が二時を報つ、あゝもう御歸宅までは二時間あまり、その間に下村先生に御禮狀を書きませう卷紙はどこに入れてあつたかしらと御書齋に入つて御机の引出しをスーと開けるとたしかに見覺えある美しい手蹟

で川上敏郎樣と書かれた封筒がまづ眼についた、裏を返せば北古賀弓彦、文面はたゞ結婚の祝詞に過ぎぬけれど私はぶる／＼ッと打ちふるへずには居られなかつた、

おゝ忘れもやらぬ此の人、此の名、色白な細おもての貴公子姿が胸にうかぶ……いつぞや若松邸の音樂會で初めて御懇意になつて以來、足掛九ヶ月の短かい御交際ではあつたけれど、御互の若き血はほのほと沸つたこともあつた。御手紙に添えて四葉のクロヴアーやパンジーの押花だの忘れな草の花束を送られたことが嫂樣に知れて

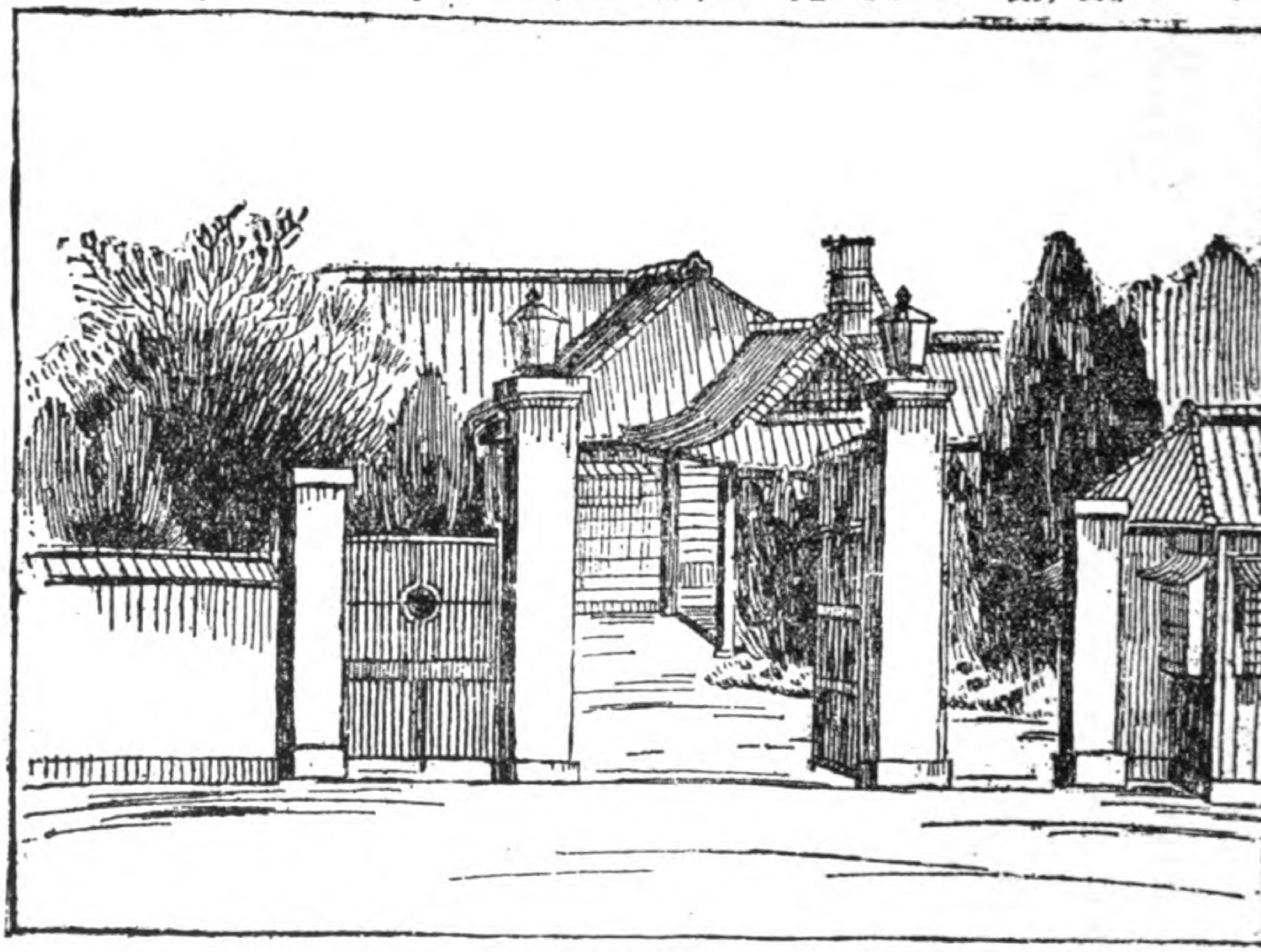
「艶子さんよく御氣おつけ遊ばせよ、パンジーの花言葉は我を想へ、クロヴアーは心臟まで捧げ盡すつて意味ですわ忘れな草は猶更よあの北古賀さんは山室侯爵家へ御養子にゐらつしやる方だそうですからこんな評判が世間に知れると困りますものね、ほんとにあなた考へて下さらなくては……」

あゝ此の時の私の驚き!!!　けれど君が慰めまた我がための名譽を重んじて斷然絶交狀を送つたのがあゝ丁度もう三年の昔になる。

その後あの御婚約のあつた山室侯爵令孃が大磯の海水浴場で遊泳中誤つて水死せられたことも、學習院から工科大學へ進まれたことも、そのほか君の御噂は同族會の席上などでちよい／＼耳にしたけれど別段深くは氣にも止めずに過ぎた、そしてその人の上をきれいに忘れて嫁いでみればゆくりなくも今此處に……。

そりやア別に不思議なことも何もない、級こそちがへ同じ學習院の御出身だから御心やすくゐらつしやるのかも知れない――と思つて見ても矢つ張り胸はをどるばかり、あゝどうしやうホンの一時の少女ごゝろに唯もうなつかしい方とばかり想ひつめて今から考へれば隨分面のあからむ樣な所謂あこがるゝ式の言葉のかず／＼を紙にそめて送つたのもいくたびか……。もしやもしや彼の君の口から敏樣の御耳に、ふる戀のあとを傳へらるゝ樣なこともあらばまあどんなに御驚き遊ばすだらう、きつときつと心の汚れた女よとおさげ

すみ遊ばすにちがひない……けれどまあ私も邪推ぶかい先方は立派な子爵家の若君まさか乳姉妹の高濱の樣な卑劣なこゝろを御持ちになる筈はあるまいと我と我がこゝろをなぐさめては見るものゝ、さてまた御心やすい仲としたならば永い行末御交際遊ばすかたに私が御目にかゝらずに過せる譯はない、その度毎にまあ御互にどんなにきまり惡い思ひをせねばならぬことかなどゝ思ひの糸はそれからそれへと手繰れども盡きず取越苦勞に胸が痛む。あゝいつそ斯う〳〵と打ちあけて



阿部伯爵邸　(本郷西片町)

申上げてしまはうかしら……。あの御優しい敏樣のこと、まして血もあり涙もある清い御心には、罪なき少女の戀よと笑つて許して下さるかも知れぬ、そして北古賀樣とも改めて夫の友として清い御交際を結んだならば……。

靜かに目を閉づれば三とせ昔の落花の夕べ、手馴のヴアヰオリン小脇に抱へてあの樂壇上に立たれた多くの公達の中に、わけてらうたかりし君がおもかげ、星かげ淡き由井ヶ濱邊に若きなやみをあかし給ひし君がさゝやき、散りしく落葉に

路もわかぬ晩秋の林をさまよひつゝ「見よ甘泉の花ちりて」とうたひ給ひしまなざしの、また今更に想ひ出さるゝ……。

あゝ敏様!!　我が敏様よ御許しあそばせ、暫したりとも君を忘れ古き戀にこゝろみだせし私の罪を御許しあそばせ、私は永劫に君が妻、身もたましいも捧げつくした君が妻で御座いますものを、北古賀様も御許しあそばせや。

ハツとして見あぐればあの美しい眉をあげて、キと結んだお口元からは今にも艶さんと御聲の洩れさうな我が君のお寫しゑ、あゝ敏様、ゆるして下さいますわねえ、

「あの従五位様から御電話で、奥様に一寸と仰せあそばします」高島田の小間使が襖をあけたのに驚かされて立ちあがり、折も折と胸とゞろかせながら初めて御面の見えぬお聲に接した。

「艶さんかい？　僕は一寸二番町の方へ廻るからね…………ナニ直き歸る、エ？　あゝこゝは自働電話、外務省を退けがけに掛け様と思つて遂忘れたもんでね、――ああ待つてゝ呉れたまへ、ぢや左様なら」

チリ〳〵〳〵とすげなくも斷つた交換手が恨めしい

沈む夕日のいろもかすかに黄昏れそめて、折りからの北風がピユーツト窓をかすめて吹く、いまごろは御俥が本邸の門内に引き込まれたころであらう、あゝ私は淋しい冬の夕暮を、せめて歌つて御歸宅を待ちませう……。

身にせまる靜寂に得堪へで立てば床のつま琴そら鳴してあゝ星が流れた……。





諸國料理十二ヶ月

二月のお献立

桑原東涙

△節分

お正月〳〵と云つてゐるうちに、モー二月、ホンニ節分です。節分の式も餘程廢れて仕舞ひまして、只今東京では見るのも稀ですけれ共、長崎では舊式の家が多いものと見えまして、今だに其家相應な事を致します。豆撒など致しませんお家の事を、「彼方の家は旅の者」と申しまして、直ぐ土地の者と、他より移住ました者との區別を致してをります。

そこで節分の當日となりますと、それ〴〵お献立を致しますが、先づお晝餐には、

お豆腐の更沙汁

これはお豆腐の骰切に、蒲鉾か、又は輕いお魚の身を入れて、白味噌汁を立てましたので、妻は蕗の薹、

お鱠

大根を劍に刻みましたのに、鯛の身か、鰤の身を薄く下したのか、又蒲鉾を刻んだのを、酢で韲たので、

向付はお煮〆、

里芋、結び昆布、燒豆腐、胡蘿蔔、竹輪などを、程好く煮〆めたもの、

此三品を取揃へて膳に据ゑるので御座います。

その日も已に黄昏頃となりますと、何方も家内を淸麗に掃除致しまして、門の戸を悉く閉おて仕舞ひ、當年の年男に當りました者、又は其家の主人は、昔しな

らば社杯と申す處ですが、只今では紋服を着致し、袴着の儘、家運隆盛、商賣繁昌を祈りまして、家の四隅、東西南北、其年の惠方より始まして、「鬼は外福は内」と、パラリ〳〵と豆を撒きますので、「鬼は外」を三度宛唱へまして、仕舞に「福は内」といふや否や、門の戸をピタリと閉めてしまひます。この滑稽な習慣は今だに演つてをるのでございます。

　　明方から白鼠

丁度此刻限に、長崎市内では餘り見受ませんが、市外の郷に參りますと、十二三位を頭に、四ッ五ッの幼子供達が、盆の上に大根のお尻の處で、鼠の形を拵へましたのを載せまして、「明方から白鼠が來ました」と唱へまして、門並に廻つてまゐります。家々では人數に應じて、五厘宛なり、一錢宛なり與る事になつてをります。しかし數限りもなくゾロ〳〵まゐる事ですから、終には斷りますと、「始末坊〳〵」と惡口を申しまして、逃げて行きます。一寸小苦らしいものです。

　　鬼の手こぼし

彼地では此黃昏頃を一の闇と申しまして、當夜豆撒が濟みましたら、この一の闇に盃事を致しまして、一家の無事を祝ひますが、此時には缺かさず「鬼の手こぼし」といふものを据ゑる事に致してをります。此習慣は一寸外の土地では見慣れません。これは三方に紅大根を葉附の儘で、眞中の處を一分位宛の厚さに、家内の人數に應じて剗みまして、少しも亂れません樣に、葉の方も、尻尾の方も附けたのを、左頭に載せ、其前に燒鹽を、腰高饅頭の形に、猪口か、茶碗かに詰めて、型を附けましたのを置きましたものでございます。先づこの紅大根を三方の儘、主人の前に据ゑ、三ツ組の盃を置きまして、上から下へと順々に、「鬼の手こぼし」と申しまして、紅大根を一片づゝ、燒鹽を付けては、盃と一緒に頂いて食べ、次から次へと廻します。一順終りますと、當日のお獻立を出しますので堅い家では會席に致しますが、普通は平常の御膳で頂きます。尤もお客樣には何方樣でも、會席膳をお用ゐになります。其お獻立も家々で多少の違ひは御座います

が、大概は此様な風で、東京のから見ますと、お魚の材料の多い土地の故かして少し濃厚い様なところがあります。

おさしみ、

鯨の白身の湯煮たのを、おさしみにいたし、橙酸でいたゞきますので、これを鯨の白湯煮物と申してをります。

小鳥の燒物

小鳥の種類は別に構ひませんので、小鳥を綺麗に拵へましたのを、砂糖と、酒鹽に醤油を入れたお汁



を附け、光澤の出るまで、幾度も燒きまして、照燒を致したのに、琥珀糖二切に芽生薑か、蜜柑の輪切等を粧點ひます。琥珀糖とは寒天寄の事で、寒天と砂糖で寄せたもので御座います。

海鼠の二杯酸

芥子韲、

人參と唐人菜の湯煮ましたのを、細く剝み、お魚には烏賊か鯨の湯煮物を、程好き大さに切りまして白味噌に芥子とお砂

糖、酒鹽を入れて、好く擂りましたので和えますのでございます。

金頭の煮附

その外別の御膳に、尺八烏賊のうま煮、干河豚と大根、牛蒡、人參のお煮〆、を付けまして、猶ほ綺麗な鉢に數の子に花松魚を掛けたのと、紅大根のお鱠に、鯛か鯔の身を霰切にして入れたのを添えておきます。一家中の者も、皆々興を催しまして、いよ〳〵御飯を召上る様になりましたら、お吸物を出しますので、此吸物は當日矢張無くてならぬ一品でございます。此お吸物の材料は、白菜の湯煮ましたのと、鯛の身一切、色蒲鉾二ツ、燒餅二切、鮑二片で、矢張松魚節で滋汁を引きました澄し汁で、お家方丈でお食りになるには一緒に入れて煮ました方が、汁は少し濁りますが、お滋味うございます。

これで一家の御祝儀が濟みましたところで、御主人は直ぐ様其地の氏神に參詣を致しまして、一家無事の御禮を申しますので、必ず其家々の標の描いてあるブラ提灯を提げて行くところが面白い風習です。それから親戚から、お友達の處まで、御無事でお目出度うござります」と一々回禮致します。又お客が「お目出度う」と申しまして、訪ねて呉れますと、一々御祝儀にお盃を出します。丁度お正月の年首廻りの様なものでございます。

△初午

二月と申しましても、彼地は氣候が餘程お暖で、一寸と雪の積る事はありませんのですから、モー春風も吹き渡りまして、未だ膚寒い位な事で、片淵、西山あたりの梅の花は滿開で、梅林の中からチラホラと、お稻荷様のお幟がホノ見え、太鼓の音の鼕々と聞えますのは、まことに悠々としたところがありまして心も伸び〳〵する様でございます。此地では稻荷祭と申しても、漸くお子供衆のお遊び位ですが、彼地では家々でそれ〴〵多少のお獻立をして、お祭を致します。お稻荷様へ供へますのも、なか〳〵丁寧なもので、先づ

神酒一對、御備一坐、大根のお鱠に花松魚を掛け桃饅頭五ッ、蜜柑に串柿油揚二枚、生鯛一尾は貧富に拘らず、何方でも供へますので、お家でのお料理は、

芥子韲。　前同樣。

吸物。

　玉椿蒲鉾といふ椿の花の形をしたものに、鯛か鰤か、興津鯛の身などの澄し汁、靑味は田芹。

猪口、　十六寸

味噌汁、

　鰍の身の白味噌汁



　妻は蕗の薹、それにおさしみと、鱚の二杯酢位で、淡りとしたものを拵へます。別に之と申す程の事でもございません。

　そこで其日は長崎中のお稲荷樣の總支配になッてをります若宮樣へ參詣いたしまして、お捻を献げますと、「もろこぼし」にお煮〆を添へて、筍盆に載せて出します。「もろこぼし」と申しますのはお赤飯を型で拔いたもので、之に添へるお煮〆は燒豆腐、結蒟蒻、人參、牛蒡一切宛に定ッてをり

ますので、神樣のお祭日とか、佛樣の御命日に參ればキット此「もろこぼし」を出すのでございます。所變れば品變るとやら、物の名の稱呼までが變つてをります。

△「チリ」

お正月の時にお寒さ凌ぎにと思ひまして、「鍋料理」の事を御話し致しましたが、この「チリ」も矢張四五人位で御會食遊ばす時には、至極持ツて來いのお料理でございます。二月とて未だ東京では餘寒が強うございますから、是非御會食にはお暖いものが宜敷うございますよ。彼地ならお友達でもお出になりますと、

「今日は酷う寒うございますケンデ、「チリ」で一杯召上ッてお出でマッシエ

と引止めらる。そんなら御馳走になつて參りませうとお腰をお据になる。最早チャントお仕度の出來てゐる事ですから、直ぐ尺位な一寸した會席膳が並びます。焜爐が出ます。お鍋が懸ります。御用意の事とて、お鍋は煮たッて、お滋味香がプン〳〵致してをります。御主人が蓋をお取りになる。ポーッと立つ濃霧、プップッと消えて行く湯玉、サア中の品物は何んでございませう、

お魚の切身に、湯煮た白菜、板昆布の下敷で、松魚節のお澄し。これは結構、先づお一ッと、お膳の上のおさしみに、鶯菜のお浸か何かで、御酒を召上る中に傍からお魚や、お菜をお鍋に入れながら、段々に煮上りましたのを、お小皿に蓮化で汁諸共お掬ひになりまして、橙酸を適宜にお垂しになッて召食りますのでございます。

これに使ひますお魚は、鮟鱇とか、鰍とか、鯛とか、肉の堅いものが好いので、鯒なども使ふ事がございます。味は極滋味もので、淡味してをるうちに、異味りしたところがあります。これは鍋料理から見ますと、お汁も薄く、材料の品數も少く、お汁の外に橙酸を垂して食べるところが違ひますので、四方山のお話を遊ばしながら、お世話が出來ますし、お仕度に手が掛り

ませんから、お寒い時分にはお勝手元が餘程お樂でございます。

△「クズナ」の餡掛

只今の季節は、丁度興津鯛の旬で、味の好い時でございます。彼地では此お魚を「クズナ」と申しまして、矢張珍重いたします。これは出し樣に因りまして、拵方が少し違ひます。

先づ五六人位のお客樣へ、お膳の上が餘り賑な時、大きな興津鯛を一尾餡掛にして据ゑます事がございますが、其拵へ方は、目の下一尺位な、肉の厚いのを



擇りまして、深い煮物鍋に、水一升位容れて、水が沸騰ましたら、鱗を引き、腸や腮を拔きました興津鯛を、煮笊に入れて、煮立つた湯の中に入れ一度煮立ちましたら、お醤油を注し、酒鹽を加へまして鹽加減は鹹くならない樣に加減致しまして、又煮立てます。好くお魚の心まで火が通つたと思ひましたら、煮笊の儘他のお皿に移し、別に葛一合許を水で硬目に溶いておきましたのを、煮立ツた汁の中に入れまして、好く攪拌しながら煮

ます。それから葛が全然變りましたら、大きい錦手か何か、蓋のある鉢に、お魚を移しまして、其上に今煑上りました葛の餡を掛け、卸生薑を其真中に載せ、蓋をして、お廣蓋かお盆に載せて、お客様の前へ出します。西洋料理でソップなど出します時、蓋附の長手の鉢を使ひますが、彼の鉢を應用遊ばすと宜敷からうと思ひます。兎に角熱いのをお客に勧めますのですから、これもお寒い時分には、一寸氣の効いて、滋味いお料理でございます。これをお客様にお小皿へ取分けて差上げますのですから、お知合同士ならば、肉叉にナイフでも添へて置きまして、各自で御自由に取ッて戴く様に致したら、一寸立食會も宜敷からうかと存じます。

このお料理は支那の南清邊で致します、紅燒魚と申しますものと似て居ります。序に尚此餡掛の別の仕方を工夫致しませう。

別の仕方と申しましても、大體は同じ事で、只御客様への出し方が違ふ許で御座います。御各自に此餡掛を差上げます節は、人數に應じて、お魚を切身と致し、それから前と同様の仕方で煑上げましたら、深目のお椀に盛り、卸生薑を添へて配りますので御座います。

今一つの仕方は、お汁を吸はれる様に薄く拵へますのも御座います。これには一升のお汁なら、五勺か三勺位の葛を薄く溶きまして、お汁の中に入れ、當季節は海雲といふ海藻が御座いますから、これを加へて煑上げますので、モヅクは全然トロ、昆布の様で、風味は却つて宜敷いものですから、お汁仕立の餡掛は、なかなかお口當が好く、味も結構で御座います。これも矢張お椀に盛つて出すので御座います。

尚ほ此餡掛には鱸とか、ムツなども使ひます。東京邊では此方がお格好かと思はれます。

△支那料理風のお魚の餡掛

この支那風の餡掛は、仕方は大概前のと似てをりますが、使ひますお魚が鯉か、河鱒か、鱸に限る様で、何方かと申すと、河魚の方を使ひます。それに全體河魚はチヨツト癖のあるもので、煑ます時には、成るべ

く一度燒いた方が、味が宜敷う御座います。夫故餡掛に致しますにも、お魚をコンガリと燒きまして、お汁を甘鹹く拵へ、煮上げましたらば、煮汁の儘他の器に移して置き、其お汁て、玉葱、慈姑、乾松茸か椎茸、乾鮑などチヨツト湯煮て薄く刻みましたのを入れまして、好く柔くなるまで煮て煮上ッたら、前と同じ様に葛を入れて、葛の熱熱るのを俟ッて、大皿にお魚を据ゑ、其上から具と共に餡を掛けて出しますので、味は此上もなく滋味いもので御座います。矢張藥味は擦生薑を使ひます。



お魚は煮るか、燒くか、酸でも撒けて食べるものと心得てゐらつしやる方もある様ですが、御夫婦共稼ぎで、手内職で漸くに夫の稼の足前をなさる境遇の方はなか〳〵臺所どころではありませんから、致方は御座いませんが、手數を掛ければ、それ丈の味を増しますし、從つて滋養にもなりますので、別に夫程お暮向に影響いたす次第ではございません。此頃なども、或る知合のお醫者様の御話にも年々日増に營養不良とか申す者が多くなるとの事で、

世間で虛榮が張ります爲めに、自然御養生の方がお控へ目になりますから、無據お臺所がお淋しくなるは當然な事で、夫故御更日々の御惣菜向きの御工夫が大切になつてまゐります。

イヤ其樣お叱言見たやうな事は休題まして、今時分は雪が降りましたり、身を斬る樣な風が吹きましたり致しまして、好く不漁が續くもので、其樣時には毎日の事とて、奥樣方もなか〳〵お惣菜に御心配なもので御座いますヨ。仕方がない時は、此樣な手取早い、お手輕なものがありますから、一寸添へて置きませう。

△鍋田樂

御夫婦差向ひに猫一匹位な、極御氣樂なお生計、それに奥樣はお年若ながら、御勤勉な綺麗好き、

「オヤ〳〵白いものが降つて來た、嘸お歸がお寒からうが、生憎此頃は不漁續で、何か滋味物をと思ふけれども、今日は魚屋さんも來て呉れず、困つたもの……アヽあの聲は剝身屋さん……左樣〳〵、此の間長崎の叔母樣から敎へて戴いた事をして見ませう。幸ひ大根も蒟蒻も八百屋さんが持つて來てくれてあるから……

此蛤は大きくて大層滋味さうだ。ドレお仕度に掛りましやうヨ。大根は二人限だから半分で澤山だ、此の大根を銀杏に切つて、厚さは三分位が好いとお仰ッたッけ。蒟蒻は一枚で好いでしやう。これは眞四角に小ひさく切つて、大根と一緒に湯煮て置いて、湯煮つたら、汁氣を絶つてお味噌と剝身を入れて、甘加減にグツ〳〵煮るのでしたツけ、一寸お加減を試ましやうか、コリヤなか〳〵滋味、材料が掛らないけれど馬鹿にしたものぢやない。大根一本が二錢五厘その半分許で先づ一錢、蒟蒻一枚で一錢五厘、蛤が五錢とお味噌とお砂糖で一錢五厘位しか掛らない。都合九錢か、十錢許で、此樣に滋味く食べられゝば結構々々。是が鍋田樂、ホンニ田樂に似てゐる……

と種々お工夫遊ばして、御主人のお歸をお待遊ばすお心持のお柔和い事……。


學校出と山出し

ゴム鞠の製造

（家庭工藝夜話の第三）

石井研堂

ゴムと硫黄。

「おッかさん、私等の使ッてますゴム鞠のゴムは、樹から採るのださうですね。」

「左樣です。メキシコだの印度だのといふ、熱帶に生えてるゴムの樹といふ樹から採る樹脂なさうです。此地に來ます時は、大和薯や大きな馬鈴薯の樣な形狀に固まッて參りますのです。」

「それを、どうやッて、あんな鞠にしますのでせう。」

「中々敎へられません。秘傳ものですから……。」

「御冗談おッしやらないで……。」

「ほんに、ゴム會社などでは、人に敎へませんよ。」

「でも、おッかさん御存じなら……。」

「では、お話しゝませう。そのゴムの原料を、湯に漬けておいて、それから、湯をかけながら、ロールの間を幾遍も幾遍も通しますのです。すると、綺麗にもなり、堅い鳥黐の樣なものになります。

「これに、硫黄の粉と亞鉛華といふお白いの樣な粉をませ、又ロールにかけて幾度も練りませますが、これで、もう細工ものになりますのです。硫黄を入れますなどは、大層な發明なさうであります。

生ゴムの竈入れ

「そのゴムを、饂飩を延す樣に薄く延します。そして、二寸ばかりづゝの、菱形に刻みますが、これを四枚糊つけにして着け合せますと、不格好な鞠が出來ます。

「之を糊付けする時は、二つの傳授があるのです。その鞠の內へ、筆軸を切ッた位の臍を一つ粘しつけます。又、熱をくれると瓦斯になッて膨れる藥品を、二三滴垂らしておきます。

「ゴム鞠を造ります工場へ參りますと、昔の木のお椀の樣な鐵型が、山に積まッてますが、その型二つの內

へ、前の生鞠を納れ、緊く止めまして、熱室に入れますのです。鐵板二枚の間に入れ、上下から熱をくれますのですが、其の熱加減が六ケしいのださうです。

「一時間ばかしゝて、室から取り出し、型を外して見ますと、立派な鞠になッてます。初め、鞠の内へ入れました藥品が、瓦斯になッて膨れ張りますので、型の内一杯に廣がり、型の合せ目が、鞠のまはりに寫るほど、一杯になりますので、形狀も何も、ちやんと揃ひます。

鞠の臍へ針

「型から出しました鞠は、冷め次第に、内なる空氣も冷めますので、段々萎びます。で、さきが針になッてます空氣ポンプで、一々空氣を彈き込んでおきます。その針をさすのが、前に言ひました臍の處なのです。一旦は針を刺されましても、この臍は特別に上等のゴムを使ッてますので、其の針あとは、獨りでに塞がッて仕舞ひますのです。これで、ゴム鞠は、できたのであります。」

「有りがたうございました。大抵分りました。學校の前の空氣堂で、萎びた鞠を持ッてきますと、空氣を入れて固くしてくれますが、ゴム會社のと同じいのですね」

「多分さうでせう。臍の處へ針をさしさへすればよろしいのですから……。その代り、鞠を餘り火で溫めたり、無理なことして押し潰したりしますと、又この針の跡から、空氣が逃げ出しますから、直に萎びる筈ですね。大切にお持ちなさいよ。」

「決して、無理なこといたしません。ゴム酸漿も、同じこととして造るのでせうか。」

「あれは又違ひます。火をくれませんで、薄い液に溶いてたゴムを、藥で乾かしますのです。この次にお話しゝませう。」

「どうぞ。」

蠣七品料理

よく水を切つた五合の蠣の中から大きなのを十箇程フライの原料に選取つてあとを五つに分けて蠣殻のない樣によく水で洗ひます。

◎蠣スープ

先づフライ鍋にバターを溶かして蠣を入れて其の煮えた中へ牛乳一合と水五勺を加へて鹽胡椒にてお美味く加減をします。

◎蠣スチウ

これは鍋にバターを溶かしてそこへ蠣を入れて、鹽と胡椒で加減をして、別に人參を捻ぢ切りにして湯煮したものと、玉葱を適宜に切つて湯煮したものとを加へて煮立て、程よく味の附いた頃下して皿に盛る。

◎蠣フライ

蠣フライは大粒の蠣を水洗ひにして、拭巾で水氣を去り、玉子の黄身を塗つてパン粉をつける、しかしパン粉が附き過ぎると味を落しますから、少しく附けるがよろしい、揚げ加減は狐色となつたのを度として、鍋から取出します、バターの量が多いとパン粉の皮が破れる、少ければ焦げつきますから、少量のバターでよく動かしながら揚げると宜しい、皿に盛るときには赤蕪の小口切を添へます。

◎蠣オムレツ

これは一人前に玉子一箇半、牛乳二勺の割でよく混合せておき、バターを鍋に溶いて蠣を入れ、鹽胡椒にて味をつけて前の玉子の中に混ぜ合せたのを、フライ鍋にバターを少し溶かした中に流し込み、適當の形にして包みます。

◎タルニップス

は中位の蕪をとつて皮を剝て縱に五つか六つに切つて湯煮して、十分柔かになつた頃鹽、胡椒にて味をつけ皿に盛つて蠣ソースをかける。

◎蠣ソース

これはフライ鍋にバターを溶いて、蠣を入れて今迄作つた料理の殘つた汁があれば、それも皆加へて鹽胡椒でほどよく味をつけたのを煮上つた頃、少量の米利堅粉を湯で淡く溶いたのを注ぎ込みてよく混ぜ合せ、少しドロ〳〵となつた位を度とし火より鍋を下す、このソースを前の蕪にかけて出す。

◎蠣ロール

これは食パン半斤を、皮を去つて四角に切り、中央の上より七分通底に達せぬ樣繰抜き、その繰抜いたパンで厚さ二分ほどの蓋を切つて置き別にバターを鍋に溶き蠣を入れて水を加へ、（蠣一合に水五勺の割）鹽、胡椒で十分加減して蠣を別の皿に引揚げ置き、また別の皿にバターを少し引いてパンを乘せ、此パンの繰抜いた穴へ八分目程蠣を詰込んで、上より靜かに前の汁を注ぎ込んで蓋をして、天火にかけて燒く、別に玉子の白味を泡立せたのをパンの上に塗り、また少しく焦げる程に燒いて皿に盛る、黄味を刷毛で塗るのが普通であるがフライに黄身を使つたその殘りの白身を利用する。



雪の日の思出

森英子

今日は終日雪降りしきりて、短かき日のいとゞあわたゞしう、暮れはてし心地して、妹の被布も思ふ半ばも出來かねし故、燈火近く針箱持ち出しきたれど、烈しき寒風につひしばしと、またも火燵に親しむなりけり、屋外はいと靜かにて、雪はいやましふり積るらむ、折々遠く近く雪折の音きこゆるのみ、暖かき火燵の情けに引とめられて物縫ふもゝのうくなりて、我から招ぎしつれ〴〵は、一年まへの悲しき思出の夢を繰り返すなりき。

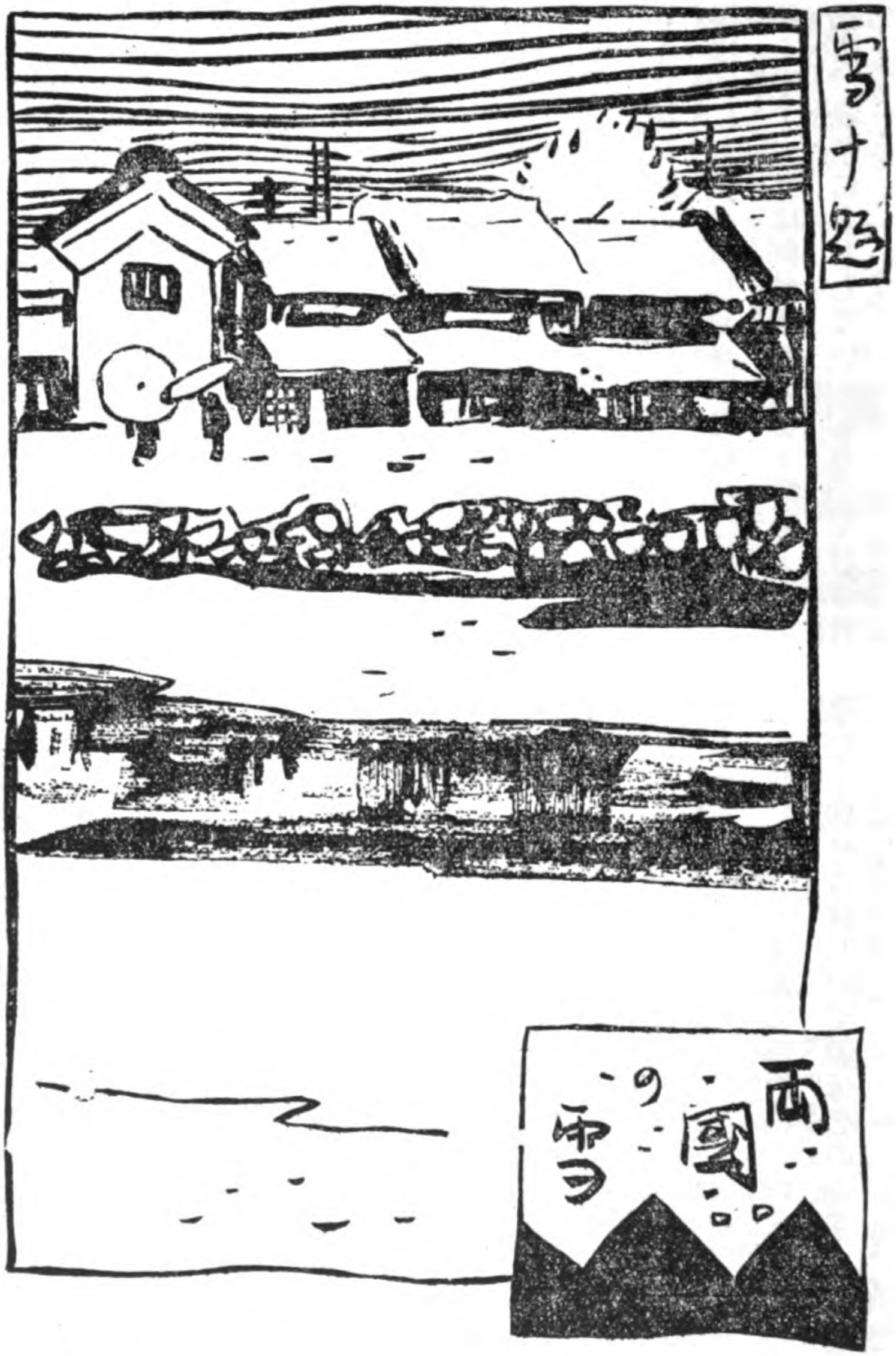
手近き文庫開けば、なつかしき日記帳あり、見るも悲しき思出の記なり、こは妾が過去の冬、さる大家へ夫人づきとして上りし折の、日常をありのまゝ書き連ねしものにて、終を忘れ得ぬ涙の種なり。行儀見習の爲とはいへ、初奉公の辛さはいかばかりぞと、み情溢るゝ父上母上の膝元はなるゝ折思はず涙を落とせしが上りて見れば餘りに優しき夫人の御情けに、さのみ心細き事もなく、奥樣のやさしう物仰せきけらるゝ時は、何となく嬉しくてまめ〳〵しく働き、おほゞへもいと目出度かりし、されど馴るゝに從ひ、たゞ何となく物足らぬ心地して、淋しき事どもありけり、かゝる思ひは皆日記にかき收めたり、しばし續く雪折れの音、それも止み再び元の靜けさに返る日記をひらけば紀念の白梅もとのまゝなれど匂ひ失せて淋し。

奥樣は初めて見まゐらせし時より、失禮ながらまことの姉上の如き心地して、其お情け深き御性質、御優しき御樣子、美しき御容姿、妾はかゝる御方に永く〳〵仕へ度ものと思へり、品よき丸髷に緋の手柄艶やかなる黒髪にはえて、水も滴るばかりなり、少しお顔色は

惡しけれど、白き頰に時々上氣し給ひて、櫻色なす御麗はしさ、御年は廿六とか承はれど、それ丈に見る人はよもあらざるべし、奧樣はお子樣おはさぬ故、かくまで初々しく見え給ふにやと、口辷せば、二十も三十も一度に年寄るともよければ、一人子寶の欲しきものよと打笑ひ給へど、沈と何やら思ひに沈み給ふなり、其御肩のあたり、いま少し肉付き給ひなばと思はるゝ程、痛々敷にお身のお弱きにやと伺へば、身體はいと健やかなれどゝ、多く語り給はず、妾は奧樣が晴れやかなる御顏拜すが何より嬉しきなり、されどとかく沈み勝にておはせり、心おきなき君に仕へまつる身の幾年住み馴し我家にもまして心安く暮せど、思へば妾此家に來りてより、未だ十日ばかりにすぎず、其十日目の朝、突然奧樣は今日の午前十時二十分の列車にて、伊香保に行かんと思へど、御身はいかに、同行して給はるやとの仰せに、いたく打驚けど、何故さばかり忙しくと問ひまゐらするひまもなく、何處へなりとお供致しますると申上、してお日數はと伺へば、日數は定めず、當分は歸へらぬつもりなりとのお言葉に、さらば御用意の程もと申せば、昨夜已に整へたりと、押入開けて見せらる、早く寢よと仰せられて妾が寢入し後にて遊ばせしか勿體なしと涙こぼれぬ。

髮結ひ、衣着更る程に、はや三臺の俥は玄關に來り待つ、手荷物乘せ、奧樣、續いて妾も打乘れば、婆やが敷臺に手をつきて御丈夫におなり遊ばして、お早くお歸り下さるやう、と其眼は涙にうるめるに、婆やさんは、何故湯治にいらせらるゝ位にて、かくまで悲しむにやと、不思議の思ひ、お美代さん何分賴みますと妾に言葉かけられ、これに答へんとする間もなく、奧樣が、旦那樣へはお前から宜敷云つてお呉れと仰せらる、下より梶は上りて、勢よく俥は走り出づ、妾は俥の上にて今奧樣が旦那樣と仰せられしにて心づきしが、旦那樣とはいかなる御方にや、一度もお目にかゝりたる事なし、御公用にて御遠方の地に留まらせ給ならんかなど、思ひめぐらしつゝ、夢心地にゆられて停車場指して行きぬ。

日和打續くまゝ、珍しき所も大抵見つくして、伊香保の地を踏んでより、はや七日をすごしぬ、今日も天氣晴朗、梅匂ひて何處ともなく鶯のこゑ聞ゆ、昨日にもまして心地勝れておぼゆと仰せらるゝに、此上なう嬉しくて身も心ろも輕々とせし心地す、お琴の塵打拂ひ、一曲お願申せば、お前の好む千鳥をと彈じ聞かせ賜はる、妙なる御奏で振りは、玉の音ころばして聞あくる事なし、且つ其お姿の床しさは一入にして、哀れ旦那樣の御覽あらばと、ふとよしなき事思ひ出しけり、千鳥の曲も



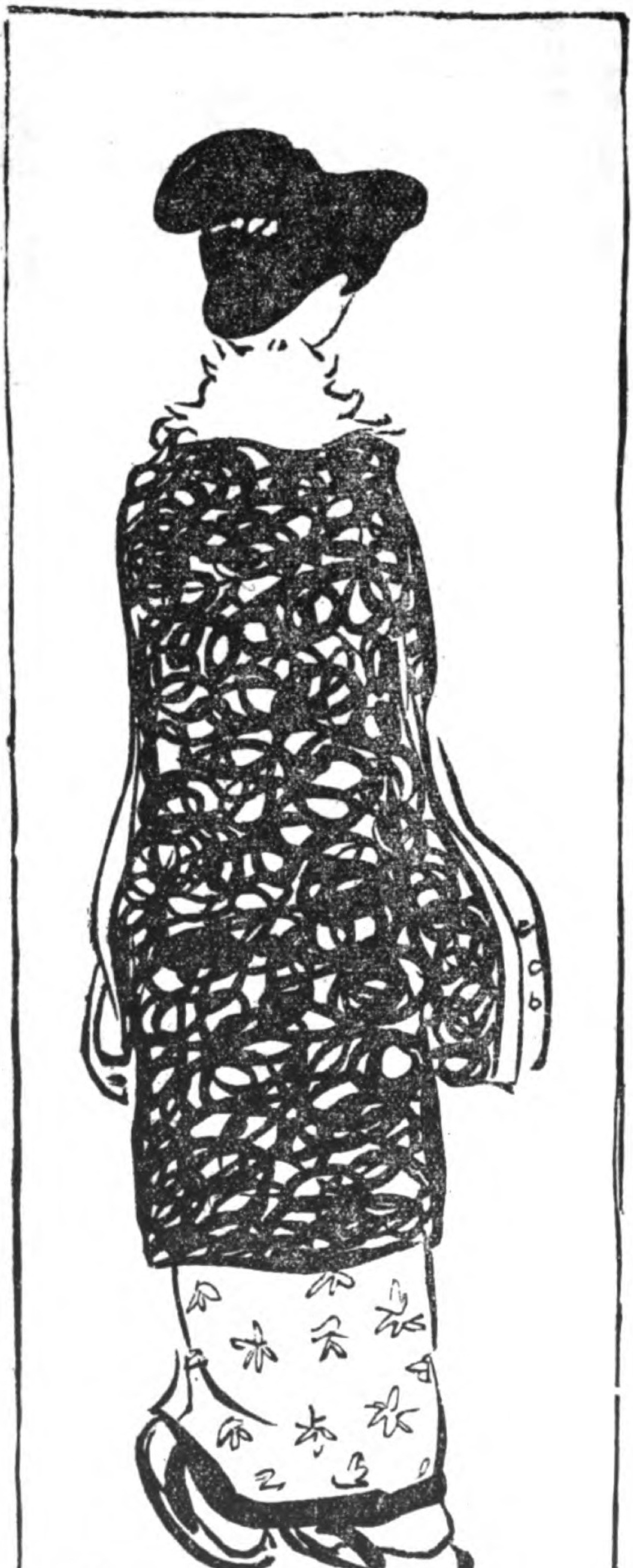
はや終りて、靜かに爪納め給へる奥樣は、お羽織更へられつゝ、今日は少し暖かきやうなれば、いつぞやお訪ね下されし千枝子夫人を、福富樣におとづれ來たければ、留守居してたまはれと下り行き給ふ、後にはお手活の白梅の香、清くたゞよふ、靜けさを破て階段を上りくる足音に、振返へれば女中を先にして上りきたる老婆を見れば、御本邸の婆やなり、餘りの事に呆れ惑ひたるが、婆やは女中の退くとゝもに、奥樣はときく、奥樣はいまお友達のお宿へお出なされしが、婆やさんは一人でこられしやと驚きの目を見張れば、餘り口惜事になつた故、奥樣を迎ひに參りしなり、といふ妾にはさつぱり解からず、いかなる事が起りしやと問へば、婆やさんは膝を進めてお前樣は何も御存じなからんが、奥樣は誠にお氣の毒なお身におはするなり、奥樣は高子樣と申て、私は御幼少の時より乳母としてお育て申たれば、我子にもましていとしく、父君母君が蝶よ花よと愛でいつくしみ給ふにもまして、孃樣可愛ゆく、行末幸多かれと祈りしに、御幸福なりしは僅か七才の御時までにして、孃樣が學びやに入給ひし春、ふとしたる御病にて、母君は愛孃に心を殘して亡き人となられ、其哀別の涙かわくひまもなく、二年の後父君も亡せ給ひければ、哀れ孃樣も全くの孤兒となられぬ、此時母君はいませど少しも優しき御情けなく、御痛はしき餘りお許しを得ていぶせき我家へおつれ申、この伏屋にて孃樣は御成人なされしなり、元より身分ある方の孃樣なれば、自ら備る氣品は美しきお姿をいよいよ麗はしくして、村の小町との評判高くなれば、此婆の鼻も高く、いかにもしてよき御縁邊をと思ひ居る中、ある夏のこと、程近き何樣かの御別莊より、お使ありて家の若樣がこれ〳〵仰せあるが、御許の心はいかにと、孃樣の御緣談、さくも嬉しき御良緣、先樣でも大家の令孃と御承知にての御申込とか、此旨孃樣へお話して、お實家の母君にも申上しに、孃樣はまだ早しと仰せられしが、義母君のおすゝめにて遂に目出度お輿入、私も安心せしものゝ、お仕度の餘りにお粗末なりしには誠に情けなかりし、お輿入後當座は何事

もなかりしが、否お仕度の事より辛き思ひを早くも知り給ひしなれど、さる事は一切み心にとめ給はず、お姑君大切に旦那様へよくお仕へなされど、旦那様は聞くと見るとは反對にて、悲しき事には外にお妾多く、蓄はれて、奥様の眞面目なるは面白味なしとて、お出なされて幾日もたゝぬに、はや家を外になさると承はりし時の此胸を痛めしはいかばかりなりしか、心配しても効なき事をと、奥様は



かへつて私をなぐさめられ、其中にはと忍びがたき御辛抱も、はや七年となりし今年、意地惡きお姑様は、今に子なきは嫁の用をなさずとて、屢々御離縁のお話しおこり、其度に私がよきやうにとりなす、苦勞は一通ではなき事なり、此地へいらせられしは奥様の御運命の定まる境にて此温泉からお歸りなされても、お子供さんの出來ぬ時は御離縁となるなりと、鼻打かんで涙を拭ふ、この話にて奥

樣のお身の上もやう〳〵推されたり、淋しき御樣子も、お胸にもだえあらせられればこそと、むせびくる涙をこらへて膝を進め、婆やさん先刻大事起りしと云はれしは何事と問へば、實は妾の奴がとう〳〵這入込んで了ひしなり、されば此際少しも早く奥樣お歸なされねば、おために惡からんといと小ごゑなり、折から人の上りくる音に、話を切ればまあ婆やどうしたのと、呆れて奥樣のとひ給ふおこゑ、お顔見るさへ悲しくいとゞ胸つぶれぬ、妾は只一人欄干に凭れて聞くともなく筧を傳はつて流れ入る湯の音を聞て居ると、谷底深く落ちて行くやうな氣になる、淋しい夕暮であるよ、遠近に燈火が點く密談があるとて、奥樣を誘ひ出したる婆やさん、早く歸ればよいに餘りつまらぬ事お聞せ申して、御心配を增すやうな事して呉れねばよいにと、うつとりと見下ろして居ると、お歸り遊ばせお寒ういらつしやいましてしようなどいふ聲が遠く聞える、お歸りかと階段の上までくると、はや奥樣先に上り來らる、只今！　淋しかつたでしやう、と常にもなく御機嫌麗はしきに、胸撫下ろしておふとんを直す、三人樂しく夕餉を終り、さま〴〵のお話して九時頃皆寢に就く、今宵ほど面白く覺えし事はなし、何となく嬉しくて氣もかる〴〵奥樣のお肩腰かな、夜着おほひてさし上るとき、お頭の金簪ぬきとり給ひてこれをお前に進げやうよく世話して下さる故と、妾の手に乘せらるゝに打驚き、勿體なしとおことわり申せば、人の好意を無にするは失禮なりと仰せらるゝに、是非なくお受はせしものゝ、嬉しくもあり又異なる感じも起りて、しばしは光りかゞやく簪を見つむるなりき、折角のお志故、有難くお禮申上て後、自分の床に入りて前後も知らず寢入りけり、ふと耳元にあわたゞしき聲するに、何事と飛起くれば、婆やは奥樣のお姿見えずと聲打振はして立ちつ居つせるに、妾は一時に動悸の高まるを覺えてまづ宿の人に告げんと、階段下るも夢心地にて下に至れば、宿の者も起出でゝ何やら語り居たりしが、妾を見ると、今此處の雨戸と庭の折戸が開け放しあるため、大騷ぎを初めしなりと云ふに、實は我が主人の姿



が見えませぬのでといふ間も、心せき素足のまゝ、折戸より駈け出せば、宿の若者も後追ひてきたる、まだ明けやらぬ曉の暗を照して、提灯の光り一つ二つ見ゆるぞ淋し、二月十日の朝日麗らかにさし入る溫泉の二階は、きのふにかはる悲慘の修羅場、奥樣のお遺骸を守りて御遺書を抱て、二人は聲を惜まず泣伏しぬ。

哀れなつかしき奥樣は二月十日の朝まだき、我から世を短かくし給ひしなり、其御心根やいかに、浮世の辛さくるしさは轟きわたるくろがねの車の響も、露恐ろしと思ひ給はず、レールを枕に美しきお身を橫たへられし其有樣、一年をすごしゝ今日までも夜每の夢に通ひて悲しさいはん方なし、雪の夜は更けていと寒し。

鶯、梅、雪

金子薫園

○

勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかがこたへむ

紀貫之の女

之れは拾遺集の雜の部に「よみ人知らず」として出て居る歌で、詞書に「内より人の家に侍りける紅梅をほ(欲)らせ給ひけるに、鶯の巣くひて侍りければ、家のあるじの女、先づかくぞ奏せさせ侍りける。」とあつて「内より」は内裡よりで、當時の帝即ち村上天皇が、貫之の女の家の紅梅を御所望になつた所が、丁度鶯が巣をくつて居つたので、家のあるじの女即ち貫之の女が、左の如き歌をすぐさま詠んで奉つたと云ふのである。

歌の意味は、勅命で何とも恐れ多いことではありますが、此紅梅を差し上げて、鶯が若し自分の宿はと尋れた時には、何と答へたらものでせうか。差し上げるに、もとより異存など申すべき筈はありませぬが……と云ふのである。所が物のあはれを深く解し給へる帝は早速御沙汰止みになされたと云ふことである。「鶯宿梅」と云つて、有名な傳説になつて居る。

○

何事の腹だゝしかる折にしもきけばゑまるゝ鶯のこゑ

小澤蘆庵

飛んで徳川時代に移つて、此蘆庵の歌が目に留まつた。蘆庵は、成るべく平たく詠むやうにと、俗語を歌に入れて卑俗にならぬやう工夫した人である。すつきりとした自在の詠み振りを喜んだ。此歌なども、確かにその傾向がある。

歌の意は、何んなに腹が立つことがある時でも、鶯の聲をきけば、自然に笑まれて來ると云ふのである。其聲の優しい和かみのあるのを讃へて詠んだものだ。初春の心持が自然にあらはれて、よい歌である。併し今一歩下ると、卑俗で、狂歌めいたものになつて來る。自在と云ふことを唱へて、究屈の弊を除かうとした點は、大に解すべきであるが、此の詠みぶりは、餘程氣をつけないと、歌だか何だか分らぬものになつて了ふ

○

鶯は小さき鳥の何處にか春をふくみて告げわたるらむ

黒澤翁滿

鶯は小さい鳥でありながら、何處からまあ春を口に啣へて來て、その啼く聲にそれと廣く報らせることであらうかと云ふ意。「春をふくみて」と云ふ言ひ方が、新しく目ざましい。鶯を一名春告鳥と云ふ所から考へついた着想であるが、新しく詠みこなされて、少しもわざとらしい

味が無い。一寸西洋の詩にでもありさうな趣が出て居る。

○

吾妹子が寝くたれ髪を朝な〳〵とくも来てなく　香川景樹
鶯のこゑ

「吾妹子」は自分の愛する女を親しんで呼ぶ場合に用ゐられる辞で、その寝て乱れた髪を毎朝解くと云ふことに毎朝疾くと言ひかけて、鶯が毎朝早く来て鳴くと云ふ意である。即ち「吾妹子が寝くたれ髪を」は次の句を起す序詞と云ふもので、単に一首の飾りであるに過ぎない。鶯のこゑに、なまめかしい、艶な句を添へたものである。

○

さばかりのわが身じろぎにかげうせて隣の聲に　大隈言道
なれるうぐひす

さばかり即ちそれ位僅かな身動きをしたのみでも、鶯のかげはもう消え失せて、隣へ行つて鳴いて居ると云ふ歌の意だ。鶯の小心な敏捷な様子がよく寫されて居る。「隣の聲になれる」とは、言ひ廻しがいかにも巧みで、瞬間の動作が、此句に活き〳〵と動いて居る。全體が生動して、作者の位置と鶯の聲とが、しつくり合つて、調子がよく其の場合の余韻して居る有様を傳へてる。此作者は當時新しい詠み振りを企てた人で、秀でた作が多い。此の鶯の歌など、古今を通じて、有數なものであらう。

○

おりたちて朝菜あらへば加茂川の岸の柳にうぐ　蓮月尼
ひすの啼く

加茂川の水際へ降りて朝菜を洗つて居ると、その傍の柳でうぐひすが鳴くと云ふのである。ありのまゝの景色で、初春の朝の感じがよく出て居る。朝菜と加茂川の水の綺麗なのと、よく調和して、川ぞひの瀟洒い柳の木に鶯が鳴いたと云ふのも、其辺りの朝の空氣に響きがよい。尼の歌の中でも秀れた作として、よく人の口に上るものである。尼の清く美しげな姿かたちが眼に見えるやうで、作者と作物とがぴつたり合つて、心持のいゝ作である。

○

うぐひすはうらみがほにも啼きにけり折りしあ　落合直文
とある梅の下枝に

之れは説明するまでもないが、鶯が梅の木の折つたあとのある下枝で、残念らしい様子をして鳴いて居ることであるとの意。「折りしあとある」と云ふ四句が一首の活らき場である。才のある歌方だ。

○

しめ野ゆき紫野ゆく行人にあられふるなりきさ　與謝野晶子
らぎの春

「しめ野」も「紫野」も京都の郊外に在つて、昔から歌に詠み込まれて來た名所である。二月の春寒きころ、此のしめ野を行きむらさき野を行く人にあられが降ると云ふのである。「きさらぎの春」と云ふので、「あられ」にゆかしみが據はつて「しめ野」や「紫野」やに好い調和をなして居る。單に冬と云ふことであつたなら、全體のゆかしみが缺けてこれだけの感味を覺えさせまい。「きさらぎの春」と云ふので、始めて一首が動かすことが出來なくなつて居るのである。

蘊籍な、古雅な匂ひのする作。

○　　窪田空穗

二月の日天に夢みて夢のかず落し〻と見る白梅の花

二月の或る日、天上に夢を見て、その夢のいろ〳〵の落ちたものが、白梅の花のやうに觀られると云ふので、梅の花を淸い高いものに擬らへた。それから、夢を形のある珠の如きものに假定しても、また形の無い氣體の如きものが地に降つて、始めて梅の花となつて現はれたと觀てもよろしい。「夢のかず落し〻と見る」と云ふ點の着けどころが面白い。梅の歌の中で、確かに異色のあるものだ。

○　　尾上柴舟

何ならぬもの〻ひゞきも興ひきてゆかしき春の地となりにけり

何と云ふ定つた物でない音までが、面白味を帶つて、ゆかしい春の氣は地上に滿ちて來たと云ふのだ。小川の流れの音、草間をわたる風の音、その他之れと云ふ物でない音までが、春の氣に融けて、冬の凝り固まつた境から離れた、柔らかい暖かい心持を傳へたと云ふのである。春が來た喜びが、其の陽氣な調子の上にも明らかに出て居る。浮かれ出しさうである。

○　　水野葉舟

春立てばその名も人も忘れはてしむかしの里の鳥の音のする

春が來ると、自分がむかし住んでゐた里の懷かしい人の名も、又何んな人であつたかも全く記憶から離れてゐた處の事が、鳥の聲で、はしなく想ひ出されると云ふのである。鳥の聲が、むかしのおもひ出を呼ぶと云ふのが、懷かしみを覺えさせる。夢のやうに暖かく、ほのかな作である。

○　　松尾芭蕉

水上はうぐひす啼いて水淺し

水上の水の淺いあたりに鶯が啼いてゐると云ふ景色。平淡な中に、春の初めの景氣が眼に浮ぶやうである。畫にかいて、之れだけ落ちついた趣は出し難からう。

○　　與謝蕪村

うぐひすや家内揃うて飯時分

朝の事、家内打ち揃つて、飯を食べる頃に鶯が啼いたと云ふのである。鶯を聞いて、その啼く方に眼を向けた様子が見えるでは無いか。之れは無論朝鶯に違ひない。春めいた朝の光景が見えるやうである。「家内揃うて」と云ふ重方と、「飯時分」と云ふ砕いた言ひ方を流石に面白いと思つた。

○

崖急に梅ことごとく斜なり　　正岡子規

崖が嶮しくつッ立つて、そこに生えてゐる梅の木がのこらず斜になつて、花をつけて居ると云ふ意。崖の急なのと、梅の斜なのとが調和して、一風變つた景色を眼の前に現はさせる。梅の句として、奇拔な作であることは言ふまでもない。

○

島崎藤村

春は來ぬ
　春は來ぬ
淺みどりなる新草よ
とほき野面を畫けかし
さきては紅き春花よ
樹々の梢を染めよかし

春は來ぬ
　春は來ぬ
霞よ雲よゆるぎいで
氷れる空をあたゝめよ
花の香おくる春風よ
眠れる山を吹きさませ

之れは此の作者の第一の詩集「若菜集」の中に出た作の一つで、優しい雅びやかな中に、新しい味ひの籠つたものである。二節に分れて居るが、始めの一節は、未だ生えたての淺緑のわか草に、遠い野のはて迄も青々と染めよと云ひ、又春の花の紅ゐなるが咲いて樹々の枝の彩りをあかく染めよと云つたので、あとの一節は、霞と雲とに凍つて居る冬空を早く暖めて春の心持を與へて呉れと云ひ、又春風に眠つて冬籠りなして居る山を吹きさましてくれと云つたのである。

今日から言ふと、幼稚の點を免れないが、その當時の作として、解すべきものがある。言葉が平たくて無理がなく、調子の落ちついてゐるのは、さすがに此作の妙味のあるところだ。

之れが手初めに次回から新體詩の短いものを一篇若しくは二篇出すことにする。紙面に制限があるから、成るべく短かくて面白いものを撰ふことにする。

遞相官邸の一時間

朧　月

△應接室の裝飾

或日、用事が御座いまして、木挽町の遞相官舍へお伺ひ致しました。お邪魔する積りではなかつたのですけれど、給仕の方が、どうぞお上り下され、帽子はこちらへ、外套もと言つて案内せらるゝまゝ、つひ上つてしまひました。

寒い日で御座いましたが、客室に通りますと、電燈がぱつと點き、煖爐がぱち〳〵と勢ひよく燃えたので誠に氣持よく感じました。

入口の高い戸棚には、玉や水晶の彫刻がづらりと列べられ、外に種々結構な品が一杯入つて居ります。

一方には春畝公の遺墨と、佛畫の大幅が三對飾られ其下に鍬形の前立した兜が嚴めしく据ゑてあります。

其外錦繡羅綾の眼も眩むばかり鮮やかな中に、ソファーやアームチエーヤなどが參差と置き列べられてございます。暫らくお待ちして居ると、男爵夫人は、衣ずれの音しとやかに這入つて來られました。

叮嚀にお辭儀をして、一ト通り用向を申上げると、夫人は一々お聞きになつて、輕く會釋なさいましたが、流石にやさしい中にも威嚴のある方と、深く敬服致しました。やがてお茶やお菓子が運ばれ、それより種々お話を伺つた中に、一寸面白い事もありますから、茲に少しく記します。

△骨董癖と酒の味

「此の兜は明珍の作と云ふて近頃手に入つたのでございますが、なるほど結構なものゝ樣ですが、實際どういふ所がよいのですか、私共には少しも判りません」。

「後藤は大の骨董好で、何かと取り集めては居りますが、此頃は似せものゝ上手なのが澤山あるさうですから、ひよつとするといかさまものを珍重がつて居るのかも知れませぬ」。

「御酒を召上る方でも、本統の味を知るまでには、宿醉をなさるやら、それはもう色々のひどい事に出會つてからでなければ、眞實にわかるものではないと仰しやるやうなもので、隨分辛い目に逢はなくては本統の味は解らぬものでございませう」。

△男爵の園藝趣味

それから園藝のお話を一寸伺ひました。

「臺灣の胡蝶蘭は大層美しくて、故の祝さん（男の後を享けた民政長官）などは隨分熱心にお仕立でしたが、主人は植木類は少しも構はない方でございます。折々植木屋などに頼んで世話をさせ、よい盆梅に育つたと喜んで眺めて居る事もありますが、よく枯らすのでございます。伊東（巳代治男）さんなどは、それは御熱心なもので、風の暴れる夜などは、植木がどうかなりはしないかと、態々起きて御覽になるとか聞きますが、これ程に致さなければ、迚も育てられないでございませう」。

△御繁忙の樣子

男爵は寫眞でお見受け申すよりも、ずつと太つて强さうでゐらつしやるが、それでも夫人のお話によりますと、何分多忙で居られますから、近頃は大變お弱くお成りになられたさうでございます。

「主人が臺灣に居ります頃は、初の中は何やかやと仕事があつて、非常に多忙でございましたが、終ひには事務の振合が變つて、局長がめい〳〵で分擔されることになりましたから、割合に樂になりました。それが内地へ參りますと又忙がしくなつて、此頃では規則立つて食事をすることも殆どありません。お客樣はもう疾くに召上つて來て居らつしやるのに、私共はまだなかなか頂かれないといふのは、もう毎々の事でございます」。

「面會時間なども、以前は定めて置きましたが、此頃はもうそれもやめました。何分遠方から態々來て下さる方々もあるのに、こつちの勝手ばかりも言つて居ら

れず、又時間をきめたところで、お約束を缺くやうなことがあつてはなりませんからと申すのでございます。」

△一週一度の轉地保養

「兎に角色々仕事がございまして、始終身邊に鞄を幾つとなく陳べて、何かを致して居るのですが、さういふ風にして居て、どこかへ旅行することになりましても兼て申し聞せて置くでもなく、ふと時間表を見て、これから直ぐにと、不意に出かける流儀ですから、私などもなか／＼落着いては居られません」。

「それ故夜になつて今日もこれでやつと、どうにか用が濟んだと思ふと、もうがつかりして了ひます」。

「こんなに忙がしいのや、定刻に食事ができない事などが、矢張り身體にいけないと見えまして、時折健康を損することがあるものですから、一週一度位葉山へ參つて保養するのですが、此處は生活が全く一變して氣が暢び／＼致します」。

△險しい道がお好き

主人はあちらでは少し氣分がよくなりますと、直ぐぶら／＼散歩に出かけます。そして妙な氣象で、樂な道路と險しい道とがある場合には、平坦な道を取るのが嫌ひで、ちと病後には無理だと思ひましても、此處を一つ行て見やうかなどゝ云つては、又氣分を惡くして了ふことがよくございます」

いろ／＼とお話を伺つて、常に忙がしくて居られる男爵をお助けなさつて居らつしやる夫人も、並大抵の御苦勞ではなからうとつく／＼感じました。

又お話によると、お子樣方には色々雜誌を取つて見せて居られるさうですが、口繪が美しいと、そればかりを繰り返して居て、中を見ないのには困ります、とて、笑つて居られました。





濱に避寒する日記

あそば

昨夜からの行燈がぼんやり灯つて、竹に雀を描いた襖の模様が、下の方ばかりかすかに見える。
もう何時なんだらう。此頃はいくら寢ても夜が明けなくていやになつてしまう。
なんだか陰氣で嫌だから、行燈を消しちまうと思つたが、朝の熱を見てからにせうと、驗温器を枕の下から取つてはさむ。
やう〳〵下で起きたやうだ。戸の明く音と一緒に留吉の思ひきつて大きな欠伸の音がする。驗温器を行燈に差つけて見ると、六度八分、まあ今朝はひくい事。

寢衣の上に羽織をかさね、白の小さな肩掛をかけて海に行つて見る。もう自分のつく息がつめたい、この暖かい濱に。霜の來るのも間がなからう。
日はまだ出ないので、後の方の森は、霧が一面に立つて、夢のやうに梢々をこめて居る。平磯の鼻から、大平山の見える彼方まで、廣い〳〵一帶の長汀に、立つ人とてはたつた一人、今たどつて來たしつとりと濕つた砂地に殘る、千代田草履のあとを見ても、なんともいへぬ寂しい感が胸にせまる──なんだか私一人を此處に殘して、世の中はみいんな何所かに行つてしまふやうな──
紫といはうか紺といはうか、輝のある雲が、東一面を横に浮んで居る。それがだん〳〵淡い褪紅色をおびて來て、其面積が廣がると、パッと蕾が開いたやうに赤いものが、地平線の上に出る、と浪も岩も砂も、そこらに落ち散つてる貝殼も、皆赤く〳〵輝いて、大きな松の木は、ヨサ〳〵とした紫色の影を、輝く砂地に投げて居る。

私は毎朝、此朝の海を見る毎に、莊嚴だとか、偉大だとかいふありふれた形容詞なんかで、此影を叙すのは、惜しい氣がして仕方がない。この間に受ける一種のインスピレーションは、受けた人でなければ、解らないものなのだもの。

少し砂地を歩いて、立岩の前まで來ると、大きな榮螺の貝殻を拾ふた、此貝にしては艶があつて美くしいさう〳〵此間の晩宿のお婆さんから聞いたつけ、此貝を耳にあてゝ、ぢいつと耳を澄すと、聞きたいと思ふなつかしい人の聲が聞える



んだつて、私がしたら誰の聲が聞えるだらう。私は濱の人達から、こんな罪のない。しかも神秘的な迷信を聞く毎に、それを正直に信じ得る彼の人達の、單純な心が、羨ましくてしやうがない、つひ此頃も、廿三夜樣だとて、宿の人達が、月の變形したのを誠心から手を合せて拜んだ時、ともにひれ伏して、拜むことの出來ない身が悲しかつた。

前濱の方で、ヤーイ〳〵といふ聲がするから行つて見ると、烏賊船が今出る所と見えて、辨天丸、福壽丸など、船の割合に名の恐

ろしいのが七八隻。赤、白、紺などの小旗が、朝の風にひら〳〵と動く帆柱の下に、たくましい赤銅色の漁師が、まばゆい秋の朝日をうけながら、何やら口々に罵り騒いで居るし、砂地には、歯を染めた海士の妻がいづれも表情に乏しい顔をして、忙しさうに、彼方此方を歩いて居る。

宿に歸つて來ても、前二階にゐらした橋川様がお歸京になつてからは、たゞならず淋しくなつた。前には一面識もない方だつたが、かうして都言葉なつかしい土地に來ては、どんな方でもなんとなく御なつかしいものだ。

「反響のない田舎の空氣を振動させるには、此聲でなくちや駄目ですよ」つて

　孤燈の下に端正す
　夜半の窓の影一つ
　天地寂たるたゞなかに
　泣きても慕ふ世々のあと

といつておきまりの校歌の一節を、聲はりあげて唄つてから、アハヽ……これが親不孝聲つてんでせうよ」など〻仰しやつて、よく笑はして下すつたあの方何時だつたか、新聞も來ず、見るものもなくなつて淋しかつた時、何か御本を拜借といふたら、これ面白いですよつて、貸して下すつたのは冒險世界。あゝあの方は、あゝまで暢氣でゐらしたから、少なくとも暢氣にしやう〳〵とつとめていらしたから、あれまでに早くよくおなりになつたんだらう。

九月半旬のむしろ暑い日に、ネルの單衣に、大きな絣の綿入羽織を重ねて、蒼白い、力ない身を、此宿に運ばれた時と、若々しい艶のいゝ顔色をして、短かめの小倉袴も小氣味よく、柏葉の帽子を斜にかたむけて、おやまた彼方で御目にかゝりませう御機嫌ようと仰しやつた一昨の姿と、これが同じ方かしらと思はれる違ひやう、あゝ羨ましい、あの方も私も同じ此病氣なのに、そして遲れていらしつたあの方が、先きに歸つておしまひなすつた。私などは何時になつたら歸れるんだらう。

午後廊下に出て海の方を眺める。冬期に向ふに從つて潮がひどくさして來ると聞いたが、成程もう此頃は晝の中でも、平磯の鼻の上まで潮が來るやうになつた。去年の夏、月のあくまで清い夜、兄樣と千代子樣と三人濱邊の散歩の歸りに、松林の側で兄樣にはぐれた時、似通つた白がすりの後姿をそれと間違て、千代子樣と二人、月が恨めしいまでに面をあかめた。あの岩の邊などは、眞晝の干時でさへも、たどる事が出來なくなつた。そして恐ろしく砕ける波の音や、眞綿をかけたやうな頬吹にも、春や夏には知られない荒凉の影がある。あの物を打ち破るやうな響、骨に沁みるやうな冷さ、あゝ海にも秋は深いのであらう。



道子樣と兄樣からは封書、橋川樣からは端書が來た、手早く端書の方から見る無事御着のしらせに、國民新聞を毎日送るとの事、赤門前などを讀むよりは、寧大に三面や四面を味はつて、寂しみの中毒をさけ給へ、などゝ書いてある

一寸御近づきながら、なか〳〵親切な方、これも同病相憐むの御心からかしら。あゝ、兼ねて勝氣だつた私も、かうまで人の同情を嬉しがるやうになつたのか、否、それよりは私は今、人の同情がなくつては一日も生きてゐられない氣がする。同情とはやがて弱者に對する聲だとすれば、私はいつの間にか、世の中の弱者になり終つてしまつたのだ。自己を客觀するの愉快だとか、現實を超絶する修養などゝ、口先ばかりでも氣强くいへた、あゝあの頃が戀しい。

道子様からのは、例の罪のない物語。順境に、悲しみといふことを知らずに育つた、美くしい人の、優しい面影が見えるやう。

――去る土曜の夜、母や從兄とゝもに、東橋亭に大隅太夫をきゝに參り候。油屋にてさん〳〵泣かせられ候に、例の口惡き從兄より、みちさんも人の惚話をきかされて、泣くやうになつたかな。などゝ、いたく嘲弄れ申候――

だつて。あの細そりとしたいゝ姿に、御召の半コートもおとなしく、引つめた、太輪の銀杏返しの頭を、鳥渡左にかしげて、淡桃色かなんかの手巾で、涙を拭く樣子が、まじ〳〵と浮んで來る。何時までも長く、印象が殘るやうにと、わざと最後まで殘したのは兄樣からの。――更けて行く我家の秋の音づれ、泉のやうにあふるゝ情ある御言葉――、小羊のやうに懐かしい嬉しい情に胸が躍る。美くしい感情の聲を通して、教訓をしみ〳〵と説いて下さる有難さ。

僕は所謂詩人の感覺の、鋭敏な情緒に動かされるよりも、常識の人の片言にも從つて、多くの人の樂しみを樂しみ、多くの人の憂を悲しむ人をしほらしい女と思ふ。平凡なアドモスフイヤの内に生きて、一日を、たゞ無事に終つたといふ、小さな事實を樂しむのも、亦、おもしろい人生ではあるまいか。

僕は、草も木もない荒れ果てた沙漠のなかに、血の色に沈み行く太陽をのぞんで、思ふ様、泣くか笑ふかして見たいと云ふ、御身の願を聞いた時、あの活々とした少女の美くしさを奪つて、それでも飽足

らず、尚、淡い、春の霞のやうに、やはらかだつたその胸をさへ荒し廻る、病魔の憎らしさに泣いた。

――し

あゝ嬉しい、有難い。こんなやさしい兄様に、慰められ、可愛がられて、それで死ぬのなら、私はこの上の幸福はないと思ふ。どうせ死なんて、王の死も、漂浪者の死も、死に變りはないのだもの。こんな事も思ふが、やつぱり私は癒り度い。癒つて生きて見たい。活き〳〵とした色で、得意の笑に誇る、若い人の姿を見ては、蟲の巣くふ胸を抱きながらも、尚、生きたいと願ふ。こんな矛盾は私にばかりあるのかしら。

早速兄様に手紙を書く。昨日の夕ぐれ摘んで來た、色も香も鮮しい野菊を封じて、總ては花に申しけましたから。この花の囁におきゝ下さいと、筆を擱く。書き終へて時計を見ると、やう〳〵七時、浪の音がだん〳〵凄くなつて來た。驗溫器を挾んで、昇つて來た夜の熱を見る、あゝ〳〵今夜もどれほど夜の長いことだらう。





人に誹謗された時の心持

日向きむ子

初冬の道灌山は痩て、骨もあらはな大樹の高い梢を遠い海から吹いて來る大空の風も、めづらしく今日は絶えて、碧玉の樣なそらの色は、遠く三河島あたりの青菜の畑の鮮な綠に映つて、春もしられぬのどやかな日の光は、水田の面に微笑してゐる。浮世を外の雅人ならば、南縁の柱に凭れて歌集にでも親みたい此頃をそれ大掃除やれ疊替へ、左官屋が來る、建具屋が棚を釣る、大工が來て物置を建直す、植木屋が入る、經師屋が來る、とり替へ引替へこの暮のいそぎに隙もなく品川の父上から新曲竹取物語が出來上つたから都合して與れとの電話がかゝつたので今日喜代さんを連れて行く日當りのよい二階の十疊にメリンスの大座蒲團を敷き、めいせんの羽織ふく／＼としたのを着て讀書して居られた父上は、二月振に訪ふた私を種々もてなして下さつた、すると父上は、「過日お前の事が日本新聞に出て居たが見たらうね」と仰つしやる、「いえ見ませんが何でせう」と申すと「さア又蛇の事だらうと思つてゐるとひどい惡口だ、何でも夫の留守に男をひき入れてゐると云ふ樣なひどい事であつた」と仰つしやる、驚いて早速その切拔を拜見すると「百花園の美婦人」と云ふ題の下に、晩秋の草花を婦人にたとへ、おさだまりの羞月閉花の形容詞で上げて置いて、だんだら下しの惡口、抑も私が日向家へ嫁したのは、井出の山吹黃金の糸で結すばれた緣なので、其後日物語が面白いと書出し、私の虛榮心を滿足させる爲に、夫が十萬圓の資產を烟にしたとか、家庭は荒び果てゝ枯野の樣だとか、產んだ子供は產みばなしで婢はなれた郭公が如何のかうのと、拙い文でこじつけの憎まれ口は、口惜しいを通り越して、いつそ馬鹿らしいが、見逃し

難い最後の一節、あらう事か夫の留守に某英詩人を馴れ馴れしく呼び入れて朝から晩までの詩物語、ある日突然の夫の歸宅に、逃る間もなく、あられもない大立廻りとなつたのとか、又は手に手を取つて雲がくれしたとかさも眞らしく書きたてゝある罵詈讒謗、むしろ大いに侮辱したものである、私は直に是から新聞社へ行つて息まいて見やうとおもつたが、そうしたところでかよわい女の、何ほどの滿足を得て歸られよう、こんな時こそ法律の保護にこの侮辱を雪がねばならぬと、七十路こえた父上に御心配かけるは不孝腹の立つのをじつと怺え歸へる、途々頭はぼうとして蒸風呂の内にゐる樣な心地がする、電車の中で熱い涙が一滴睫毛を傳ふて落ちた、兎角して漸く田端の宅へ歸り着く心の作用が、今朝の長閑さは跡もなく、暮をいそぐ日影淡く、枯尾花吹く風はたゞすさびぬ、子供等を入浴させて夫の歸を待つ間も、やるせない口惜さがひしひしと胸にせまつて來る、やがて御歸りの聲に玄關へポチ、メン、タマの三愛犬にまつはられながら機嫌よく歸つて來られた夫の顏を見ると、一時も早く話し度くはあれどかゝる事聞かすはよき妻のせぬ事を心靜めて入浴、食事、食後の樂しい時間の過ぎる迄、忍んで居ました、やがて子供等も寢床に就て、是からは讀書でもと云ふ時に、今日は斯く〳〵と彼の切拔を出してお目にかける、で、告訴すると云ふ事に就て夫の意見を伺ふて見る、夫は幾度も讀返して、成程これではとの賛成を得たので、いよ〳〵明日は鵜澤氏(辨護士)に托して誹毀の告訴を提起する事にした。

翌日は安息日、靈南坂の會堂へ夫と共に臨む、この日牧師の小崎弘道氏が地方へ出張されたのでグリーン氏が代つて說敎をされた、要領は世の中の事はすべて神の攝理のうちにある、淺墓な人間の心で量り知る事は到底出來ない、ゆゑに日々の出來事に就ても常に神の御旨を深く信じ、安心して正しき道を歩むより外はないと云ふ事であつた、あゝ何事も神の攝理！と思ふにつけて明日の事が胸にせまる、萬一彼の新聞を此處に會する人々のうち、見てゐる方があるとすれば、神を汚

す悪魔よと憎んで居られるかもしれぬと、から思ふと最早ぢつとしてゐられなくなつて小崎夫人に始終を話し事實のない事を皆様の前に立つて一應申述べて置きたいと相談すると、本當にする人はありませんから其必要はありませんと親切に慰めて下さつた、會堂を出てから夫の事務處



へ立寄り鵜澤氏へ電話をかけて時間の都合を問合せると、一兩日大阪に旅行との事傳が一日の事であるから待事にした、ほどなく、そこへ横田千之助氏が來られたので、此度の出來事を話して其意見を聞いて見ると、近頃の新聞紙は世間からあまり重く視られて居ぬから書た悪口も、取

消もそれほどの効力がない、殊に一般日本人が名誉と云ふ事をそんなに重く見ぬ樣であるからさほど力を入れる必要はあるまい、何、本當と思ふ人はありません、投つて置いたらいゝでせう。あなた許りではなし此頃は貴婦人達が隨分惡く書かゝれて居る、山脇夫人の事なども隨分ひどく書いてゐる。まあこんな新聞紙など相手にせぬがいゝでせうとの意見であつた、成ほど相手にせぬのは心の高い人の態度ではあるが、甚だしい侮辱を受けても、默つて居るから女の生命たる節操の事までも輕く見られる樣になるのである、それでは女の德は葬られて仕舞ふ、下田さんや山脇さん達が彼の位置にあつて何故默して居られるのかと私は不思議に思ふ位、まづ身にふりかゝつた此度の事はどうしても明かせずに居られないと自分は深く決心したのである。

翌々日は賴むで置いた鵜澤氏から主人歸宅の趣を知らせて來たので早速行く、やがて主人が出て來られた早速例の切拔を出して尋ねる、一體私の宅へ男の詩人など足ふみする人は一人もないのにさりとはあまりの侮辱、どうしても此儘には濟されませぬからといふ、鵜澤氏も快くうけひいて成ほど酷い、此頃の新聞は隨分ひどい、が殊にこれなどは甚だしいものですなと、同情して下さつた、で、兎も角その手續を賴んで歸つた。

捨兒の受る苦痛

養育院を訪ふた人の話に凡そ世間で捨てられた兒は、大抵が饑みて居る、其に寒が迫つて泣き泣き勞れた頃漸く人の目に觸る、交番へ走る、巡査が來る、警察へ連れて行く、警察には女は居ず、赤兒は此處でも泣ける丈泣く、泣いた處で乳首でも含まして置く位で他に方法が無い、今度は區役所へ移されるが、此處でも前同斷別に手當とても無い、其處等の隅へ捨放して、誰れもかまひ手が無い、あゝ何と云ふ苦痛な事で有らう、捨兒は親の温かな肌をはなれてから是れ丈の難關をくゞらねば養育院に來る事は出來無いので、養育院に送られて來る兒は殆ど死屍同然、顏色も無ければ息も絶々に乳を與へた處で容易には飮まず常の人間に歸復する迄には數十日の時日を費さねば成らぬのである、切ない事情も存在しやうが兒を捨てる親は先兒が是丈の悲慘な目に合ふ事を覺悟しなければ成らぬ、が兒の爲めにはむしろ殺された方が捨てられるより遙かに増しかも知れぬ。



妻を迎へて後の私の兄

千鳥女

先日私は遙々東京へ出て兄の旅行中嫂と二人で半月ばかり留守居をしてゐましたが、兄が歸つてくると氣がくさ〳〵しまして、其の夕刻、家へ歸へらうとして汽車に乘りました。で搖れる室の一隅に腰を掛けて居りますけれど、人の顔を見るのも厭やで、無暗に感情が亢りました。そして何うして兄は此頃私に對してあゝ冷淡なのかと、たゞ其の事ばかりを考へました。

こんな時には轟々といふ車輪の響や、人々の話聲は實に耳障りなもので、一層氣がいら〳〵します。見るともなく外を眺めると、冬枯の淋しい空の雲の色は妙に心を誘ひました。

けれど眼に入るは杜や林の單調な景色ばかり、何時か飽きて了つて、煩さい響や話聲の中で又考へ始めました。

あの優しかつた兄が、何うして近頃あのやうに變つたのだらう。旅行から歸つて來てからの私に對する仕打は、何う考へても以前の兄とは思はれない。嫂は決して私に氣兼をするやうな人ではなく、是迄私を眞とうの姉妹のやうにして呉れたし、又私も親身の姉を得たやうに何時も懷しく思つて居たのに、あの兄の態度は何うしたのだらうと、何も斯も厭になつて了ひました。

兄が獨身の頃は決して今のやうではありませんでした。全く優しい人で、父のない私には若い父のやうに思はれると常々友達にも誇つた位でした。實際父のやうに慕つてゐたのです。それが妻を迎へてからスツカリ樣子が變りました。もう何一つ以前のやうに優しくはして呉れませぬ。

兄の態度が不圖浮ぶと、口惜しくて憎らしくなつて了ひます。

「もう私は歸つたし、お母さんが淋しいだらうから一度歸る方がよからう。」

己れが歸つたからもうお前なんぞは居ないでもいゝと言つたやうな仕打なんですもの、母にかこつけて自分を歸さうとしたのだと思ふと一種の反抗心が起つて參ります。

その時は一圖に兄の家などに居まいと、口惜しまぎれに思つたけれど、何故私は默つて歸る氣になつたらう、何故何時迄も滯在して兄に復讐をしなかつたらう事の動搖は烈しく腦に響いて不快で堪らなくなりました。

上京する時にはたゞ若い嫂と二人で樂しい生活をして見やうと、そればかりを思ふて居たのに、とんでもないこと、全く人は當てにならぬと思ふて、がつかりして了ひました。

家へ着くと、もう十時近くでした。

「今時分歸るなんて、何うした事だらう。歸す兄さんも兄さんだ、若い女が淋しい處を夜になつて歸るなんて、萬一間違ひでもあつたら本當に何する氣だらう。」

と母が言ひますから、

「兄さんは私なんか、何うでもかまはなくなつたのですよ、もう嫂さんより外には心配な者はないんでせう。」

とせめて母に自分の不平を聞いて貰ひました。

「ほんとにひどい兄さんだ、何といふ仕打だらう！。」

「お前何うしたのだねえ、嫂さんと喧嘩でもして來たのぢやないかえ？」

母の言ふ事が、餘りにもどかしかつたので、何か言はうとたしけれど、俄かによして了ひました。母迄が自分の心を知つて與れぬのかと思ふと、何だか淋しくなりました。

「私はもう今日は疲れて居ますから、いづれ明日ゆつくりとお話しませう。」

苛々とし乍らもう何にも言ふまいと思ふて自分の居間に立つて了ひました。

兄は全く私を別物にしたのです。以前はよく面白い

事を言つては笑はせたりしたものだのに、嫂が來てからはそんな事は宛でなくなりました。話をしかけても、仕方なしに返事をしてゐるやうな風で、そして何か私を憚つてゐるやうな様子があります。

けれど私が外から歸へる時などは、門を這入ると快活な兄の笑ひと共に、嫂のつゝましやかな笑ひ聲が聞えます。それゆゑ昔の風は全くなくなつたのではなくて、たゞ嫂に對ずる時だけに見られるのです。兄の愛は、親にも自分にもなくなつて、たゞ嫂一人に注がれてゐるのです。實に言ふに謂はれぬ淋しさと、深い失望とを覺えました。そして兄妹などゝ言ふものも、何時迄も頼りには出來ないものだと染々思ひました。

親だの兄姉だのといふても實は離れ〳〵の自分勝手なものなんでせう。血を分けた親子の間でさへ、親の心は知る事が出來ず、子の心持も知つては呉れません。よし兄の事を話したところで、恐らく思ふ事が通じないでせう。ほんとに世の中は心細いものでございます。恁んな世の中に滿足して面白く笑ひ乍ら暮す人は幸福でございます。あゝ自分はどうしてかうなんでございませう。實に情けなく思ひます。

流行の肩掛

今年の肩掛けの流行を見ると、中以上の社會では、毛皮若くは鳥毛といふところに進んで居る、毛皮と云へば臘虎が最上であるが日本では甚だ拂底で容易に手にも入られば價も非常に高いので、今のところ獺絨が第一になつて居る、肩掛一枚分が先づ百圓から百五十圓ぐらゐまで、仕立上げると附屬品其の他でもう二三十圓かゝる、次は駝鳥の羽毛で、狐の尾のやうにふつさりと長く一つの細い心に植附けられたところは、肩掛けといふよりも頸卷といふ方こ適當である、眞白な柔かい羽毛は如何にも温かさうで、頗るハイカラである、色は白の外黒、濃い鼠、納戸色、黒に白毛の混つたものなどある、價は九圓以上三十圓ぐらゐ、之と竝んで好手の多いのは、獺及び佛蘭西貝のマント型になつたもので、價は十一二圓から二十四五圓である、野田の肩掛になると、型は先年と大差なく、生地は柞蠶絲で作つたシヨール、黒天鵞絨、繻子、羽二重の類、絲の裝飾は生絲の儘で織つた細いリボン風のものに、ミシンで種々取つたのが多く、上等になると之に草花の刺繍などが施してある、價は二圓四五十錢から十圓ぐらゐまで、手袋は指のないのが廢れて、指貫大小や獸皮の毛で細く編上げた指のあるのが流行る、價は一圓五六十錢から四五圓までゞある。

人の性質と配偶の選擇

吾人々類には種々異りたる天賦の性質あり、科學上この性質を大別して四種に區別せり、第一多血質、第二神經質、第三粘液質、第四膽汁質是なり、勿論これは其の大體の性情によりて、區別したるものにして、素より精密なる研究を經たるものにあらず、且つ又其の性質とても一個人に特有せるものにあらずして、數種の性質を兼有するものもあれども、まづ大體の傾向によりて其の特質を記すれば左のごとし、

◎多血質

此の性質の特點は皮膚赤く毛髪漆の如く黑く、敏捷活潑にして毫も憂愁の狀なく、其の美點は血氣盛んにして氣輕く、多くは樂天的にして、且つ現在の生活を樂しみ、博愛にして常に交際を好む風あり、されど其の缺點を求むれば、時に或は輕擧浮薄にして志操堅固ならず、爲めに屢々外物に刺戟せられて、一定の操守に乏しきの嫌ひあり、而して此の種の性質は滋養物の吸收最も盛んにして、血液に富むを以て、動もすれば腦溢血充血等の疾病に罹る事多く、肺及び心臟を侵され易く、概して長病少く、急激の致命症を發する事あり、されど多血質は平素極めて健康なるものなり、且つ又多血質中には、往々雄辯なるものあり、されば其の不斷の攝生法は、成べく強き刺戟物を避け、熱度の高き飲食を禁じ、發汗する事甚大なる動作、幷に精神の激昂等を避け、及ぶべき丈け精神を沈靜にして、外部の騷擾に關る丶事を避くる様努めざるべからず、其の食物は、脂肪の多き肉食よりも淡白なる菜食をよしとす。

◎神經質

神經質は多血質と稍や反對なる性質にして、一般に寡言にして沈默、多くは憂愁の氣を帶び、人生を悲觀する場合多し、而して一度び憂愁に沈むときは、先より先を案じ出して、其の憂愁の範圍を擴め、容易に斷念する事能はざるに至る、而のみならず、其の過度の憂慮は、まづ其の精神身體に影響を及ぼして、種々なる習癖を生ずるものなり、まづ其の精神上に及ぼす現象を求めば、事物に感觸の念深くして思考に陷り、運動遊戲等を兒戲として好まず、動もすれば靜閑、寂寞を好み、瞑想に耽り易く、遂に憂鬱の病を惹き起すに至る事あり、次に肉體上に及ぼす影響は、腸胃の疾患を起して、諸事快活を缺き、皮膚軟弱となり、血行は遲鈍となり、往々血塞、痔疾等の長病に侵され易し、されど其の長所を求むれば、耐忍持久にして、小心翼々其行を謹むを以て、失敗少く、比較的事に成功する性質なり、此の種の人は顏面蒼白にして、毛髪薄く、身體多くは瘠痩にして五官、鋭敏なるがごとし、

而してその性質の人の不斷の攝生は、刺戟を盛にして運動を活潑ならしめ、沈思單獨を戒め、其の食物としては肉食を多くし、果物を時々用ふべし、されど饂飩、蕎麥、素麵の類、穀類食物、豆類等下腹部を膨

服せしむる食物を求しむべし。

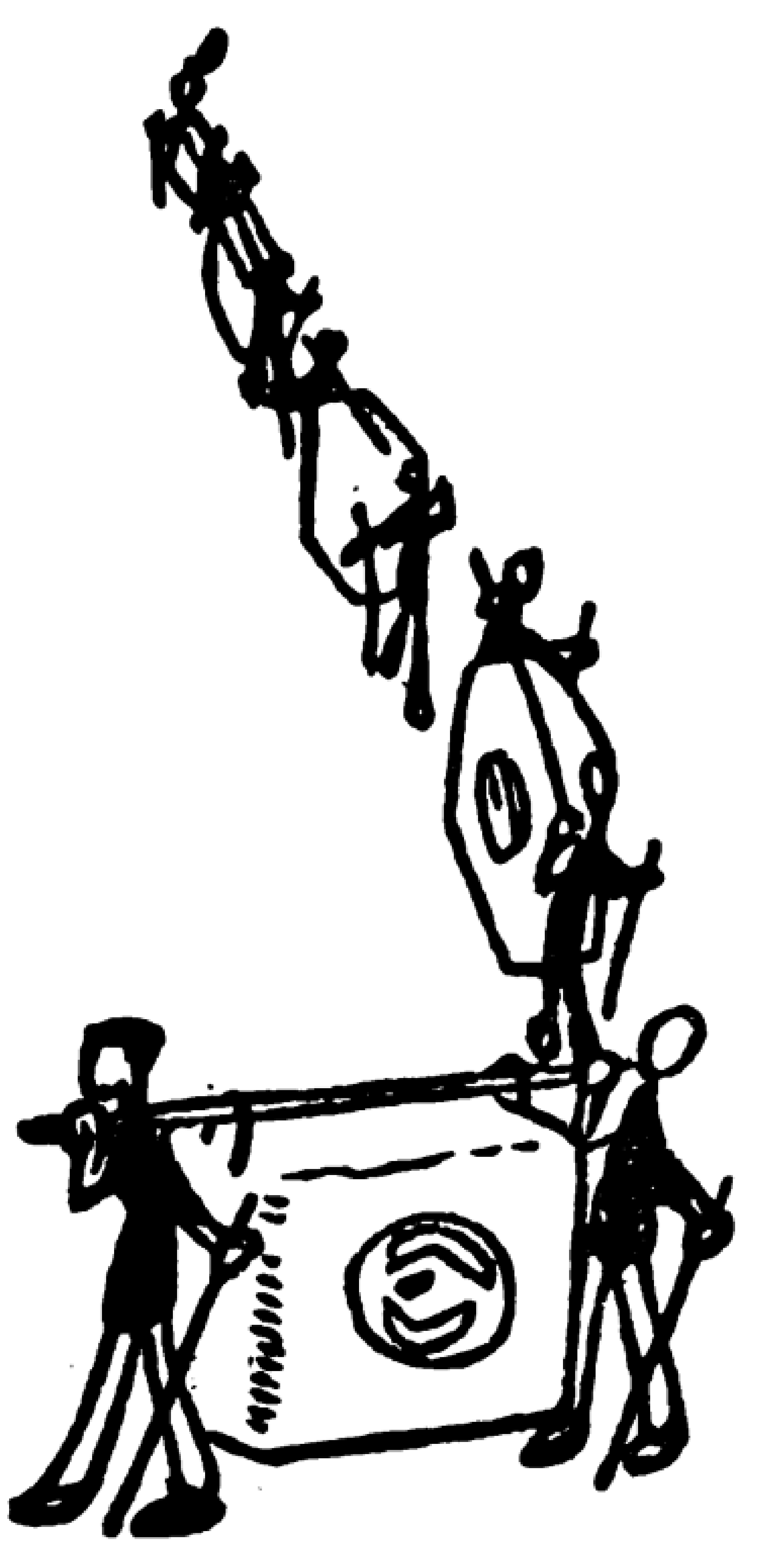
◎粘液質

これは多血質とは全く反對にして、神經質とも又反せる傾向あり、この性は知覺鈍く、思考力に乏しく企て事を決行するに遲く、又活氣に乏しきを以て、外面より見れば沈滯遲鈍、恰も感覺なきが如くにして、身體の動作極めて緩慢にして血行遲く、筋肉弛緩にして、往々贅肉を生ずる事あり、此の性質の人は事を成すに遲鈍なるを以て、到底人に先んじて功を奏する事能はざれども、一度び信じて行ふ時は、遂に全然なし遂げずに至る、すべて粘り强く、我慢强く、容易に動かざれども、一旦定めし事は如何なる障碍に遇ふも、中途にして廢止する事なくして、遂に大業を成就するもの、往々此の性質の人に在り、

粘液質の平日の攝生法は、專ら活潑なる動作を務め、精神の刺戟を盛んにし、時々興奮的飲食物及び香料を取る事必要なり。

◎膽汁質

粘液質に稍や似て、又大に相違せり、此種の人は顏色漆黑にして、體質肥滿し其の性質冒險を喜び、大膽にして沈着なり、容易に物に動ぜずして、又獨居默考の癖あり、膽汁質の人は時々肝臟病、或は黃疸病に罹り易く、故に不斷の攝生は、專ら粟食を務め、飲料は清水を多量に用ふるべし。



今日歐米諸國にては、配偶を選ぶには解剖生理學より其論理を實り、以上の四質の中の何質に屬するやを選み、夫婦互に其の反對なる質を求めて結婚するの例なるが、我國にてはまだかくまでに至らざるも、この事が人身生理の上より子孫に及ぼす影響は決して尠少ならずといふべし。依てこゝに何質と何質との配偶が最も好結果なるかの一例を示せば

第一、夫婦の一人が膽汁質、一人が神經質の配偶なれば生兒の生育甚だよくして器量を備へ成長速かなり、

第二、膽汁質と多血質とは生兒の生育惡からざるも器量は劣れり、

第三、神經質と多血質とは兒の生育よろしきも銳敏に過ぎて體質は弱し。

第四、膽汁質と膽汁質とは生兒を孕むこと少し、若あれば兒の生育甚だ惡し。

文藝百科全書　早稻田文學會編

世界的思潮社會の全面に波及して、文學の思想と藝術の趣味とは人間の日常生活と離るべからざるものとなれり、此際文藝百科全書の出版を見る、恰も時を得たるものなり、本書は早稻田文學會が知名の文士、藝術家數十名に囑し、四ヶ年の歲月を費して編纂したるものにて尨然たる二千頁の大册を成せり、全篇を(一)文學(二)演劇、音樂、美術(三)名著解題(四)人名字彙の四大部門に分ち、古今東西に亘つて文藝の關係を詳かにし、その發達、盛衰、變遷の跡を尋ね、引いて現今の狀態に及ぶ、蓋し世界文藝の大勢を一目の下に窺ひ知り得べきものなり、今これを文學の部に徵するに遠く希臘、羅馬の神話神曲の說明、印度ペルシャの古典の探究等は頗る有益希覯のものたり、又演劇の部にあつては西洋古代の劇場の構造、演劇全般に亘つての詳細なる說述、日本に於ける演藝の由來、發達、能、狂言に就ての趣味ある記述は世間に比類少き參考書なり、殊に解題の部に於て泰西名著數十種の梗概を示したるは文界を益する事大なりといふべし、又明治文學に就ての豐富なる材料を供したるも頗る興味ある項目なり、要するに各部門の執筆者はいづれも其向の專攻の學士にして各自專門の智識を傾注披攊したるを以て各項目それ〴〵詳細を盡し而かも冗漫に流れず、簡潔にして明瞭なるを得たるはこの書の一大成功にしてやがて讀者を益する事大なりといふべし、且又卷中各部に挿入せし說明的挿畫の外、別に名家所藏の繪畫五十葉を鮮明なる色刷にして挿入せしは錦上更に花を添ゆるの觀あるべし。

人文進步の今日苟しくも世界的思想を呼吸し且つ日常文學藝術の趣味を味はんと欲する人々にあつては絕好の參考書たるべし。定價拾五圓隆文館發行



和歌

佐々木信綱先生選

一等　○　仙臺　南琴代

落日の淡くも引ける悲しみの光の底に立つ枯木かな

評、しめやかなる景色、目の前にうかびいづる歌なり。

二等　○　牛込　琴女

心地よう碧きみ空に舞ふ鳶の下はましろく雪つみし岡

評、着想奇警凡を抜きたり。

二等　○　阿波　かえで

霜月の野に咲きのこる野菊にも似てよわ／＼しなやめる心

評、結句原作なやめる女はとあり。さてはいたく劣れり。作の洗錬こそ望ましけれ。又阿波かえで（假字もたが〈へり）などかゝる匿名はよき事にあらず。

三等　○　攝津　吉原呉竹

阿兒を失ひて

臺の間は彌陀のおん手になれもせむ乳房はなれし夜半の夢はも

評、あはれなる母の心、亡き子の夢を見てれざめし夜半などの作なるべし。

三等　○　丹波　佐藤芳枝

雨の日や打つゞき行く牛車わだち重たし黄昏の街

評、京都の町はづれの雨の日、さもとおもひやられて。

三等　○　安房　松原勝子

城山はことになつかし海の日の木の間の草にかゞやきて落つ

評、館山の城山なるべし。鷹の島沖の島並べる鏡が浦の風光、いとなつかし。

秀逸

○　　淡島　千葉幸子

月を背にかへるさ急ぐ雲の上をすべるが様に馬の鈴なる

評、書き盡に陥らず、新らしきに囚へられずして、わが住める土地の風景をさながらうたひ出られたるをよしとす。

○　　ヘルビン　目黒はな子

たらちねを千里の外にのこしおきてたひちにやめるひとり子の身

評、いひさまはよしといひかたけれど眞情流露なるを採る。

○　　深川　佐久間貞子

野末には花を枕にやむ蝶も或はあらん春の雨ふる

○　　四坂島　渡邊梅子

神々し關八州の雪のはて初日禮する富士のいたゞき

○　　仙臺　南　朝子

夢のごと月影のこる有明の小窓の下の水仙の花

○　　福岡　嘉　須子

新緑のたかき薫りに胸すきて思ひなき身をもたす森の木

○　　越後　五十嵐ふみ子

潮の香によみがへりつる思ひして年のあしたの磯に立つかな

○　　東京　小幡よし

薄絹かそれかあらぬか初霞めでたき國をかろくおほひぬ

○　　長崎　加納豐子

え忘れずかの故郷のなつかしき友も弟も海もなぎさも

評、結句難あるべきか。

○　　樺太　船坂深山子

磯の夜や千鳥きゝつゝ故郷の山のことなど姉とかたりぬ

評、四句いまだし。

佳作

○　　高嶋　鳳琴女

點燈夫せはしく過ぎしたそがれの雨の小路をかはほりの飛ぶ

○　　岩代　木内豊都子

川下に蓑なきぬ君のせて朝網とらむ棚なし小舟

○　　信濃　せきや

やよひの日大船出づるぞよめきにまじりそ磯の童の聲なる

○　　伊豆　鈴木矢壽子

この家を去ぬてふ思ひ夕暮の淡き悲しみ森林を見る

○　　埼玉　齋藤なを

かずしらぬみ空の星もひとつひとつ光をさめて夜はあけむとす

○　豐後　平石すま子

夢のごとたゞよふ花の彩雲は森の古塔をまばゆう捲きぬ

○　岩代　水田せつ子

夕月に車して來ぬ玉しきの都につゞく白樺小路

○　福岡　原田つる子

故里の母は泣くらむ木枯の窓うつ夜半は旅の子のため

○　四谷　味方こう子

あなさびし悲しみの神つどひ來てわれをとりまく如くおぼゆる

○　横濱　喜多りゆう子

霜柱ふみてし行けば田のくろの凍れる水のありあけの月

○　久留米　久々宮紫花

千鳥鳴く出島が磯の靜かにてあみ引く人の歌もよき哉

○　横濱　小豆澤きよの

菫咲く野道を牛の背にのりて笛吹く稚兒の神に似たるよ

○　攝津　和久かつ子

遠方の疎林に月の影おちて霜ま白なり冬枯れの村

○　長崎　小林靜子

うらぶれの身を春風にふかれつゝ犬を追ひゆく故鄕の野べ

○　巣鴨　小林しげ子

悲しみにむくもりぬたそがれの曠野を一人ゆく心地して

○　陸前　大場ちよせ

暮れかゝる春のゆふべの冷さをしばらく啞ひてあれば悲しき

○　下野　片岡濱子

朝はれの遠き港見る濱やかた欄をすべりて眞帆片帆ゆく

○　阿波　大久保八千代

つよきこと言ひし亡き姉偲ぶかな粉雪降りつゝ月夜となれば

○　牛込　平塚白百合

ゆら〳〵と朝日のぼりぬ雪の村うすもゝ色の雪の山など

○　米國　村舘光子

夕ばへは白き高殿くれなゐに染めておち行く桑の海かな

○　月島　村上紫

水色の絹にも似たる霞のして夜は明け初めぬ總の平野は

○　長崎　田中やす子

白梅の故鄕の家思ひおん母の聲かと聞きぬ春の夜の闇

○　麴町　淺井ゆき子

春の雪花のやうにも振袖の紅き模樣にまじりて降りぬ

○　美濃　飯島小枝

渉二寸かげろひ四寸もえたてる海見ゆる岡胡蝶生れむ

○　仙臺　あきの

中空に竟の神御するあら馬のそのたてがみとふく木枯よ

○　相模　宮川富女子

磯の夜は靜に更けて物思ふ心にひゞく波の音かな

○　信濃　吉川多美子

菜葉咲く畑のすみに遠がすむ桑の花の上の富士の白雪

○　山梨　天川やすよ

日の本の國をよろしと千早振る神ぞ植ゑけむ山櫻花

○　大阪　辻村百合子

吾胸のくしき聞えを小波は靜に神に告ぐるなりけり

○　豐後　平島鐵子

む今宵のどよみの夕暮に狂へる如く君を慕へる

○　豐州　ふじの花
櫻貝拾ふといねし砂濱やうつら心に春の波きく

○　名古屋　みのり
冬枯れの風すさむ夜の月空にたゞ映さまし故郷の影

○　鹿兒島　渡邊修子
三百尺銀河の下になげらるゝ瀬踏にさめぬ秋夜の鐘聞く

○　神戸　中村伏子
町はづれ四人のせし馬車のゆくてに白く雪ふりしきる

○　大阪　前澤はつ榮
羽子板を母にねだりし頃もありき思ひ出多き年のくれかな

○　東京　藤掛つれ子
すゝき野の夢の様なる穂すゝきに夕月見れば涙ながれぬ

○　門司　古賀みづ枝子
聞えて鐘はなるかな白き鳥あまた浮べる丘にのぼれば

○　伊勢　岩本淑子
ともすれば情熱として物思ふ淋しき人と君はなりける

○　門司　濱山文子
立ちのぼる煙りめぐりて湖濱の小山とり巻き朝の鐘なる

○　群馬　林　きみ
更けて猶讀文學ぶ窓ならむ青のまゝなる燈火のかげ

○　神戸　藤原　紫
あかしがたさしいでのいそのまつなみ木夕日なゝめに千鳥とびかふ

○　須磨　有村紫芳
たれか來よあたらこのよをたゝひとりをすまき上げて月にうそふく

○　豐後　鹽谷ゆき子
白き雲の戸にかくれて夕ぐれの川邊にひとり君を思ひぬ

○　美濃　花園百合子
悲多く思ひ出もなく十八の年暮れむとす人の前に

○　信濃　柳原喜美子
三條の紅屋の暖簾くゞりたる舞妓のあとの淡雪の雪

○　長野　柳原たつ子
湖を過ぎてうす雲するあけぼのゝ鐘よりせまる朝潮の音よ

○　小石川　高橋ちか子
紺青の空のかなたに我夢をのせたる如き白き雲ゆく

○　美濃　花園百合子
木枯らしを一人聞く夜は神の世の木々のみ生いし日を思ふかな

○　北海道　金の露
秋の夜にひとり思ひにしづむ頃遠ふ方より笛の聞こゆる

○　札幌　光　子
春日かげ霞むらさきの中空に春なほ寒むき雪の富士の嶺

○　常陸　荒川百合子
春の歌聲いさましううたひけり新しき年の朝の海べに

○　熊本　安田文子
吹く風にたゞよふ雲の絶えまより日かげも漏りてふる時雨かな

○　肥前　小岩やなぎ
命足る日の何時か來る心地して悲みはなく今日も暮しぬ

○　宮城　瀧倉　緑
こぞまではこよなうめでし秋なるをなどか今年はかなしみに居ぬ

○　山田　千代田鶴子
冷たさに日向にいでぬ寂しさもきえゆく如きこのこゝろよさ

○　美濃　竹島小枝

めしひの子美き衣着しと見せに來ぬ雛にひそめるさびしき朝

○　岩代　須田市子

はつ風やわが頬を吹きてなつかきし彼方の園は霞流るゝ

○　秋田　波來子

さらぬだに淋しきものをやけあとのかれ木をもれて三日月のてる

○　堺　青柳糸子

白薔薇一輪咲きぬわが髪をかざらまほしとれがへるがごと

○　兵庫　今井ちゑ子

有明の月かけ淡うたゞよひて夢より明くるちぬの海原

○　越後　五十嵐須賀子

梅の扉や宵の燈火影更けて衣擂れの音の寒う消えゆく

○　新潟　五十嵐みつ子

あさぼらけ東風吹く庭にわれ立てば手飼ひの鳩の戻り來にける

○　東京　芝　蘭

君故にひきし玉琴あすよりは誰に聞かさんさすらひの旅

○　千葉　五月女美都瑠

君の爲め寄られし垣ゆひかへて青ひじりの御歌をきく

○　千葉　池田鶴子

秋の鳥こぼるゝごとく山すその雑木ばやしをむれわたりけり

○　千葉　冬野水仙花

寒空のひかりとゞかぬはなれ島を幾夜夢みて鳴く千鳥かな

○　千葉　冬野水仙花

秋の鳥ことしき戀にいとしばし旅のつかれを歌ひつゞけぬ

○　靜岡　加藤千代子

さく梅の木の間こぼれて我まどにうすくかゝりぬ春のあわゆき

○　越後　岩木芳子

旅に病みて一人もたゆる燈暗の影そらにかすみぬ春の夜の月

○　大森　もゝよ

春や昔逝きにし君と歌かきしその日に似たる梅日和哉

○　門司　磯宮はるみ

人夫等の歌ものどかに春の野路測量の旗ひるがへるかな

○　山形　白鳥折枝子

冬の月冷く胸にうつろひてありし夕ぐれ思はするかな

○　神戸　村山あき子

よべさえし月の光のこぼりけむひさしに白き今朝の初霜

○　宮城　原　百合子

新春のうれしかるべき夕ぐれを戸により雲を眺めて泣きぬ

○　神戸　長谷川ふん子

しら〳〵と船行く跡の道てりて海はるかにもみどりなるかな

○　沼津　藤田靜江

霜ふるやほすゝき枯れて木立枯れて明暮を親の家おもふ

○　岡山　林　榮子

病き身を窓にもたせてやまうとの淋し笑顔に雪ぞ聞く

○　四國島　波逸梅子

初東風や山をゆすりて野をなでゝもそろ心地に梅の香送る

○　鳥取　夢の舎

初日かげ君にはぢらふくれなゐの頬の色ににたる富士の山姫

○　神戸　西尾紅濤

うぐひすの初音にさめぬ亡姉と花野さまよふあかつきの夢

○　但馬　井上美登子
美しうなりぬと父の涙してのたまふごとに涙落ちぬれ

○　廣島　[illegible]英子
少女子のかざすかざしの胡蝶にものどけき春の色ぞ見えける

○　肥前　白百合
憂き事をきかしとてすむ山の井の水より清き心ともがな

○　横濱　小豆澤清野
天つ日を慕ひて廻る日廻の花にも似たる我身かなしき

○　牛込　塚原美子
山の宮柱にゑりし金龍に夕陽てるなり紅葉ちる時

○　飛騨　知代子
うとましき人にもあるか日ごときて胸の小琴をかきならしゆく

○　信濃　田中愛子
いとうれし雪ましろなる東の山に美し日の出づる時

○　大阪　中村のぶ
灯をともすもす力も失せてしとゝなる冬雨の音を窓にきくかな

○　山形　仙河鈴子
我ひとり疲れる道にたゝずみぬ見る人もなき冬の月夜に

○　相模　澤田はる子
木枯に星凍る夜は故郷に病みつゝ居ませる母をしぞ思ふ

○　和歌山　かつ子
月清く梅か香たかき夕庭に我はしつかに君を思ひぬ

○　伊勢　佐々木らく子
寒き夜を衾すゝめてつくゞゝとやつれし母のおもわをそ見る

○　豐後　星清子
春の宵小雨そぼふりおずれ君の胸に寄きて君をたゝへぬ

○　大阪　永田和子
つよきこといひて別したわれにあれどこの一すゝえ夢にやせにき

○　豐後　菅原芳子
泣かむため戀しまむためことさらに君を戀せしわれならなくに

○　横濱　小豆澤せい子
たそかれを野に立ちをれば秋風はいにし戀しみもたらして来ぬ

○　土佐　宮内ゆき子
野をめぐる二月の水はなごやかによき棒が音もこまらせながら

○　廣島　野田美代女
金雀枝にむれて山茶花のとぼそ静かにふる霰かな

○　沼津　金澤あい子
敢て問ふ何れより来て何方へ行く可き道に彷徨へる人よ

○　新潟　岩木芳子
新潮は朝の日うけて白帆みるをとめの足をそとぬらしけり

○　近江　深田愛子
磯つたひ朝の干潮に色々の貝ひろいつゝ歌おぼえけり

○　樺太　船塚深山子
朝の海藻を刈る舟の二つ三つ島の彼方に遠く浮びぬ

○　相州　中田静枝
春あさきいてゆの里のつれゞゝを慰むること葉うたふ

○　東京　杉山常子
このこゝろかくては身をも食ひぬべき錆びと知りつゝ人を頼みぬ

○　豐後　菅原芳子
真午も海にただよふ茫漠の浮藻のごときわが運命かな

○　越後　松永紫子
鶴ひたての鐘の振りなほしほゝゑめば花に酔ひつゝ鶯の鳴く

○　麹町　牧野銀杏庵
柴舟はわしの枯葉をやはらかにもれくる夕日のせてゆくかな

○　明石　きさらぎ
中々に讀みてあそぶむせず紙買る子も有と思へば

○　若狭　津田汐汀女
とりとめしことにあられど秋の日にうたれてあれば涙ながるゝ

○　静岡　天野欣
小春日の窓に倚れて思ひ出に耽れば庭の山茶花の散る

○　福井　伊藤ちか子
見渡せばをちの村山ほがらかにかすみにもるゝもゝ鳥のこゑ

○　豊後　糸芒女
ある宵のはかなごとなどかきあつめ咲くやと思ふ水仙の花

○　牛込　武子
わがせこは何處をふれのうきれしてこよひこの月いかゞ見るらん

○　新潟　河原ゆう子
今日も又悲しき心誘はれてゆけば果てなき黒き世界に

○　京都　池田みぞれ
昔の君の春衣ぬひをへさらはとて子らとつれたつとしの市かな

○　大阪　岡本春子
君を得し時の思ひとやぶれたる今の思ひをしづかに思ふ

○　羽前　野口清
あたたかきみ情いつかさめし時この黒髪を灰と見ませ

○　伊勢　岡部かく子
木枯の風ぎて静けき平原を今宵日はひやゝかに照る

○　鹿児島　渡邊春子
銀盃の浮彫なして村はなの老松高う初日のぼりぬ

○　長崎　西村春子
星の夜はわきてなつかし端ゐしてその名をしへて君はあらなく

○　東京　永田かつ
たへがては椿の花輪池になげぬ我がものおもひしげき冬の日

○　神戸　森中晶子
年たちぬつめたき雲は灰色に我二十年をうばひゆきつゝ

○　下谷　くちなし
ともすれば狂はむとせしわかき日のやうにもあるか年のはじめは

○　麹町　牧野はん子
吹き返へし捲きかへされし芭蕉葉の破れに寄る我が思ひかな

○　丹波　上田豊子
うす月夜梅が香淡き戸によりて遠くなりゆく笛の音をきく

○　美作　黒原うめ子
かたときも君がみ名をば忘れ得ぬまゝに春すぎ秋暮れにけり

○　信濃　吉川多美子
奥飛騨の尖れる冬の山脈にましら啼くらむ雪もよふ朝

○　豊後　加納豊子
うすら日は夕べの窓に影さしぬおのが心のさびしさに似て

○　福田　幸田いつ子
夕映の七峰こえる白雲のながれやいづこみ心に似る

○　信濃　深山しづ子
浅茅の垣つ邊を摘む我が姉のおん頰紅し南天の實も

○　飛驒　眞砂子

御佛を口にするさへうしとせしこの心もて死をぞ願ひぬ

○　豊前　赤田須美子

初春の雪打とけし野らゆけば若菜つむ子のうたのきこゆる

○　三河　まゆみ

草萌えて泉の水のあふるゝに似てもわびしも君久に見ぬ

○　下總　月沖百合枝

如月や里に若芽し水ぬるみ白帆かすめる母が家恋ふ

○　下總　小澤まゆみ子

なごみたる我がむねも紅梅の香になづみけり如月の春

○　日本橋　呉谷獅子

夕さればしほ風さむし浜べよりかへる小舟に雪もちり来て

○　東京　千野ふく

紅梅のにほへる窓をおしあけて書斎の人の笑ひ興ずる

○　丹波　足立美枝

友禅の袂かざして少女子が琴ひく窓に紅梅ちりぬ

○　岐阜　三田京子

天冷えて地も亦凍る街はづれ酒かひにゆく童よあはれ

○　常陸　荒川百合子

霜さゆる枯野が原の古寺の軒廣き鐘の朝のつめたさ

○　京城　松田かよ子

彫塑の匠ゝ鑿に槌打てば冥き音深ふ荒彫りの像

○　青山　横田秋代子

花すこしほころび初めし庭に鶯り物編み居れば鶯の鳴く

○　群馬　清水貞子

其の昔ふりの袂をかざれては折りては君とかたりし少女

○　高崎　志美津

明暗の影あきらけき月の夜の木立によりて君をこそ想へ

○　伊賀　龜山けい

町はづれ柳に細き春雨のけぶれるなかを馬子二人ゆく

○　茨城　大田学子

鶯のなく音に鞠の手をとめて小さき妹の我を招きぬ

○　駒込　松井登喜子

街を賣る蜆板賣の呼聲に眠氣もよほす春日さす窓

○　東京　琴吾

草枯れし秋の野みちにたゝずみて雲流れ行く空をあふぎぬ

○　備前　佐久間榮子

我胸の野に歡びの鳥の來て歸る日かな君は來りぬ

○　神戸　松室廣久子

夜おぼろ月妻戸そとくる少將の物語めくしのび姿や

○　足尾　根本綠子

霜冴えて村の境に笠を着て妹許行きし冬月夜かな

○　伊豆　杉山貞子

ふりつみてましろに見ゆる箱根路にいかゞますらんいたづきの君

○　福岡　あさ子

山人も渡りかねけん丸木橋ふみすべるべく積る白雪

○　羽前　野口菊子

ゆふ月夜散りくる花に目をとめて笛にふけりし君を想ひぬ

○　大阪　秋澤子

きさらぎやかつ咲く庭の白梅に色そふとやう淡雪のふる



短文

（甲）漁村に在る人に

山形　物河鈴子

御約束の海濱の日の出をスケッチ遊した繪葉書はこれですか。少し洒落れすぎてはゐなくつて？、何だか物足りないやうですれ、ホヽヽヽ筆頭から小言を申まして何うも失禮、しかしまあ、御歌には感服致しました、

隨分詩的な方におなりなすつたものれえ、イヱ本統よ、第一正月なんて陽氣なものはいやだつて、わざ〳〵靜かな處へにげてゐらしつたゞけでも、もう平凡な方でない證據ですわ、其上「一生此地で暮したい事……」、と仰有られては全くたまりません、どうぞモソッと言葉の裏に元氣を見せて下さいな。

元旦は珍らしく雨でしたよ、雪はほんの申わけ程……水仙の花が今盛りです、温室で咲いた紅梅と一緒に床に飾りましたが、矢張り私は雪の中に咲いた水仙の方がどことなく又氣高く見えますのですから、あなたに譬へませう、

もうお友達も海山出來ましたでせうね。一日でも伸々としてお暮しなさるに增した事は御座いません、とまあ降參致して置き升さよなら。

鈴子より

（乙）此の瞬間

清津　板井朝子

盛んに煽つてゐた園爐裏が、ポツと燃え出した暗い三疊敷の間の一面が、明るくなると爽作爺さんの顏がまたゝいて見える、妻もなければ子もない、「われほど暢氣な者は又とあるまい」と言つた樣な顏付です「草鞋五六足作りや、それで足りるからのう」とは爺のふだんの言草煤けた天井から釣り下されて勢よく湯氣を吐く鐵瓶に、濁酒の燗瓶がチヨコなんと頭だけ出してゐる、それを見てゐる爺さんの面は、常ならず輝いてゐる。この瞬間どんな感でゐるのだらう世は、木枯が吹いて、わびしい冬枯れ時、この一椀の熱燗に福々しい笑顏でゐるのを何人も羨まずには居られない。

（丙）石鹼賣

神戸　森中かず子

「なに一すですよ」と文子樣がのぞいてらつしやるので、つい立上ると石鹼賣です、十四五人もとり卷いて見て居る中で、二十歲位の男がヘツピを着て向ふ鉢卷、「こんどはこれだい」と三つ入りの箱を出して「あーどーもよい匂ひだ」と自分で感心して見せて「さー此石鹼を使ふと色が、白うなる、きめがこまかになる男前があがる女前が下る

……」、横の方でクス〳〵と誰れか笑ふ、「年寄りが使ふと鼻がのびる。若うなる、垢がおちる、ニキビがおぢる、ソバカスがおちる。毛がおちる、鼻がおちる、二階からおちる、歯がおちる……アッ」息もつかずしやべりたてゝ、あつと自分で呆れてゐる。「マアー」、「オホヽヽヽ」と思はず笑ふと、「お笑ひ玉ふお優しさ、さーみなさん、これを使ふとあんなお顔になります……」きまりが悪くなつて逃げてかへりました。

昔の我友

宮城 加藤とめ子

三年前に親友の友人で寫した寫眞を今日手文庫から出して見ました、一番右にマガレットに四时のリボンをかけて居るのは花子さんで、「私れ御嫁に行く時は文學家へ行くのよ」と御話して居らしやたが、軍人に成つてる御兄樣の友人に是非と云はれて其の奥樣に御成なすつた方、其次は光子樣。荒い矢飛白の袂を長々しく立たれた御姿は女でもふるひ付きたい樣な方で、父樣は某會社の社長さんで、只だ一人の御嬢子でしたが、先年法學士を御養子に御迎へなすつて、只今では每日の樣に御二人で散歩や遊山に御出かけなさいます、其次が私で思ひ切つて前髮を出した束髮に白いカンナの造花を一輪さした頭を少し左へまげて笑顔一番、左は淑子樣、年は私と同じの十八でしたが、其御姿でも御顔でも實に無邪氣で、何んとも申樣のない方でした、よくクラスでは紅ばらなど申しましたが、此の方が一番早く御嫁樣に成つて、今は可愛い赤ちやんさへ有ります、その樣に皆ばら〳〵に成りますと、昔の樂しかつた事が戀しくてなりません。(秀逸)

不思議な職業

淺草 紅谷貞子

「每度車中御邪魔を致しますが、今回皆樣に御紹介いたしますは繪はがきで御座います、此れはまことに御子樣方の敎育になります、歴史畫で、第一御目にかけますが楠公櫻井驛、次に御座いますが曾我兄弟夜討の繪、次が彼の有名なナポレオン、次が何々、次が何々、然し今日は特別を持ちまして他に風俗繪はがきも差し加へます、都合五十三枚取りそろへましてわづか十錢で、皆樣に御分ちいたします、ホンの紙代丈です、御賛成の方が御座いましたら、御子樣方の御みやげに御求めをねがひます、わづか十錢です、御賛成の方は御座いませんかー」此れは私が往々往復する汽車中で聞く口まれで、此の男は本所で乘つて龜井戸で下りるのです、そうして日に幾度となく同じ事をくりかへし〳〵、三等室に入り込んで公衆の前でのべ立てる此れが彼れの職業です。(秀逸)

小さい兄さん

大阪 西本ゑん子

昨夜、妹が生れましたので、今年三つになつた秀ちやんは、もう兄さんになつて、今夜はお父樣とねんねした、どんな顔をしてるかと思つて、そつと覗いて見たら、夜具の袖から可愛いゝ顔を出して、林檎の樣な拳をしやぶりながら、小さい妹の方を盗み眺て居た、「秀ちやん。お乳のみたくないか」突然から尋れたら、驚いて顔を引つ込めて了ひました、やがて蒲團の奥で、「今夜は……お父ちやんの……お乳を……のむの。」、(秀逸)

横須賀の兄様へ

大阪　喜多山　とき子

いよ〳〵遠洋航海も眼前に迫つて参りましたれ、兄様は如何に喜んで入らつやるでせうと皆々お噂致してをります、父様母様のお喜びもお察し下さい、お父様は、己もあの時海軍に籍をおいてゐたら、今頃は大佐相當官になれてゐる筈だが、旨く試験を受けて及第したものをと後悔みた様な事を云つて入らつしやいますの、横須賀埠頭を雲霞の如き官民知人に送られて、第一期と日本の土地をはなれてゆくときはどんな感がするでせう、私もお送りしたうございますわ、針箱がほしいと被仰いましたから、旅行用のを送ります、切手と卸十個入れておきました、先づはお達者で御きげんよく。(秀逸)

秋田の友へ

宮城　沼倉蔵子

おん懐しき御便りかな、嬉しき御便りかな、おみ胸ゆるう締め給ひし丸髷ゆかしき御姿を遙に忍びまゐらせて、定まれるおん縁のいよ〳〵堅からん事を切に祈り上奉り候、朧月ゆかしき節とは云へ、寒さ身に沁む今日この頃、おん嬉はしき貴女様には、永劫に春なるおん館にいかに楽しく暮し給ふらんお羨しく候、妾事はいつも變らぬ、やんちやん馬、去年の秋に自轉車求め候ひて、折々郊外を試み等致し居り候、今一度處女時代に、とのお言葉は解し難く候、嬉しきは楽しきに候へど誤り無き家庭のあるはこの時代に候はずや、來ん夏は兄の供して男鹿にまゐる豫定に候へば、其の節は御立寄申上ぐる心に候、何卒玉の如きユンセルの君に御對顔おゆるし下され度、今より願上置き候(秀逸)

賑かき春宵

長野　淺輪久子

華やかな電燈の下に、可愛ゆい友禪の座蒲團しいて、天晴お琴の名手と氣取つて、日頃得意の残月と四季の月を弾じた。

お口悪の兄様はすぐ、「露香さんはお年取つたせいか大分上手になつたれえ、乳母やお膳に何かお菓子でも持つて來んか」――だつて。松風を色あせた口に入れた乳母は、「あのお嬢様は下げ髪で居らつしやいますと、かうお煩さい様で御座いますから、乳母が一つ庇人髷に結つてお上げ申しませう、」と、もう用意して後にまはる、やがて出來上る頃又、兄様はからかひ始める、「露さん、其髪でさ、ホワイトラインの袴はいたらどんなだらう、」「まあ、文雄様のお口の悪い事、」否え、お嬢様がかう遊ばしますと、まるきりお人形の様で御座いますよ」「はゝゝゝそんな面倒くさい髪に結はんでも好いさ」、「ほゝゝゝ兄様面倒な丈でくさかありませんわ」つて思ひ切りやり込める積りで言ふと、御本人すまアしたもの、新體詩か何か口吟んでゐられる憎らしさかへつて母様や桃子さんや乳母がどつと賑やかに笑はれた。(秀逸)

凧

小石川　森賀子

敏雄といふは私の長男で、今年とつて三才になる、一日動物園につれて行つた處が、鵜が水中の魚をあさつて居るのを大そう喜んで見て居た昨日今日縁に出ては高く低く空に舞ふ凧を指さしては、喜ぶいぢらしさに一つを買つてあたへた處が、私の仕事の傍にきては「オアサ中ツルトゝ〳〵」と云つて袖をひくので、試しに行つて見ると、これは

これは、今朝買つてあたへた鳳をバケツの中に入れてある、いかにも鳳の鶴は鶴であるので（秀逸）

寫眞の返し

遠州　野　菊　子

文子様、御寫眞有りがとう。きのふの御葉書ではたしかけふあたり、朝から郵便配達のくるのが待ち遠くて〳〵、時計ばかり眺めて居りました、待つたかひあつて、午前十時に御懐かしい貴女様の二寸三分のお姿は勇ましい郵便の一聲と共に玄関へとび込みました、さあ私は嬉しくて〳〵、お母様が「どなたからですれ」との御言葉も耳にも入らないで、其まゝ自分の部屋へ入つてしまひました、上封じを夢中で開ひて拜見しました、よく取れてます事れ、お目ざしから口元なんかほんとに、そつくりですわ、今にも笑ひ出しさうれ。御葉書では始めての島田でまるで、土人形みた様だなどゝ書いてありましたが。其れどころではありませんわ、ほんとによくお似合ひ遊ばしてよ。召物は三越へ御註文との事、實に奇抜な摸様ですれ、いつまで見て居ても見あきがしない事よ、其れから御約束ですから田舎のお多福を一枚お目にかけます、お笑ひなすつちやいやですよ、（秀逸）

子爵家の家庭教師

嵜　木　き　ぬ　子

御本邸から奥様と若様がお越しになつたので、お座敷は俄かに賑はしさう、時折美保子様の華やかな笑顔が響く、はげしく痛む頭を抑へてぢつと眼をつぶつて居ると知らず〳〵熱い涙が頬に傳はる、羨やましいのぢやないけれど。こんな運命に陥つた身が悲しい、私だつて四年前迄は大家のお嬢様、お茶の水の校堂に袴の裾颯へした二八の春もあつたし、友禪の敷布に手毬ついた下げ髮の時代もあつたものを、今は徒らに春老いて名のみ美しき子爵家の家庭教師、思ひに亂れて窓を押せば利鎌に似たる月影白く、眠つた様な葉山の海岸に、涙の音許りが淋しく夢の様に聞える、（秀逸）

最幼年の英子様

信州　壽　美　江

花子様、今時計が六時を打ちましたよ、思ひ起せば去年の今日、丁度此の時でしたわれ、平井様の御宅で歌留多會の初まつたのは、あの凉しい御小母様の御聲がまだ耳の中にある様ですわ、あの決戰の時の事を覺えて居らしつて、彼の時一番おしまひになつたたつて御しる粉の中へ瀧の様に涙をおそゝぎ遊ばした英子様は、去年の冬さる理學士の方とか御結婚遊ばしたたつて、昨日田中の姓で御年始狀下さいましたのよ、花子様、實にこればかりは分らない物ですわれ、あの集ひの中で最年幼者だつた英子様が一番さきとは、（秀逸）

負けた鶏

京城　松　田　か　よ　子

韓人が七八人。鶏を囲うて鶏を闘はして居たが、軈て一羽の方は散々の手負ひに最早闘ふ氣力もなくなつたのであらう。消魂しき悲鳴を擧ぐると、同時に驀然囲みの隙きを衝いて冬がれの畑にヨロ〳〵として出て來ると、今し落ちんとして居た夕日に、我影の長く地に曳いたので、痛める足の倒れんばかり戰れと我が影に驚きつゝ、再び悲鳴を擧

げて彼の納屋に逃げ込んだ、之れを見た私は世の所謂弱者が口癖に云ふ、彼の強者の壓迫なるものは、寧ろ弱者夫れ自身が觀ずる誤れる心の影ではないかと思つた。

行く春

牛込　平塚白百合

ポカ〳〵と暖かい日だ。白いシーツに長い髪の毛たらしてねてゐらしつた姉様の蒼い頬にも、何處か色が動いて、窓際に置かれた紅椿が暖かさうに開いてゐる、

ガラスごしに見える海はキラ〳〵光つて、砂原つゞきの砂の上には患者が横になつたり看護婦により掛つたりして、そゞろあるきしてゐる姉様もムク〳〵動いてゐらしつたけれど、とう〳〵ベットからすべり下りて、私の肩に倚つた、まあ何んで軽るくなつたのだらう、十五貫なんて威張つてゐらしつた姉様はぬけがらのやう、私はつく〴〵若い胸をかむ病を憎みました。

都の友に

御嶽山　山里の友より

其後の御消息承りたきものに候ふ、さらでも聞き彼の梅香る南向の窓に、ストーブたかせ、長き椅子により靜によみふけり給ふは源氏か、さるにても羨しきは都の空よ。とは申しながら、遠く筑波を初めとしつゞく山々見渡すかぎりの雪げしき、叉なき眺めに候よ。おひがすむ都の風にさへあたらせ給はぬ君には、山の幸とはかゝる寒き事にやとこの文よみ給ひて御身ぶるひ遊ばさん。

あゝお兄様

青山やす子

うらぶれて茲に四年！、帝大に通學のお兄様を、杖とも柱とも思つて零落れはてた我家を、再興遊ばす様にと、朝夕祈つて居つた其お兄様は、病床に呻吟遊ばす事廿日あまり、お隣から聞える歌がるたのお聲賑かな、七草正月の夜、「僕あまだ死に度くないのになア――」と繰返し言ひながら、永久の眠りに就いてお仕舞になつた、氣の故か此頃お母様は、何だか急にお年召した様で、昨日お髮を梳いて差上げたら、大分お白髪もふえた様だつた。

物凄いばかり冴え渡つてる寒月を仰ぎ見てると、不意に窓の下で「霞棚引く山々の、盛の花を眺めんと、暫く駒に鞍置かせ――」、あゝあの歌は、あの歌は、お兄様がお得意だつた琵琶歌の櫻狩！。お懐かしやお兄様！今其靈はどのあたりを飛んで居られる事か、思へばありし世の面影が沁々と胸に浮んで來る。

町の夜

越後　中野かず子

空は暮れかゝつて、ちらほら雪になつた、町はひつそりとして電燈のみ雪の上に長く光をなげて居る、「オイばかに寒いな」と調子外れの高聲で云ひながら横町から出て來た二人連の若い男が、今しも暗い小路を曲らうとするとたん、のつそり顔を出した宿なし犬につきあたり。けたゝましく吠えつかれた、「ナイおれだいベラボーめ」とどなつたが犬の血相に恐れて二人は一目散に走り出した、やがてとある御神燈の掛つたのれんの内へスイと逃げ込んでしまつた、こゝまで駈けて來た犬は間の抜けた様な顔して御神燈の下に立つて居る、寒い風が一しきり犬の顔を吹いた。

模擬演習

羽後 佐藤ひさ子

餘り鉄砲の音が烈しいので母様と二人庭先へ出て見る、わが家の垣根から村の端まで赤帽の兵士が數百人綺麗に列んで盛んに發砲して居る殿はと眺めば向の村の乳母の家の邊を中心にして白帽がしきりと撃出してゐる銃口の硝煙は恰も牡丹の花のやう、やがて處々から進撃の喇叭が起つた、忽ち銃劍閃めいて騎馬蹴り、吶喊の聲諸共に赤白の兩軍は僅か數間を隔てゝ停止した、實に莊嚴なる光景である、再び吻喨と喇叭が鳴ると嚴しい老將が驀馬で前を過ぎて行く。

小春の日

日本橋 植松誠子

蝶々や蝶々、可愛いゝ蝶ちよ……、と可愛いゝ聲がしたと思ふと、すぐ緣側の所に、光ちやんと花ちやんが兩手に持ち切れぬほどの花――椿をもつて、につこり、光ちやんのお下げの上に紅の花片が一つ―、丁度赤いリボンのやう、花ちやんは糸へ差した花を拔いて一つ〳〵に數へ始める、「花ちやんいくつあつて?」と問ふと、「これだけ」と楓のやうな兩手を出す、小春の長閑の日は照つて庭のあなたに陽炎が燃え走つてゐる、あゝ私にもこんな妹があつたならば………。

我家の小猫

本所 大熊しま子

毎朝九時頃きつと、今日はと言つて來るのは、魚や、にやあと應じて一番先に飛び出すのは、小僧(猫の名)である、お嬢さんは大喜で「おゝおゝ小僧さんよく知つて居ますねさあ〳〵之を」、といつていつも頭を持つて來る、もうすつかり味を覺えて仕舞つた、猫婆といはれるのももつともと聞く度毎にほゝゑむ、三時頃がらつと威勢よくは入つて來るのは妹、誰も知つて居るので出迎へるのは猫ばかり、妹は荷物はうり出すなり、おゝ小僧やよくお留守して居たね、さあ〳〵此方に御出と背おふやら、抱へるやら、はては人形の着物を着せる、何のことはない、おもちやである、併し少したつと背中から飛び下りる、妹は泣聲を出す。皆をかしさに吹き出して仕舞ふ、實に可愛らしいのは小猫である、

秋の山家

大阪 村瀬くに子

落葉にうづもれた農家から、もみする音がごろ〳〵、門に主人とおぼしき四十近きが歸り來て、どさんと、おろした稻束は、房々として實が入つてゐる、内より妻が走り出て、あらおかへりか、おもかッたで御ざんしよう、今年は、どの田も大みのりで嬉しう御ざんすな、と云へば、夫は赤き黑き顔面に笑みをたゝえて、そーさ今年は大みのり大ほう作ぢや、あすは祝ひに、もちでもどッさりつかふぢやないか、……たゝゝ大そうで御ざんすなーと笑ふ妻の聲、

車中所見

牛込 琴子

ある日、月島に友を訪ふた、歸途には築地橋から新宿行の電車に乘つた例の通り車内を見まはすと、はしなく目にとまつたのは、十一二ばかりの商店の小僧、身につけたは銅光りのする袷、袖口のされたシャツ

足袋ははかない、足はうす汚れて、みるからに寒むさうな、それが自分の體よりも大きな、包を膝に抱いて、窓に身をもせたたまゝ前後もしらず寢入つて居る、時々車のゆれる度に驚いたやうに目を開く、と又かすかないきをもらして、すぐにもとの眠に歸る、其可憐な眼ざしが今は亡い只一人の弟にそつくりなので、私は言葉でもかけて、聞きたいやうな感ひがした。

鶯の宿

愛知　榊原愛子

夜べの春雨の名殘りなう晴れて、うら〳〵かすむ野のいづこよりか、かすかにきこゆる鶯の音に誘はれそこかしこさまよひあるく內、いつしか友の家の前に來りぬ。友は居まさぬやと、垣間よりうかゞへば、庭の木立のなつかしきに、白梅のさき出でたるが、云ひしらずうつくし、一枝を乞はましものと思ひ、事のよし云ひ出づれば、友はほゝゑみながら、心なき人とも見えぬ君ながらなどうぐひすの宿を乞はるゝ。

梅の老樹

本郷　柴田晴子

聞く霜寒く夜はいたく更けぬ。女學世界新年號の初春の令孃日記を讀みをへ、つれ〳〵なるまゝに障子を半ば開くに、見す渡限り霜白く、庭前の梅樹未だ咲きやらずして、其の影ひとしほ淡し、東籬の蕾一ツ二ツ三ツ、凍るやうな風雨をかすめぬ。

おてんば日記

大阪　妙子

一人子の私だから、うちでは父樣も母樣も私の云ふ通りになるといつて私は決してわがまゝなんかしやしない、今日は日曜だから文子樣と博物館へゆく、電車の中はいつぱい、ヤツト垂げ革にぶら下る、私のやうな紫式部が立つて居るのに、席をゆづつてくれる人は誰もない、電車を下りる、十八九のまだ乳臭い男の人がいやに氣取つてやつてくる文子樣と相圖して二人で丁寧にお辭儀をする、知らぬ人におじぎして向うをまごつかすのが可笑しいので、場內でおぢいさんの電氣頭に投げて居つた子供のボールがペタンドしてふきだした。二人でさん〳〵笑つておしやべりをして家にかへつた、折しも來客であつたが、その時の私の顏は實にすましかへつて居つた。

胸中の秘密

越後　端雪

一體私は近頃どうしたんでせう？　何だかそは〳〵して立つても坐つてもゐられない、可笑しくもないのに笑つてみたり、机の前に坐て雜誌をよみちらかし、かと思ふと、つと立つて室中をぐる〳〵歩きまはつたり始終何者かに追ひまはされるやうな心地がしてならない、さうかと思へば冬の月の凄い光を滿身にあびて、夜深いのに庭をぶら〳〵あるくそして月を仰いではわけもなくはら〳〵と涙がこぼれる、どうしたんだらう。

散る花

名古屋　泉月女

病室のともしびは暗くて、たゞさえ蒼白かつた姉は一層凄く見える、低くそして力の入つた聲で「ねえ樣」と耳元で呼んで見たが、たとか

すかに息の音の通ふ許り、再び蒼白な姉の顔をのぞき込んで、「すうちやんよー、姉様！今來ましたよ」と呼べどあはれ髪一本ゆるぎもしない、私が午前に來た時は「おゝすうちやんかい、今日はどうしたのか會ひたくツて仕様がなかつたわ、さ髪を結んで頂だい、お前が一番心地がよいよ、毎々足音する毎にすゞちやんかとどんなに待ち遠ゝしかつたらう」と情に迫つてかホロリと骨張つた頬に涙がつたふ、姉が六つ私が三つの時、父様は永遠に覺えぬねむりにつかれ、翌年母様は父様の後を追つて行つて仕舞はれた。廣い世界にたつた二人殘されて、姉様は二十歳、私は十七まで辛い目を忍んで來た。

駄目とは思ひながらも、又「ねーさまあー」と叫んだ、聲は涙に曇つて自分にさえわからなかつた、死んで行く姉様の心、どんなにせつないだらうか、あゝ取り殘された私は是れからは誰と語らう、これからは誰と泣かう。

雪の日

弘前　ゆり子

おゝ寒い、また雪でせうよと障子を明けたら、もうさかんにふつて居る、綿のやうなのが、サツと吹く風にまひ上つて、一間先も見えないやう道理で橇の音もあまり聞こえないと思つた、さあ着物でも暖めて御歸りを待ちませうと立上つた、「お魚はどうでせうもう一つですから買つて下さい」と門口に立つた少女は顔も手も眞赤、まあこの雪の中、あれも人の子と見つめた、骨を刺すやうな風は、少女の面をかすめて、ヒユーツと白いものを吹きこむ。「姉様お魚もう今日は買つてよ」妹はこたつで編物に餘念もない。

楽しの夕餉

藤井　稲花女

「今日弟から米ちやんの盛粧の寫眞をよこせつて云つてきたよ」と大兄様が被仰ると、皆が、又かといつた様な顔をなさる「今度は本當だよ米ちやんどうだ、法學士だつて事だよ、洋行も出來るよ」つて呼ひなさる母様は「そんな家へ嫁けば雑誌などに寫眞が出るだらうれ」、一同思はず吹き出した、「母様はそんな事がお望みですか」とすれて見せると、「でもいゝものぢやないか」つてすまして被入る、大姉様は「自分で選ればいつでも、出して貰はれますわ」、「そんなら先づ姉様お夫婦のをお出しなさい」と中兄様が口を出す、「こんな爺や婆を…」と大姉様が被仰ると、大兄様は「でもお前を貰つた時には若かつたぢやないかへゝゝゝ」とまぜかへしなさる、やさしい父様は「それぢや僕等夫婦のを出さうよへゝゝゝ」後は皆で笑つて仕舞つた。

無事に着いて

福岡　澪子

三里の道を馬車に揺られて着きました時は、日がトツプリと暮れて、銀の砂を撒いたやうに星が空に光つて居ました。馬車には二度と乗らうとは思ひません、途中で幾度か下りて歩かうかと思つた位でした。其夜は旅の疲も忘れて、松枝様と都の物語とお友達の噂とで夜の更けるのも知りませんでした。谷川のさゝやかに流るゝ水の音が耳に付いて、少時は寝付かれませんでした、手水は谷川の水で使ひました、石にせかれ岩に當つて、水は温く柔らかでした、音が聞こえなかつたら水が流れて居るとは思へぬ程澄んで居ました。

小川の邊り

上毛　富美子

何だかつまらなくなつて來たので、又例の通り外へ出た、冷い風がヒユー〳〵吹いてえり元へ當る、寒い事おびたゞしい、併し寒くても何でも家に居る時よりは心が清々して好い、知らぬ間に麥畑と桑畑の間を通つて裏の小川の邊まで來た、此處が私の第一の慰藉所だ、どんな悲しい事があつても、人も餘り通らない淋しい此處へ來て思ふ存分泣けば、心が清々してしまふ、生れてから二十年の永の年月親しんだ此の小川、來る毎に昔を思ふまだ七ツか八ツの時、お母さんにだまつて芹を取りに來ておそくまで居てしかられたのは此處だ、秋の夜月影が美しいので姉さんと蟲の音を聞きに來たのもこの小川邊だなどゝ、又例の空想にふけつて居ると、あたりが急にうす暗くなつた、鴉がカア〳〵と、二聲許りないて頭の上を通つた、と見て居ると八幡樣の杉の木へ止つて、此方を向いた。

初奉公

大分　瀨口くま子

夜毎に寒さは加はりつ、寒さを凌ぐ火鉢の元は、赤き手、黑き手のかざされて自分は暖むる餘地もなければ、一人つくれんと氷の如き手を己が胸に押しあつれど、手は中々に暖らず、「胸ちやん私とかはつておあたまり」と誰一人云ふ者もなき初奉公の辛さ、身に沁みて思はずほろりと落す一雫、氣づかれてはとはつと眠れにかへりし時、又しても意地惡き奥樣の惡き呼び聲

兄上へ

靜田　新村基子

兄樣お怨み申します、嘸兄樣を薄情な方とは夢にも思ひませんでした、死んだと思へ、世に亡き者と斷念らめて、縁も切り便りも絶つとは、兄樣夫は、あんまりでございます、私許りなら何の〳〵厭ひは致しませぬけれど、谷間にひそむ老木に均しい此御兩親を、いつまあおなたは日の光りに合せて上げて下さいます、あゝ最う申しますまい、之も返らぬ繰り言でせう、唯私は一生泣きますそして兄樣のつめたい〳〵冬の樣なお心に一時もお早く以前にも増す春のうしほの漲ることを、只管祈つてお待ち申します。

朝寒

佐野もの花

いつもの通り起きてすぐお座敷の掃除をする、箒を持つ手も凍る許りにつめたい、母樣がお湯をわかして下すつたおかげで、雑巾がけはつらくなかつた、あまり今朝は寒いので温いものが當にしみた、髪つけるにはやはり扇髪の方が好いかしら、然う思ひきり前かみをのめらしたからさうをかしくもない、でも大前がみが小さくなつたから、少し何んだかをかしい氣をもみながら鏡臺片づけて着替へをし登校する、いつもの樣でもなくそつとは入ると、口惡の桑田さんが「あらー　お嬢樣然としてー」、とんきやう聲を出したので皆さんの視線が一せいに……。

父上に

東京　須美子

お父樣、諦らめました－、今度こそあきらめました、あゝ、妾は何といふ不孝者で御座いませう、どうぞ御心配下さいますな、こんごは、もう決して、決して、あの樣な事は申上げません、いゝえ、思出しも致しません、仕方がございません、もう、此境遇に安んじて時節を待つことに致します、

御安心下さいませ、これから追々實行致します、どうぞ御安心遊ばして………、

武坊の地藏樣

秋田 宮越志磨子

「月日のたつのは早いものですネ、あの頃の坊ちやんの可愛さと云つたらネ、ほんとに眼のくる〳〵して、今でもあり〳〵と見ゆる樣で御座います、」と乳母は歩きながら話を仕掛けると、花瓶を持つた姉樣は、ショールを直しながら、「そうれ妾ほんとに可愛いかつたわ」と、お返事をなさる、徑の兩側には青萠が一面にのびて、さながらゆつたりとした海でも見るやうな心地がする、やがてお墓に着いてまだ新しい武ちやんの地藏樣の前に新しい花や茶を供へて、乳母と姉樣は何かしきりにお念佛を唱へた、私は此地下にあの可愛い武ちやんが居るのだと思ふとなつかしうなつて、持つて行つた薔薇を地藏樣の首へそつと懸けてやつた。

雨の夜

東京 雪子

雨の夜は淋しきものとはいひながら、一しほ今宵は身にしむ、いつも門通る人足の眼かさに引かへ、流石往來もたえ〳〵にて、雨のみシト〳〵折から夕刊くばる新聞やの鈴の音もいとゞ淋しく聞えぬ。

「通學日記」の筆者あなば女史の住所を至急報知あれ

才媛詞藻の募集に就て

我が女學世界は、こゝに芽出度新年を迎ふると共に、今後大いに新進の才媛の詞藻を賑はさんと欲し、從來募集せしものゝ外、更に美文、日記、書簡文、俳句、私の實驗等、各種の文に就いて讀者の瓊章を募る、苟しくも文藝に志ある諸子、冀くは錦心繡腸を披攊したまへ。（投書の規程は二〇八頁に詳記す）

▲謎の新題

「活動寫眞」とかけて

「人口の繁殖」とかけて

「自然主義」とかけて

笑話

○自惚な奥様　三河　静代子

奥様按摩に肩をもませながら、「あなたでもんでる人が美人かどうかといふ事がわかりますか」、按摩、「ハイもうお聲でお顔の美しさはわかりますし、お體はもんでる中にわかりますし、お體格は中肉中勢ではそれはすぐわかります」、奥様「オホヽヽヽヽそんなによくわかりますかれー」、(丙)

○ライオン　大阪　西本みん子

妹「兄さん、獅子の吠える聲は雷の樣だつて本當」、兄「そうよ、だから西洋では雷音(ライオン)と云ふのサ」

○失戀の男　大阪　妙子

失戀の男、女に向ひ、「あなたは實に品性高き、美しき、アヽ女神の樣なかただ」、女「有難う御座います、私のやうな者をそんなに仰しやつて下さるのはほんとにあなただけ……ぢやありませんの」、(秀逸)

○お父さんの白髮　筑前　藤井靜枝

父「お前が惡サをする度にお父さんは白髮が一本づゝ殖える」、小兒「ではお父さんは大變に惡サをしたんですネーお祖父さんを見てごらんなさい」(秀逸)

○魂の長さ　仙臺　頼子

客「昨夜人魂を見て喫驚しましたよ」、女學生「ソー、何れ位大きかつたの?」客「左樣、確かに一丈はありましたな」女「そりや嘘ですわ」「客イヤ眞實です」女「デモ一寸の蟲に五分の魂と云ふぢやありませんか、人間の魂なら二尺五六寸が當り前だわ」、

○孃さんの外交術　信州　戎能喜美子

「御父樣、御酒は體の毒だと云ひますから、明日からおよしなさいな」、「孃や御菓子は齒の毒だから今夜からおよしよ」、「だけど御父樣には御酒御藥だわれ」、(秀逸)

○正直な答　兵庫　松川りつ子

教師が奢侈と云ふ言を生徒に說明しやうとして「もし私が立派な首飾手飾或は指輪等をはめて美しい衣服を着て來たとすれば、皆さんはそれを何と申しますか」、一生徒、「大方先生、は借りておいでになつたのでせうと申します」、

○都合の好い計算　信州　喜美江

先生「皆さん、爰に金が七十圓ありますが、三圓三十八錢の反物を何反買ふ事が出來ますか」、生徒「十一反買へます」、先生「きつちり買へますか」、生徒「十八錢不足ですけど、澤山買ふ中ですからそれ位まけてくれます」、

○電話室の滑稽　大阪　橋八重子

山出しの下女、電話をかけて居ましたが、やがて「あゝ左樣でございますか、左樣なら」と丁寧にお辭儀を致しましたので前の電話機でゴツーンと頭を打ちました、

○踏んで下さい　大阪　たそがれ

或る日、弟を立たして身長を計ると、弟は今度は姉さんを計らうと云ひますから、私は柱を背にして立ちました、すると弟は尺度を持つて伸上りながら「姉さん、坊には屆かないから少し蹲んで下さい、よう」

誌友倶樂部

▲愛子様、松葉様、可代子様、朝顔種子をありがたう、私方より御返し致しましたのはカタメス、ダリヤの一變種です、御失望あればまだこちらには澤山ありません積りです、日當り良き暖な處へお植ゑ置き遊ばせば本年八月頃にはキツトお目を喜ばせやうと存じます、御園藝同好の諸姉様、朝顔の種子の交換をお願ひ致します(信濃國西筑摩郡三留野青木恒子)

▲鵠沼の内藤千代子様に申上げます、每號かゝさず御彩筆お揮ひ遊ばすには、只々感服の外は御座いません、私は實は貴女様にあやかりたいと先達から每號一二篇づゝ投書致して居りますが、お恥しい事には載せて戴く様なのは未だ一つもありません、けれども百折不撓貴君様のお作を師とし益々想を練りましたならば、貴女の眞似は出來なくとも誌上に出して戴けるやうにならうと存じます、何卒御教導下さいませ、(小岡物膝しぐれ)

▲一月號に「餘りにも」といふ和歌をお出し遊ばした、寒川嘉女子様、貴女はもしや三十七八年頃まで、女子之友に御寄書遊ばして入らつしやいました、石見のお方でありませんか、又讀者倶樂部に連てなりました、あけぼの様貴女はあの麻布のふく子様で入らつしやるでせう、ちがつたら御免下さい、(越後よし子)

▲私は今本校普通學部の二年生で御座いますが希くは今後皆様と共に次第に濁り行く世を清めて行きたいと思ひます、誠に智識淺き者なれど皆様と共に神の大なる御力に依つて事をしたいと思ひます、何卒私も此の後は愛讀者の一人として下さいましれ、御願ひ致します、(京都同志社女學校宮川しづ江)

▲女學世界最愛讀女様、妾も貴女と同感でございますわ内藤千代子様のいつに變らぬ御才筆一月號のうれしい正月日記は如何でございます、もう／＼振いつきたい程ですわ、妾ほんとうに何べん讀んで見たか知れませんでしたの、貴女のおつしやる通り誌上へお寫眞を掲げて頂きたうございますわ、記者様何卒願ひます。(愛媛白露)

▲皆様私は一月から愛讀者に成りました、どうぞ御見知り遊ばして御仲間に入れて頂戴な、私はやつと今年十八に成つたので御座いますけれど、今迄の事御話すると、それは／＼大變ですの、御同情下さる方は是非御住所を委しく御知らせ下さいな、御手紙でくはしく御話し致しますから、(本郷にてすみれ)

▲一月號の内で私が一番面白く讀んだのは、カ靈の奥、上流社會の松の内、漢學の春、初春の令孃日記、うれしい正月日記、都下女學校の校風競べ、貴婦人の日常生活等であります、中でも初春の令孃日記は特に面白くて、三四回くり返して讀みました。(下總靜子)

▲近江の六角すみ子様、おなつかしうございます、誌上で御交際をおねがひ申上げます、貴女の御令弟様に卯三郎様とおつしやるお方がいらしやるでせうね、若しちがつたら御免あそばせ(花草)

▲皆様誠にあつかましいお願ですが、女學世界増刊の心の日記第一回二回貳册をお持ち遊ばしてる方がお在りなら、繪畫講習錄と申す本貳册と交換願ひ度う御座います。(横濱市馬町石井嗣書店内紀美)

▲戀しき内藤千代子様、私は大阪の○○女學校に通學してる者ですが、先日より君の御麗筆に感じました、私も千代様とは同じ年ですが、中文は下手でいつも拜見する度びにお羨やましく思ひます、私が女學世界を見るのたのしみは君の御文を見るのが何よりです、もう此頃は御逢ひしたくつて／＼たまりませんのよ、私も御住所さへわかれば直接に御手紙を交換したいのですが、どうぞ私だけにでも知らせて下さいな

千代樣などは私のやうなものには見むきもして下さらないでせうけれど、私もう〳〵戀しく戀しく思つていますのよ、いつも見もしらぬ、君を思はない日はありませんよ、千代子さまどうぞ、此度の時御住所をかいて下さいれ。（大阪ホワイトリリー）

▲大阪名もなき花樣、同情いたします、私も病氣の爲め女學校へ入學することが出來ませんで、やむをえず小學校卒業後、女學世界を唯一の樂しみとしてくらして居ります、何卒讀者諸孃樣誌上にて御交際のほどを。（大阪府北河内郡三島村大字三ツ島中埜富子）

▲京坂ちよ子樣、あなたも本誌愛讀者ですか、只今東京何學校にゐらつしやるのですか、何卒知らして下さい。（岡田まさし）

▲記者樣、私は大阪の愛讀女樣のお言葉通り、いつも内藤千代子樣のお筆にはチヤームされますのよ、ほんとうにお上手ですわれ、記者樣お願ですから千代子樣のお寫眞を誌上にお揭げ下さいな、此お願ひはきつと愛讀者皆樣がお同感でいらしやつるわ、皆樣如何。（雪の都にて富子）

▲諸姉樣方よ、私は去年より本誌の愛讀者となりました、少女でムいますが、どうか妹と御思召してレター頂戴な、下手ながら御返事は必ず差し上げますから。（京都市七條通高倉西入加藤ふじ子）

▲諸姉樣、私は本年より愛讀者となりました、どうぞ御交際下さいまし、御差支のない方は御住所を御知らせ下さいましな、併し懇親し易い人、ヒステリーの傾向ある方は望みません。（名古屋花枝）

▲みなし子さんに申し上げます、私は先月の紙上であなたの尼になりたいといふことについて此の倶樂部へ御出しになりましたのを拜見しましてから、私は一時も忘れますことが出來ません、今月の紙上をみなへし樣が御同情ある御尋ねを遊ばしましたから、をみなへし樣へきつと御返事を大誌で遊ばすことゝ存じますが、まちきれません、私も隨分悲觀いたしました、尼になりたいと云ふことを母にも申しました、然し今は樂觀してゐます、過去は忘れて行先どの樣な境遇になりましてもそれの中からたのしみを摑んで滿足して世を渡ります考へです、みなし子樣決して氣を弱く遊ばさず世間に鬼ばかりはないと云ふことをよく〳〵御ふくみの上御考へなほしを願ひます、私には母があります、然しあなたはみなし子さんですか、あゝ御同情します、何卒みなさんと東京のをみなへしさん御交はり下さいませんか、私は御二人がなつかしう御座います。（東京ある花より）

▲寫眞揭載——記者樣マーガレツトや其他只今流行の髮の結ひ方、それと内藤千代子樣のお寫眞を口繪にお出し下さる樣御願ひして頂戴、千代子樣の御寫眞拜見したいのは私ばかりではないだらうと思ひます。（南海の一少女）

▲皆樣、本雜誌にも愛讀者の面影をかゝげて戴いては如何でせう、尙此後よろしく御交はりを願ひます。（大阪中野清香）

▲記者樣姉樣、御變りは、ありませんか、私は河崎蘭香先生、榊原蕉園先生、宮崎與平先生、市川秀方先生、日高島助先生、竹久夢二先生方の御書きなさつた畫が大すきよ、どうかたくさん書いて出して下さいな。（廣島齋藤繁枝）

▲皆さまは毎日日記をつけて御出でゝせうれ、日記帖はどんなのを御用ゐ遊ばして?、普通の雜記帖?、洋紙?、夫れから鉛筆で御書きになりますか、ペンですか、筆ですか、私是非伺ひたいのよ、どうぞ御知らせ下さいませな。（北見國信大英子）

▲記者樣、誠に申兼ねますが、廣瀨西尾きやう子樣の御處を御知らせ下さいまし。（麴町區飯田町六丁目十六番地です）

▲私は此の正月を兄や姉などゝ面白くかるたとりして暮しました、これが東京なら猶々樂しく面白かつたでせう、ほんたうに都の方が羨まし

いわ。四谷の櫻子樣、平塚白百合樣、何卒住所を御敎へ下さい、さうして末長く御交際を願ひます。(埼玉さくら子)

▲お正月の『夫人待遇法』は大そう面白く拜見致しました、御達筆には唯感じ入るの外ございません、潮風先生の學校評判記は、相變らず御快筆でございますれ、田舍者の私なぞは鶴首して第一に愛讀いたします、尚どし／＼拜讀させて下さいまし『當世妻君小言』、表面美しい御職業の方々の御內情は左樣なものでございますかれ、未婚者の御方には多大の暗示參考となる事でございませうと信じますから、尚各方面の小言を御知らせ下さい。(福岡竹石はる子)

▲私は遠くから本誌の愛讀者です、どうも色々考へて見ますと、讀者倶樂部などへ御投稿遊ばす愛讀諸姉の大部分が餘り御心の程が淺墓なやうで私は口惜しく思はれてなりません、先づ第一に伺はれますのは同じ欄で見ますと本誌へ每每御投稿なさる內藤千代子樣とやらを大變崇拜して居らつしやるやうです、此方がもし今迄御投稿なさつたのを本氣でお書きなさつたとすればよほど賴もしくない方と思はれます、それを大變崇めて居らつしやる皆樣もあまり賴もしくありません。(以下大畧)(美濃桑子)

▲皆樣、誌上の御交際願ひます、四大久保の松岡雲野樣、私方の祖母もあなたと同姓同名です、これを御緣に誌上で御交はり下さいませ、おなつかしうございます。(岡山縣吉田郡東一宮村松岡喜奴子)

▲ちぬの浦の美鈴女樣、どうぞ御交際をお願ひいたします、(筑前小林房子)

▲記者樣、私は每月投書致しますが、まだ一度も出た事はありません、或る人の話に、博文館より直接に雜誌をとらなければ採用されぬと申しましたが、そんな事はないでせうれ、私は木戶市の書店より每月とつて居りますので、やはり愛讀者だらうと思ひますが、如何です。(一少女)　雜誌は何處の書店からお取りになつてもよろしいのです、投書は一層勉めてお書き下さい必ず當選しませうから。

▲大阪の久子樣、御同情にたへません、御作を拜見して居る內、しらず知らず涙がこぼれました、誌上で御交際下さい。(佐賀多香子)

▲記者樣及愛讀諸姉樣私は二三年前から缺かさず愛讀致して居りますが、廿歲を越さないと讀者倶樂部へ入れて戴く事が出來ないとか申しますが、ほんとうですか、(田舍一少女)　そんな事はありません。

▲內藤千代子樣、失禮では御座いますが貴女の記事の御美しいのを拜見いたす度に感出しますが、此度は是非貴女樣の御寫眞を誌上で拜見さして下さいな、たのしみにして待つて居ります。(下總姫百合)

▲皆樣、此お正月から私もお仲間入り致しましたから、何卒末長く御交際下さい、又四谷の櫻子樣、未だお目もじ致しませんが、ゆかしの御名はとうより誌上にて拜見いたしておなつかしく存じます、何卒住所を御知らせ下さいまし。(埼玉縣はる子)

▲賢明なる愛讀者諸孃よ、繪葉書の交換を永久に御願ひ申します、繪葉書に何か書いて御送り下さい直に御返しします。(長野縣北佐久郡中佐都村丸山操子)

▲私は七卷の一號からの愛讀者ですが、ほんとに田舍者ですから、何とぞ御みちびき下さるやう誌友諸姉にお願ひいたします、又これから短文や和歌を出したいと思つて居ります、皆さんお笑ひ下さいまし。(札幌加藤雪子)

▲みなし子樣と東京おみなへしさん、私ほんとに貴女方に御同情いたしますわ、何卒お差支無くば御身の上をおきかせ下さいませんか、尚今後御交際を願ひます。(大阪白梅女)

▲私は鶴岡に名高き長瓦川のほとりの女學校に通學いたして居ります、不束者ですが、御なさけある諸孃よ、誌上にて御交際を願ひます。(岐

草本アイリトし)

▲大阪府下愛讀者様、私も御同感で御座いますのよ、なんだか私内藤様が懐しくて〳〵仕方がありませんのよ、千代子様のお話の出ていない時はなんとなく物たりない、感じが致しますわ一度お目にかゝりたいと思ひますが、鵠沼と大阪ぢやあれ、とても駄目ですわ、記者様お願ひですから千代子様の、お寫眞を掲げて下さいなどうぞお願ひ致します。(大阪野末の花)

▲諸姉様、妾も昨年十一月から本誌を讀んで居ますから、どうか御交り下さいませ、そして私は古蹟や名所の繪はがきが好きで集めて居りますからお贈りを願ひます、その代りに妾の地方の上古の古蹟のものを呈します。(大和國田原本局區内乙木堀島きよ子)

▲保文子様、能くこそ御尋れ下さいました、貴嬢も眞に御いでのやうですが、何處ですか、私は前號に記しました通り山の手の者ですの、お差支なくば御交際ねがひたく、尙々何かと御導き下さいまし。(芙蓉花)

▲兵庫の野口清子様、正月號の女學世界御送附下すつて有がたう御座います、之れから毎月愛讀する事になりましたよ、又下手な作品も投書いたしますから欠伸をかみつぶして讀んで下さい、貴女も何か投書なさいな、そして時々御手紙下さいましれ、實吹さんなどは如何御暮しですか御名吟をうけたまはり度いものですれ、(東京府下豐多摩郡下戸塚小林たけ子)

▲高知の白はぎ様不束な私に御交際をとの御言葉誠に有難う御座います、私の方からもひたすらお願ひ申します、何時の女學世界を見ましても投書に土佐と云ふ字の見えんのはほんとうに殘念では御座いませんか、如何で御座います、少し御投書遊ばしては、私などは、もう少し文才があると好いのですけれど。(土佐大黑きくぢ子)

▲諸嬢様、妾は投書するのは此度が初めで、今まで淋しく暮しましたが、此れからは何卒末永く御交際を御願ひ申します。(大阪文代)

▲大阪府下の愛讀者様、貴女も其御心でしたの私もなのよ、記者様どうぞ内藤千代子様の御寫眞を御掲げ下さいな。(京橋すみれ)

▲ちぬの浦美鈴女様、私も久しく本誌を愛讀する少女で、至つて不束者で御ざいますが、何卒御交際して下さいませ、尙誌友の諸姉上様、どうぞ御文通を願ひます。(宮城縣登米郡登米町佐々木光子)

▲私は北海の波荒き岸に住ふ母もなく、友もなき、誠に薄幸の身で、本誌を唯一の慰藉として淋しき日を送つて居ります、皆様何卒哀れのもよと思召して末永く御導き下さらん事を祈り上げ升。(北海道小百合)

▲東京をみなへしさんに、御答します、私は深い事情があつての決心で御座います、貴女様御差支なくば誌上に御芳名を承り度う存じま升。(みなし子)

▲伊佐數清子様、御懐しいわ、私も札幌に少しの間ですけど居りましたよ、あのあなた若しや森尾満代さんを御存じないでせうか、恐れ入りますが一寸誌上で御知らせ下さいまし。(北見信太英子)

▲愛する諸姉君妹君様方には御變りも御座いませんか、御伺ひ申し上げます、不束者の私もさきつ頃までは、サメンでもたふす様な、元氣で御座いましたけれども、去る十月の一日よりふと風の氣味にて、御藥を服さきましてからいまだに全快致しませず、日毎〳〵に香高き藥を飲んで居りますけれども、私は何も失望はいたしませんよ、此病はいつ全快しますか私は知りませんけれども、吾が愛する神様はよく知つて御出でになります、いな是れは神様が私を御試みになるのであらうと思ふて何も、彼も神様に捧げ毎日〳〵樂しく暮して居ります。(神戸みどり子)

新刊紹介

△少女四季物語　竹貫佳水著

本書は四季折々の自然現象や、日常卑近なる出來事について、少女として必ず知り置くべき事柄を平易に說き記したるものにして、少女と若木の話、音樂の話、梅雨、螢、風鈴の話、其他十數篇を收め、之を讀む中に知らず識らず有益なる智識を得、高尙なる趣味を養はしむ、定價金三拾八錢、博文館發行、

△官立學校入學試驗算術問題詳解　竹貫登代多著

最近十數ヶ年間の諸官立學校の算術、代數、幾何及び三角法の入學試驗問題を集め、尙ほ附するに數多の模範問題を以ってし、それに一々詳解を附したるものにして、諸官立學校の受驗者には、最も便益を與ふる書なり、定價金六拾錢、博文館發行

△夢二畫集（春の卷）　竹久夢二著

著者自ら語って曰ふ、其の東京に出でたるは十六の春にして、都會に於ける漂泊生活の習慣は、余をして時に銀座街頭を、波うつ胸を抱き乍ら革命、自由、漂泊、等の奔放なる歌を低唱せしめたりと、又曰く、若草萌ゆる學校の運動場に蹴倒び乍ら、早稻田に連なる目白一帶の高原を眺めて、色深き空に漂ふ白雲に、如何に遠き思をよせたりしよと、著者の繪畫に一種摸すべからざる詩趣のあるは故ありと謂つべし、本集は從來諸方の雜誌に揭げられたるもの其他を集めたるものなるが、著者獨得の畫趣の全卷に溢るる上に、著者の散文をも加へありて、近來の趣味ある書なり、尙ほ夏、秋、冬の卷は、引續き上梓さるゝ由、定價金五拾錢、麴町區麴町洛陽堂發行

△東京の女　松崎天民著

昨年秋東京朝日新聞紙上に連載して大に讀者に迎へられたる「東京の女」を集めて一册となしたるものなるが、殆んど有ゆる階級の女を描き、文章に著く波瀾あれば、再讀、又新らしき興味を覺ゆ、定價金五拾錢、京橋區南鍋町隆文館發行

△古今東西今日の歴史　高橋淡水著

本書は主要なる歷史的事實を日々に配當して各時代に於ける人物の事業を叙し、性格を論じ、或は政治、文學、產業等の要點を述べたるものにして學校に於ける教示の參考書、家庭に於ける訓話の資料として良き書なり、定價金七拾五錢、京橋區南小田原町榮山堂書房發行

△家庭十二ケ月（一月の卷）

雜誌と書籍の中間を取りて廣く家庭に智識の糧を與へんとして生れ出でたるものにて、本號には新年行事、風俗、新年向家庭科學、歷史、各國新年、飛行器の話、料理、和歌、衞生等を收め内容頗る豐富なり、定價金參拾錢、本鄕區本鄕一丁目啓成社發行

△かんこ鳥（第二卷第一號）

俳句俳文の瀟洒なる雜誌にして、四日會同人の維持にかゝる、本號には多くの選句を掲ぐる外、長谷川天溪氏の觀察範圍の廣狹、前田木城氏の聖の俳句觀等趣味ある記事頗る多し、會費は在京員拾五錢、地方員拾錢、每月運座會を開きて研究を爲す、京橋區弓町八、四日會

正誤

本誌一月號寫眞口繪の令孃かゞみの中、「男爵原田一道氏令孫信子」とありしは、「令孃信枝子」の誤りに付訂正す、尙ほ序でながら、信枝孃は既に嫁がれたるものゝ由

才媛文壇懸賞募集（二月十五日〆切）

▲美　文（二十四字詰三十行以內）

▲日　記（二十四字詰二十行以內）

▲書簡文（二十四字詰二十行以內）

▲私の實驗（二十四字詰三十行以內）

▲和　歌（一人一首）

▲俳　句（一人一句）

▲謎▲笑話▲讀者俱樂部

△美文、日記、書簡文、私の實驗の四種は用紙は半紙の事△和歌、俳句、謎、笑話、俱樂部は端書にかぎる、△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす△名宛は博文館內女學世界宛とし△原稿に文の種類及び住所氏名を明記する事

賞品

△美文△日記△書簡文△私の實驗
天賞參圓、地賞貳圓、人賞壹圓

△和歌△俳句△謎△笑話
天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

（圖書切符）

每月一回一日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
定刊數……十二册
內（增刊四回：一、五、九、十一月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

廿四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	……	……	五十錢
四半頁	……	……	十圓	七圓五十錢
半頁（卅二行）	……	廿三圓	十九圓	十四圓
一頁（六十四行）	五十五圓	四十五圓	三十八圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せす
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治四十三年一月廿六日印刷納本　第拾卷第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地
發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番　千十八番
本局　二千六百二十番　三千二百二十九番

最新發明 肺病肋膜 新藥に就きて

獨逸ドクトル 高平氏報告（醫事週報二七號報告再錄）

新治療劑主藥の諸結核による熱度下降は可驚著効あり四十度を示す熱は本藥服用後は常溫下に減じ患者は藥劑が無味なるを喜び之が服用を嫌忌せず食慾を增進す

右の外本劑の著効ある事は既に諸家の試驗報告及賞賛により明らかなれども今本院服藥患者につき其成績を左に報ぜん

●金森某（德義上住所姓名を秘す）女子三年前發病遂に末期重症の**兩肺結核**に陷り咳嗽たん盗汗動悸呼吸不利。不眠。發熱激しく度々喀血し非常に羸痩す服藥壹週頑固なる熱を去り咳嗽喀痰を輕快す服藥貳週喀血やみ臥褥せしもの屋外に出で日光に暖をとるに至る連用三十日病全く治し食慾進み體重を增加せり

●兵頭某卅一歳男 **肋膜炎**（喀血無し肺病初期の疑あり）胸部痛み食不振身體倦怠盗汗。咳嗽。頭痛あり身體羸痩を見る卅九度に至る發熱あり服藥五日奏効あり二週にして全治す僅々二週にて全治する如きは病輕症なるに因るとは云へいかに新治療劑が肺病。肋膜。肺炎。肺尖加答兒。氣管支加答兒。腹膜結核等の諸症に對し可驚効力ある全治藥なるを知らん以下病歴を細述する時は冗長に亘るを以て左の通略式とす

患者	性	病名	成績
三村	男	兩肺結核	全治
中川	男	肺尖加答兒	全治
松信	男	結核性肋膜及腹膜炎	徽効
笠井	女	肋膜炎	全治
上野	男	右肺結核及腸結核	全治

患者	性	病名	成績
龍谷	男	兩肺結核末期	無効
宮本	女	結核性肋膜炎	全治
岡田	男	氣管支加答兒及肺炎	全治
阿崎	男	右肺結核及腹膜結核	全治
神村	男	肺結核初期	全治

斯の如き好成績は從來の藥物に於て見る能はず我國藥劑界名譽の發明藥として報告する義務あるを信ず又効力多大にして持長服藥するも副作用なく殊に**喀血**と其豫防に可驚効あるを以て醫藥の傍ら服用最も妙ならん吾人は病者に向って新治療劑は現今に於て完全なる發明藥なるを紹介し安心服藥せん事を勧むと共に醫師は自家患者に本劑を投藥せん事を勧告す●本治療法を知らんとする患者は貧富の別なく、（貧者にも療法あり）遠慮なく送料郵券二錢添東京神田竪大工町拾三番地療養院製藥所村尾明治堂宛申込あらば新治療法の書を無代貰ひ得らる。故是非一讀あれ益する處多からん、之れにより全治の幸福を得らるべし

藥價

壹週 金二圓
貳週 参圓九十錢
参週 五圓七拾錢
四週 七圓貳拾錢
五週 九

療養院製藥所 東京神田竪大工町 **村尾明治堂**
電話本局参千七百五十二番（私書函神田本局第三號）
振替口座東京壹四参壹九番

▲見よ!!讀め▼

少年少女の讀物として大好評を博せし 本書は第六版を發行す

西川三五郎編

學校家庭 兒童百話

▲洋裝頗美本全壹冊●紙數二百卅餘頁●
▲木版密畫挿入●價廿八錢●郵税四錢（送金は便宜上郵便切手代用諾す）

この本は第一に子供の敎育に適切なる古今東西のお伽話、寓話、傳説の中より最も趣味あり最も有益なるもの約百種を撰びて之を編述したるものなれば少年諸君の讀物として極く面白く家庭に於ては訓話の種本となし小學校にては話方敎授の資料として無二の良書なり

發兌元 東京神田區松下町十三 **文盛館**

文章世界

第五巻第二號増刊

梅花譜

（二月一日發行）

全一册洋装菊判　紙數二百四十頁　正價金二十錢　郵税二錢

卷頭　現代文士錄＝現代の文士二百五十餘家の小傳にして、其の著作、現職、現住所等すべて一目の下に瞭然たり。

本欄　誌友が苦心の餘に成れる短篇小説、評論文、叙事文、抒情文、書簡文、紀行文、小品文、はがき文、長詩、短歌、俳句及び挿畫等を各選者が愼重になせる選評の結果を發表す。現代青年の思想と努力と其のこれを表現する手腕とは、正に此の一卷に遺憾なく發揮せらる。

附錄　下記諸家の會心の評論、短篇小説、小品及び長詩を附錄として掲載す。○畫中の人（上司小劍）○悲鳴（小山内薫）○7の教室（小川未明）○雪の夕暮の諧調（蒲原有明）○我が思ひなをなしむ（片上天弦）○覺めたる者の行方（相馬御風）○鼠色の印象（小島烏水）○生物（三木露風）○床屋の繼子（岩野泡鳴）○狽の歌　兒玉花外）○鳩（德田秋江）○雀（吉江孤雁）○大師詣での記、白柳秀湖）○竹（野上臼川）○復活者の世は美くし（中村星湖）○葬式（正宗白鳥）○七浦七阪（田山花袋）

別欄　誌友の内より特に新進青年作家を選拔して、其の新作を世に紹介す。其の氏名左の如し。○サンドウイッチの皮（田中落穗）○畑の家（上田茛一）○通行人の横死（西村小徑）○商店（秦蓌歐）

博文館

女（後付の二）

少女世界

毎月一回一日發行
第五卷第三號
二月一日發行

表紙と口繪

お人形（山村耕花）○紅梅の內侍（河合英忠）○雪ざいく（岡吉枝）○はつ音○誌友の面影○女流名家の筆蹟○熊本の少女會○淑女學校の音樂部生活……（以上寫眞版）

本文の記事

お伽小說怪牡丹（巖谷小波）▲米國みやげ（同上）▲梅の歌（田山花袋）▲第十三回筆蹟▲小さな淑女と紳士（三谷民子）▲羽子一代記（黒田湖山）▲少女小說お靜（三宅花圃）▲さびしい二人（沼田笠峰）▲紅梅の內侍（海賀變哲）少女小說湯の宿（西村渚山）▲かたみの指輪（松井百合子）▲女皇の御幼時（岡本文學士）▲涙の箱（竹貫佳水）▲狼の穴（横山理學博士）▲袖のかたり（木村小舟）▲近畿巡回講話（記者）▲花瓶敷の編方（三木とみ子）……●其他少女會館の記事山の如し



紙數百廿八頁
口繪美麗なる
石版寫眞版澤山

正價金十錢
郵稅一錢

東京日本橋本町
博文館
振替口座東京二四〇番

明治文壇 名家小說

（装訂……洋装菊判總）

明治の世、新文學ありてより、僅に未だ三十餘星霜を閲すに過ぎずと雖も、其間思想の起伏、文運の變遷一にして足らず、大家相踵きて出で、雄編傑作また少しとせず。或は艶麗に、或は崇高に、或は平淡に或は怪奇に、皆な競うて其特色を發揮し、春花の爛熳、秋草の溫雅、人情の機微を寫し、心理の複雜を描き、文章思想共に美を盡し粹を極む。まことに聖代の偉觀と稱すべき也。されど珠は聯珠の美しきに如かず、雄編傑作また時ありて散逸す。本館此處に思ふところあり、**名家小說文庫**を發刊し、每卷千頁の大冊子となし、諸大家の集中苟も錄すべきものは悉くこれを輯め、裝釘を美にし、價を廉にし、逐次刊行して、以て讀書社會の渴を醫さんことを期す。竊に惟ふ、本書完成の曉は明治文學の偉觀燦然としてそれ讀者諸君の眼前に輝かん乎。

女（後付の四）

再版 露伴叢書

前編（九百七十餘頁）　正價金貳圓　小包料拾貳錢

後編（九百九十餘頁）　正價金貳圓　小包料拾貳錢

前編目次

▼自傳 ▼二日物語 ▼夜の雪 ▼僥倖 ▼緣の絲 ▼休暇傳
▼毒朱唇 ▼ひげ男 ▼新學士 ▼迷霧 ▼和合樂 ▼川舟
▼大珍話 ▼緣外緣 ▼夢がたり ▼是は〳〵 ▼醉鄕記 ▼珍饌會
▼獅子庵 ▼伊能忠敬 ▼まき筆日記 ▼客舍雜筆 ▼地獄谷日記
▼將棋雜考 ▼將棋雜話 ▼元祿時代の雜劇 ▼折々草

後編目次

▼椀久物語 ▼春の山 ▼當世外道の面 ▼封じ文 ▼鐵三鍛 ▲自繩自縛
▼蹄鐵 ▼冷干氷 ▼箱根草 ▼銃獵孝行 ▼夢日記 ▼ひとよ草
▼新浦島 ▼鄭成功 ▼日蓮上人 ▼二宮尊德 ▼突貫紀行 ▼醉興記
▼易心後語 ▼春の一日 ▼うつしゑ日記 ▼遊行雜記 ▼旅の心得
▼知々夫記行 ▼文明の庫

說文庫

無比好擧

（クロース特製紙箱入）

新刊

澁柿叢書

紙數壹千餘頁
正價金貳圓
小包料十六錢

本編目次

▼釜煮▼妻の心▼猿冠者▼鐵火▼聚樂殿▼島勘左衞門▼是非もなき▼不老術▼新粧法▼夢と夢▼眞の武士▼親の面▼五月女坂▼三千石▼男の面▼油井正雪▼大石內藏の助▼碧玉盌▼大風乾之介▼他流試合▼脫走兵▼振武軍▼密告▼此の戀

新刊

柳浪叢書

前編

紙數壹千餘頁
正價金貳圓
小包料十六錢

前編目次

▼おもかげ橋▼昇降場▼骨ぬすみ▼妾▼今戸心中▼隅田の夜路▼罪の悶▼變目傳▼都の夢▼狂言娘▼畜生腹▼重づま▼貯金玉▼花ぐるひ▼幼時

▼發兌元

東京日本橋本町

博文館

女（後付の五）

（二附の六）

女（後付の七）

原胤昭君著

母と子

全二册

何うしたら子供はよく躾けられるか

和裝菊判**前編**（紙數二三六頁）**正價五拾五錢**郵税八錢
美本**後編**（紙數一八〇頁）**正價四拾五錢**郵税六錢

人生の幸福は富か譽か將た壽命か、否な眞の幸福は子寶よ。然り、賢明良善忠孝の子にして子寶よ。其の寶子を得んとするには子の育て方躾け方を如何にせんとは世擧ての問題だ。今や之を解決するに最も有力なる實驗談は記された。世既に知る如く著者は出獄人を保護し不良少年を研究して二十有八年の經驗を積み、茲に此の解答を著はされたのだ。乞ふ速に繙讀して第二の人を賢明良善忠孝の民に造り一家のため國家の爲めにせられなば本書刊行の素願である。

次目

（前編）〇家庭の感化〇三歲兒の魂〇繼ッ子〇名家の遺子〇著者の實驗〇犯罪の原因〇兇賊山邊音槌の最後〇山邊音槌の經歷〇山邊音槌の爲人〇犯罪原因の說明〇山邊音槌の改悔時代〇育兒の方針〇結局如何したら可いか？

（後編）善と惡、母の兩面育て方躾け方の善惡實驗談六十一題

東京日本橋本町三丁目
博文館
振替貯金東京二四〇

伊藤公爵を哀悼せる琵琶歌

●末松子爵閲　佐々木信綱君閲　牧野錦光君作譜　下村無端君作歌●

新曲 **哈爾賓**（ハルピン） 符解付

四六判横本大和綴美本——正價金二十錢　郵税二錢

本書の第一節

一、首途

大丈夫　天に生れて　天に随ひ　天に事へて　天に死すたい　東の間の　玉の緒も　切◎世の起き臥し◎に繋るらん」大干●されば●從一●位●大勳位●公爵●伊藤●博文●卿」中干、維新、このか、た、天皇、の御代、を、輔けて、四十年、内に、文明、の、政を布き、外、に、平和、の、策を建、て……（以下略す）

東京本町
博文館
振替口座東京二四〇番

中村秋人君著

名媛と筆蹟

洋裝四六判美本紙數三百頁　正價金四拾錢　郵稅六錢

▼孃ちやんも見るべし姉さんも讀むべし

一、富美宮泰宮兩内親王殿下、各宮妃殿下、各姫宮殿下三十方に、名流婦人、女子教育家、女流作家、女流畫家四十二人の優しき美しき幽かしき愛らしき話のみを叙し附錄として三皇孫殿下　各若宮殿下の御愛嬌話と婦人に關する數項とを加ふ。

一、筆蹟は有栖川宮妃殿下を始め、各宮妃殿下同姫宮殿下及び名媛の書畫數十枚を挿む然して其取るところ大概ね幼少の手に成れるものにて恰も天眞爛熳たる天使の姿を髣髴として偲ばしめ其愛らしさ云はん方なし就中閑院宮妃殿下六歳の時御染筆に成りし繪畫と八歳にして渡米留學せし津田梅子女史の八歳の時故國の慈母を慕ふて送りし愛嬌たつぷりの書翰は見る人をして思はず莞爾と眉を開かしむるものにして頗る興味あり

一、著者は虚榮虚飾の塵煙を厭ふて、淸を探るの年少氣鋭の健筆家にして又大に考へつゝある子煩惱なれは其觀察の着實にして精細、其一句一章は必ず教育的の意味を含み、然も取材の如く優しく美しく幽かしく愛らしき筆を縦横自在に振ひ讀んで解り安く味ふて淸新の趣味を覺えしむる近來の快著也。

▼お母さんも味ふべし教育家亦一讀を要す

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女學世界
（毎月一回廿六日印刷納本）
第拾卷第參號
明治四十三年一月廿六日印刷納本
明治卅三年十二月廿五日第三種郵便物認可

さむい寒いと嘆つ婦人

夜休む時

一服の中將湯を飲め

忽ち五體を温め

頗るよい心地

故に

冷え性にて、懷妊せざる人
冷え性にて、逆上頭痛する人
冷え込にて、下腹の痛む人
冷え込にて、こしけの下る人
は勿論左の容體にて苦しむ
婦人は猶さら今直に
中將湯を服用せられよ





●子宮病子宮内膜炎にて白帶多く前たゞれ又下腹腰足の引つり痛む人
●婦人神經（ヒステリー）血の道にて氣鬱ぎ癇高ぶり物を苦し夜眠ざる人
●川經不順月經滯り等にて吹出物多く又何となく身體惡き人
●逆上頭痛眩暈し肩こり腰足冷え●息切れ動氣強く手足痺れ水腫
●十七八歳になりて月經なく血ぶとり又月經の前後に下腹の痛む人
●白血赤血滯下多く顔色蒼白き人●冷症にて難產流產の癖ある人
●產前何となく常ならざる人、嘔吐、產後古血の滯り或は日立惡く
●此外子宮血の道月經不順に起因する諸症にてぶら〳〵と惡き人

中將湯定價

五週間	二円五十錢
三週間	一円六十錢
二週間	一円十錢
一週間	六十錢
四日分	三十五錢

●中將湯は全國各藥店に販賣す
●若しなき時は本舖へ申込れよ加減藥あり

中將湯本舖は東京日本橋區通四丁目…津村順天堂です

（定價金貳拾錢●郵稅貳錢）